757-169
1200501596103
757
169

757
4
169

63

樹本

上海漫語

393
757
169
新本

内山完造著

上海漫語

改造社發行

昭和十三・八・六 帝國圖書館藏

757
169

序

去年八月上海事變が起ると共に、私は病妻をつれて京都に近い小倉村に避難して來た。――此處は宇治茶の逸品玉露の產地である――時はまさに非常時である、避難中とて無異に過ごす可きではない。各人は今立てるところに於いて今持てるものを採つて働らく可きである、と友人の應援を得て、東は東京から岡山まで十數個所及び全滿の十五個所に於いて『支那を語る』と云ふ題下に百七十回の漫談講演をして歩るいた。

何處の漫談講演の時でも、在支二十六年とか二十七年とか云うて紹介されるので、今更らのやうに上海生活が思ひ出される。

成程二十七年と云ふ年月は、私のためには丁度半生であるから、隨分永い年月である。

然しその二十七年は、實は夢の間に過ぎて終つたのである。と云ふのは、この二十七年間は日本にとつても支那にとつても、ナカ〳〵多事な年月であつた。事柄の難易は別として、事が多いのと時の經つのが非常に早く感じるのは、必ずしも私だけではないであらう。それ故に夢の間のやうに思はれる。而も隨分長い年月の二十七年を、若しも專門の知識や學問で支那及び支那人の

研究に沒頭して居つたら、キツト今頃は大支那博士の肩書き位は得られたであらうが、殘念にも私は小學校さへも滿足に卒業もして居らない一介の小賣商人であるが故に、たゞ毎日を齷齪として尊い月日を曠うした。それを思ふと今更ら云うても還らぬことだが、何んだか責任を果たし得なかつたやうに思はれて、誠に慚愧に堪へないものがある。

然し極めて僅かではあるが、其間に雜誌『改造』の好意によつて、上海漫語と云ふものを書いた。この漫語はホントの漫語であつて、歴史でもなく地理でもなく紀行文でもなければ無論哲學でもない、何度讀み返へして見てもそれは正眞正銘の私の漫語である。

どんなに下らんものでも、自分の書くものが印刷されると云ふことは、假令自分がお金を出して印刷屋で造らせるものであつても、その出來上りを見るのは、何んとなく嬉れしいものである。若しも同人雜誌にでも掲つたら、より嬉れしいことは言ふ迄もないことである。この一般的の心理が、個人雜誌や同人雜誌が發行される一つの原因ではあるまいか。その雜誌の顏を見る迄の待ち遠しさを考へて見れば合點ける。若しそれが權威ある大雜誌にでも出た時の歡びと云ふものは、他人には一寸想像も出來ないものである。自分の書いた記事が出て居る雜誌の發賣日のモドカシさ、店に出たが最後早速に買つて、親族友人知己の人々に寄贈する。その時のお金の値打の如何に低いものであるか、それこそ貝殼同樣である。

或は遂に鼻をピコ〳〵させながら、兩腕を組んで、烟草の煙をプツト天井に輪に吹いて、ツンと濟すやうな人もないことはあるまい。

況んやその書いたものを集めて本にして出版するとでも言はれたら、それこそ伊勢蝦の刺身ぢやないが、身體中の肉がビク〳〵と動くのをドウすることも出來ないであらう。

なんてまるで他人の心境でも解剖——下手な筆で——して居るかのやうに書いて居るが、實のところそれは間違ひもなく自分が踏んで來た道であるのだ。今私の肉はビク〳〵と感激の浪を打つて居るのだ。

序文を書けと言はれたところで、何が書けるものか。頭の中はたゞ空想がかけ廻つて居るだけだ。どうか出版された本を見て歡ぶと共に、改めて世の中に對する書く者の責任者と云ふことをハツキリと感んじたいと思うて居る。筆を擱くにあたつて、出版に就いて色々お骨折り下さつた皆さんに、心からの感謝を捧げる次第である。

昭和十三年四月十五日

茶園の葭簀を眺めつゝ

内山完造

（於小倉村）

目次

上海漫語（一―九）　三
國共合作への私見　一〇七
西安の一幕　一二〇
空襲下の上海を脱れて　一三五
詩の對話　一三八
魯迅先生と版畫　一四〇
臨終の魯迅先生　一五一
魯迅先生の思ひ出話から　一五八
丙子漫語　一六〇
骨董品、骨董屋　一六六
當然のことだ　一七三

四庫全書の信用　一七八
飜譯について　一八一
をかしい文字　一八九
漢字六分ノ一說　一九三
漢學廢止說　二〇三
房　字　二〇九
こんまを忘れな　二一四
三種の貨幣　二一九
郵便支局長　二二五
上海の票いろいろ　二二一
見合の注意　二二三
大宴會は安料理で　二二四

習　慣　二二九
子供の世界、大人の世界　二四九
雙　喜　二五五
養老院へ凱旋　二五九
唯　吃　論　二六五
一　石　三　鳥　二六七
恐るべき力の漫行　二六九
絶海の孤島と小說　二七一
神　蟲　二七四
牛肉盜人　二七八
茶　撰　り　二八二
蕨と苜蓿　二八六

西湖夜話　二八九
黒焼　二九五
膠考　三〇一
雨の日の下午　三〇七
常識を働らかせよ　三一三
生活の向上　三一七
支那の金融界　三一八
自省のために　三二七
儒教と革命　三三六
轉向　三四一
思ひつくまま、あれや、これや　三四六
有限か無限か　三五二

上海漫語

上海漫語（その一）

一

二十五年前に上海へ來てビツクリしたことは、一定不變のものとばかり思うて居つた日本のお金に、毎日相場があつて高くなつたり安くなつたりすることであつた。始めビツクリしたことも馴れると云ふことは恐ろしいもので、上つたり下つたりすることに何んの不思議を感じないばかりでなく、高下がないと時々は淋しさをさへも覺えるやうになつて來る。

先年上海事變で避難した時、長崎から東京迄更らに東京から上諏訪名古屋京都を經て長崎から船で停戰後の上海へ歸つて來た事がある。その內地の旅行の間に誠に異樣に感じた事は、日本の內地では物が高くなつた安くなつたと云ふ言葉は何處でも何時でも聞かれたが、只の一度もお金が高くなつたとかお金が安くなつたと云ふ言葉は聞いた事がなかつた。況んやお札が高くなるとか安くなるとか云ふやうなことは話のはしにも聽くことは出來なかつた。それは上海に馴れて、毎日々々今日は日本金が高くなつたイヤ暴落したとかイヤ下つたとか云ふことを當然のことゝさ

へ考る私には淋しさが高じて何んだか一種の不安をさへも感ぜしめたのである。

上海には澤山の外國の銀行がある。そして、此等の銀行の最大の仕事は爲替の賣買であると云ふ。イヤ只に外國銀行だけでなく、支那の銀行でさへも最大の營業は爲替の賣買であるとさへ言はれるのである。無論それは外國の金貨幣と支那の銀貨幣との賣買である。

そして何百萬圓儲けたとか、何千萬圓損をしたとか云ふことは常に聞かされるのである。それは又銀行だけでなく全部の商人が又此爲替の高下によつて儲けたり損したりして居るのである。

この上海に三萬人近かい日本人が居つて、毎日々々しのぎを削つて居るのである。處が私はジツト考へて見た、上海で日本人は儲けたか損をしたかと。

そして得た答へは、上海に店を開らいて商賣した日本人の八割も九割もの人は損をして居る、そして僅かに一、二割の人々が儲けて居るのである。

何故八九割の大多數の人々が損をして、僅かに一、二割の人々が儲けたのであらうか。

損をした八、九割の人々も、品物の賣買では決して損はして居らん。損をして居るのは皆んなそれは爲替である、爲替の失敗である。而もそれと緣切出來ないのが上海である。

爲替の失敗の原因は何んであるかと云ふと、色々ある原因の中で最も大きなことは、損をした時にヤケになることが其の最も大きな原因であると思ふ。

何故日本人はヤケになるのか、ソレは勝負ごとに對する訓練が不足して居ると思ふ。特に金錢を目的とする勝負の訓練が全く缺けて居るからではないかと思ふ。

その原因が、賭博に對する解釋の餘りにも潔癖であるのが大きな原因ではないかと思ふ。

支那の財政とか經濟とかを考へたり論じたりする人は、誰でもが知つて居るやうに、華僑と云うて外國に行つて居る多くの支那人がある（支那人は上海其他支那の各地に居る日本人を日僑と云うて居る）。此の華僑は毎年その本國へ澤山の送金をして來る。其の金額はナカ〳〵に大きな額であつて、支那が毎年々々輸入超過國でありながら破產しない一つの原因として數へられて居る位であつて、實は何億圓と云ふのである（或る人は二億圓上下と云うて居る）。

しかし毎年二億圓上下かとさうではなくて、送金の非常に多い年と、又少ない年とがあるのである。時には一億圓臺にもなるかと思ふと、又四億圓を突破することもあるのである。その理由は多く華僑の好況と不況とに因ると云はれて居るのであるが、私はたゞ好況とか不況とかを否定はせぬが、尙ほその外に、華僑の在留地が大部分金貨國であると云ふことを忘れてはならぬと同時に、又その華僑の本國が銀貨國であること、その爲替の高下によつて然るものであると思ふものである。

上海にはゴールドバーと云うて、日本にない一つの取引所がある。それは金の延べ棒（目方七

百匁位）を標準として賣買してゐる金業交易所と云ふのであるが、それは丁度金本位國の英國の倫敦や米國の紐育に銀の標準賣買が行はれて居るのと同じやうなものである。このゴールドバーでも、日本はナカ〳〵よく損をすると云ふことである。

私の店には支那人社員が數人居るが、日本の御大典の時に、聊のその祝意を表するつもりで何か記念品をやらうと思うて色々考へたがどうも妙案がない。そこで皆んなに各々銀十元づゝを與へて好きな物を買つて記念にするやうにと云ひ渡した。四五日へて皆んなの買つた品を見ると、

一人は寫眞機
一人は眞鍮のラッパ
一人は蓄音器
一人はオルガン

を買つて來て居つたが、他の三人は申合せたか又は偶然の一致か知らぬが、三人共金の指輪を買つて來て居つたのである。その頃金は非常に安かつた、社員は皆んな十七八歳であつた。

私は四人の買物には何んの面白味も覺えなかつたが、指輪黨三人には多少興味を感じた。そして微笑を禁ずることが出來なかつたのである。

それから一二年經つてからであつた。或る時私は三人の指輪黨の指に指輪のないのに氣づいて

どうしたかと聞いて見た。すると、

モウ賣つて終ひました。

と云ふ答へであつた。私は再び微笑を禁じ得なかつたのである。

更らに私の家には、女の子のある阿媽（女中）が居る。モウ十餘年間居るのであるが、この阿媽が又ナカ〳〵面白いことをして見せて呉れる。支那ではその習慣上女は子供の時から耳飾りをつけて居る（メッキや硝子の寶石マガイ物も澤山あるが）。それから金や銀の指輪もはめて居る。それから子供の時は首にも銀の輪や色々の金銀やの飾りをつけて居る。足にも輪をはめて居る。大人になると腕輪をはめて居るのであるが、その色々の裝飾物が（私は單に裝飾物とは思うて居らん、ハツキリとそれは財產であると思うて居る）、或る時には銀になつたり又或る年には金になつたりするのである。無論全部代ることもあり一部分だけの事もある。恐らく十餘年間に三四回位それを見たのであるが、私はその度毎にいつも獨り微笑して居るのである。

そんなことはなんでもない。日本人の間にでも澤山あることである。銀時計を持つて居つた人がお金を儲けると金時計を持つやうになつたり、金のノベ煙管を持つて居つた人が、銀のノベ煙管に下落したりするのと同じことぢやないかと云ふ人があるかも知れないが、さうした場合は成金になつたとか、成金が歩に返つたとか云ふ標準になるのであるが、阿媽の場合は全く違ふので

ある。

假へば今は金の裝飾品を持つて居るとする、處が外國爲替は或る原因によつてドンドン外國貨幣が騰貴して來る。ゴールドバーもそれについてドン〳〵騰貴する、從つて金細工品は又値段が高くなる。

この金の騰貴と云ふことが誠に無學文盲な阿媽にもチヤンと解るのである。それは毎日々々金の相場と銀の相場があることを習慣的に知つてゐるからである。其處で今身につけて居る金細工の裝飾品は、何年か前に何程で買つたのであるが、今日では何程に賣れるやうになつた、スルと何程儲かると云ふことをチヤンと計算して見る。

それで其の儲けの多少によつて全部賣るとか一部賣るとかするのである。

處で日本で金グサリが、四十圓の品が七十五圓に賣れた、處がそれは金グサリと金貨本位の紙幣との交換であるに反して、阿媽の場合には金の裝飾品を賣ると共に、必ずその代りに銀の裝飾品を買ふのである。世界大戰後銀の暴騰した時には持つて居つた銀のものを悉く賣つて、金の物を買つて持つて居つたが、その後金が暴騰するや又金の裝飾品をスツカリ賣つて、銀の裝飾品を買つて來て居つた。

それは時に早く賣り過ぎたり、買ひ後れたりするやうな事は時々あつて、大儲けを逃がすやう

な事はあるが、損をすると云ふ事は斷じてない。それはどんな事があつても儲からねば賣らんからである(不幸に遭遇して賣る時は別であるが)。

眼に一丁字なき阿媽でも、年若き店員でも、各自が持つ處の財産(假令一個の指輪でも)を賭けて期限なしの相場をハツて居るのだ。ゴールドバーも投機である。華僑の送金も金貨國と銀貨國とを股にかけての金銀の高下で勝負して居るのである。大銀行の商賣も矢張り同じ事である。

金と銀との二つのウチでも、金が上れば銀が下る、銀が上れば金が下る。

はてな、それでは四十圓で買つた金のクサリが七十五圓のお札になつたのは一體儲かつたのかナ。

二

支那人と云ふ奴は——無智で、我利々々で、嘘つきで、平氣で盗みして、慘虐な殺人者であると、この位の常識よりない人々もあまり少くはないと思ふ。無論上海迄でも支那へ行つて見ようと思ふ位の人に、そんな馬鹿氣た考への人はないが、昆明とは何れの省城のことかと聞かれて、それは雲南の省城であるとすぐ答への出來ない程度が、大多數の内地人の支那常識ではあるまいか。

それで居て支那人と云ふ奴は――と來るんだから笑はせる、と私が云うたからつて餘り腹も立つまいと思ふが如何。先年京都の或大學の構内で、夕食を御馳走になつたことがあつた。同席の一人にその大學に關係のあるお偉らい方があつた。そして昆明常識で、無遠慮な支那論を聞かされた。相手にならんのがかしこい事なんだが、餘りヒドイので、貴方はどういふ支那研究をおやりになりましたかと聞いて、驚かされたことは、

支那を論議するに、支那研究なんか不必要である。

英米の情勢さへ知つて居れば、それでよいのだ。

と云ふのであつた。例へ結論は英米の情勢如何で決定するとしても、アフリカ蕃地の食人種を論議するのとは違ふ。イヤ食人種の論議にでもこんな論議は許されない筈である。而してこれが平和主義大學の關係者の口から出たのであるから驚くまいことか、私は餘りの馬鹿々々しさに折角の御馳走が咽喉にヒツカカつたことがあつたが、然かし幸ひにしてその後何百人かの人々に會つて大いに安心したことがあつた。

或る年の春、同文書院のボートレースを見に行くべく、宅から人力車に乘つて小蒸氣の棧橋まで行つた。車賃に四角の銀貨をやつて、丁度出かけて居る小蒸氣に乘るべく臺船へいそいで、出かけて居る船へ片足かけた刹那に、今乘つて來た車夫に片袖をつかまれた。その儘振り拂つて乘

つてしまつてもよかつたのだが、無理をせない私の習慣は、次の小蒸汽に乘ることにして臺船に戻つた。何んの事だ車夫は手に四角の銀貨を一個持つて居つた。私は靜かに其の銀貨を手に取つて見た、それは民國十一年と年號が入れてあつた。

『その頃、民國十一年十二年製造の銀貨は、銀の質が悪いとかで、一般に通用せなかつたのである。無論少し安くすれば通用はしたのであるが』

車夫は銀貨を見せながら、これは今貴方から貰うたのであるから替へて呉れと云ふのである。

私は言下にそんな事はない、私のやつたのは民國九年の銀貨であつたと取り替へを拒絶した。と云ふのは、私はその日宅を出る前に、小使ひに持つていく小銀貨を非常に丁寧に調らべたのである。いろ〳〵の面倒を避けるために、そして民國八年九年のものばかりを十數枚持つて出たので、而も今渡す時に迄チャンと民國九年の年號を見て渡したのであつた。私は確信を持つて居つた、そこできつぱりと取替へを拒んだのである。處が車夫は承知しない、例によつて懸河の辯でまくしたてゝ來る。その時には私共の周圍には黒山の人だかりである、それが悉く苦力や物賣り車夫などである、一般日本人が目して彌次馬と云ふ群衆である。

然かし私は何と云うても取替へを拒絶した。所謂彌次馬達が替へてやりなさい、貴方は旦那だ車夫は貧乏人なんだからと云ふ。けれど私は頭を横に振つた。そして私はポケツトから一元の銀

貨を二個出した、右の掌に乗せて車夫の目の前にニュツと突き出して云ふに、お前にも良心がある、私にも良心がある、お前は貳角の銀貨を私から貰ふに違ひないと云ふ。私はそんなことは無いと云ふ、どちらが本當か。私はどうしてもその銀貨は取替へないが、若しも私が間違つて居つたらこれをやるから持つて行けと、ジツト二元の銀貨を車夫の前に突きつけて、彼の返答を待つた。黒山の群衆は鳴りを靜めて吐息を呑んで居る。車夫はビツクリしたらしかつた。二元の銀貨には手を出さないで、そんな物は不用だ。この銀貨を取替へて呉れと云ふのである。

私は再び前言を繰り返へして車夫に迫つた。車夫は一歩後退した。私は一歩進んだ。群衆は二人を中にして未だ沈默をつゞけて居る。私はモウ一度突きつけて、私が其銀貨をやつたに相違なければこれをやるから持つて行けと突きつめた。車夫は又一歩退いた。續いて又一歩退いた。口には無論そんな金はいらないこの銀貨を替へて呉れと云うて居つた。

然かし勝負はモウ決したのであつた。車夫はやがて、日本人は悪るい奴ぢやと云ふ捨言葉を拋げつゝ、車の置いてある方へトボ〳〵と逃げ足を運ぶのであつた。

私は群衆の中に、二元を掌に乗せて依然として立つて居る。群衆はザワついて來た、口々に車夫の後姿を指しつゝ、あの車夫は悪い奴だ。彼奴は悪い奴ぢや、東洋先生早く小蒸汽にお乗りなさいと、出航をしらせて呉れつゝ群衆は散つて了つた。

それは私に確信があつたからやれたのである。例へ少しでも懸念があつて出來ないことである。又そんな時にやつてはならないことである。

日本人は私一人で黒山の群衆の中で、こんな事をしても彼等は二元の銀貨を持つて行かない。一體これは何んたることであらうか。ホントに彼等が無智で我利で嘘つきで盗賊で虐殺者であつたら、果して斯くの如きであり得るのであらうか。成程彼の車夫は嘘をついたが、それが嘘であることをかうして責められると、一度ついた嘘をモウ一度嘘をついて十倍の金儲けをせうとはせないのである。況んや盗賊をやである。例へ苦力、車夫の人々でも支那人は有良、有眞理の通じる人間である。無論除外例を否定する私ではないが、大多數を基本とするこれは一例に過ぎないものである。

極めて少くない事柄、それは世の中の除外例に屬することであるにも拘らず、その事柄をひいて來て議論の土臺とすることは私には出來ない。私は飽く迄も多數を土臺として考へる。富士山頂の金明水と揚子江とを同一に論じるものではない。

三

吾々人間の生活を考へて見ると、その幼少年時代は神話生活とでも云ふ可きであらう。その生

活は童話から一歩も出て居らんやうである。

やゝ長じて青年時代に入るに及んで、空想からダン〳〵と向上して理想家となる。然かしこの時代は尙ほその足は地上についてはをらんやうである。壯年時代に入ると共に經來たりし幾多の經驗は大地にシツカリと兩脚を踏張つて、人生の花が實を結ぶ實際家となるのである。

更らに年と共に老年時代となるに及んで、死と云ふ免かれることの出來ない運命に一日々々と近づいて往かねばならんやうになつて、如何なる富豪も權者も英雄も愚人もひとしく一種の淋しさを覺えて來る。そしてその生活は知らず知らず墓穴を掘るやうになる。つまり來世信仰家と云ふものが出來上るのである。

一人の人間に於いて此くの如きのみならず、國家としても民族としても、矢張りこの傾向を辿るものであると私は思ふ。

上海と云ふ一種の變態的な土地に住んで、個人的の事から國家的のことから民族的の動きに迄私の考へを當てはめて見ると、何んだか裡書きをして居るやうに思ふ。

小さな事だが云うて見ると——上海の共同租界は、大體英國人が主になつて總べての事に英國式を採用して居る。それは九十年前に上海を始めて開らいたのが英國人であるのはもとより、その後一漁村上海をして今日の大上海に迄仕上げて來たのも亦英國人であるからである。

この共同租界に、工部局と云ふ役所がある。工部局と云ふ名は何んでも最初英國が租界を造るに當つて、一番大きな仕事は色々の工事であつた、其の工事のために支那文字で工部局と書いたお役所が出來た。その工部局が今日では上海共同租界の行政、警察、衛生、教育、財政その他百般の市役所になつたのである。

實質的には百六十萬、共同租界の市役所であるにも拘らず、依然として工部局なる名をその儘に用ひて居るなどは、流石に英國人の實際家であることを思はせる。

この共同租界が嘗つて電燈、電力を直營にして電氣局と云ふのがあつた。その電氣局を賣出した時に希望者は入札することになつた。そして入札は英國人と米國人との競爭になつた。日本人は落札者の百分の五の株式に應じるとか云ふことであつた。

入札が濟んで、いよ〳〵開札された。英國人側では現金なら貳千七百萬兩（テール）、年賦なら壹千六百萬兩とか云ふことであつたに對して、米國人側は勿驚六千七百萬兩と云ふ飛び放れた高札を入れた（正確な數字は失念した）。無論米國人の手に落札したのである。それが今日の上海電力公司である。

當時米國人支配人が、租界當局に對して採つた態度、又百分の五の上乘りをする日本人に對して採つた態度の鮮かであつたことなど考へてみると、彼米國の青年であることがハツキリと私の

目に映るのである。

數年前上海の租界が持つ公園に、支那人の入場を許せと云ふ公園開放の運動が起きた。そして共同租界五ケ處の公園も、法租界一ケ處の公園も、悉く開放されることになつたが、然かし僅に十萬人を目標にして狹い租界内に造られて居る公園を、貳百萬人の支那人に自由解放すると云ふことは、到底不可能であるばかりでなく、そんな事をしたらあの無遠慮な苦力達がスグ自分共の巣にして終うて、普通人は入場出來なくなるのは火を睹るよりも明らかである。そこで何んとか制限を設けなければならぬと、現在行はれて居る切符制度が、その時に考へ出された苦力入場拒絶の妙案である。

彼等苦力共の一日の全收入は平均五、六角である。其處で一人一個所一回の入場料が貳角と云ふ到底彼等が出し得ない高い切符で入場せしめることにした。

然かしそれだけでは苦力の入場は完全に拒み得ても、一般人のためにも高きに過ぎる。一寸計算して見ると、一日に一元拂はなければ共同租界五ケ所の公園に入場することが出來ない。若しも毎日公園廻りをしたら一年には三百六十五元の公園入場費となるのである。

この時法租界一ケ所の公園は、一人一回の入場料を一元としたのである、これでは完全に入場拒絶である。

そこで從來無料で入場出來た各外國人と、新らたに入場を許す支那人のために、モツト便利な方法を考へなければならぬ。即ち一ケ年使用のパスが賣出されることになつた。そのパスは最高入場料三百六十五元からヅツと割引されてタツタ一元と云ふのである。法租界公園も同じく一ケ年のパスは一元である。其處で公園入場希望者は、先づ一元のパスを買ふことになる。この一元のパスさへ買へば誰でも入場出來るのである。然かしなに程安くても一度に一元と云ふお金を出すことの斷然出來ない苦力連は、此處でもハツキリ除外されたのである。

法租界公園一ケ所の一人一回の入場料が一元で、一ケ年のパスが又一元であると云ふ。この極端なる制度を見て居ると如何にもフランス人らしいと思ふが、その共同租界の制度を見ると、其處にはハツキリと壯年英國の實際家が見えるのである。

そして公園開放の時代風を吹かした支那の人々が、この制度に對して一言半句の文句も云はない。只だ沈々默々として居るのを見る時に、支那人も亦た壯年期に在る實際家であることを思はせられるのである。英國も支那も老年と云ふ人もあるが、兎に角この理論と數理を超越したベラボーな制度が何の故障もなく實行されて居るのはその制度が實際的であるからである。

扨て此く考へて來て、吾々日本人は果して何れに屬するものであらうか、私には何んとなく日本人は若い。日本國も民族も未だ青年であると云ふ感じがする。

上海漫語（その二）

茶の話

抑々お茶は唐の陸羽に始まつて、我が朝に於いては榮西禪師が入唐の土産に、洛西三尾に移植されてより此に千年の歴史を云々、と言ふやうなむつかしいことは自ら他に人がある筈。私の話は例によつて漫談であることを此にお斷りしてペンをつゞける。

靜岡の人に言はせたら必ず、靜岡茶は日本一でと云ふであらうが、帝都の人に言はせたら、靜岡はナカ〳〵澤山出ますが矢張り輸出向でして、何んと云うても日本のお茶は宇治が本場ですと云はれるにきまつてゐる。そんな本場あらそひなんかどうでもよいが、兎に角日本茶の代名詞は宇治である。その宇治茶の大本家である支那のお茶の産地は流石に澤山ある。

安徽省の祁門（チイメン）　六安（リユウワン）
浙江省の龍井（ロンチン）　平水（ピンシユイ）
福建省の武彝（ウウイイ）　安溪（アンチイ）

湖南省の君山（チユンシヤン）
雲南省の普洱（プウアル）
江西省の武寧（ウウニン）　王山（ユイシヤン）
湖北省の蒲圻（プウチン）
四川省の雅安（ヤウワン）　名山（ミンシヤン）
廣東省の惠陽（ホイヤン）
陝西省の紫陽（ツウヤン）

等であるが、日本の宇治に比すべきは浙江省の龍井である。支那の人に龍井と云へばお茶を思ひ、お茶と云へば龍井と言ふのである。

龍井のお茶は、昔は知らず今日では、綠茶が多く而も全く煎茶である。

日本の煎茶は、黄檗の隱元和尚によつて支那から傳へられたのか、それとも金儲けに抜け目のない商人の算盤王が持つて行つたのか解らんが、何れにしてもこの龍井からの流れであると私は思ふ。

何日であつたか魯迅先生とお茶の話をして居つた時に、日本の薄茶は支那では唐の時代の飲み方であると言ふことを聞いた。然し飲み方と云うても、あんな七面倒な形式や作法のことではな

い。無論遠州流の庭園でも、利久好みの茶室でもない。況んや一個の茶碗に萬金を投じることではないのである。たゞ茶の葉を粉にして飲むと云ふことであるのだ。

私の想像にして誤りなければ榮西禪師の傳へられたお茶は恐らく抹茶であつたと思ふ。而もそれは約として使はれて居つたものであつて、病後の衰弱とか疲勞した時とかに一種の興奮劑として服用して居つたものではあるまいか。長安の南の方に紫陽と云うてお茶の產地がある。あのお茶の葉を粉末にして用ひて居つたのであらう。抹茶とは粉末の末のことで粉にした茶と云ふことであり、薄茶とは茶の粉をお湯で薄く溶かして飲むからの名であらう（友人が薄茶とは濃茶に對して云ふのであると注意して呉れた、或はさうであらう）。

それは兎に角、薄茶なるものは唐代の渡來とすれば、當時の都長安からに違ひない。そして煎茶は薄茶とは別の道から卽ち龍井から日本へ渡つたものであつて、玉露は更らに違つたモツト南の福建からの渡來であると思ふのである。今も福建省のお茶には、蔵珠とか秀眉とか云うて日本の玉露に似たお茶が澤山にある。その又福建ではお茶の入れ方にも工夫茶（コンフチヤ）と云うて、非常に緩くりと時間をかけて出す法がある。日本の玉露にしんにうをかけたやうな方法である。又お茶についての逸話などにも、薄茶では解せられない、茶ではピツタリせない、玉露なら成程と肯定出來る話を歐陽予倩先生らかも聞いたことがあつた。

私は支那のお茶を色々集めたが、現在のお茶から考へると、前にも云ふやうに日本へ渡つたお茶にはかうした三つの源があると思ふ。

一つ不思議なことは、福建茶の王座と迄云はれる鐵觀音（テクワンイン）其他の紅茶の類が、何故日本へ渡らなかつたかと云ふことである。私は龍井に遠くもない上海に永く居りながら、而も龍井のある杭州へは度々行きながら、龍井に遊ぶ機會を得なかつたが、數年前の正月にゆつくりと出掛けることが出來た。

龍井は杭州西湖畔の山中にある清冽な水が滾々と流れて居る。その源が海につゞいて居つて龍が住んで居ると云ふので龍井と名づけられたのであるが、ホントの名は龍泓と云ふとか。水の傍らに龍井寺と云ふ寺がある。靜かな處であるだけに淸らかな水と共に好い感じを受ける。老龍井と云ふのは、今の龍井からは少し離れて居る獅子峰と云ふ龍井茶中の最高品の產地のあたりを云ふのである。山の上を上龍井と云ひ、山の下を下龍井と云ふ。龍井から有名な九溪十八澗へはダラダラの下り路である。

龍井へ一歩踏みいれると、同時に私の眼に第一に映つたのは茶芽と書いた文字であつた。此處ではたゞお茶とか茶の葉とは書かないで、茶芽と書いて居る（友人の一人が芽茶だと敎へて呉れた、或はさうであつたかも知らんが、兎に角今は私の記憶のまゝ茶芽と書いて置く）。

又驚いたことは、この支那隨一の龍井の全茶畑が、石コロのゴロ〳〵して居る實に哀れな荒廢地であつて、其處に植ゑられた茶の樹なるものが、悉く營養不良のヒヨロ〳〵とした貧弱な姿であつて、而も苔に包まれて並んで居るのである。支那茶は近年非常な衰退であると聞いて居つたが私は此の荒廢を一目見て直ぐこれではナアーと思うた。

支那が國として民族として衰退の一途を辿つて居ると云ふ人々もある、私は今その衰退の縮圖に直面して居るやうな感じがしたのである。日本の茶畑や茶の樹と思ひ比べて、興亡盛衰をマザマザと思ひ浮かべることが出來た。

然し次ぎの瞬間、さうした私の感じが又極めて私の皮相であることに氣がついて、再びビツクリしたのである。

龍井の茶畑が荒廢したのだと見たのはお恥かしいが、私の皮相に過ぎなかつたのである。實は支那の茶畑なるものは始めからより荒廢した荒蕪地を選んで茶の樹を植ゑるのである。茶畑にしてからも斷じて手入れはせないのである。雨降らば降れ風吹かば吹け雪も積れ霧もたゝけと全くの放任である。肥料なんてことは夢にも施さないのである。

お茶の事を書くとよく枯淡と云ふ文字を使ふ。枯淡の風味なんかと書くのはお茶に最も適した文句であるが、私は龍井の茶の樹を見て始めて枯淡の風采に接した思ひがした。

自然の風雪にさいなまれた龍井の茶樹の枯淡な風采と人間生活から解脱せんと惡戰苦闘を繼けて居る枯木のやうな支那の禪僧の姿とは確かに一脈通じて居るものがある。

油ぎつて丸々と肥へ肥つた日本の禪僧と、手入れと肥料の滿腹とに丸々と繁茂して居る日本のお茶の木とがよく似て居るやうに。

龍井の綠茶は自然の香味を枯淡な氣品に於いて味ふのである。そのために茶の樹までが枯淡に育てられるのである。

茶樹の姿だけでなく、茶芽なるものが又文字通り全くお茶の新芽ばかりである。最も上等の品は槍のやうな卷き葉や旗のやうにパツと開らいた二つ割ればかりである。

お茶をすゝめられて、出された茶碗の蓋を開けるのは失禮であるとも云はれて居るが、それは安物のお茶を出された時のことであつて、清明節以前に摘まれた明前とか、穀雨以前に摘まれた雨前など云ふ最上品のお茶を出された時などは、寧ろ蓋を開けて美しいお茶の芽を賞讃するのは決して失禮ではないと私は思ふ。好いお茶を出された時など、私は一口頂いて思はず知らず茶碗の蓋を開けるのであるが、日本のお茶にも上等の煎茶や玉露の葉が急須の中でお湯に浸たされて居るのは、誠に美しい色をして居る。然しその色には多分に人工がたゞようて居る。

これに反して龍井の明前や雨前などになると、茶碗の蓋を開けて見ると其處には自然のまゝの

茶の芽の姿が自然のまゝの色で靜かにやはらかに眠つて居るのが見える。

更らに蓋を斜めにしてすゝる舌の觸りこそ枯淡な自然の香味である。

成程、龍井のお茶は自然味を味ふのだなと云ふことがハツキリと私の心を捕へて呉れる。

枯淡がお茶の面目であるなら殘念ながら指は龍井に屈せずばなるまい。

武彝の岩茶、安溪の鐵觀音、雲南の普洱茶、祁門の子茶などについて面白いことが澤山あると思ふが、それはも少し味うてから書くことにする。

因に　湖南の洞庭湖沿岸一帶、湖北省蒲圻、江西省修水武寧、浙江省平水溫州、福建省福寧等にはロシヤ米國等への輸出茶も多く出るのである。

支那人氣質

黄包車（ワンパウツオ）（人力車のこと）が止まつた。一人の支那人客が車から降りた。

ハンカチに包んだ銅板（ドンペイ）（銅貨のこと）を丁寧に何十枚か數へて車夫に渡した。汗でビショ〳〵に濡れた借着のハツピを、クル〳〵捻ぢてジュウ〳〵と絞つて居つた車夫は、片手を出してお客から銅板を受取つた。捻ぢたハツピを小脇にかゝへて今受取つた銅板を五枚づゝ上手に數へて居る。お客はそれをジツト見ながら立つて居る車夫が數へ終るのを待つて、

『好否（ホウパ）』（ヨイかと云ふこと）

とお客が念を押した。その口の下から左の掌に今數へた銅板を載せて右の手で指しつゝ、

『勿對（ブテエ）々々』（イケないと云ふことと）

と云うてそれから例の通り相方が雄辯をふるうて居る。日本語で云ふと、

『あんな遠い處から來てコレばかりでは少いからモツト呉れ』

と車夫が云ふと、お客は、

『彼處から此處迄來てそれだけなら多い筈だ、此れ以上好い商賣があるものか』

と云ふ。車夫は入口の上の電氣時計を見ながら云ふ。

『見なさい三十分もかゝつて居るモウ二十枚增して呉れ』

と云ふ。お客は自分の腕時計を見ながら、

『嘘つけそんなにかゝるものか、それ見ろ十分より過ぎては居らんぢやないか』

とやりかへす。然し車夫は委細かまはず三十分かゝつたからモツト呉れ〳〵と手をさしつけてつめ寄つて來る。

かうしてお客と車夫とが聲高に言ひ合つて居る場面を上海では『ワラ〳〵』と云ふ。つまり騷がしいと云ふので、日本で使つて居る喧嘩と云ふ文字の内容に當て篏まるのである。

因に　日本ではお客と車夫との場合には絶對に車夫はお客に對して一種の敬語を使ふやうである。お客の方でもソレが當然のやうに考へて居るらしいが支那語にはアーした敬語は無い。第一お客とかお乘りとかお歸りとかおいもお魚おさつお豆腐と云ふやうな『お』の字をつける言葉も文章もないのである。『お』の字の本家である『御』と云ふ字は天皇樣以外には使はない文字である。從つてお客と車夫の間の言葉にも一言も敬語と云ふものは使はないのである。

此のワラ〳〵が尙ほ續くと、

『先生要面子否』と來る。旦那さんの顏はイラナイのかと云ふのだ。

『猪玀』（コン畜生の意味）

『飯桶』（食ひ拔けの意味）

とお互ひが惡罵を飛ばすやうになると今迄のワラ〳〵の場面はもう舞臺が代つたのであつて、この惡罵の場面が追々と熱を持つて來ると、例によつて支那一流の勇敢にして大げさなるゼスチユアーが始まつて、眼をムキ齒を喰ひしばつて、母指を中に包んだ握り拳が相手の鼻の先迄下の方からクツ〳〵クツと突き出されて來る。然しナカ〳〵突き飛ばしもブンナグリもするものではない。かうした場面を上海では『相罵』惡口の言ひ合ひと云ふ。

この相罵になる頃には、日本人が一口に言ふ彌次馬が二人を取り卷いてグルツと屏風を立て廻

はしたやうになつて居る。

然しこの連中は、決して言はれるやうな彌次馬ではないのである。後で一寸觸れるつもりであるが、一般日本人から一口に彌次馬と言はれるこの人々は、實は現狀監視人又は陪審人とでも云ふべきものであつて、この人々の間から必ず仲裁者が出て來るのである。それは例の大げさなゼスチユアーが相當速力を加へて來る頃であつて、そしてこの仲裁者によつて問題は十中の九迄解決がつくのである。

時々新聞記事を見て居ると（特に日本の新聞）、かうした時に集つて來たのは彌次馬であつて、頭から理も否もないボンボンビシ〳〵と打つたりナグツたりするやうに書いてあるが、そんな無茶なことは斷じてない。

一口に支那と云うても實に茫々たる大國であつて、支那人と云うしも到底吾々の想像さへも許されない程の四億の人間のことであつて、而もその四億の集團は支那人として四五千年の永い集團生活を續けて來て居る民族である。

例へ一時的にでも吾々が集團生活をする時に全く無秩序で生活が出來るであらうか、私はそれは不可能であると思ふ。必ず何等かの自發的にか命令的にか又は意識的にか無意識的にか秩序なくして濟むものではない。それが況んや何千年の永い間の集團生活であるのだから無秩序とか無

茶苦茶とか云ふやうな事はあり得ない。只だ習性が違つて居るだけである。秩序の様式に相違があるだけであると私は思ふ。

然るにそんな事を頭から考へないで、濫りに自分等の習慣のみで支那人を計らうとする日本人の多いことは、實に嘆かはしいことである。

多くの日本人にかうした考へ違ひがあるのは、その指導的立場にあつた人々の大きな罪であるとさへ私は思ふ。

隣りの國の人々の生活様式やその民族的秩序などの眞面目な研究をして居らないことは、殘念ながら吾々日本人の大なる缺點ではあるまいか。

支那と云へば丸で未開人でも住んで居るかのやうに思はせるやうな事に導いて來たのは、何んと云うても指導的立場に居つた人々の失敗であると思ふ。

支那人の社會に非常に發達して居る事柄に、前にも云うた仲裁と云ふことがある。小は個人間の紛糾から一村一鄕一省、遂に全國的の問題に至る迄其の悉くを仲裁によつて解決することである。日本人の或一部の人々はつい先日の兩廣と中央との問題の時にでも、早くやちまへ何をグヅグヅして居るのか又妥協か馬鹿々々しい糞面白くないとか云ふ人がナカ〳〵に多かつた。仲裁者の右往左往して居るのを見て冷笑を與へる人はあつたが、誰一人彼の方法を讃める人はなかつた

やうである。

然し吾々はモツト眞面目に考へなければならぬ。抑々戰爭と言ふ行爲はさう簡短に行ふべきものではない筈である。

イヤさう輕々しく實行されてはならんものである。戰爭は昔はたゞ戰士と戰士とだけの生命の取りやりであつて、其れによつて戰士の家族とか肉身にも不幸をもたらすやうなことはあつてもその範圍は極めて狹くて濟んだものであるが、今日の戰爭に於いては相互の國とその全男女から老幼の生命を迄も擧げてのやり取りである。誰であつたか知らんが、今日の戰爭は軍人が戰場で生命を失ふよりも少女が家の窓際で死ぬる方が多いと云ふやうなことを言うた人があつた。實際であると私は思ふ。而もその戰爭と云ふものが始めから勝つと云ふことが決定して居るものなら兎も角此れは戰つて見なければ解らんことである。丁か半かはサイを振つて見なければ解らんことである。四年間戰つた揚句たうとう大露西亞をして見事屈服せしめた彼の歐洲大戰に於ける獨逸を考へねばならぬ。露西亞は遂に國破れて空しく國民を生き地獄に追ひ立てたのであるが、勝つた國々も敗けた國におとらず國民は同じ慘苦を嘗めねばならんことは、大戰が敎へた大きな敎訓である。戰爭と云ふ行爲は最後迄避けねばならんことは當然である。戰爭の勝敗は最後の五分間で決せられるのか最初の五分間で決せられるのか知らぬが、然し戰爭は最後の一秒迄避けなけ

ればならんことは吾々平和を愛する日本國民の誰でもが知つて居る筈である。

あゝして仲裁者が往來して戰ひを避けようとして居ることはあながち冷笑惡罵すべきものではない筈である。

たゞ吾々の持つて居る尺と支那の尺とは少し違つて居るだけであるから、吾が尺で濫りに支那を測ることは必ずしも支那の正體に觸れる所以ではあるまい。支那を測るには矢張り支那の尺を用ひなければ、その正體に觸れることは不可能ではあるまいか。

兎に角支那人はありとあらゆる問題を仲裁によつて片附づけて居る。私はジツト眺めて來た、一體仲裁者はどんな鍵を持つて居るのかと。ある〳〵實に好い鍵がある、それは『馬々虎々』と云ふ言葉である。この言葉は實に微妙な働らきをするのである。今お客と車夫とが相罵して居る時に輪觀の彌次馬の中から一人の仲裁者が出て雙方の言ひ分を聞いてやる。相當永い時間を平氣で聞いて居る。あの辛抱强さだけでも私は感心する。やがて仲裁者がお客に、それでは貴方はもう此れだけおやりなさい、車夫の方へは、お前もモウ此れでよいではないかと云ふ。仲裁する多くの場合此れで片附くのであるが、時に雙方がナカ〳〵承知せないことがある。各々自說を曲げない、さうした時に仲裁者が雙方に對して『馬々虎々馬々虎々』と云うて肩をたゝいてなだめるとモウ問題は無い、相方共假へどんなに不服なことがあつても解決である。

この『馬々虎々』と云ふ奴は支那に於いて一面社會の病源であるが、他面又かうした巧妙な社會紛爭解決の大きな役目をも果して居るのである。假へ一面に社會の病源であつても他面にかうした大役を果して居るのであるから『馬々虎々』は功罪相償うて居るものである。

支那の事はホントに眼光紙背に徹するにあらざれば知ることは出來ないのである。一枚の紙にも裏と表とがある。馬々虎々が二面を持つに何んの不思議はないのであるが、由來一面のみを見て一面を見逃がすのが吾等の短慮である。事支那に關する限り如何なる場合如何なる事柄についても、吾等は必ず兩面の存在を信じて一面のみによつて判斷してはならんと思ふ。

仲裁者の馬々虎々で解決すべき事柄が極めて稀れに奏効せないことがある、そして相罵が激して來てお客からでもドンと一突き鐵砲でも喰れたが最後である（ソンナことはメツタにないことだが）。

『哀呀』と云ふ悲鳴は穹窿に響き渡るのである。それと共に今迄の『相罵』の舞臺は終りをつげて新らしい場面に代つたことになるのである。上海語では今度の場面を『打相打』（ナグリ合ひ）と云ふのである。勞働者や苦力などの間では打相打をやるが、それでもナカ〳〵やらないものである。況んや少しでも先生顏して居る者の間に於いては相罵から馬々虎々を超えて發展することは殆どないことである。

然し事一度　相打になつたら、前の場面でドンナ正しい理由があつた者でも打つたが最後である。今迄の正しい理由も勝味も全部取り消されるのである。打つた方が悪るいといふことになるのである。

打相打が始まつても、根氣のよい仲裁者は尙ほ雙方を引分けようとして努力するが、周圍の群衆はモウ相場を決めてゐる。打つた方が悪るいと打たれた方に味方するのである。その又打つた方が平素見知りの人間であつてその性質が悪るいやうな人ででもあつたら、同情は一層打たれた方に集中される。いらだつと打つた方の者に見えないやうに背後から始まつて右から左から群衆が打たり突いたり蹴つたりする。つまり亂擊が行はれるのである。

遂に相方の組打ちにでもなると、この亂擊はメチヤ〳〵に雨下するのである。然かし負傷させるやうなことは少ないが、それでも鼻血とか口の邊りが破れて血を流すとかすると群衆の同情は其人に加はるものである。

尙ほ打相打が續いて遂に何れかゞ死にでもしたら、舞臺は急回轉をする。

『殺人』である。

さうなると强盜であるとか何んとか特別の人間でない限り、モウ一切の條件は消えて斷然殺ろした方が悪るいのである(恐らく世界共通であらうと思ふが)。

私が今迄書いたのは吾々日本人の習慣に於て、たゞ一つの喧嘩と云ふ言葉によつて片附けられる事柄が、支那では『哇拉々々』と『相罵』と『打相打』と『殺人』と云ふ四つの各々獨立した行動に分解されるものであることを表現せんとしたのである。解つたらお慰みである。

かうした習慣を知つて、毎日新聞を見て居るとどうもその儘受け取れない記事はナカ〳〵に少ないものである。私の經驗から云ふと、新聞記事の誤りはその根本が當事者の誤りに始まつて、新聞記者諸君が又かうした習慣に全く不案内な爲めであると思ふ。無論大體に於いてゞあるが、兎に角支那人だとて決して狂犬ではない。支那民族は斷じし無茶苦茶ではない。チヤンと其處には支那的な秩序と云ふものがあるのである。要は日本人の尺と支那人の尺の相違だけである。漠然とどうも解らんなんて言ふことを止めて、お互ひ支那の土地に住んで毎日二六時中支那人に接してゐる吾々が、先づ支那及び支那人を知ることに努めねばならんのではあるまいか。今や支那再認識と云ふやうなことが叫ばれてゐる時である。吾等の認識や果して如何である。

相手の人の習慣を知ることは平和の最大なる條件の一つである。

上海漫語（その三）

揚子江

或る時、日本からOと云ふ友人がやつて來た。彼は支那も上海も全くの始めてゞあつた。Oは曰く、

『君揚子江と云ふ河はベラボーに大きなものだネ、僕は船の上からあの味噌汁のやうな水の色を見ただけでビツクリして居つたのだが、而も兩岸も見えないのにモウ此處は揚子江の河の中だと云はれて二度ビツクリしたよ。僕は學校で習うた地理の揚子江を思ひ浮べて經驗の實力と云ふものを始めて知つたよ。僕が揚子江の大に見とれて居つた時に、隣に居つた一人の上海に二十年も生活してると云ふ人が、三度僕を驚かしたよ。

彼の人の話によると、揚子江と云ふ河の水は年中五寸も增えるとか、一尺も減るとか云ふことがないと云うたのだ。怪物とはホントに揚子江のことだネ』

と云ふのであつた。私はこの話を聞いて又驚ろいたのである。彼はO大學も出て立派な紳士であ

る。而も彼は非常に常識の發達して居る人であるにも拘らず、揚子江と云ふ河の水の增減がないと云ふやうな出駄羅目話を私の前でサモ誠しやかに感心して話して居るのである。私は言下にこの出駄羅目話を訂正した。

『君其の上海に二十年生活してると云ふ人の話は全くの出駄羅目だよ。

抑々揚子江と云ふ河はネ、上海から港に迄が約六百浬あつて、その漢口で對岸の武昌まで河巾は約二浬ある。そして夏と冬とで水の高低は四十呎乃至四十五呎と云はれるのだよ。現に僕の知つて居つた頃に漢口の日清汽船會社の碼頭（棧橋のこと）では冬の減水期には道路から下へ四十五段の石段が見えて居つて、其の四十五段下から又水面迄一町位土があつて、其處から短かい橋があつて、橋の向ふに蟹船と云ふ浮棧橋で倉庫になつた汽船を横付けする棧橋が、鐵のクサリにつながれて水に浮いて居るのだ。その棧橋は三月頃から水が日々增えるに從うて高くなる。高くなるに從うて短かい橋と共に鐵のクサリをたぐりつゝ段々に道の方へ近寄つて來て遂に七月頃になると水は兩岸に滿水になるので浮橋も極めて近くに浮いて居るのである。

處がこの漢口から上海迄の六百浬の揚子江には殆ど高低と云ふものがないらしい。何んで四十八呎漢口が高くて、上海がそれだけ低いとか云ふことであるからまあ平面だネ。道理で何日でもまるで池の面を見てるやうに水面が靜かである。風の吹く時には浪は立つが丁度海の浪の

やうなもので水が流れるための瀬が立つのではないのである。
然かし上海附近になると、今度は海水の潮流の差に影響されるのであるから、漢口のやうに大きな差はなくなるが、それでも水に増減を見ないなんてそんな馬鹿なことはない。それは其人が上海と長崎と往復する汽船の上からだけ揚子江を見て居るから、それな出駄雜目を云うたのである』
と説明した處、O君はナール程と得心した。
私は更らに言葉を續けて揚子江名物の大筏の話をしてやつた。
『君も話に聞いて居るだらう。あの揚子江の大筏、あれは支那人は木筏と云うて材木の筏だがネ、上の方からも來るが然かし一番多く出るのは江西省の潘陽湖と云ふ湖からであつて、大きさも亦一番だネ。小さい木筏の上には小屋が一二軒よりないのもあるが、大きいのになると十軒十五軒位小局が並んで居るのもあるが、全體の形は一寸見た處では巾三寸長サ九寸位の比例尺で、其長さ一町位のものや時には一町半位の長さのものもある。
筏の上に家があると云うただけでも日本の人にはホラ話に思はれるのである。それが十軒も十五軒もあつて鷄が飼つてあり、豚が飼つてあり、家鴨も飼つて居ると云うたらいよ〳〵以つて大ボラ吹きと云はれるであらう。其處へいや筏の上に畑を作つて野菜が出來て居るなんて云

うたが最後、どうやら蘆原將軍らしいと云はれるのであるが、然しそれは何んと云はれても仕方がない。殘念ながらそれが事實なのだから……。どうだ君ホントと思はれるかネ?』
O君はたゞ一生懸命に聞いて居たが、私がホントと思はれるかと云うたので、始めて大きな呼吸を一つして、
『イヤハヤ僕にはホントとも嘘とも想像も何も出來ないネ』
と嘆聲を放つのであつた。私は尙ほ話を續けた。
『この大筏はネ、江西省の山奥から小さい筏で流れて來て、潘陽湖の修水と云ふ河の河口にある吳城鎭と云ふ所で、大筏に組み替へられて、揚子江へ出て途中の街々で崩し賣りしながら南京の下流の鎭江と云ふ街迄來る。此處で全く賣り拂つてお金を懐ろにして故郷へ歸るのだと云ふことである。鎭江から下流へ來ないのは、賣買機關のないと云ふことも一つの原因であらうが、又一つには水流の關係にもよるのであらうと思ふ。
兎に角この大筏なるもの〻動作と云ふ奴が、又ナカ〳〵の見物である。長さが一町あるやうな圖體に尻に梶が四ケ位ついて居る。そして才子(ホツ)(テンマ船)を一隻又は二隻位持つて居る。この才子は云ふ迄もなく街への交通船であると同時に、この才子には實に特別の任務が一つある。無論豚や鷄が水の中へ落ちた時の助け舟にもなる。又家鴨の集團を追うて行く親舟にもな

るのであるが、そんな小さい仕事でなく、實はこの大筏の前進の先き引きをこの才子がするのである。

この大筏が前進しようとすると、先づ筏の頭の方に造られて居る大きな錨綱を捲き取る大ロクロがあつて、そのロクロの上に長い線香がたてられる。ロクロの横に錨と錨綱とが置いてある。この亦た錨綱なるものが嘘のやうな話だが竹の縄である（筏の木材を組むのも矢張り此竹の縄であつて、これが即ち竹纜と云ふものである）。長い竹を薄く細く割つて麥藁眞田を組むやうに高いヤグラの上で丸い太い綱に組むのである。この竹纜の頭へ錨が結びつけられて居るので私はこの竹纜をチヤイニーズ・ワイヤロープと命名して居る。才子は大筏の前進に先だつてこの錨とワイヤロープとを積んで筏の前進方向に運んで行く、無論ワイヤロープは筏から續いて居るのであつて、その長さ一ツパイの處まで行くとドブンと錨を投げ込む。筏の方ではモウ大勢の人が出て來て大ロクロの周圍に立つて待つて居る。筏の頭は古びた太鼓を提げて、恰度大石内藏助山鹿流の陣太鼓と云ふ構へで立つて居る。ドブンと筏の投げ込まれたのを見ると共に不景氣さうな太鼓の音がトントントン、トントントン、トントントン響くと大勢の人々は一せいに大ロクロに、手をかけて胸を押しつける。ワア……と云ふトキの聲と共にロクロはギイギイギイと廻轉を初める。つまりこのロクロに捲き取られるだけの竹纜の長さだけ大筏は前

進するのである。（最近は小蒸汽船で引いて居る）

日本人の頭には、筏と云へば早瀬の川を瀬に乘つて勢よく下るとか、どんなに靜かな筏でも水の流れについて流下するものと相場は決まつて居るのである。だから筏流しとさへ言はれるのである。

斯うした日本人の筏常識はこゝに至つて根本的にひつくり返へされざるを得ないのである。解つただらう、揚子江の水の流れが如何にノンビリして居るものかと云ふことが……』

O君は又一つ大きな呼吸をして、

『解つた〳〵、日本人の支那に對する認識が如何に不足して居るかと云ふことが。そしていよいよ經驗の力の偉大さを知つた。本で習うただけでは全く片輪だ。本で習ふと共に實地の經驗と云ふことをして、始めて知つたと云へるのだネ。

二十世紀の尖端を行く上海も支那であり、太古のやうな揚子江の大筏も矢張り上海である。質は假へ一元であつても現象は二元である。日本人の多くは質の一元と現象の二元とを同一視して二元から一元へ轉向したつもりで居る。然かしそれは只だ油と水とを混ぜただけであつてこれは矢張り別々のものであつたのだネ』

揚子江の洪水

揚子江は大氾濫だ、六十年來の洪水だ。毎日の漢口電報は、たうとう五十尺になつた、又增えた五十一尺になつた、又增えた五十一尺五寸になつたと、水準の高まるのを報じて居る。

斯くて舊英租界（第一特別區）から最下流の日本租界迄二哩餘に亙る美しい沿岸の街は路傍樹に沿うて俄かに防水工事が施こされたので、流石の大水もこの堤防を越える迄には至らなかつたのである。

然しそれは人間の慾眼であつた。あの靜かな小波さへもたてない水にも驚ろくばかりの力があつた。堤防によつて氾濫をさえぎられて居つたあの水の壓力は、堤防の內側の道路の眞中から突如として水を噴き上げたのであつた。かうなつてはモウ駄目である。

眞に此れ沒有法子である。かくて必死の全防水工事は遂に徒勞に歸したのである。

兩岸は山が遠いので恰も大湖の如く水は氾濫した。處々に殘された堤とか墓とかの上には悉く避難の人が居る丘も堤も黑山の人である。山は全く避難者の極樂であつた。兎に角この大水によつて何千萬人の人が水難民となつたのである。

一體揚子江と云ふ河は常でも相當水の多い河で、舟楫の便と云ふことに於いては世界第一である。そして下流は非常に勾配がない。何んでも上海漢口六百浬の間に僅に四十八尺の差よりないと云ふのだからまるで平面である。

揚子江の氾濫は漢口方面に於いて漢口と漢陽との間を流れて居る漢水の堤防の破壞されたのが一大原因ではあつたが、一面勾配の殆どない六百浬と云ふ長距離の流れが非常に緩濁である爲に江水が海に流入する點には多くの時間が要る。其處へ上流地方の降雨が止まない爲に支流の水量は日々增して來るので、本流である揚子江が遂に大洪水となつたのである。日本の洪水のやうに一時に激流を爲して流れて一日にして減水するのとは違つて、毎日々々三寸五寸と云ふ工合に增水して來るのであるから、避難する人々にも其準備は割合に早くから出來るのであつて、舟とか筏とかと持つて居る家では增水につれて要意する。そしていよ〳〵避難せなければならんやうになる迄は止まつて居るのであるが、さうした舟とか筏とか云ふ物のない人々は早くから出來るだけ近くの、出來るだけ高い場所を指して避難するのである。今日高いと思うて避難した處も、明日には又避難せなければならんやうになる事も度々あるために、一週間から十日の間に數場所へ轉々避難せなければならんやうな事もある。

兎に角出來るだけの衣食を要意して避難はしたが、いつになつて減水する事やら、避難民は毎日毎日まるで海のやうになつた水面を見ては呆然として居るのである。

最大限に準備した食物は盡きて來る。雨露を凌ぐものなき此等空腹の避難民は、まるで濡れ鼠のやうになつて寒さにふるへる。病氣は發生する。病人は醫師も藥も求められないために次から次ぎに死人が出る。國民政府では救濟金の募集を初めた。日本宮內省から十萬圓の見舞金が來た。華洋義損會は何十萬圓かを集めた。そして、どんに遣はれたか私は知らないが、恐らく何千萬人の救濟には九牛の一毛に過ぎなかつた事と思ふ。日本の大震災の時に支那からは新銘鄕と云ふ船に食糧品を積んでお見舞に來て呉れた事を感謝して居る人々は、今日の揚子江の大洪水に同情して日本でも御見舞船を出す事になり、各方面から醵金して食糧品を買入れて赤城丸(?)に滿載して、水害見舞にやつて來た。上海迄——實に水害地でない上海迄である。この時は日本の政治的問題が紛糺して來て居つて折角持つて來た食糧品を支那側では斷じて受取らないと云ひ出した。折角持つて來た赤城丸滿載の食糧品は再び日本へ持つて歸つてたうとう賣拂はれたと云ふ椿事があつた。

受取らない者も者だが、折角持つて來て又持つて歸る者も者である。何れおとらぬ馬鹿野郎共であると私は憤慨するのである。なぜならこの受取らなんだ者共は漢口方面で修羅場に苦しんで居る人間ではなくて、上海で自動車を飛ばして一食千金を湯盡して平氣で居る政治家や呑氣者の政策上からの見解であつた。斷じて洪水の修羅場にあへいで居る人々の行爲ではなかつたのであ

る。

其處へ又持つて來た者などは同樣に死ぬるか生きるかと云ふ修羅場の事など一向に見た事のないお目出度いお方樣と來て居つたので、ハイ左樣でと折角の救濟品を持つてスゴ〳〵とお歸りになつたのである。

私は憤慨する、大馬鹿野郎共と。ホントに水難民の救濟のための食糧ならなぜ水難地である漢口迄直接に持つて行かなかつたのか。何んの爲に上海にウロ〳〵して下らぬ交渉なんかして居つたのか。平常でも夏は一萬噸の軍艦の上下が自由である。況んや大水の時である赤城丸がまさか進航出來ないとも言はれまい。それは兎に角として受取る方も實際に水難民の事を考へたなら、何故小さい政策なんか弄して居つたのか、口に救濟を叫びつゝ政策上受取ることが出來ないなんてこの人々もホントに水難民の生命を少しも考へたのではないと私は思ふ。其故に馬鹿野郎と云ふのである。若しも避難民をしてこの實情を見せたら恐らくこの馬鹿野郎共はタ、キ殺されたに違ひないと私は信じる。

未曾有の大氾濫に遇うた水難民は小高い土地に、丘に、山に避難したのであるが、減水は非常に日數がかゝつて、遂に彼等は食ふに物なく、空腹をかゝへて雨露と寒氣に曝らされて、あまつさへ病魔の襲來を受けて死人の續出となり、この世ながらの生地獄を現出したのである。

其處へ誰かゞやつて來て、この旗を持つてあの街へ行け、飯も呉れる、衣物も呉れる、病人には藥も貰へると言うた。溺るゝ者は藁をもつかむ、飢と寒氣と病魔にさいなまれて居る人々の爲には天來の福音であつた。彼等水難民は最後の力を出して吾れ勝ちにその旗を奪ふべく集つた。そして各々旗に手をかけた。中には手をかけたまゝあへなく息きを引取つたものもあつた。然し旗は少く人は多かつた。

旗を持てる人は言うた、この旗一本に百人迄の人が集まれと。そして此處に一本ツキさし彼處に一本ツキさして呉れた。そこで一本の旗には數十人又は百人がこの旗につゞいたのである。

この救濟の旗は此方の丘の水難民にも彼處の山の水難民にも悉く渡されたのであつた。

生命の綱のこの旗を手にした水難民共は最後の力を出して舟に、筏に、舟も筏もない者は淺い處を選みつゝ水に滑りながらあの街さして各方向から行進を始めたのであつた。舟の中で死んだ者もあつた。筏からころげ落ちて往生した者もあつた。水中で足を滑らすとそのまゝ起き上る力もなくて行方も知れずになつた者もあつた。あゝ彼等の行進こそは極東を指しての最後の死力による行進であつた。

街の公安を維持する公安局巡捕や軍隊の目にこの俄かに起つた避難民共の大行進が何んと見えたであらうか。

非常ラッパは餘韻を引いて物凄くも鳴り響いた。直ちに武裝した輕機關銃は持ち出された重機關銃も運搬されて來た。人垣を作つて居つた巡警も兵士も散開した。

雜然として騷然として食と衣とに一分も早くありつかんものと先きを爭うて街を目がけて行進して來る飢餓の一隊に對して安全辨は悉く除かれた。

多くの兵隊が右往左往するのを遙かに見て飢餓の群れはこの上なく喜んだ。あの人々は今餘々を運んで居るのであらう、熱いお粥を煮て居るのであらう、溫かい衣を持つて待つて居つて呉れるのであらう、一足でも早く行つて食ひ、衣にありつき度いと文字通り餓虎の如くに舟も筏も水中に渡渉のジヤブ〳〵軍も先きを爭うて行進したのである。

漸くにして近くなつた、人の顏さへも見えるやうになつた。

と、突如悲鳴の如き喚聲がウワツウワツと四方から唸りのやうに上げられた。それと共に街の方から異樣な物音がはけしくする。コト〳〵〳〵〳〵ボツ〳〵〳〵パン〳〵〳〵。

見る〳〵中に、餓虎の群れの喚聲は消えてしまつた。たゞ異樣の音のみは尙續いてゐた。と靜かになつた水面には無數の屍骸が浮いたり沈んだりして居る。此處彼處から彼等の持つて居つた旗が生命の綱が、救濟の印が拾ひ集められた。その旗の色は皆な紅かつた。

巡警も軍隊も皆な共產黨討伐の功勞によつて、何程かの酒錢にありついた。街の商總會は少か

らぬ御用金を獻上した。その後郊外には共產軍討伐の記念の矢倉が建設された。

こゝに殘る疑問は、紅い旗は誰が持たせたかと云ふ一つの事柄である。

上海漫語（その四）

陰陽、明暗、高低、大小、上下と云ふやうに土地の名などでも北京、南京と云ふやうに對蹠的に人に覺えて貰へたら仇恨さらにない筈であるが、人事兎角思ふにまかせぬが故に浮世と云ふのであらうか。こゝに最も哀れを止めしは上海（シャンハイ）（上海の土地の發音ではソンヘイである）と云ふと世界的に知られ押しも押されもせぬ極東の大都會であることは誰でも知つて居るに反して、下海（シャーハイ）（上海の土地の發音ではオウヘイである）と云ふと氣の毒にも知つて居る人が皆目ない。日本人など身自ら其下海に永年住みながらサアーそんな處がありますかと云ふ程である。これでは下海なるもの少しは恨みもするであらう。下海に對する上海であらう、上海に對する下海であることを覺えて居つて下さい、揚樹浦方面のことである。上海事變以來有名になつたのがクリークである。ラヂオニュースでは丁寧に解說さへして呉れる。も一つ閘北（チャハイ）（上海の土地の發音ではザボ）であるが日本內地ではザホクと、上海語と日本語のチャンポン讀みの方がよく通じる。何れも博學なる支那通がお取り次ぎされたからであらうと思ふ。

これから書く私の漫語の中に、エキステンションと云ふのがある。英語もフランス語も知らん日本語一點張りの私には、この言葉の內容は、文字及び言葉によつては說明出來ないが、一つ實際から見てのニュース解說をすることにする。

このエキステンションを支那文字では越界築路と書いて居る。この文字で說明すると極めて簡單である。界を越えて築かれた路と云ふのである。つまり租界と云ふ限られた區域から其界を越えて築かれた路のことである。

なんだそんなことかと云うて終へばそれだけであるが、實際はどうもそんなに簡單に行かないのである。丸で人生のやうなものである。ホギャーと生れて五十年ウンと死ぬる迄を人生と云ふと言うて終へばそれ迄だが、實際にはその五十年に遂に說明の出來る事やら出來ないこと迄があるから厄介である。

越界築路は誰がどんな條約で何時頃作つたものか私は知らない。一體英國人の經營と云ふものは大體この越界築路のやうなもので、條文に調印してキツパリと條約を結んでから仕事をするのではなくて、すべての事は馬々虎々（マアマアフウフウ）（これは上海語であるが極めて調法な言葉である、玆に私が使つてゐる意味はアヤフヤな間と云ふ意味である）の間にズン〳〵仕事をして行くのであつて、文句や面倒は發生してから審理する人間らしい。丁度內山完造と云ふ名が登錄されてから人間が

生れて來るのではなくて、何んの何兵衞になるのか知らんが、赤ん坊が生れてから後に戶籍役場に登錄されるやうなものである。越界築路も恐らく生れてから問題になつたのではないかと思ふ。發生の因なんかどうでもよいとして、今日の實際狀態を云ふと越界築路は租界の限界から外へ支那街に動脈のやうに太く遠く迄延びて居るのである。大山大尉最期の場所である虹橋路とか、先刻御存知の北四川路などは代表的なエキステンションである。このエキステンション街上の行政權は共同租界工部局が持つて居るのであつて、この街上及び地下に通じて居る電燈、電話、水道は又共同租界內に外國人が經營して居る物である。道路の行政と云ふものが租界工部局にある、そんならその道路の兩側の家屋の住人は一體どうなるのであらうか。理論から云へば兩側の家屋も住人も當然支那街の管理すべき筈であるのだが、それが實際問題となると止むを得ずではあるが全く租界工部局の管理に屬して居るのである。それは支那街官憲が管理しようとしてもこの道路の兩側に建ち並んだ家屋に立ち入らうとするには是非共同租界工部局の道路を通らねばならぬ。其處におこる問題は工部局行政權の侵害と云ふことである。故に支那街官憲はその管理權はあつても實際に執行することが出來ないのである。

其處で租界工部局が代つて管理して居ることになるのである。其處で此等の兩側の住人に支那街官憲が課稅しようとしても實際には徵收が出來ない。租界は課稅する權利がないと云ふことに

なつて、多くのエキステンション住人は免税の特權を持つて居ることになつて居るのである。實は工部局はエキステンション住人に對しても課税して居るのであるが、强制權がないために納税者が甚だしく少ないとのことである。

このエキステンションではなか〳〵面白いことがある。一人の盜賊が北四川路を逃げて居る後から工部局の巡査が追ひかけて居る。其中に盜賊は横丁へ走り込んで終つた。そこらに支那街の巡査の姿が見えなければ盜賊はモウしめたものだ。走るどころか悠々と大手を振つて歩るいて御座る。その筈である、追ひかけて來た工部局の巡査は支那街に屬するこの横丁へは一歩も踏み込むことは出來ないからである。一歩踏み込んでもそれは國權の侵害となるからである。これと反對の場合も亦た同樣である。何んと厄介な道路ではないか。エキステンション回收問題と云ふのは、この厄介道路の行政權を支那街の管理に歸さうと云ふのであるが工部局もなかなかさる者である。ハイ左樣とは決して言はないのである。先づエキステンション區域を一つの特別區域として租界の管理から切り離して、支那人を主任者として經營して見ることにしようと云ふことに相方の話が落ち合うて居るのが、現在のエキステンション問題である。未だ實施を見ないのである。電燈、電話、水道などの問題が自然とこの問題に附隨して來るのである。

この北四川路は南から北へ〳〵と延びて一度私の店の前で西に曲つて江灣路に接續して、上海

市政府を中心にして新らしく建設せられつゝある大上海の中心區を經て遠く吳淞に迄達して居るのである。

上海で非常に目につくのは澤山のやどがへ自動車である。上海搬場公司、中國搬場公司等云ふ文字をデカ〳〵と書いた大きなトラツクである。北支事變が發生してから後、上海人の神經が緩慢ながら活動を始めた頃から、これ等のトラツクがやや頻繁に通行するのが目立つやうになつて、私をして又かと思はせたのは、宮崎水兵事件の直前のことであつた。私の記憶を辿つて見ると、國民革命軍が上海をその掌中に納める前に北四川路邊の支那人が一度租界内へ避内の引越しをしたことがあつた。最も南市や城内から第二革命の時であつたか江南機器局邊の爭奪戰の時ナダレを打つて租界内へ引越して來たことがあつた。其後は全く忘れられて居つた處、前年の上海事變に際して北四川路方面から租界内や蘇州、杭州其他への汽車による避難、寧波方面への船による避難で大混雜をしたことがあつたが、其後は中山兵曹事件の時に一度、更らに田港水兵事件の時に又一度、蜒蜿長蛇の陣を造つたことがあつた、その避難引越が今又始まつたのである。

然し搬場公司のトラツクが悠々として走つて居る時代の荷物は樟木箱子（楠の箱）とか、ハイカラな旅行用のトランクや、スートケースや、大きな皮鞄とか朱塗りや黑塗りの支那鞄とか、姿

見附きの洋服箪笥などをギツチリ詰め込んで、應接間用のテーブル、チエア、ピカ〳〵して居る大ダブルベツトなどを滿載した車が前に行つて、後の車には厨房の料理臺から下女下男の食卓から椅子樫子から物干竿からナマコ板の煙突迄はづして詰め込んだ車に、召し使ひの阿媽や苦力が數人上乘りして、無論彼等自身の衣裳箱などはチヤンとこの車の一番始めに積み込んである。苦力も阿媽も申し合せたやうに穿き古るした靴を大切に兩手に握つて居る、と云ふ引越しである。無論これ等の荷物の御主人公は已に早くより大切な現金とか銀行の預金帳其他金銀寶石の類は、澤山の家族と共に自家用の自動車で、フランス租界あたりに四方庭附きの住宅を借り受けて、荷物の來るのを今や遲しと待ち受けて居る程度の人々である。

彼等は北支問題の雲行きを鋭どい直觀でジツト考へて、どうも上海もをかしいと見透しをつけて、萬一の時を用心して平素は安全を頼みにして住居して居る日本陸戰隊の守備區域を後にしてより安全と思ふ方面へと引越して行くのである。

かうした連中の引越しがやゝ頻繁になる頃になると、何處から誰が言ひ出すか知らんが、戰爭が始まる危い〳〵と云ふ流言が水のやうに流れる。その謠言にモーターをかけるのが舊英租界やフランス租界方面に借家を持つて居る家主共や搬場公司や、自動車屋や、黃包車（人力車）や、小車（一輪車のこと）、老虎車（この車は昔私等が大阪で丁稚の頃ひつぱらされた俗に云ふ丁稚

車のことであつて、車の形から考へたのか又非常に堅固な車である點からかつけた名である）から、遂に買東西（日本の屑買ひに比すべきもの）に至るまで、危いぞ〳〵戰爭が始まるから早く引越せ〳〵と流言を飛ばして歩くのである。

それは甚だ罪深かいことではあるが、これもみな各自がその營業に忠實なるに外ならんのであるから又止むを得ないことである。公安局でそんなことは決してない、引越してはならん、と何程止めたところで當てにもならん公安局の言ひ分位で安心して引越を中止するやうな人は支那人中にはマアあるまいと思ふ。

毎日續く支那人の引越しは、七月二十八日には頂天に達した觀があつた。トラツクに、自動車に、黃包車に、老虎車に、小車の長い行列が續いた。田舍のお百姓さんが一家族を引きつれて蓆を持つ者、支那鞄を提げる者、空罐を提げる者、茅桶（支那人特有の丸形の桶で造られた大便器である）を提げる者、親父は古い机や椅子や櫈子（椅子のもたれのない物を云ふ）や手桶や洗臉盆（上海では面盆と云ふ顏を洗ふ盥のこと）などを一方にして、一方には米袋を荷にして一荷擔うて、吾れ後れじと租界を指してナダレを打つて押し寄せるのであつた。

店頭の便茶を呑むべく立ち止まつた母親が、乳呑子を抱いて十歳位を頭に三人の子供を歩かせ

て居つた。相當長い道を歩いて來たと見えて暑さと渴きにあへいで居るのがよく解る。折惡しくお茶が空になつて居つて一滴もなくなつて居つた。空罐を持つて何んとも云へない悲しい顏をした、私の目に今もナホあり〳〵と見える。私はスグ言葉をかけて一寸待てと云うた。彼等は日本人である私がかけた言葉に對して、何んの疑ひも反抗も持つては居らぬ。極めてスナホに空罐提げて入口近くまで來てジツト待つて居る。私は大きな麥茶のヤカンを提げて來た。彼はすぐ空罐を差し出した。私は全部の麥茶を入れてやつた、そして、これは麥茶であることを注意してやつた。子供等迄が謝々々々と云ふ口の下から、ガブ〳〵ガブ〳〵と呑んで居る。一杯の麥茶で丸で生きかへつたやうに顏色が冴えて來た。

私は母親に、お前等は何處から來たのかと聞いたら、蘊藻濱（ウンツァオパン）だと云ふ、蘊藻濱とは江灣鎭から少し北の方である。何處へ行くのかと聞いて見ると租界へ行くと云ふ、租界に親戚とか友人でもあるのかと聞いたら何にもないと云ふ、何をしに行くのかと聞くと戰爭だから避難して行くと云ふ、誰が戰爭だと云うたかと聞いたら、保安隊の兵が今夜三時から日本の兵と戰爭をするのだと云うた、と答へた。

そして彼等は重い足をひきずりながらトボ〳〵と北四川路を南へ〳〵と歩るいて行つた。

今日の幾んな引越しの原因が解つた、今夜三時から日本の兵隊と戰爭すると云ふ何んにも知ら

ん保安隊の强がりのゼスチユアが、かうした無辜の人をしてかくもいたましき狀態を呈せしめるのである。私は彼等無責任なる流言者破安隊（保安隊にあらで破安隊である）に對して、少なからず人道的怒りを押さへることが出來なかつた。

大きな皮の鞄を路傍に置いて、黃包車と車賃の交渉をして居るハイカラ婦人がある、蓆に舖蓋（ブックカイ）（フトンのこと）を包んだのを肩にして歩く七八人の工人の一群がある、前の籠には子供を一人入れ後の籠には家財道具を詰めて、父が擔ひ臨月の母が二人の子供と米袋とを抱へて黃包車に乘つて行くのがある。

バケツの中に、飯碗（ファンワン）（御飯を頂く碗、日本で茶碗と云ふ）の五六個と、筷子（クワイツ）（おはしのこと）と、粽子（ツオンツ）（チマキのこと）十個ばかりを入れて提げた父を中にして、五人の子供をつれて向ふの方ばかり見ながら歩いて居るお百姓らしい一群がある、老虎車に支那鞄を積み上げてウン〳〵云ひながら引いて行くのがある、昔日本で千金丹賣りが提げて居つたやうな眞中からポンと二つに開かれる鞄の大きな奴、小さい奴を提げた老人が行く、若い人が行く、阿媽が行く。

靴の紙箱を大切に持つて行く年頃の娘がある、大方中には赤い刺繡をしたお嫁入りの靴でもあるのであらう。黑い皮のスウトケースを阿媽に持たせて團扇片手に太陽を除けながら、早口に何かシヤベリつゝ家鴨のやうにお尻ふりふりヒヨコヒヨコと行く纏足の老婦人がある。舖道に立ち

並んで避難し行く人をジツト見て居る男、女、老人、子供がある。

向ふ側の煙草屋が家財を運び出した。隣りのミシン屋がミシンを運んで居る。その隣りの洋服屋は二階から大きな洋服箪笥や女の衣裳箱やを出して居る。遂にウインドの生地の反物までキレイに運んで居る。米屋は米を雜貨屋は雜貨をドン〳〵運び出して、店はホンノ少しばかりバラバラと並べて、イザと云へば何日でも逃げられるやうに準備して居るのがハツキリ見える。大部分の品物や家財は女子供と共に安全區域に家を借りてか部屋を借りてチヤンと避難さして居る。

共同租界やフランス租界では三十元の家賃が五十元六十元になつた、而も三ケ月前金ばなければイヤ六ケ月前金でなければ貸さんと云ふ、十五元の部屋代が二十元二十五元三十元と鰻上りに上つて行く。

それ處か一時間四元で苦力四人附きのトラツクが今日では六元になつた、八元になつた、トウトウ十元になつた、それでもナカ〳〵來て呉れないと云ふ。

平素は黄包車に相當持てる東洋先生（トンヤンセンション）（日本人のこと）も今日は呼んでも見向きもせない。だからと云うて排日抗日と早合點してはならん、要するに避難者の方が二倍三倍の儲けになるからに外ならんのである。

支那の人物評をして誰は親日派、彼は親米派、あれは排日派、これは親英派、などゝ得意になつて通を振り廻はして居る人もあるやうだが、一寸待つて下され、黄包車に平素持てる東洋先生でも、引越や避難民をお客にとれば、二倍三倍のお金儲けがあるとなれば東洋先生も何んのそのだ、呼んでも見向きもして呉れないのだ。

然し其時大きな鞄か柳行李でも持つて、『黄包車！』と一聲呼べば恐らく先きを爭うてやつて來ること受け合ひである。無論車賃は二倍又は三倍になることは言ふ迄もない。かうした光景はたうとう日本人を動かすやうになつた。日本人の避難引越は租界内へ行く人は割合ひに少くて、多くは日本内地への引上げであるから、郵船會社は滿員滿員の大當りである。

日本人の動搖を見て支那人が又動搖しだした。ジツト落ちついて居つた支那人までが、たうとう動き出したが、それでも二三日はやゝ靜かであつた。

それが又熾んになつた。どうしたのだらうか。今日は又引越しが非常に多い、日本人の家に雇はれて居つた阿媽やボーイが、月末に月給を貰ふとそれきり來なくなつたと云うて困つて居る人が澤山になつた。

西部區域に住んで居る友人から、電話で北四川路方面は大變だと云ふが、どうかと聞きに來

る。ウン引越しで大騒ぎだと云ふと、何んでも今夜南京から飛行機百臺で上海を空爆すると云ふのださうな。

あゝさうか、それで今日の引越しの盛んな原因が解つた。從前の引越しは多くエキステンションに住んでる人々が租界内へ避難するのであつたが、今次の引越しは只に其等の人々のみでなく、實に近郊近在の農民までが、上海へ上海へと避難して行くのである。而も此等の人々は租界内に身内や身寄りでもあるのかと云ふと、その多くはたゞ租界へ〳〵と人浪に押されてはひり込むだけであるから寢るに家なく泊るに部屋もない人々である。此等の人々は晝間は何んの的もなくゾロ〳〵と街を彷徨して居る。夜ともなれば天氣の時は舗道に鹽鰤を並べたやうにコロリ〳〵とゴロ寢をするのであるが、雨降りの日には無論舗道には寢られない、又街上に彷徨することも出來ない、それでは一體あの溢れるばかりの人浪は何處へはひり込むのであらうか不思議千萬のことである。

そして何時でもかうした時に杞憂せられることは、此等難民が暴動を起こしはせんかと云ふことであるが、これ亦不思議にも一向に暴動化せない靜かなものである。かうした色々のことを見たり聞いたりして、さて一體支那の政治家とか軍人とかはこんな時どんなにして居るものであらうかと云ふことを考へて見ると——

彼等は常から各々その鄕里にも家を持つて居る、そして上海にも共同租界の西部とかフランス租界の内部に堂々たる住宅を構へて居る。無論位置の低い人々はこんなことは出來ないが、相當權力家と云はれる位の人は大體に於いて同じことである。も一つ南京勤めの人なら南京にも家を持つて居るのは云ふ迄もない、出るにも入るにもビツク・シボレーの最新型を無遠慮に飛ばして居るのである。何時何事が起つても大丈夫なやうに平素から心掛けよく萬事が行き屆いて出來て居るのである。勿論金錢は外國銀行に預けてある。用意周到な人になるとチヤンと磅とか弗とか法とかに換へて居るのである。日支の問題が如何に紛糾しようが混亂しようが、或は遂に戰爭にならうと一身上の不安と云ふものは先づないワケである。これが保身の秘訣であり身を守る極意である。

私は支那の政治とか軍事とかについて語る可き資格は無論ない。何故なら何んの研究もして居らんからである。私が少しでも注意して居るのは庶民の生活と云ふ一點である。私の考へでは人間の一生を五十年として、實際浪風にもまれるのは三年か五年で、殘る四十五年か七年かは平凡なおだやかな生活の出來る時であると考へる。そこで私は支那流に少い時間を主體とせずに、長い時間を主體として考へることにして居るが、支那の庶民生活は政治や軍事とは全く離れて居る

と思ふからである、言葉に足らない點はあるが。

支那の政治も軍事も悉く庶民と云ふものが根幹である可きである、そんな事は今更ら言ふ迄もない、三民主義を讀んだ人なら誰でも知つて居るといはれるかも知れぬ。左樣その通りである。一も民、二も民、三も民である。先づ庶民が土臺である筈である。然し現實の狀態を見て居るとドウモそれがさう考へられないのである。

三民主義が立國の基礎であり、庶民幸福の根本であると聞かされて居りながら、尙ほ且つ私は大なる疑問を持つて居るものである。三民主義が立國の基礎であると云ふことと、庶民の幸福であると云ふことがらにも、私は矛盾があるやうにさへ思はれるのである。

例によつて私は獨斷するが——支那の庶民は如何なる時にも戰爭を欲する者ではない。一面に支那統一の國家的基礎は定まりつゝある時に、庶民は飢饉、洪水、旱災、戰亂に禍ひされて久しい間塗炭の苦しみを嘗めて來たのである。

支那の庶民生活は、昨年秋の珍らしくも平和にして全國的豐年豐作に面して一躍回生の色を呈したのである。豐年豐作で回生の色が見えると共に、各地市場は近年稀れに見る活況を見せて來た。內外の商品の動きは慚を追うて活潑となつて來た。それは今日尙ほ繼續されて居るのであ

る。排日も抗日もない。在支日本人紡績の未曾有の好況と云ふ一事だけでも已に瞭然たることであるが、たゞ紡績會社だけてなくあらゆる商品に於いてそれが見られるのである。かうした商業上の好景氣はその根底に農業の豐年豐作と云ふものがあつて始めて然るのであるから、私はこれを庶民生活の活況と云ふ。かうした庶民生活の活況に於いて、誰が戰爭を欲するであらうか、言ふだけ野暮ではあるまいか。庶民は戰爭を起さないやうにと努力こそしたが、戰爭せよと奔走した者はそれによつて儲ける者以外にはマア一人もあるまいと思ふ。

然かも遂に今日の上海事變にこれを導いたのは一體誰がしたことであるか。

支那の政治が實際に庶民を根底として居るなら、庶民の欲せざる庶民の希はざる戰爭がナゼ起つたのであらうか。

假へ北支事變が重大性を持つて居るとしても、それは矢張り支那のためには土地から云うても庶民から云うても一部分に過ぎないものである。その一部分のために支那の大多數である中南支那の庶民が果して抗日戰爭を上海に於いて强行することを希望したであらうか、假へ新聞や雜誌に何んと書かれたとしても、私にはそれが庶民の聲であるとは考へられないのである。

色々の關係や事情から表面に表はれることは少なかつたが、實際に如何に庶民が上海事變を回避しようとしたか、又そのために色々の手段方法が構ぜられたかと云ふことは知る人ぞ知つて居

る筈である。

支那の軍備が日本に對して五分々々、若くは六分の勝味があつてなら兎に角（戰爭は軍備の比較のみで決することは出來ないと云ふであらうが、大體に於いてさう考へて差支へないと思ふ）殆ど見込のない全く段違ひの軍備を持つて居る日本に對して、捨鉢的挑戰的態度を採つたことは支那經濟の心臟である上海に自ら劍を突きさした自殺に均しい行爲であつたと私は思ふ。

この大きな誤りは何んであるかと云ふと、それは恐らく兪上海市長の日本に關する無智と云ふことではなかつたかと思ふのである。特に日本の軍備と云ふことに今少し正確な認識があつたらあんな行動は採らなかつたであらうと思ふ。

何時如何なる事があつてもちやんと保身の出來て居つて心配のない、ゼスチユアばかり徹底して居る、決して機關銃の前に立つことのない抗日戰爭を主張する認識不足の、一口に云へば極めて若かい苦痛と云ふことを知らない所謂幸運兒彼の責任や大なるものであると私は思ふ。

イザ戰爭イザ事變と云ふ時に、一家一族の生命も財產もその全部が危險の丸ざらしになつて、誰からも保護も守備もして貰ふことがないのみならず、味方のために婦女に汚辱の犧牲とさへされる恐れの多分にある徹頭徹尾悲慘に直面させられる庶民が、何んのために戰爭の强行を要求するであらうか。

曾つて揚子江の大洪水に際して、日本の國民がその悲慘に同情した贈物を赤城丸に滿載して慰問に來た時、その滿載せる食料品を政治的紛糾を口實にして受取ることを拒んだのは誰であつたか。

喰ふに食なく着るに衣なき實際の水難民が、果してこれを拒んだであらうか。

私は斷言する、それを敢へてした者は、飛馬輕車に身を委ねて一夜の宴席に平然として千金を投じて、春宵一刻を樂しむ政治家であつたのだ。彼等は自己の政治的面子（メンツ）のために幾千萬水難民の甘露である而も國民的贈物である食料品を蹴飛ばして得意然となつたのである。

彼等政治家は身自ら飢ゑも寒さも瀕死の病も知らないが故に出來たのである。自らその立場に居らざるが故にあんな馬鹿々々しいことが出來たのである（假へ日本から來た使者に何等かの間違ひがあつたとしても）。

飢ゑに泣く幾千萬庶民の聲は誰が聞いたか。彼等の飢ゑは果して如何にして滿たされたか。今日尙ほ上海附近に、河北河南湖北などの縣知事が捺印し、世の慈善家に救濟を依賴した大きな紙の飢民證明書とでも云ふ可きものを持つて、乞食して歩るいて居る數へることも出來ない程の多數の難民は、一體何を物語るものであるか。私は今次上海事變に對してもこの實例を引いて、庶

民と共に支那の政治に抗議するに躊躇せないものである。

かくて支那の政府は依然として庶民の幸福と云ふことからは全く離れて居るものであることを學び得たと共に、庶民を危機に丸ざらしにして自ら安逸と贅澤に平然たり得る矛盾に注意を促がさんとするものである。

上海漫語（その五）

一

上海の夏はあつい、朝九時と云ふのにモウ寒暖計は九十二度に上つて居る。暑いナアーと言ひながら私は表へ出た。私の目に第一番に映つたのは淋しい姿の一人の黄包車夫（ワンポウツオフ）が涼茶（リャンヂャウ）（便茶のこと）を呑んで居るのであつた。私は無意識に彼の動作を見て居つた。彼は熱い〳〵お茶をフウフウと吹きながら、而も非常に忙しくシヤクリをしながら續けて竹杓に三杯も呑んで、又四杯目を一杯いれていま迄のイライラした調子に少し落つきが出來たやうであつた。拋げるやうに車の梶棒を置いて蹴込みへドツカと腰をかけた。

私は何んだか話して見たくなつて來た、私の足は自然と彼れに近づいた、私は聲をかけた。

黄包車儂住了甚地方（ロンポウツオノンズ・ラ・サテイフアン）（車夫お前の住居は何處か）

我住宅是江灣（グーズ・ザズ・コンワと）（私の住居は江灣だ）

儂朝辰頭歩來幾點鐘呀（ノンツオヂンドウボウレイチイテエツオンヤ）（お前朝何時に出て來るのか）

我歩來六點鐘（私は六時に出て來る）
儂個車子甚公司借來呀（お前の車は何會社から借りるのか）
我個車子火車牌公司（私の車は汽車の印の會社だ）
租車銅錢幾錢一天（車の借賃は一日何程か）

上海の黄包車は全部貸車である。星牌と言うてスターコンパニーとか何んとか言うて大體は西洋人の名義である。それも皆んなゴロツキと云ふことであるが、支那人のゴロツキと聯合して澤山の車を持ち、一日何程と云ふ貸車を營業して居るのである。無論共同租界も佛國租界も車の貸賃は許可によつて決定され、車も時々檢査があつて租界當局の監督を受けて居るのである。最近には車體の改造を命ぜられ又貸賃の値下げを命じられて幾分か値下げされた筈である。

田舍から出て來て車夫にでもならうと思ふ者は、先づ自分の親戚とか友達とかの保證で車を借りに行く。この保證と云ふことについては上海に限らない支那では何處でもあるが、一番信用のあるのは商店である。借家の保證でも郵便局あたりの爲替の金を受取る保證などでも、必ず要店家保と言うて商店の保證を要求する。私共のやうに日本人であつても、配便局に相當名を知られて居ると、支那の人で上海に來て田舍から現金送金（支那の郵便には日本の内容證明とか價格表記とか同じやうな扱ひで『保險信』と云ふものがあつて中に紙幣を入れて送る方法がある。そし

てこれは通知書を配達して來て呉れて本人が印を持つて局へ受取りに行くやうになつて居る）の時に時々保證人が必要なことがある。さうした時に賴まれると保證してやるとそれで渡して呉れる。支那の郵便局だから必ず支那人の商店に限るとは決して言はない。兎に角支那では保證は商店が最も信用がある。

車夫の保證に商店は少ない。又實際車夫になるやうな時には已に車を引いて居る友達が田舍の友達を呼び寄せるとか、田舍から賴つて出て來たとか云ふやうなのが多いのであつて、已に車夫をして居る所謂先輩の顏が一番ものを言ふらしい。始めは地理や賃錢の割合などを覺えるために先輩が稼ぐ車について後押しで走つて見る。それが一巡濟むと今度は二人で一臺の車を一日借りて半日づつ働らく。いよ〳〵自信が出來て來ると、一人で一日借りて稼ぐやうになるのが多いやうである。

私は今車の借賃は一日何程かと聞いたのに對して彼は答へた。

一天一夜念四個鐘頭三千銅錢（一晝夜二十四時間で銅貨三百枚だ）
儂一天吃飯銅錢要幾錢（お前の一日の食事はドレだけかゝるか）
我一個人吃一天三盪大約要三五百錢否（私一人一日三度凡そ銅貨三十枚か五十枚です）
儂屋裡有幾個人（お前の家には何人居るか）

我屋裡還有三個人（私の家にはマダ三人居る）
一個人是儂個娘々兩個是小兒否（一人はお前の嫁で二人はお前の子供か）
是個儂那能饒得呢（さうですが、お前ドウして知つてるのか）

と非常に驚いた態度で眼を丸くしてニツコリして見せた。調子は先づ解け合うて來た。この調子なら面白い話が進む。

那麼一共四個人吃飯一天要多少銅錢（それでは合計四人で一日何程で食へるか）
從前是大約九百銅錢可以吃個現在是樣々東西價錢貴所以要一千五百銅錢差不多否（以前は大體銅貨九十枚位でよかつたのですが、今は何んでも大變高いから百五十枚位要ります）
儂一日天步來步去有多少生意（お前一日の收入はどの位あるか）
不一定的（キマラないネ）
大約有幾錢（大體どれ位あるか）
有個辰光四千五千有個辰光六千七千有的（或る時は銅貨四、五百枚又或る時は六百七百の時もある）

銅貨四五百枚と云へば日本金では一圓三十錢から五十錢と云ふことになる。六七百枚と云へば二圓から二圓三十錢位である。

車子銅錢另外是否（車の借賃は別にしてか）
勿是個共總生意的（いや合計の商賣高です）
那麼一日天步來步去儂賺銅錢有辰光三五角有辰光一塊差不多否（それでは一日のお前の儲高は三十錢か五十錢、時に一圓も儲かるのだナ）

日本金の計算にして見るとかうなる。

是個々々差不多（さうです〳〵當らずと雖も遠からずです）
儂朝辰頭吃甚點心（お前は朝何を喰べるか）

この點心と云ふのはお粥、うどん、粽、パンその他間食用の食物であるが、支那人は朝は大體さうした物を食べるから、朝の食事のことを聞く時は甚點心と云うて何を喰べるかに通じる。

我今朝無甚物事吃（私は今日は何んにも食べない）
甚的勿吃（何故食べないのか）
今朝不好運道還沒做生意（今日は運惡るくマダ一つも仕事がない）

私は言ふ可き言葉を持たない。熱い茶をイライラしながら續け樣に四杯も呑んだワケが電光のやうに私の胸を打つた。

嗚呼、彼の最後の一言、私は自分には解らなんだが、此時の私の顏色は恐らく蒼白になつたで

あらうと思ふ。私は私の顏の血が一時に下るのをハツキリと覺えた。

私は今朝は何にも喰べない。

今朝は運悪くマダ一つも仕事がない。

それ故に彼は食べないと云ふのである。彼は毎日朝六時に仕事に出ると云ふ。そして、今はモウ九時を過ぎて居る。然し仕事がないから何んにも食べないと云ふのだ。何んたる悲慘であらうか。

彼は毎日仕事をして儲けてからでないと喰はないと云ふのだ。恐らく彼一人ではない大多數がさうであらうことは想像される。一食の飯もイヤ一個の點心も稼いでから食ふと云ふ。これこそ毎日布く背水の陣である。この覺悟あるが故に、地球上寒帶でも熱帶でも如何に不毛の地にも支那人は勝ち得るのである。

この事を知るや中國の爲政者達。彼等の欲するものは國家的體面にあらず、五彩の市政府にあらず、東洋第一の運動場にもあらず、實に食して後に働くことのたゞ一事である。

曾つて賀川豐彥先生と上海の貧民窟を見に廻つた時に、

『神戸の新川は丸で御殿だなア』

と嘆ぜられた一語は、今も尙ほ私の頭に燒きつけられて居る。

二

煎りつく熱い太陽はもう沈んで終つた。夕燒雲の色もヤ、褪せて、闇にきらめくダイヤのやうに星がピカ〳〵またゝき始めた。涼しい風がソヨ〳〵と街の並木に吹いて來た。さしもに燒けたアスフアルトの大通も今は冷えて行く。あらゆる人がホツト一ト息つく八月中旬の夕暮時。

赤裸の上半身は流るゝ油汗でつややかに光つて居る。ビツショリと濡れた下の褲子を太腿のあたり迄クル〳〵と卷き上げた一人の黃包車夫が、便茶の前に長い梶棒をガチヤンと拋げてドツカリ腰を下ろして、竹杓に一パイ酌んだお茶を、すするやうにして呑み始めた。キツト遠い處から一生懸命に走つて來たのであらう。商賣も色々あるものだ。黃包車夫はお客を乘せるが商賣、その黃包車夫に中食や夕食に點心を賣りに來る。大餅（タイピン）、油條（ユウテウ）、粽子（ツオンツ）、方糖糕（フオンタンカオ）等が多く便茶を圍んで集まる。

甘さうに熱いお茶をすゝつて居る黃包車夫の前に一人の粽子賣が來た。バケツの中に澤山の粽子がある。相當時代のついた飯碗が二つと、處々がヘゲて生地が出て居る琺瑯燒の小さいお茶呑みが二つ、長い汚れた竹の杓子が五六本上にのせてある。

丸で雜巾のやうに汚れたタオルでそれでも上から覆うてあつた。

一方にはブリキ製の藥罐を古綿と古ぎれとで包んでお茶の冷えるのを防いで居る。如何にもキタナらしい奴をそれでも大切に提げて居る。彼はこの客逃がしてなるものかと云はんばかりに、車夫の前に陣取つて粽子を手にして要三個四個と車夫に進めて居る。

お茶を一杯呑んだ車夫はヤオラ身體をネヂ向けて自分でバケツの中を探し始めた。何を探がして居るのがあらうか、時々指に力を入れてグツト押して見ては又取り替へて居る。

粽子賣りはカケ碗を出した。車夫は二つ粽子を握つて子供に渡した。子供は非常に馴れた手つきで括つた麻糸をクルクルほどいて、それがすむと長い蘆の葉を又クル〳〵とほどく。中から白い粽子が出て飯碗の中にコロリとはいつた、又一つはいつた。子供は又一つ取つて還一個と云ふ。車夫は又探し出した。そして又一つ取つて子供に渡した。子供はクルクル〳〵と上手にむいて碗の中へ入れた。煙草の空罐に入れてある黄粉のやうな色をした砂糖を、長い竹の筷子で少しカキ出して粽子の上にかけた。車夫は竹杓を茶桶の上に置いて粽子を受け取つて筷子にグツと突きさして一口パクツとかぶつてムシヤ〳〵とやり出した。又一口かぶりムシヤ〳〵ググツと音をさせて粽子は喉へ通つて行つた。ムシヤ〳〵ググツ、ムシヤ〳〵ググツと次ぎから次ぎへと三つの粽子はスグなくなつた。子供は古綿包の藥罐からドス黑い色のお茶を琺瑯の茶呑についだ。然し車夫は目も呉れないで立ち上つて便茶の竹杓を取つて一パイお茶を入れて、フウ〳〵と吹きな

がら呑み始めた。粽子賣の子供は汚ないタオルで粽子をシゴクやうにして拭いた、カケ碗を持つてクル〳〵と拭いて居る。

三つの粽子では腹の蟲がをさまらないと見えて、車夫は又バケツに手を入れて探し出した。此時私にはモウその探すのが何んの意味か、時々指に力を入れて押して見るのが又何んのおまじなひかよく解つて居る。押すのはなる可く大きいので、指で押すのは中味がシツカリ詰つて居るか居らんかと云ふことである。車夫は二つ出した。子供は又クル〳〵〳〵〳〵と上手にむいて砂糖をかけて渡した。パクリ、ムシヤ〳〵ググツと粽子を平げて又熱いお茶を一杯呑んだ。

車夫は口の端を手のひらで拭きながら立ち上つた。粽子賣の子供は又一人來た車夫の前にバケツを置いて車夫の探すにまかせて居る。立ち上つた車夫はお客が腰かける蒲團を蹴込みへ下ろして、下の板をあけて上衣に包んだ銅貨の中から三十枚ばかりの銅貨を掴み出した。どうやら此男好生意(上景氣)らしい。五枚宛三度數へて粽子賣の子供に渡した。子供はモウ一度數へて見て、粽子の間からガシヤンとバケツへ入れて終つた。

向ふの煙草屋の前から黄包車と呼ぶ聲がした。今ムシヤ〳〵始めた車夫が、商賣には行きたし粽子は食はねばならんので、妙な腰附きでモジ〳〵して居るのが面白い。

粽子五つで腹の出來た車夫は、オーと答へて勢ひよく梶棒上げて一ト飛びにいつた。洋服の日

本先生が默つて乘つた。彼は一度お客をフリ向いて見て指圖を待つた。お客はアゴで南の方を指した。彼は委細承知と云はんばかりに三つ頭を上下に振るなり、韋駄天走りに北四川路を南へ走つていつた。

私は嘗つて福州で勞働者がお粥を買つて喰べるのに、その濃いと淡いとを考へて、決して出來たての水つぽい時に喰べないで、桶の中程迄賣れてから詰りお粥が相當ネバツた頃に喰べる事を書いたことがあつたが、私は今再び粽子の大小その中味の詰まり工合を選つて食ふ支那の勞働者の生活に直面したのである。

私は自らの幸福を感謝すると共に彼等の爲に熱涙の禁ずる能はざるものがある。しかもそれは遂に吾等日本人の手によつて救はれる可き運命にあるのではあるまいか。

三

草より出でて草に入る武藏野の月と云はれるだけに實際、武藏野の原は日本一の平野である。然し決して平面ではなくて低いながらに大變な凸凹がある。

武藏野の原に比べて、上海を抱く蘇浙の平野は又特殊の平野である。武藏野の原が丘陵起伏せるに反して、蘇浙の平野は全くの平面であることである。それ故に武藏野の平原を頭に畫いて蘇

浙の平原は決して解らないのである。上海と云ふ街はこの平面な蘇浙平野の東端に、黃浦江と云ふ河の右岸に在る街である。この上海から西北南京に向つて汽車で走ると、平面の水田の中にポツンと一つ馬鞍山と云ふ塔のある島が見える。熱海の向ふに見える初島の何分の一かの小さい島を水田の中に置いたつもりで居れば間違ひない。それから又走つて丁度上海から急行列車で二時間走つた處に、月落烏啼霜滿天の詩で有名な寒山寺の在る蘇浙に着く。此處迄來て始めて吾等の目に山と云ひ得るものが見える。然し尙ほ霞の中に遠く見えるのである。蘇州から近くても一日行程の行樂の地である獅子山、天平山、丈法山、靈嚴山等がそれである。

更に上海から西南杭州に向つて汽車を走らせると、一時間ばかりで松江と云ふ驛に着く。此處は鱸魚（ルウ）の產地であつて、巨口細鱗松江の鱸の如しと云ふ蘇東坡の詩は、人をして唾涎三尺たらしめるものであるが、その實此地の有名な鱸と云ふのは、最大五寸位のハゼによく似た小魚であつて、魚の多い吾等日本人には一向珍しくも又たいして甘いこともない物である。日本のスヾキとは全く違つた魚である。腮が四枚になつて居るので四腮鱸（スズル）と云ふのである。

この驛から遙に雲煙模糊の間に、九個の丘がまるで眉を引いたやうに見える。それから尙ほ二時間走つて臨安（リンアン）、硤石（ヤサ）で始めて山を見るのである。何んと云ふ大きな平野であらうか。

日本から船が揚子江の流れに入つてから、右の方にスウツと一本線を引いたやうに見えるのが

崇明島と云うて、米や棉や赤豆の産地として知られた江の中の島である。人口は四十五萬人餘と云はれて居る。然しこれもたゞ平面の洲に過ぎない。更らに吳淞の近く迄來て見ても見渡す限りたゞ平らかな一望際涯なき平地である。日本から始めて上海へ來る人が先づ驚ろくのは、この山なき平面の大平野である。

上海から杭州に行く汽車の窓から見る風景の中に面白いものが二つある。竹林の陰に人家があることと、樹林の中に墳墓のあることとである。何故に人家の在る處に竹林があるのか、竹林のある處に必ず人家が在るのか、私の不思議の一つであつた。處が私の友人が、風を防ぐ何ものもない平坦なる蘇浙平野に人が家を建てて住居する。その人家が風を除ける爲に竹林は造られるのであると敎へて呉れた。成程それに相違ない、私の不思議は釋然として消えた。

然し今一つ、樹林の中に必ず墳墓のある理由は何であるか。これは實は最近迄どうしても判明しなかつたのであるが、ふとした事から遂に全く氷解するに至つたのである。人間到る處に青山在りと人が洒落に言ふ程に、それ程澤山の墳墓が、お碗を伏せたやうに小山を築いて居るのが見える。その小山型の墳墓は必ず樹林の中に在るのである。

支那では棺を埋葬するのは、殆んど觀相と云うて、八卦見に方角を占つて貰うて、その決められた方角の地點に土地を求めて埋葬するのが習慣である。この邊でも矢張りその方法で埋葬されるのである。

其時に占はれた地點が自分の持ち地であれば文句はないが、若しも他人の地面であつた時には交渉して買はねばならない。土地を買つたら自分の買つただけの地を區切りせなければならん。石に乏しいこの邊ではこの買つた土地の區切りを樹木でするのである。その區切りに植ゑた樹木がやがて樹林となるのである。墳墓の樹林に樹木の種類が違つて居つたり、樹林の形が違つて居つたりするのは自分の墳墓の目印である。

日光の參詣道の兩側の大杉並木の堂々たるには無論及ばないが、それでも蘇浙大平野に樹木の存在は誠にこれ墳墓の存在するが故にである。思へば墳墓が人間の生存に大なる貢獻をなせるものである。

感謝せよ、幾千萬の人々よ、墳墓の功績に、墳墓の樹林に。

上海漫語（その六）

宣傳

近衞さんが亞米利加から歸朝されて、彼地では日本は宣傳に負けて居ると云はれたとかで、先日も或る會場でその話が出た。新聞にも林芙美子さんなども書いて居る。

大體に於いて、日本が宣傳があまり甘くないと云ふことを前提して居るやうである、實は私もさう思うて居る。そして日本人のこの宣傳下手は源遠く流れ長きものであると思ふ。

ソクラテスかカントか朱子か陽明か、誰が言うたか知らないが、日本では昔から沈默が尊敬されて來たのだ、言行一致が標語であつたのだ、知行一致が叫ばれて來たのだ。

沈默、言行一致、知行一致——一體、これ等の中に廣告とか宣傳とか云ふ意味が發見出來るであらうか。

もの言へば唇さむし秋の風——などに至つては、頭から廣告も宣傳も生れるべき母體ではあり得ないではないか。

近代になつて雄辯と云ふことが唱道されるやうになつて、先日も電車の中から見たのだが、式辭挨拶演說講習會とか云ふ看板を見た。流石は東京だと思うたが、然かしどうも振はないやうである。そして一般人も沈默の人を何んとなく尊敬する癖がある。これでは宣傳は上手にはなれない。

宣傳の母體は沈默にあらで雄辯である、多辯である、饒舌である。

宣傳とは讀んで字の如くノベツタヘルである。宣べるのは口である、言葉である、口によつて言葉によつて人に傳へる行爲を宣傳と云ふのである。論より證據、多辯であり饒舌であり雄辯である支那人の宣傳上手は、吾々日本人には他山の石ではあるまいか。

言行一致と云ふことが、人間生活に於いて容易に出來ることであれば、或は宣傳を助けたかも知れないが、この言行一致と云ふものは吾々の生活上に於いては非常な苦手であつて、これが出來たら聖人だとは吾れ人共に許るして居る。それ程むづかしい困難なことである。知行一致も同じやうに凡人に出來ないことである、言ふことと行爲とが一致せなくては言行一致ではない、知つたら行はねば知行一致ではない。

これでは丸で人間取締會と同一である。大膽な行爲は出來なくなる、況や大膽なる言葉は頭からつかはれない。

日本人の宣傳下手は寧ろ當然ではあるまいか。思ひ出すことが一つある。

國民革命が北伐に成功して、武漢政府を造つた時であつた。私の友人が、武漢政府外交部長の陳有仁に面會して歸つて來ての話である——

僕が陳有仁に向つて、彼の言論が徹頭徹尾共產主義的であることを、證據を擧げて詰め寄せた處、彼は大きな聲で笑つて、

『中國は今革命の時である、革命の時に必要なものは宣傳である。宣傳は宣傳であり實行は實行である。宣傳と實行の區別の解らないやうな人は話せない』と

云うたのでギヤフンと參つた云々。

と云ふ話を聞いたことがある。

此處だ、文字は符號である、一つの文字は一つの符合である。故に茶碗は茶を呑む碗である。飯碗は飯を喰ふ碗である。卽ち宣傳は宣傳であり實行は實行である。誠にハツキリとして居るではないか。同文同種をもつて自ら任じて居りながら、這間の理窟さへも解らんやうでは困る。

吾々日本人は、中國人と同種ではあつても、大きな聲で同文なんて言ふことはどうかと思ふ。一體茶碗で飯を喰てるのは日本人ではないか、支那では茶を呑む碗を茶碗(チヤワン)と云ひ、飯を喰ふ碗を飯碗(ファンワン)と云ふ。哇囉々々(ワラ〳〵)は哇囉々々である、相罵(シヤンマア)は相罵である、打相打(タンシヤンタン)は打相打である、殺人(ツアアニン)は殺

人である、喧嘩卽ち哇囉々々と云ふ。一つの事柄の符號で、惡口の言ひ合ひである相罵も、ナグ(合ひである打相打も、遂に人殺し迄もたゞ一つの而もワイ〳〵騷ぎ(少し語幣はあるが)の符號である『喧嘩』と云ふ文字の中に詰め込んで終ふのとは、頭から違つて居る。襖(アオ)と云ふ字は綿(ミエン)襖(アオ)の襖である、カラカミやフスマではない、腰から上の綿入れの着物のことである。東西(トンシイ)とは方角のことではない、彼の品物、この品物と云ふ品物のことである。疊(テエ)と云ふのは備後表、など云ふ蓆で作つたタヽミのことではない、疊(テエ)とは紙とか裂れとかを折疊むタヽミである。假(チヤア)といふ字は日本では假りにと云ふ意味で使はれて居る、假契約、假調印などであるが、支那では假はニセである、僞造の僞である、ニセ札のことは假票(チヤアピヤオ)と云ふ。仮りとニセとは丸で違つて居る。

ドツコイ〳〵横通へ這入りかけた。今日の漫語は宣傳だつた。支那人は宣傳は宣傳と考へるが故に、大膽に口で言葉で遂に文字で文章で宣傳するのである。其處には形容がある誇張がある擴大がある技巧がある僞瞞が生じる、遂に知らず〳〵にか故意にか、出鱈目も出て來る、然しそれは宣傳であつて實行ではないのだ。

吾々日本人は宣傳は直ちに實行だと考へる傳統がある、言行一致だ、知行一致だ、それが遂に宣傳の意味を解することを拒んで居るのではあるまいか。

古い言葉で多分支那の言葉と思ふが、『濃髮に宰相なし』といふのがある。

この言葉を日本では、濃髪とはたゞに濃い髪と云ふだけでなく、鬚髭も込めて、卽ち、頭髪と鬚髭の濃い人には宰相はない、と敎へられて居る（或はこの解釋は一部分の學者に限つて居るのかも知れないが）が、これなどでもそんなことを云はずに、素直に濃い髪の人に宰相はないと譯した方がよいと思ふ。なぜなら支那には昔から五流長鬚と云うて偉人英雄君子の相に五流れの長い鬚をくつつける癖がある、人柄によつておとなしい長い鬚がはえて居つたり同じ五流の長い鬚でもハネ上つたり逆立つたりして居るのもあるが、兎に角この同じヒゲにでも鬚もヒゲなら髯もヒゲだ、鬚もヒゲだ。かうして幾色かのヒゲと云ふ文字があつて、各々生えて居る居所によつて違つて居るのである。それであるのに、濃髪と云ふ髪の字一字の中にヒゲ迄込めてあるなどは餘り解釋が得手勝手であると私は思ふ。これなどはきつと禿無髯の學者が始めに解釋したのであらうと思ふ。

こんな解釋をして居るから宣傳が出來ないのだ、濃髪に宰相なしは、濃い髪をした宰相はないと譯したらよいと思ふ。

そこで宣傳とは字の通り『ノベツタヘル』のだ、口で言葉で文字で繪で文章で、多くの人にノベツタへさへすればよいのだ。實行は實行だ、吾等はもつと安心して『ノベツタへ』るべきではあるまいか。

賣藥の廣告文や効能書や、化粧品の廣告文や効能書きは誠に好適の鐵證ではあるまいか。日本にも賣藥や化粧品の大成功者を少からす持ちながら、獨り國の宣傳と云ふことにのみ下手であるとはどうも受取れないやうな氣がする。

宣傳の目的は『了解せしめる』にあり、廣告の目的は『財布の口を開らかせて品物を買はせるにある』のだ。その財布の口を開らかせて品物を買はせる目的に成功する日本人が、了解せしめる目的に成功せないと云ふ筈がないと思ふのは、あながち私一人でもあるまいと思ふが如何。

もう一度言ふ、陳友仁は言うた『宣傳は宣傳、實行は實行』と。

無關係

五月蠅と書いてウルサイと讀む。十月蠅と書いたらウルサイ〳〵と讀んでも差支へあるまい。支那で一番五月蠅ものは、黃包車夫だと云うたら、恐らく誰でも首肯できるであらうと思ふ。實際だ、黃包車夫のあの執拗は五月蠅（ウルサイ）ではなくて十月蠅（ウルサイ〳〵）だ。

吾々日本人のやうに淡白、生魚の刺身のやうな人間には實は餘りに濃厚に過ぎる。

上海の街を歩るいて居ると、その執拗な黃包車夫が、要罷（コワ）々々（入るか〳〵）と長い梶棒を下げてサカンに勸める。一人位ならまだよいが、時には三人五人が、丸で包圍攻擊のやうに、取り

巻いてしまふことがある。

この場合、日本人たる者、如何に事情に通じて居る者でも、無言で居ることは斷じて爲し得ざるところである。

勿要々々、々々、々々（入らないの連發）

と口で斷りながら、手で活路を開らかざるを得ないのである。

處がドツコイ、丸で執拗そのものである彼等車夫は活路を開らくどころか、いよ〳〵益々身邊近く攻め寄せてくるのである。

來々、々々、々々、々々（來い〳〵〳〵）

と云ふ奴が居る。

幾錢、々々、々々、々々（いくらか〳〵〳〵）

と云ふ奴が居る。

甚地方、々々々、々々々（何處か〳〵）

とワメク奴も居る、何にも知らずに、

好々、々々、々々（ヨロシイ〳〵）

と云うて袖を引張る奴が出て來る、甚だしい奴になると、

曉得、々々、阿羅曉得文路去兩角洋錢（知つてる知つてる私は知つてる文路迄貳十錢だ）

なんて途方もない出鱈目を云ふ奴が出て來る。處が時にこの出鱈目の文路へ行くと云ふやうなことが、偶然に自分の考へにあたることがある、さうすると、人間と云ふものは特に日本人の感情と云ふものは妙なもので、假へ外の言葉はどうであつてもたゞ一言の文路と云ふ符合に引かれて、始めは車に乘るつもりもなく、又車夫の言葉が出鱈目と云ふことを知つて居る者でも、ウツカリ其奴の車に乘つて終ふことがある。何んだか宣傳の秘訣があるやうに思はれる。

支那人は他人を攻擊する時に、先づ放つ第一聲は、大體この出鱈目からである（實際の事も組込んであることもある）。私は二十年來文學界の論戰を見て來たが矢張り大體同じやうである。

この出鱈目の第一聲に答へたら最後だ、それがどんな言葉があつてもかまはない、直ちに第二聲が又出鱈目で放たれるのだ（第一聲でも同じであるが時に實際の事柄も組み込まれて居ることもある）。

偶然に、日本人の耳に與へた文路と云ふ出鱈目の言葉に引かれて、ウツカリ其車に乘つたのと同じ事だ。車夫は梶棒取つて文路を指して走り出すのだ、文路と云うても相當長い街である。その何處と云ふことは知らないが兎に角文路の方角に向つて走るのだ。これが出鱈目の第二聲と同じことだ、これから先きは車夫はお客に先きを聞き出すのだ、曉得々々、阿羅曉得は丸で忘れた

やうである。

眞面目になつて、お前は先程知つてる知つてると云うたではないかなんて言うた處で、

阿羅勿曉得（アラブショウタ）（私は知らない）

の一語を聞くのみである。そのトボケ顏は、日本人たる吾々をして、この野郎馬鹿にしやがるなと腹立たしさを感ぜしめるのが十中の九であらう。這間の事情を知つて居る私でも時々失敗して今更ら怒ることも出來ず、苦が蟲を喰ひつぶしたやうな顏して苦笑するのが落である。陳友仁ならざる車夫どもは宣傳は宣傳である、實行は實行であるなどゝ說明はして呉れないが、勝負はモウついて居る。結局車夫には行く處迄走つて行つて相當の車賃を貰ふことは斷じて相違ないことである。この場合ドウかすると相當よりも少し高い車賃を支拂はされた口惜しさに、其後支那人の話をすると、頭から支那人の惡口ばかり言ふやうになる人も絕無と保證することは出來ない。

車夫が何程要罷（ヨウバ）〳〵々々と勸めても、お客が支那人である時には、必要なら先づ行先きを告げて車賃の應對を始める、例へ何人の車夫がドンナにガヤ〳〵とシヤベツてもこのお客は平氣なものである。先づ一番先きに聲をかけた車夫と悠然として應對して居る、そしてこの應對が不調に終つた時に他の車夫に應對を移すのであるが、ヤヽむづかしいのは此時である。この第一の交渉の不調が、例へば車夫の三十錢の要求にお客が二十錢より出せないと云ふやうな場合だと、丁度株式取

引所の立會のやうなものだ、二十八錢の聲が立つ、二十七錢が立つ、二十六錢が立つ、ソコでお客たるもの又動かざるを得なくなつて、二十一錢二十二錢となつて來ると車夫の方からは思ひ切つて、二十五錢と誰かゞ云ふと二十三錢と又誰かゞ飛び出す、その途端に横から、

兩角貳分好々（リヤンコニイフンホウホウ）（二十二錢ヨロシイ）

と云ふ奴が出て來て、たうとうそのお客を乘せて行つて終ふのである。

時々このお客を乘せた車夫が走り出してから、途中で後を向いて何處へ行くのかと尋ねるやうなことがある（支那人のお客は二十二錢よろしいと云うて決めて乘る時に、今一度何處迄二十二錢と念を推すものがあるが、時にこの念を推すのを忘れるやうな事があるのだ）。さうするとお客が、お前二十二錢でよろしいと云うたのは何處迄と云ふ事を知つて云うたのであらうがと責めて見ても仕方がない。

阿羅曉得兩角貳分別樣事體不曉得（アラショウタリヤンコニイフンベヤンズテイブショウタ）（私は二十二錢を知つてたのだ、外の事は知らない）と來る、かうなつたら無沒法子（ウノフファツ）（仕方がない）である。此處で又行先きの再應對が始まる、そして車夫は必ずそんな處までなら行かないと云ふやうなことを言ひ出してお客を困らせることがあるが、然し結局、

去、々、々、々、去到了多付一眼（ナイトウラトフイゲエ）（行け〳〵け着いたら少し多くやる）

と云ふ處で、又梶棒取り直して走り出すのが落である。

車夫が何程要罷々々と勸めても、支那人は實際不要の時には、決して言葉を出さないものである。なぜ言葉をかけないのであらうか、それは、

關係をつけない無關係

と云ふことを示すのである。かうなると流石に執拗な車夫も決して再び勸めない、決して包圍攻擊はしない。

こゝに吾々の注意せなければならんものがある。車夫が何程要罷々々と勸めても實際不要なら言葉をかける必要はない、無關係が當然である。支那人は其處で言葉をかけないのだ。

然し日本人にはそれが解らない。日本人の習慣はさうなつて居らない。

そこ迄生活が深刻になつて居らないのだ。日本人の生活は簡單である。いらないから勿要々々とハツキリ斷つたつもりであるが、支那人車夫の習慣からするとホントに入らないのなら無關係の狀態におかるべきである。例へ勿要々々でも言葉をかけられたのは關係がついたのである。彼等はその關係をたよりの綱として此處ぞとばかり秘術を盡くして競爭するのである。然し彼等の間にも競爭の巧拙はある『來、々、々、々』と云ふ者、『幾錢、々々、々々』と云ふ者、『甚地方、甚地方』と云ふ者など外交の秘術を盡くして居る中へ、『兩角二分好、々、々』（二十二錢ヨロシ

イヨロシイ）てな言葉を飛ばしてお客を取るなどは支那ならでは見ることの出來ないものではあるまいか。支那人が無關係を示して車夫を擊退するあの方法は、實に徹底してるではないか。日本人の習慣は言葉の上で要と不要とをハツキリさせようとするだけのことであるが、支那人の方では言葉の關係さへもつけないのである。この間、東京の或る會合で日本人と支那人とは必ず握手出來る可能性があると云うた處が、某さんが、

『私共は何んとかして、支那から來て居る學生と親善しようと思つて、何々と云ふ會を作つて、その會に出席するやうに誘うて見たが、ドウしても出て來ない、そこで何故出席しないのかと聽いて見たところ、彼等の言ふには、吾々は頭から日本に對して反感を持つて居るのであるから、決して握手する意思はない、とキツパリ答へた、だから私共は支那人との握手と云ふ事はモウ駄目だと思ひます』

と云ふ事であつた、これは誠に日本人として當然の考へ方である。然し私は云うた、

『貴方の考へ方は當然のやうであるが、支那人留學生がホントに根本的に日本に對して日本人に對して反感を持つて居るなら、恐らく彼は日本へ留學はせない筈である。然るに彼は身親しく日本の地東京に來て生活して居るのである。こゝに立派に關係はついて居るのである。斷じて無關係ではないのであるから、それはもつと熱心に勸誘する必要があると思ふ』

と云うたことであるが、他の條件は別としてたゞこの一事については日本人の考へは今一歩つつこんで、モット執拗に己について居る關係の綱を、グン〳〵手繰つて行くべきではあるまいか。反對に無關係であることを、支那人の習慣を知らないがために、關係をつけて終ふやうなことは餘程考へなければならんことではあるまいか。つけた關係が日本のために又支那のために善いことなら未だ恕すべしであるがイヤ幸ひであるかも知らないが、多くの場合それは不善なことが多い、不幸のことが多いに至つては謹みてもつゝしまなければならんことではあるまいか。支那の新聞には何んのためにか知らんがよく出鱈目の記事が出る。丁度兩角二分好々々の式である。イヤもつとひどいのもある。新聞記事は出鱈目である。それは如何なる形式があつても實際に出鱈目であるならば、その記事に對しては辯明も辯解も反對も反駁も無用である。空吹く風と聞き流すべきである。つまり支那人の無關係の表示である。さうして置きさへすればその記事はやがて出鱈目として消えるであらう、所がその出鱈目の記事を見て大いに憤慨して、實に怪しからん此儘に放任すると承認したことになるからと云ふので、早速これが事實無根を聲明したり反駁文を書いたりしたら、お客は已に車に乘つたのである。盲滅法走り出すのである。つまり第二聲の出鱈目は大きな活字で再び新聞面を賑はすであらう。この第二の出鱈目を見て更らに憤然卓をたゝいて聲を大にしてその出鱈目を抗擊せんか、相手は得たりや應である、第三の出鱈目は又新聞面

を大活字で充たすであらう。かくてこの勝負は車に乘つたお客の負けではあるまいか、ドノ道車賃は拂はねばならんのだから出鱈目の記事なら棄てゝ置けばよいではないか、それに返答すれば關係のあることだから答へたことになるのだ。その答への如何を問はず、その返答によつて已に關係はついたのである。車夫は走りさへすればよいのだ。行先きがわからんでも何んでもよい、先づ走り出して途中で行先きは聞けばよいのだ、ドウした處で到着した先きでは車賃は貰へるに決つて居るのだ。私の漫談はこれでお終ひだ。

しかし、この事は支那人の一般民衆の間に通用するものであることを、念のために附記して筆を擱く。

上海漫語（その七）

年末ではあつたが三人の客の案内役を勤めて、遊覽バスに乘つて京都見物をした。且つて十二年間住んだ事のある京の町、何んとなく見るもの聞くこと一種のなつかしさを覺えた。殘念に思うたことは、清水寺の上の山が前年の颱風で全く裸山になつて居ることゝ、鴨川の名橋三條五條が今尙ほ危つかしい假橋のまゝであることであつた、北野神社から南へ來る時に、バスの案内係が、

此處から發車いたしますアノ可愛いらしい電車は、明治二十八年？　に出來ました日本最初の電車でありまして、當時は晝は旗を持ち夜は提燈を持つた子供が、四つ辻とか曲り角とかへ來ると、電車の前に危ない〳〵と云うて走つて居つたとのことであります。

と思ひ出深かい案内をして呉れた。私の記憶をたどつて見ると、何んでも今の京都驛前から東廻りと西廻りとの二線であつて、東廻りは寺町通り五條へ、五條から高瀨川を渡つて木屋町を北へ、二條から又寺町へ出て北へ丸太町を西へ曲つて、烏丸から更らに北へ下立賣を西へ堀川迄來て、西廻線に合して居つた。西廻線は驛前から西洞院を北へ、四條通りを更らに西へ堀川へ出て

眞直ぐに中立賣に走つて堀川を越えて北野天滿宮前が終點になつて居つたと思ふ。京都唯一の文明の交通機關であつたのであるだけに一般人に對しては、非常に注意をしなければならなかつたのである。電車の運轉臺に十四五歳位から二十歳位迄の電鐵會社のハツピを着た男の子が、晝は旗（ドンナ旗であつたか記憶にない）を持つて、夜は提燈（電形の印の下に電車と書いてあつたと記憶して居る）を持つて、電車の先き走りをして居つたことが彷彿として浮んで來た。

トウ〳〵思ひ出は大阪に飛んだ。私が始めて大阪へ丁稚奉公に出た頃に、私達の間で羨望の的になつて居つたのは、神戸の外國商館に勤めて居つた所謂商館番頭と云ふ人々であつた。商館番頭は其頃から洋服を着てナカ〳〵ハイカラであつたばかりでなく、非常に羽振りの利いた者であつた。

私は上海へ行つて、上海の外國人商館（洋行（ヤンハン）と云ふ）に、支那人の商館番頭が澤山居るのを知つた。始の中は日本に於ける商館番頭と同じやうに、ハイカラで羽振りの利くものと位にしか思うて居なかつた處が、これは又一寸違つた商館番頭さんであつた。無論日本の商館番頭さんと同じやうな番頭さんも澤山居るのであるが、その澤山の番頭さん達の一番上に買辯（マイパン）と云ふ一人の番頭さんがある。この買辨と云ふのが、支那に於ける一種特別のものであることが解つた。

買辯の歴史が、學問的にドウであるか私には解らんが、恐らくは英國人が支那に始めて來て商

賣を始めた時に、言葉も通じない、支那人の習慣も解らん、その時に支那人の中に曲りなりにでも、少しばかり英語の解る者があつて、英國人と支那商人との間に立つて通辯をしてやつた。その後で英國人が、この支那人を大變重寶に思うて雇ひ入れて、販賣の一切をまかせたに始まるものと思ふ。

英國の商人や會社や銀行などが、ダン〳〵多くなるにつれて、英語の話せる支那人は多くこの仕事に從事するやうになつた。始めの中はキツト保證金など云ふことはなかつたのであらうが、ダン〳〵殖えると其中には惡るい人間も出て來て、遂に今日のやうに、非常に多額の保證金を豫納して販賣の全權を依頼されるやうな習慣になつたのであらうと思ふ。

・日本の銀行會社商社などでも、この買辯(マイバン)を雇うて營業して來たのであるが、吾々から考へるとドウも買辯の儲けと云ふものが、ナカ〳〵少くないのに目がついた、買辯さへ廢止すれば、それだけ中間搾取をまぬかれることが出來て、相互利益であると云ふ理想論なども拍車をかけて、今では日本人の銀行會社商社では、買辯のないのがナカ〳〵多いやうである。

これは一面から考へると、非常に合理的であるやうであるが、他の一面から考へると、餘りに目前の利益と云ふことに拘泥しすぎて居るやうでもある。それは總ての事が仲裁で片附く習慣のある支那人の間に於いては、買辯のやうな自らにして造られて居る緩衝地帶のやうな買辯の制度

の如きは、ワザ〳〵でも造つて置く可き筈のものではないかと私は思ふ。

平素の狀態を見て居ると、或は彼等に儲けられることは馬鹿々々しくも見えるであらうが、然し一朝何か障害の起つたやうな場合には、決して邪魔になるものではないと私は思ふ。

日支親善とか、中日提携とか云ふことをよく聞くのは、日支合辯事業の經營如何と云ふことである。これは一寸考へると非常に好い事のやうであるが、實は私の考へでは、これは非常な難事業であると思ふと云ふのは、日本人のやうに何んでも彼でも法律一點張りで問題を解決しようとするやうな人間と、一から十迄人の常識で仲裁によつて問題を解決する習慣の人間とでは、たゞそれだけでも決して好都合に物事が運ぶとは考へられない。其上に利益の分配とか損失の責任とか云ふ點に於いて、決して解決が容易であるとは考へられないと思ふ。そこで私は、通商の場合などは特に、日本人は製造と上海輸入迄を自分の手で行つて、上海から內地への販賣は、支那人に販賣會社を造らせて、その會社から相當額の保證金を預つて置いて、販賣の全權を委託する方法が良法ではないかと思ふ。

然しその何れの方法を採るにしても、先づ知らなければならんことは、支那人の習慣である。この根本問題を等閑にして置いて、何んの彼のと云うた處で、それは恐らく駄目であらうと私は思ふ。どう云ふものか我等は短氣であるが、支那人に對しては短氣は失敗である。

支那研究の失敗は全部この短氣が原因であると云うても差支へないと思ふ。どうか十二分に、支那人の習慣心理を、日數を費やして研究して貰ひたい。

この相手の習慣と心理を知ると云ふことは、たゞ支那だけに必要なことではないが、特に支那人の生活習慣が非常に複雜であるから、私は氣永くその研究をして欲しいと思ふのである。日本人の支那研究家は澤山にあるが、その澤山ある支那研究家の研究方法は、殆んど同一の方法である、その殆んどは文字、文章、數字の研究方法である。

先年某大學の支那劇研究學者が、上海へ來られて、一夕晩餐を共にしたことがあつた。其時その學者の話に、芝居は見る必要はない、吾々學者は圖書館の中で書物によつて研究するのだ。と云ふやうなことを言はれたので、私が、さうすると貴方の御研究は、舞臺上の芝居ぬきの研究ですネ。私はその研究方法には反對するのであります。實際の舞臺の芝居ぬきの研究は片輪ではありませんか。と云うたことがあつたが、どうも日本の支那研究には、この現實ぬきの研究が非常に多い。此點は是非共改めなければならないと私は思ふ。

例へばこゝに一寸漫談した賈辯の研究などでも、日本人の中で而も支那に仕事でもしようと云ふやうな人で、ほんとに研究した人が何人あるであらうか、或は支那商人の人の經理とか協理とか云ふやうなものゝ實際、いや普通に會社と飜譯されて居る公司（クンス）などの内容などについてさへ、

吾等上海に生活して居る者の間にさへ通じて居る人が何人あるであらうか。此等の事柄は學問的にではなく、もつと簡單に吾等の常識でなければならぬ筈であるのにそれがない。現實支那の認識がなくて、如何にして將來が豫測出來るであらうか。一六勝負でならどうでも出來るが、そんなことは誠に困る。現實の詳細を充分に握つて、實際に仕事をして居れば、變化に際しては又自らにして變轉は可能であるが、現實を握つて居らんで將來の理想論では、現實の仕事は實行出來ないと私は思ふ。

吾等の缺點は餘りに理想に走り過ぎることではあるまいか。一本調子に理想を追うて現實を忘れる點ではあるまいか。

戲曲や脚本を研究し、劇評や其他劇に關する書物の研究と共に、舞臺上の芝居を研究するのでなければ、劇の研究は決して完全ではないと思ふが、どうであらうか。

上海漫語（その八）

誰が云うたか知らぬが甘いことを云うた、

蒲團きて寢たる姿の東山

千年の歴史を包んで默々たる東山三十六峰は、昔ながらなごやかに紫に映えて居る。

山麓白川村に近かきあたりに、足利義政公が風流を極めし茶室銀閣がある。花の御所室町御殿が榮華の名殘りであることは云ふ迄もない。この銀閣の庭は北山金閣の庭と共に、林泉藝術の粹と云はれて居る。

銀閣の庭は、唐土の湘瀟八景をうつしたものであるとか、西湖八景にかたどつたものであるとか、二十錢の案内者の鹿爪らしい口上であつて、眞も僞も無論保證の限りでもなく、又かく言ふ私の耳さへもあてにはならんことである。上野公園の忍の池を一名小西湖とか云うて、これも杭州西湖に摸したものであるとか聞いたことがある。

さう言へば、説明の仕方によつては、チツトやソツト似て居るナアー位には思はれぬでもないことはない。

且つて日清汽船會社が、長江に活躍華やかなりし頃、私は度々漢口から上流方面の旅行の度び大貞、大亨、大元、大吉、沅江、湘江、武陵等の船に御厄介になつたことがあつた。出帆を告げるドラの音がジヤン〳〵と鳴り渡つたので、ムツクリ頭を上げて窓から外を眺めたが、深い〳〵霧が天地を包んで漠々たる雲の海であつた。然しモウ寢て居る氣にもなれず、起き出でゝデツキに出た。船は已に進行を始めて居つた。東天漸く紅を呈して薄墨色の雲の上に、朱盆のやうな太陽が堂々と昇つて來た、まん丸いまん丸い太陽が、――咫尺も辨ぜないと形容してもよい程の霧も、漸やく遠い高い處から薄衣をハグやうに次第に霽れて來た。左の方には武昌の奥略樓の櫓のやうな屋根や白色の喇嘛塔が、右の方漢陽の大別山上の禹王廟と相對して夢か幻のやうにかすかに浮かんで來た。アー無限の大景、神祕の景觀、到底人力の得て及ぶ處にあらずなど思ひつゝ、身はいつしか恍惚として醉へるが如く陶然たり。やゝ久うして吾れに還れば、船首百尺大小のジヤンクは、朝風に帆を上げて悠々たる長江の流れを覆うて上り行く壯觀あり、而も身自ら大水軍に將たるにあらざるか、血の湧き肉の躍るを如何せん。かくて私は思うた。支那の景色と云ふものはドウ考へても大きい。而もその大きさが度はずれである、それ故に支那の繪畫は生れたのではあるまいか。それが支那畫の生命ではあるまいか。今日の油畫のやうに、景色の一部分の小さい場所を如何に精細に描寫してあつても、支那人が一向に興味を感じない理由は此處にあるので

はないかと、柄にもない繪畫の世界に思ひを走らせるなど、思へば無限大の自然の力に接したたまものであると、獨り感謝を禁じ得ないのであつた。

然しながら支那の人も云ふ、西湖は天下第一の景であると。そして吾等の目にも亦た天下第一とは思はぬまでも好き景色であるとは思ふ。

とは言ふものゝ、朝霧に浮び出る西湖の景色は、景色がチャンと纏つて居るだけに、吾等をしておのづと絶景を叫ばしむるのである。雨の西湖も、あの朦々たる中に畫舫を浮べて、自ら畫中の人となりては、よく筆舌の盡くすところにあらざるを思はしめる。支那人が天下第一の景と云ふのは、支那にはこんなに小さくチャンと山紫水明の纏つた景色が外にないから云ふのではあるまいか。そは吾等が無限の大景、神祕の景觀に驚嘆すると同じく、珍らしいと云ふことかも知れぬ。兎に角西湖は、山に水に遊ぶに最も手頃の場所である。一日若くば數日の遊びには、最適の勝地である。それ故に四時遊客の趾を絶たない。この西湖の東岸には、此等遊客のために多くの旅館がある。

私は商用の時にも散策の時にも、この西湖の旅館に泊まるのであるが、此處で面白いことがある。それは同じ宿の同じ部屋に泊つて、同じボーイに同じ日數同じ人數で泊つて、ボーイのチップが商用の時と遊びの時とで違ふことである。一體日本ではチップと云ふものは、お客様の心ま

かせのものであつて、陰で彼是は言ふが、決して公然彼是云ふべきものではないとされて居るのである。支那ではボーイのチップを酒錢（チユウチエン）と云ふ。日本でも俗に酒代（サカテ）と云ふものがある。或はこの酒錢の轉化ではないかと思ふ酒錢（チユウチエン）を、チユウチエンと讀むのは北京語であつて、上海語ではチユウデエと云ふのであるが、錢もデエと讀むが酒代もデエへ讀むから、日本の酒代（サカテ）は或は上海語のアテ字書である酒代（チユウデエ）から來たのかも知れぬと思ふ。その酒錢は、支那では決してお客の心まかせではないのである。それは支那の旅館などのボーイ（茶房（チヤフファン）と云ふ）は無給である。若しあつても極めて安い給料らしい。そして湯茶を自分で供給する、其他お客様の手足となつて働らく、その代償として得るものが卽ち酒錢であるのだから、一種の勞力の報酬である。それ故にお客様の心まかせのあてがひぶちで默つては居られないのである。私も始めて支那宿に泊つた時には、必ずこの酒錢をボーイにやつて、いな、お客様酒錢を下さいとボーイの方から催促されて、先づ其時に、何んだこの野郎怪しからん奴だ、チップを請求する奴があるものか、と日本流に考へて獨り憤慨する。然し憤慨はしながらもドウセやるつもりであるから澁々ながらやると、いや是れは驚ろいた、ボーイの奴決してありがたう御座いますとは云はないで、手の平にお金を乘せて又は兩手でお金をヒネクリながら、どうぞもつと下さいと言ふ。こゝに至つて日本男子たるものゝ憤慨は爆發する事決して少しとせずである。然しながら支那人の酒錢と云ふものは、前に言ふやうに

日本人の餘得とは性質が違つて居る。純然たる勞力の報酬である。其事が解つて來ると、アーさうかと極くあつさりと片附くのであるが、支那の習慣と云ふものを知らんと、憤慨したり怒つたりしなくてもよい處で、無暗に憤慨して見たり怒つたりすることがある。其癖憤慨も激怒も先方には一向何んの意味だか解らんで、日本人と云ふ者は妙な怒りつぽい人間だ位にしか通じないに至つては、遂にお笑ひ草である。

私は或時商用で、西湖に二人で五日泊つた。馴染のボーイ（茶房）に二元やつたら、謝々と言つて喜んで居た。次ぎに私が正月の逃避行に、家内と二人で三日泊つた。歸りに酒錢を二元やつた。商用の時は五日で二元であつたから、今日は三日で二元だから、キツト喜ぶであらうと思ふと、これはしたり喜ぶどころのことでなく、これでは少ないからモツト呉れと言ふ。支那と云ふ處は奇怪至極の處である、お客である吾々の行動が、茶房の酒錢に影響するのである。商用であると遊びであると、それは何にも茶房に關係すべき筈ではない。それはお客である吾人の自由である可き筈である。然るに商用と遊びとその行動によつて茶房の酒錢が高くなつたり、安かつたりする。實に怪しからんと青筋たてるよりも靜かに考へることだ。何か知らん其處には暗示があるやうだ。矢張り生活が實際に則して居るのが、私にはあり〳〵と見える。それは私だけであらうか。

上海漫語（その九）

上海其他の支那に生活して居る者が、相當苦るしめられて居ることの一つは、アミーバ赤痢である。而も一度罹つたが最後、恐らく全快は不可能と云うてよいのである。

妙な事には、このアミーバ赤痢で苦しむ者は、殆ど日本人だけらしいのだ。四億の支那人は一向平氣で居るやうである。

最近はアミーバの豫防注射迄出來て居るやうであるが、私は必ずしも注射藥や豫防注射を悪るいとは云はんが、かうした注射又は豫防注射によつて、アミーバ赤痢からの苦るしみを免からしめる努力と共に、アミーバ赤痢菌が日本人の腹中に住居しても差支へない方法を考へる可きではあるまいか。

私は今日の日本醫術の發達は非常に喜ぶが、どうかすると、この方面の研究が後れて居ると思ふ。病源が判明すると共に、病菌を撲滅すると云ふ方法も必ずせなければならんが、その病菌と同居しても一向苦痛を感じない身體になると云ふことである。アミーバ赤痢の如き已に支那人は此菌と同居して居るにかゝはらず、一向苦痛を訴へないやうである。（無論除外例はあるが）何故

支那人は苦痛でないのか、アミーバ菌は支那人の體内では何故活動出來ないのか、それとも活動しないのか。この點に研究は進められる可きではないかと思ふ。

一體衣食住と云ふものは、各國各民族の間で色々違つて居るものであるが、その最大の原因は恐らくは生活環境の相違と云ふことであると私は思ふ。而もそれは各人がその生活環境に順應した結果ではないかと思うて居る。その生活環境を無視しての生活法は、丁度暴風に向つて船を走らせるやうなものではないかと思ふ。かういふ風に考へて來ると、支那在住の日本人が、アミーバ赤痢に苦しむ一面に私は日本人の生活環境無視があると思ふ。

極く簡單な話であるが、日本人がお茶を呑む、支那人もお茶を呑む、然し其量に於いて日本人の方が少ないと思ふ。お茶の量はその本質的に云ふのではなくて、水量で云ふのであるが、支那人の方が遙かに多量に呑むやうである。私自身でも支那に居る時と日本内地へ歸つて來てからとでは、其量が非常に違ふ。なぜ支那ではお茶を多量に呑むのであらうか。それは日本の空氣が濕度が多く支那の空氣の方が乾燥して居るが爲めであらうと私は思ふ。

日本人が食物に油を使ふことが少くて、支那人が油を呑む程使用するのは何故であらうか。ただ好ききらひと云ふことだけではない。あれは必ず自然の要求であると思ふ。支那人の身體が油を要求するのであらう。その生活の自然環境が油を體内に入れしめるのであつて、それが自然環

境に順應したことになるのであらうと私は思ふ。

日本人と支那人とでは、同じ上海に生活して居つても日常生活が非常に違つて居る。朝起きた時から日本人は多く水で洗面する（上海に居住して居る日本人は今日は多く支那人式になつて來たが、それでも夏は矢張り水の洗面が相當多いやうである）が、支那人は必ずお湯で洗面する。日本人は冷飯を平氣で食べる、中にはわざ〳〵冷たくして迄食べる、おすしはさうである。處が支那人は冷飯は殆ど食べない、熱い御飯でないと食べない。從つて、どんなまぐろのニギリでも食べない。たゞ冷飯を食べないだけでなくて、生物は多く食べない習慣である。然し決して食べないと云ふのではない。生物も隨分食べはするが、大體に於いて煮た物その煮方が多く油で煮た物を食べて居る。生物を食べる時、假令ば鹽菜（漬物のこと）を食べるには、必ず胡麻の油をかけて食べる。其他生の蝦とか貝とか蟹とか野菜でもきつと胡麻の油をかけて食べる。支那人は生魚は食はないと云はれて居つたが、そんなことはない。除外例ではあるが、杭州料理や廣東料理の中には魚生と云うて、お刺身がある。然しこの魚生も胡麻の油がかけてある。

かうした點から考へると、私は上海在留の日本人が、アミーバ赤痢菌の活動による苦痛は、或はその體内に油が少ないためではないかと思うたので、先年三回程自分で試して見た。私はアミーバ赤痢菌とは無論同居者であるが、時々冷えると彼れが活動を始めることがある（自分で冷え

ると起ると思ふだけだ）其時に下劑をかけて腹を空らにして置いて、支那料理を食べる。さうするとそれきりで治つて終ふ。こんなことは實は私一人の三度や五度の經驗で決定するのでは無論ないが、或はアミーバ征伐の何等かの手がかりになりはせんかと思ふまでであるが、兎に角衣と住との關係もあるかも知らんが、腹の中のことだから食の問題が一番關係が多いと思ふので、食物で比較して見ると其處に油の食用に非常な差がある。或はアミーバ菌は油に對する活動が弱いのではないかと思ふのである。

別にアミーバ赤痢の治療として書いたのではないが、どうも上海在住の日本人の生活の多くが環境に順應した生活をして居る人が少なくて、反對に環境無視の生活が多いやうに思はれる。それは恰度暴風に向つて舟を走らせてゐるやうなものではあるまいか。

私一人の杞憂だけであつたら幸ひであるが——。

國共合作への私見

國民黨が、蔣介石を主腦とする政權は、數年前卽ち滿洲の獨立前迄は、南京を中心とする三、四省に限られて居つたものであつて、やゝもすれば反國民黨又は反蔣介石運動が擡頭しかねまじき狀態にあつたのである。而してこの國民黨政權に對して極めて明確にその反國民黨的旗色を飜へして居つたのは言ふ迄もなく、江西省瑞金に政府を持つ處の中華ソヴェット政府の主なる中國共產黨そのものであつた。

然しながらこの反國民黨的反蔣介石の中華ソヴェット政府は、その半面に於いて反つて國民黨の蔣政權の擴大を非常に援助したものである。例へばソヴェット政府が一の事實を十に宣傳すれば、その宣傳を國民政府は直ちに十五又は二十に擴大して宣傳するのである。國民政府は何故にソンナことをするのであらうか、これこそ昔から支那で行はれる逆手の政策である。敵をして生かさず殺さずその半殺しの狀態を利用して自らを有利に導くこれ大政治家の手腕である。殘念ながらこの大手腕を國民政府が持つて居つたのである。そしてこの生かさず殺さずの方法を中華ソヴェット政府に對して施したのである。

舊軍閥・舊政治・舊習慣に全的反對を標榜して立てる中華ソヴェット政府は、自分等の宣傳が然く逆手政策に利用されて居るとは全く知らなかつたであらう。彼等はたゞ赤色ロシヤ模倣の宣傳に熱中したのであつた。中華ソヴェット政府のロシヤ模倣宣傳は、それがより盛んなればなるだけ國民政府の逆手政策はそれに正比例して强烈となつたのである。一體その逆手政策の効果をもたらすのであらうか。それは國民政府をして紅軍討伐の軍資金と、國民政府直屬軍の强大資金の調達とを、非常に容易ならしめたのである。

然らばその方法は如何と云ふと、原來共産黨を恐れるものは多くの財産を持つて居る所謂資産家連中である。この又資産家連中こそ國民政府が軍資金を調達する唯一の目標である。このツボをチヤンと握つて居るのが國民政府であつたから堪らない。共産黨の擴大された宣傳を尙一層國民政府が擴大してその恐しさを彼等資産家に見せるのであるから、資産家たるもの身の毛をよだてゝ恐れを爲したのである。卽ち、恐しい彼等を討伐するには、第一に必要なものは軍資金である。さあ公債を買へ公債を買へと幾度でも繰り返へして公債を買はされたのである。共産軍は誠に恐しいものである、彼を討伐の軍資金であるからサア公債を買へと云ふのである。資産家たるもの遂に逃がるゝ道はないのである。イヤもオ、もなく公債に應募させられたのである。

卽ち國民政府に必要なものは、中華ソヴェット政府の宣傳文であつたのである。そこで國民政

府はいつ迄も、いつ迄も、宣傳文の發行可能の程度に共産軍を壓迫して居つて、決してその徹底的討伐はせなかつたのである。此處迄考へて來ると國民政府が今日の統一を造り出すに對して、共産黨の貢獻も亦た大であることを忘れてはならぬと思ふ。國民政府は、紅軍卽ち中華ソヴェット共産軍のこの貢獻を思ふが故に、彼等が遂に瑞金に止まるを得ざるに至つて、瑞金放棄を宣言して逃走せんとするや、豫め示すに逃走の道筋を以つてしたのである（私は某氏から未だ彼等が瑞金を出發せざるに、早くもソヴェット政府は江西より湖南に入り、貴州から四川を横ぎつて甘肅を通過し、寧夏から陝西に入ると云ふ豫定通路と聞かされたのである。その某氏は南京政府要人に非常に親しい友人を持つて居る人である）。卽ちソヴェット共産軍は、恰も修學旅行でもするが如くに、樂々と豫定の道筋を行軍したとの事である。その落ち行くソヴェット共産軍の後を追うて、丸で監督でもして行くが如き態度で、不則不離の行軍をしたのが國民政府の紅匪討伐軍であつたのである。

ソヴェット共産軍は、遂に陝西省延安（今の膚施（フス））に入つて落ちついたのである。それは豫定の目的地であつたか又は偶然であつたか知らんが、兎に角トンデもない場所に落ちついたものであると私は思うた。

私は、當時共産軍が此處でこのまゝに膠着したならば、彼等は必らず物資の缺乏と共に全般的

の窮乏に遭遇するであらう。そしてその結果としてキツト非常な危機に直面するであらう。或は遂に救ふ可からざる崩壞に瀕するのではないかと思うたのである。そこで私は其後の推移を注意して見て居つたのである。私のこの考へはこの延安と云ふ地が、後方は大ゴビの沙漠であることと、その前面は國民政府の西北巢匪軍が討伐の陣を敷いて居ることからの考へであつた。果然私のこの考へを裏書きしたのはソヴェット共產軍を此處迫追ひ込んだ蔣介石が、これで巢匪工作は一段落を告げたものとして、一先づ南京へ凱旋したことである。

而して張學良を總司令とする西北巢匪軍は、西安に本陣を据ゑて共產軍と相對峙して、今日に及んだのであるが、天然の巢匪軍たる沙漠と人爲的巢匪軍に狹擊されて居る共產軍は、恰も鹽か砂糖が溶けるやうにジリ〳〵〳〵と水と熱とが加へられたのである。其處に押し寄せて來るものは當然全般的窮乏と云ふことであつた。それには三年の日子が費やされたのであつた。無論其間、共產軍は巢匪軍に向つて昆蟲的喰ひ込み戰術を用ひて對抗したのである。西北巢匪軍もそのためには相當苦しめられもしたに相違ないが、然し孤立無援の共產軍（私は中華ソヴェット共產軍は、ロシヤの共產軍とは無關係又は極めて薄弱なつながりがあつた位のもので、大體無關係と云うて差支へはないと思ふ。何故なれば、新疆省の廸化府の中國郵政局行の局員を上海で試驗した事があつた。其時の話に、露西亞語の話せる者は非常に便利であると聞いて居つた。然れば

少くとも同地には相當ロシヤ語が使用されて居ることが解る。されば萬一支那の共產軍が實際ロシヤと關係があつたとしたら、甘肅省を横ぎつて現在の地點に向つて東に來るよりも、寧ろ西へ向つて廸化府に入る可き筈ではないかと思ふ。又假りに百歩を讓つて東行して北の方庫倫あたりで、ロシヤ共產軍との連絡を欲したものとすれば、何故三ケ年の日子をその方面と無連絡のまゝ過したかと云ふ不可解が出て來るのである。私はかうした理由で、支那共產軍は孤立無援であると云ふのである）は、十年來の戰疲と、最近攻め寄せて來た窮乏とで、知ず〳〵全く鳴りを靜めて延安に膠着せしめられて居つたものであると思ふ。處が偶々昨年十二月十二日、西安に於いて西北巢匪軍總司令張學良の名によつて、反國民政府反蔣介石抗日卽時開戰と云ふ頗る物騷なる聲明が發せられると共に、國民政府軍事委員長蔣介石は、西安に於いてその家の子郎黨と共に監禁せられたと云ふ事が、中外人の耳を驚かしたのである。此時に當つて、蔣介石の生死兩說が熾んに傳へられた。そして日本の大體は死亡說であつて、次ぎに來るものは國民の崩解と云ふ見透しであつた。その結果として、支那の紙幣は當然反古になると云ふ說が日本側を支配して居つたやうであつた。然し經濟的立場の若かい人々は、生死相半ばしたやうであつたが、例へ死んで居つても今日の國民政府は最早蔣介石政府ではなくて、實に相當確かな組織の上に立つて居る國民政府であるから、決して崩壞はせないと云ふ意見であつた。だが、私は蔣介石は生きて居ると考へ

た。それはこの監禁を矢張り一種の紙票と見たからである。故にその肉票を殺して終つては目的の金が得られないから必ず生きて居ると見たのである。又假に蔣介石が死亡して居るとしても、國民政府は決して崩壞せないと見た。それは各國の武力的壓迫の手がゆるまない限り、斷じて崩壞はせない。從つてこの發行權力の不崩壞は、その紙幣をして反古たらしめる事はないと考へたのである。

私は國民政府が蔣介石を主腦として支那統一を企てしより以來、知らず〳〵ではあつたが、その統一を非常に援助したものは各國であると思ふ。その事は支那の人々の間にもよく言はれて居つたことである。若しも各國の武力的壓迫がなかつたならば、兩廣の妥協もあんなに容易には出來得なかつたであらう。支那はあの兩廣問題を最後として、先づ統一されたのである。もう當分反國民政府運動も反蔣介石運動も起り得ないであらうとは多くの支那人間の定說であつた。一度西安に監禁された蔣介石が、如何なる方法手段によつて解放されたか、實際は私は知らないが、私の想像にして許されるならば、これが解放に當つては、舊保定軍官學校々長であつた。蔣方震（彼は歐米漫遊より十一月三十日に歸つて、十二月十二日在西安の蔣介石に報告のため、洛陽から天大楨と共に飛行機で西安に赴いて同時に監禁されたのである）の力が、非常に有効であつたと云ふことは、西安半月記が如何に蔣介石の名論卓說の効と書かれてあつても、又宋美齡が如何

にキリスト敎の御利益を說明しても亦、彼女の信仰を高調しても、宋子文の力であると書かれて居つても、それ等一切のものを尻目にかけてより以上に有効であつたものは、矢張り蔣方震其人の力であつたと思うて居る。而も蔣介石の身代金なるものは、想像以外の小額であらうことを思ふものである。

蔣介石は、十二月二十五日無事に放免せられて洛陽に歸つた。此時に一つの不可思議の一事が起つた。それは反逆の張本人張學良が責を負うて國民政府に待罪を申出づるため、蔣介石に隨伴して、同時に南京入りをしたことである。この一つの謎は、先般來張學良は蔣介石の鄕里なる浙江省奉仕に軟禁されて居ると云ふ流言と共に、實に不可思議の好一對である。

蔣介石西安監禁事件なるものは、それが例へ誰がやつたことであるとしても、兎に角國民政府の一大缺點の暴露であつたことは云ふ迄もない事であつた。此報を耳にして最も活潑に活動したものは、言ふ迄もなく、實に延安に膠着を餘儀なくされて居つた共產軍であつた。

共產軍は時到れりとばかりに國民政府に向つて聯合抗日戰線案を振りかざして妥協を申込んだのである。當時私は尙ほ上海に在住して居つたのであるが、例へその宣言と聲明とが如何なる文字と文章で綴られて居つても、一ケ條でも共產主義の本來の面目を放棄するやうなことがあつたら、それは共產軍の降伏的妥協であると考へたのである。

その反對に、國民政府にしては、その年來の主張である三民主義の一ケ條でも放棄するやうな事があつたら、それこそ國民政府が共產軍への降伏的妥協であると私は考へたのである。

然し妥協である以上、相方が同量の讓步をすることは當然のことであつて、それなしには不可能であるが、それは相方の力が相伯仲した時のことであつて、國共いづれか力に强弱のある場合は、その妥協面に現はれて來るところは、力の强い方は讓步の量が少しも無いか又はあつても非常に少ないに反して、力の弱い方の讓步は必ずより多い讓步をせなければならんことは言ふまでもないことである。詰り國共いづれがより多く讓步して居るかと云ふことによつて相方の實力が判明する筈である。

西安事件を契機とする國共兩者の妥協は、漸く進んで確か今年初夏の頃と思ふが、遂に成立を告げたやうであつた。それと共に、延安方面への郵便の交通（何月何日から郵便物の取扱ひを開始すると云ふ布告はなかつたやうに思ふ?）が開らけたことによつて私はそれを知つた。其頃新聞は、熾んに周恩來の來滬とか南京入りとか云ふことを報じて居つたが、恐らくそれは事實であつたと思はれる。然し成立した妥協がどの程度のものであつたかと云ふことは、私共は一向知ることが出來なかつたと云ふのは、少しく妥協條件も聲明も宣言も發表せられなかつたからである。

而して七月始め、蘆溝橋に端を發した華北事變は、追々と擴大されて行く。八月十三日には上海に於いて大山大尉事件が原因となつて（イヤ其頃已に支那側は充分抗日戰の準備をして居つたものと見えて、この明らかな大山大尉事件の外交的解決を彼から放棄したのであるから、今次の上海事變は明らかに支那側の挑戰である）、再度の上海事變が爆發した。此等の大事變の進行中、九月二十三日上海電報は中國共產黨の宣言なるものを傳へた。曰く（東京朝日新聞に因る）、

(1) 中國共產黨は、中國再建設には孫總理の三民主義は不可缺ものであることを認め、三民主義の完全なる實現のために、黨としての最善を盡くすべきを誓ふ。

2) 中國共產黨は、(イ)暴力による國民政府の轉覆。(ロ)共產主義思想の宣傳。(ハ)土地の强制沒收の三者を目的とする總べての方策措置をこゝに廢棄することに決定した。

(3) 中國共產黨は、中國ソヴエット政府を解消し、中國の行政的諸機關を統一する意圖の下に、中國のために民主的形式の政府樹立を支持する。

(4) 中國共產黨は、紅軍を解散し、その麾下に屬する軍隊を國民革命軍に改編。國民政府軍事委員會の指揮下に屬せしめる右革命軍は、軍事委員會の命令の下に前線に於いて、國防事務に服する用意あり。

と云ふのである。これがその全文であるか又は一部分であるか知らないが、暫らくこれをその全

文として取扱ふことゝする。(1)から(4)までの全文の中に(1)の末句黨としての最善を盡す可きを誓ふと云ふ中に、何程かの面目を殘せる外全般的に讓歩せることは判然として居るではないか。この文面では共產黨が如何に辯明するとも、最早彼等が共產主義を放棄して、國民政府に身賣したと云はれても答ふる言葉はあるまいと思ふ。

更らに二十四日、大阪毎日新聞に因る上海電報は、中國共產黨の宣言に對して、蔣介石の聲明が傳へられて居る。曰く、

共產黨の聲明は輝かしき民族意識の勝利である。國民政府は國民黨指導の下に各黨各派に對し、救國の實を擧ぐ可くあらゆる機會を提供する用意を有する。共產黨また今回の聲明に從ひ、我等の同志として抗日救國に合作せられん事を望む。

と云ふのである。これ又それが全文なるか一部分なるか不明であるも、これを全文として取扱ふ事とする。共產黨員にこれをたゞせばこれ共國兩黨合作の對外的辭令のみ。その實際に於いては全く共產黨が國民黨を合併したのであると云ふであらう。これを國民黨員にたゞせば、全文の示す通り明らかに共產黨を國民黨が併合したのであると云ふであらう。

これを要するに、兩者いづれにしても、自己に有利なやうに自己の立場に都合のよい辯明をするであらうことは、間違ひのないことである。而して吾等の判斷は、實に此處にかゝつて居るの

である。例へ如何なる理由と事情とが伏在するにせよ、一つの主義に立てる一黨が、他の一黨と合併する場合、無條件の合併にあらざる限り、其處には必ず程度には色々あつてもその主義を棄てなければならん者と、それを棄てさせる者とがある。その二つの立場こそその實力の强弱の尺である。今次中國共產黨がその主義を棄てゝ（あの宣言の文面から云ふと違ふと云はれるかも知れないが、然し私は違はないと思ふ）國民黨に合併する旨を宣言したのは、明らかに國民黨が、共產黨及び紅軍を解散することを條件として合併したものであると思ふ。然れば何れが强者的立場に立つ者であるかと云ふことは自ら判然として居る。

蔣介石はその聲明の第一語に於いて、

『共產黨の聲明は輝やかしき民族意識の勝利である』

と云うて居るところに、決定があると私は思ふ。

始めて延安に郵路が開らけた頃、同地にある中華文藝協會から版畫刀二組の注文があつた。又同地から古雜誌でも古本でもよいから至急に送つて呉れと云ふ注文があつた。其時の話に延安方面は全く物資が缺乏して居ると云ふ話をして居つた。私が且つて同方面が物資の缺乏に陷るであらうことを杞憂して居つたことが、今や事實となつたものであると私は思うた。尙ほその注文が古雜誌でも古本でもよいと云ふ文句によつて、金錢上にも非常な缺乏を見せて居る。されば今次

の妥協に當つても、決して噂されて居るやうな多額の身代金が渡つて居らんと私は思ふ（私は中華ソヴェット政府は、國民政府に身賣りしたと思ふが故に、敢へて身代金と云ふ）。

今一つにこれは、決して重要性を持つて居ると云ふわけではないが、一寸注意して見るも無駄ではないと思ふことは、今後共產黨の頭目連中が頭を揃へて國民政府部內の椅子に並ぶか、それともボツ〳〵と一人々々が就任するかと云ふ、つまり共產黨員の就任振りである。頭を揃へて就任するやうであれば、今次の妥協にも尙ほ相當の力が認められるが、萬一にも一人々々引き拔き的な就任をするやうな場合には、それは國民政府が拔本塞源的な方法を採るものであつて、全く共產黨が買ひ取られた一つの鐵證であると云うても差支へないと思ふのである。かく考へて來ると私は今次國共の合併は遂に中國共產黨の解消であると思ふのである。然しそれで完全に解消して終つたかと云ふと、決してさうではない。必ず其處には多少共不平分子がお粥の塊のやうに殘るものである。お粥の塊的殘留分子は將來又大を爲すやうなことがあるであらうが、然し大體に於いて今次の國共合併によつて、中國共產黨は一先づ解消し、その共產軍も亦た解散されたものであると見て差支へないと思ふのである。

然しながら此處に一つ注意せなければならんことは、各國の武力的壓迫が支那を追及することが非常に急なる場合、其處には且つて魯迅先生が言うたやうに、支那全民衆の飢餓戰線が展開す

るやうなことになりはせんか、私は杞憂に堪へないものがある。さうした時にお粥の塊的共產黨の殘留分子が再び活躍するのではないかと思ふ。いやその活躍は必ず此等飢餓軍を指揮するであらうと思ふのであるが、事其處に至る迄には、未だ〳〵幾多の變遷があるのは言ふを待たないのである。第一各國の武力的壓迫がどの程度で止まるものであるか、その止まつた後に如何なる政治が行はれるか、其處にも大きなものが殘されて居るのである。

私は今共產黨と共產軍と國民政府との惡因緣から、今次の妥協合併までに對する極めて貧弱な材料からの私見を書いて見たのである。又ソレを土臺として將來に對して一言及ほしたわけである。漫談より一歩も出たことのない門外漢である私の政黨談、矢張り一つの漫談に過ぎないものである。

西安の一幕

場所　上海漫談クラブの一室
時　一九三六年十二月十三日
人物　A　支那問題研究所長
　　B　著述家
　　C　〇〇〇調査部出張員
　　D　〇〇〇會社支店長
　　E　クラブ主任

話題は、昨日突發した西安に於ける蔣介石監禁問題が中心である。

E　そこで、明日の公債市場はドウなるかだネ。

C　無論大暴落だネ。

E　その下る値幅が、蔣介石の値打と云ふものか。

B　まあそんなものだネ。然し決して崩れないぞ。大暴落とか總崩れなんて事はないと思ふネ。

何んと云うても今日の政府の紙幣發行權力と云ふものが、非常に廣くなつて居るのだから、國民政府の經濟的基礎は崩壞するやうな事はないと思ふネ。

E　對外爲替はドウなるだらうか。

A　相當の影響は受けるであらうが、大影響はあるまいと思ふ。Bの說には僕は贊成するネ。

D　僕は、公債は無論暴落するし、爲替も大變動があるに違ひないから、恐らく支那銀行は明日は休業するだらうと思ふネ。

E　兎に角日本側の意見は、蔣介石は殺されて居ると云ふことに一致して居るやうだネ。それから出發して國民政府は倒れ、從つて支那の財政は破產するといふ結論まで引き出したやうだネ。

C　僕もさう思ふネ。蔣介石は無論殺されて居る。蔣なき後の國民政府は四離滅裂すると思ふネ。だから無論幣制は大破綻を來たして、紙幣は反古になるだらうと思ふネ。

A　例へ蔣介石は殺されて居つても、――僕は生きて居るだらうと思ふが――今日の國民政府は最早昔の國民政府ではない。蔣介石一人の政府ではない。今日の國民政府は立派な組織の上に立つて居るのであるから、蔣が殺ろされたからと云うてすぐ崩れると云ふやうなことは決して、ない。從つて公債が下落し、爲替が影響を受けるやうなことがあらうとも大丈夫と思ふ

ネ。僕等の若い者は大體かう云ふ意見であるのに、老人連は全く悲觀說であるが妙な對立だよ。

D　僕も大體悲觀說だネ。

B　僕は悲觀せないネ。これだけ大きな紙幣の發行權力の上に出來て居る經濟組織が、さう簡短に崩壞なんかするものぢやないよ。

E　蔣介石は殺されて居ると云ふ意見が多いやうだが、僕は西安事件を一幕と見て、その場面をかう書いて居るのだ——舞臺の西側には、蔣介石が監禁されて沈思默考して居る。その舞臺の東側の全く切り放なされた一軒の中には、張學良が大きな机にもたれて、聲明書を讀んで居る。楊虎城が横に立つて居る。後に若い將校が二人、興奮の面持ちで劍を振つて立つて居る。張學良がヤヤ艱ましい面色を見せる。二人の將校が楊虎城に早く〳〵と催促するので、彼も次第送りに總司令サ早く檢字をして下さい。とセキ立てる。そこで張學良はシブ〳〵檢字をして、拋げるやうに楊虎城に渡す。楊虎城は聲明書を受取つてホツトした態度で、二人の將校をつれて出て行く。廊下にも庭にも門にも嚴重に番兵が澤山居る。花道には多くの若かい將校達が、ガヤ〳〵と云ひながら楊虎城の歸りを待つて居ると云ふ場面だ。ネーつまり

學良も監禁サ。

B　それも一つの見方だネ。

C　そんな甘くドラマ的な事があるものかネ。

A　イヤ支那には案外そんな事があると思ふネ。

E　それから、例へ蔣介石が殺ろされて居つたとした處で、國民政府は斷じて瓦解するものではない。それは已に現實に見えて居るではないか。〇〇からの壓迫がかくも鮮やかに國内統一を完成させて居るのを見れば、この通りである。壓迫が嚴しいだけ統一は堅くなるものである。日本だけではないが、凡そ殉教史を讀めば一目瞭然ではないか。大きな權力が信仰を壓迫する時に、その壓迫の强さに比例して愈々信仰が堅くなり、更らに加へられる壓迫に對して遂に悲壯なる殉教者が出來るのであつて、壓迫が少ない時には決して殉教と云ふことはないのである。殉教は非常な壓迫に對して自己意志の統一が、いよ〳〵堅くなつて其處に發生する殺ろされても屈しない統一意志の結晶である。だから蔣介石が殉國すれば、それだけ國民政府の統一が堅くなることは火を見るよりも明らかである。つまり外部からの壓迫がいよいよ强ければ强いだけ支那の統一は堅固になる筈である。これを考へる時に決して國民政府は崩れないと云ふことが出來る。從つて幣制に何んの心配もない公債が、どんなに下落しても、爲替が如何に變動しても、それは一時的影響に過ぎないものであつて、決して悲觀すべ

きものではないと僕は思ふ。

翌日公債市場は開いた。遂に人氣は四元の棒下げを演じたので、立會停止となつた。各銀行は休業もせず、開業した日本金だけが動いた。而も買ひの一手なるが故に、一〇四圓の相場は一〇二圓迄上つた。然かしそれからは大變化はなかつた。英米の爲替は殆ど不變であつた。

やがて政府顧問ドナルド氏は、飛行機で西安一番乘りをして蔣介石の無事を傳へた。再び飛んで蔣鼎文が蔣介石の親書を携へて南京へ歸つた。支那新聞は全部蔣介石生存を載げたにもかゝはらず、日本側は依然として死亡説を唱へて生存説を芝居として冷笑したのである。更らに宋子文西安に飛ぶや、日本新聞は八千萬元の紙幣を携帶したと傳へられた。引き續いて宋美齡女史が飛んで、十二月二十五日には蔣介石は解放されて宋美齡と相携へ、張學良を從へて南京入りをした。張學良は待罪文を發表して宋子文邸に謹愼した。これで全支那は湧き立つて爆竹の音は耳を聾するばかりであつた。

空襲下の上海を脱れて

——停戰協定の區域内に居る保安隊の數が最近非常に增えた。保安隊は一人々々非常に爆發力の强い獨逸製の手榴彈を三個と、非常に巧妙を極めた小型の機關銃を懷に入れて居る。保安隊は兵舍を離れて民家に分宿して租界に接近して來た。保安隊はザンゴウを掘つた、鐵條網を張つて居る。陣地も構築して居る。保安隊の中に正規軍が出て來た——と云ふやうな話が毎日甲から乙へ乙かの丙へと洪水のやうに流れた。支那人避難者の群は流れのやうであつた。だが陸戰隊は極めて注意深かく、而も平然としてこれを見て居た。兵の外出も平常のやうであつた。突如として起つた大山大尉事件に對するあの正々堂々の態度は、未だ且つて見た事のない立派なものであつた。

然し事は遂に決裂した。それは勢ひの止むを得なかつたのであつたかもしれないが、私が非常に遺憾に思ふ事は、支那人一般民衆生活のモツトーとも云ふべき『窮すれば變じ、變ずれば通ずる』と云ふ詰まり行づまりと云ふものゝない人生哲學が、兪鴻鈞市長の若さから四億民衆の幸福の心臟とも云ふべき上海をワケもなく炎々たる坩堝の中に、たゝき込んだ愚かさである。

十三日午後四時半に領事館から、エキステンション在住邦人は速時租界内へ引上げるやうとの電話が來たので、私の通知すべき範圍の人々にスグ其旨を傳へた。然し一方自分達は前きの上海事變に採つた態度と同じやうに、店内に籠城するつもりで居た。處が砲彈に堪へられる點から云ふと店の建物は不適當であつたのと、丁度前年の事變に最後の籠城家屋として安全であつたラモスアパート（鐵筋コンクリートの建物）内に、十數年來寢たまゝの病人を抱いて居るS氏から電話で同じ籠城するなら、この建物へ來いとの事であつたので早速一時だけでも凌げる米など持つて一同は其處へと引越した。

若い者は部屋の準備を始めた。ベランダには日本人の住んで居る印に國旗を出した。

私はモ一度店へ引き返へして、店や住宅の戸締りを見て廻つた。鐵の網とウインド硝子との間には日本疊を一枚づゝ差し込んである。入口にも疊が立てかけてある。新居も舊居も何れもこれ以上ドウすることも出來ない事を見屆けて、籠城家屋にひき上げかけた時に五六人の正服をつけた領事館の巡査が大きな聲で『引上げて下さい。一人殘らず引上げて下さい。今トラックが來ますから一人も殘らないやうに引上げて下さい。』と叫ぶのであつた。

私を見て『この千愛里にはモウ日本人は居りませんか。』と尋ねられたので、『今はモウ一人も居りません。』と答へた。『貴方はドウするのですか。』と再び聞かれたので、『私共は向うのラモ

スアパートに籠城するつもりであります。』と云ふ言葉の終らぬさきに、『いけません、一人も殘つてはいけません。租界内への引上げ命令ですから一人殘らず引上げて下さい。』と云はれたので、『實はあのラモスアパートには動かせない病人がありまして、私共はそのS氏の部屋に籠城するのです。』と云うた處、『斷然いけません。私が行つて來ます。』と云うて巡査は走つて行つた。

丁度その時何を探がしに來たのか私共の家主の自動車が來たので、これを呼び止めて最後の引上げに備へた。アパートから巡査が自動車を持つて來い、と云ふのでスグその自動車を廻した。若い者達や皆んなが手傳つて病人を自動車に乘せた。

Mさんが私の爲に小型自動車を運轉して迎へに來て吳れた。病人を伴れて、S氏一家は虹口のK醫院に行かれることになり、私の店の一行は虹口の共和里内にあるK病院へ行くことにした。私はヤツト昨日病妻を避難させた平凉路のK洋行の住宅に避難した。

此處では若かい人々が盛んに荷造りをして居るので、二度ビツクリした。聞けば昨夜近くの東華紡績に支那軍が襲擊して來たのださうで、此處も決して安全地帶ではないらしい。實は前年の上海事變で絶對安全地帶であつたので、昨日病妻を避難させたのであつたが來て見るとこの騒ぎである。その間も絶えず砲聲が響く、豆を煎るやうな銃聲が聞える。それでも其夜は安心の高いびきで颱風さへも知らずに過ごした。

十四日Kの自動車に便乘してS銀行や郵船會社へ行く。S銀行の中で話して居ると十時半頃、突然文字通り百雷の一時に落ちたやうな一大音響がしたと同時に、流石の大建築もビリ〳〵ビリビリと震動した。居合はせた人々の顏色は一瞬にして蒼白になつた。外は人の雪崩だ。門衞の印度人は直ぐ門を締めて了つた。何んだらう〳〵と云ひ合つて居ると、今支那の飛行機が黃浦江上に姿を見せて爆彈投下をやつたので、日本軍艦から全艦の總射擊をしたのだと云ふ。その知らせがあつてヤレヤレと胸をなで下ろしたが、街は何にも知らぬ人々の右に左に避難する自動車、トラック、黃包車で渦を卷いて居る。

郵船會社へ船を決めに行くと、臨時船の榮洋丸が十六七日頃に出るが、船室の有無は明日にならないと決定しないと云ふので、豫約だけして、Kの自動車を借りて平凉路へ歸りかけたが、今朝の飛行機が楊樹浦方面へ爆彈を投下したとか云ふので、遽かに支那人の避難者が列車のやうにヴロードウエー路へ押し寄せて來て、とても通行は出來ないと云ふので一先づ後返りして、午後二時頃ヤットの思ひで歸りついた。

艦載飛行機一臺が低空飛行をして居るのが見える。かすかに日の丸の印が見える。間もなく西南の雲の中にウーンウーンと云ふウナリが聞えて來たと同時に、ドーンと耳をつんざく一發の大砲の音をキツカケにしてタンタンタン、ドーンドーン、パンパン、ドドドドドーンと一齊射擊の

音が聞える。雲の上高く十機ばかりの敵機が姿を見せたかと思ふと、今の射擊で列を亂して北の方と東の方へ分かれ分かれに飛んで逃げる。折柄二臺の艦載機が飛び出して來た。一臺は北へ一臺は東へ敵機を追うて勇敢に突進する。數臺の敵機の中へ一臺が飛び込んだ。始めて見る空中戰、高射砲機關銃が全力を擧げて高空射擊をして居る。危險だ!! 敵數機の中にたゞ一臺で飛び込んで行く勇敢さ!! 見て居る私等の手には汗が玉のやうに流れる。

快速を利用して高く〳〵密雲の彼方に長蛇は逃れ去つた。然し此時已に一臺の敵機を見事打ち落したことが翌日發表された。東に敵機を追うた一臺は、敵機が浦東の石油タンクに一彈を投じて黑煙天に沖する時、非常な速力で敵機に迫つたが惜しや彼もスピードを出して遂に逸走し去つた。一度北に消えた敵機の中の一機が再び東部の空に姿を現はしてルナパーク跡、東部小學校前、商業學校前、公大第一廠、上海紡織第三工場等に爆彈投下を行つて逃げ去つた。

始めて見る敵機の襲來、それを迎へ打つ高射砲機關銃の耳を聾するばかりの響と、高空の敵機近かく破裂する砲彈の響が手に汗を握らせた。これが今事變に於ける第一次の敵の空襲であつて、私が味うた最初の恐怖であつた。

今夜再び空襲がある、と云ふ噂さが傳へられ、各自避難の場所を求めた。この家では近かくにある工部局楡林路警察の一室に一部が避難した。今夜のニュースで購買組合、內山書店は共に黑

煙濛々として目下燃燒中であると報じた。然かし幸ひにこの火災は私の店よりも遙かに遠い場所であつたことが後に判明した。恐怖の一夜は明けた。雨と風との交響樂の中を虹口の店員の避難所へ立寄つて郵船會社迄行く。この日蘇州河の各橋は閉鎖されてたゞ一つガーデンブリッチだけが租界の交通路となつて居た。

臨時船樂洋丸で、いよ〳〵病妻を歸國せしめることに決定して、雨の降る中をたゞ一枚より持たないシヤツのまゝでビショヌレになつて多くの支那人の中を掻き分けてガーデンブリッチ迄來ると、此處は工部局巡査及び日本陸戰隊員が嚴重に警戒して居て呉れる。

『日本人です』(この一語は夜でも晝でも吾等の守り本尊である)と一聲かけて虹口に向つて橋を渡る。同じ共同租界でありながら蘇州河以南の舊英租界は人で埋まつて居る。だから十四日の爆彈でカセイホテル前、大世界前等で英米人支那人等數百人の死傷者は出たのである。ガーデンブリッヂからエドワード路の平和記念塔迄の間、アノ廣ろいバンドに出て居る支那人の數は恐らくは何十萬であつたらうか。全く人で埋つて居たのである。ソレにひきかへて蘇州河以北の舊米國租界は、これは又何んたる淋しさであらうか。鬼氣人に迫る死るせ街虹口である。

私は無量の感慨を抱いて共和里の避難所迄つき、賴んで置いた自動車に乘つて平凉路へと向つた。この方向も悉く店は閉めて、ヴロードウエー路に避難する人の流れが、沈默に傳へて居るの

が見えるだけである。涯山碼頭迄來るとモウ人の影もチラホラである。平凉路の通りは遠く迄見透しがつく。マーケット近かく迄來た時に行く先に群衆が見え、この方へ四方から走つて行く男女が見える。何か事があるに相違ない。こんな中へ自動車を乘り入れたら危險があるのだ。私は運轉手に路を變へるやうにと注意した。馴れた運轉手は直に前輪を横町へと曲げて居るのであつた。

歸りついて二階の窓から見て居ると、工部局の赤塗の非常用自動車が三臺走つて行く、オートバイが走る。支那人巡査が自轉車で列をなして驅けつける。群衆のワメキが聞えて來た。大方巡査が群衆を追ひ散らして居るのであらう。バケツに米を入れて提げて來る老人がある、メリケン粉の袋を擔いで來る若者がある、麻袋を二人で引ずるやうにして來るのがある、あゝ米屋の襲擊であつたのだナと解つた。

群衆が散じた頃、三人の男が工部局警察の方へ支那人巡捕にひつぱられて行くのが見えた。食料品の盜みに對し無意識的に寛大な支那人心理は遂に飢饉の時の食料品の掠奪を罪にしない習慣迄生んで居るのである。今次上海事變は全くの其日暮らしをして居る、支那の下層の人々をして、遂に飢饉に迄追ひつめた。其處に來るものは食料騷ぎであるのは當然である。引張られて三人も、大方二つ三つ肩でも打たれるのが落ちであらう。

街は又淋しくなつた。それでも時々軍用オートバイやトラックがシュウ〳〵言はせて走つて居る。

樂洋丸は十五日午後七時に入港して翌日未明の出帆と云ふので、私共は形ばかりでも乘船準備をした。タオル、齒磨、ブラシ、悉くK夫人が氣をつけて呉れた。準備は出來たが本船の入港は明朝になつたので又一夜を厄介になつた。今夜は比較的靜かであつたが、未明頃から砲聲が聞えて來た。夜が明けて久し振りに青空が見えた。風も凪いだ、此分なら航海は大丈夫。

郵船會社へ電話すると、本船は今朝七時入港しました。九時から御乘船を願ひます。お荷物は苦力（勞働者）が居りませんから御自分で處理して頂くより方法がありません、そのおつもりで願ひますと云ふ。

今次の事變中最も嬉しかつた事は、上海の電話が全部自動式になつて居つた事である。私の店が燒けたと云ふニュースの時にも、早速私は誰も居ない店へ電話をかけて見た。呼出しベルの鳴つて居るのがよくわかる。あゝ未だ店は燒けては居ないのだと分る。それからは友人の宅や店へも度々この電話で其後の安否を知ることが出來た。

やがて心盡くしの朝食に舌鼓を打つて、先づ荷物の積込みに大連汽船黃浦碼頭に繫がれた樂洋丸へと自動車を走らせた。

實は私の病妻は三ケ月前から私の家に來て居る岡田女史に附添うて貰うて歸國させるつもりであつた處、ドクターからの注意で急に私も附添ふ事になつたのである。そこで今日はこのK洋行の店員の妻子が二た組乘船する事になつて同勢八人となつた。

本船へ上つた刹那に、非常に近く耳をつんざく大砲の一發を聞いた。又一發又一發とつづいて聞える。本船の反對側に繫留されて居る××××が浦東方面に昨日から進出して來た敵に對して砲擊を加へて居るのだと云ふ。荷物は若い人々に擔いで貰うて14號の室に入つた。私共一行の行李やフトン包が未だそのままになつて居る。下船して數人の若い人々の手を借りて、荷物の積み込みを始めた。見も知らぬ人々がどん〳〵とやつて來て手を貸して呉れる。日本人だと云ふ意識が、今更らのやうに確かになる。外國へ出て日本人と云ふ意識がハツキリするとよく云ふが、日本に居る時は洋畫專門の大家であつた人が、洋畫の本場へ旅行してから日本畫を書くやうになる心理と同じではあるまいか。

一度家へ引き歸り一行を連れて二臺の自動車に分乘して、居殘る友の一家に後髮ひかれつゝ見送られて出發した。やがて本船についた。どうかと案じた長いタラップも緊張のためか病妻は安安と上つて船室に入つて呉れたので、私の不安も、ヤレ〳〵と胸なで下ろすことが出來た。

乘船する避難者を積んだトラックが、後から後からとやつて來る。陸戰隊員や自警團員が武裝

して警備して居る。その大部分が婦人と子供であるために混雜は一層である。

折柄敵機數臺がウナリを立てゝ上空に襲來した。碇泊中の我が軍艦からドンドンドン、タンタンタン、パンパンと高空目がけての射擊が始まつた。その物凄さ!! 船客係りはサジを拋げた。切符のあるも無いもない。兎に角無暗矢多羅に乘船させた。午後一時出帆の少し前に紡績聯合會の堤さんが杭州領事松村君を探がして居られた。何んの要事か知らないが急用らしいので探がして上げた。見つかつたので事務長の室に待つて居る堤さんの處へ同行した。

堤さんが內山君は何處へ……と訊ねるので私は病妻を送つて神戸迄と云ふと、丁度幸ひだ是非お賴みする。此船にはひき上げの婦人子供が約千人乘船して居る。實は郵船會社から民團が借りた形式になつて三等長崎行十元門司行十一元神戸行十三元と云ふ割引切符を民團が發行する事にした。然し何分にも急速の事とて充分其意味が徹底して居ない。乘船に際しても民團が發行した乘船證明書を持つて居る人だけと云ふつもりであつたが、先刻からの空襲でそれがメチヤ〳〵になつて了つた。そこで杉村さんを主任になつて頂いて君とお二人で船中で此等の民團事務を全部處理して貰ひたいとの依賴である。彼れ此れ云うて居る時ではない、よろしいと引受けて了つた。堤さんは必要の書類を引渡して下さつた。

ジャンジャンと出帆を知らせるドラが鳴る。船は靜かに碼頭を離れた。二隻の軍艦に護備され

て下江した。吳淞附近で數發の射擊を受けたが、何事もなく船は黃浦江から揚子江の本流へと進んだ。多くの×××が此處に投錨して居るのを見た。

私共は民團事務を開始した。船賃の受取り、領事館證明の發給、船賃の立替、上陸地からの乘車賃の立替と云ふやうな私としては前代未聞の事務であつたが、同文書院學生や外に熱心な二三人のお手傳ひがあつて長崎迄に大體が片づいた。乘客數は千五百〇一人であつた。船中二日颱風の後の大ウネリのために流石の大船もグラリグラリと搖れ、加ふるに暑熱の烈しいのと、船室でない船艙につめこまれたのとで乘客は丸でヘトヘトである。子供は乳を求めるが母は頭さへも上らない。コンデンスミルクの配給をして貰ふ。見る見る函にミルクが出拂ひになつて了つた。食事は一二三等共長崎迄は平等にニギリ飯の一點張りである。

十八日朝、長崎檢疫所着、檢疫官が乘船され種痘のしてない者は種痘しなければ上陸させないと云ふ。トウトウ大多數が種痘してない事が解つて、船中で種痘が始まつた。岸壁に橫づけされる頃にはそれも濟んだ。上陸が始まり長崎縣廳からは、避難者に對して出來るだけの便利を計るから兎に角、驛前の大テント迄行つて吳れとのことで、一同はとりあへず上陸して、色々の慰問や歡待を受け、午後二時頃には大テントも全く空らになつて終つた。

船中では一人赤ちやんが生れたと云ふので赤飯のおにぎりが一度出た。又一人產氣づいたと云

ふので、長崎救護班より直ぐ擔架で產婦を下船させて病院へ引取つて下さつた。ただお氣の毒に堪へなかつた事は門司上りの一婦人が、六歲の子供をつれて上海をやつとの思ひで脫れ、長崎迄來ながら此處で不慮の事で空しくこの女兒を黃泉に送つた事である。

長崎上陸は約七百人の豫定であつたのが實際には千人の人が此處で上陸して陸行したので、船中は非常に樂くになつた。門司上りは六十二人の豫定であり、極めて安醉な航海を續けて翌十九日朝門司に投錨した。

出帆が明日の午前十一時であると云ふので此處でも上陸者は豫定以上になつて、百人あつた。船長が乘客の心中を察して出帆を午後八時に變更して下さつたのであるが、イザ出帆と云ふ時に本船のスクリューがブイの鎖を卷き込んだと云ふので、翌日午前九時の出帆になつた。しかしながらそのために瀨戸內海の美しさを滿喫することが出來た事は又一つの感謝であつた。

二十一日午前七時、大阪築港三井棧橋に繫船され、大阪府社會課、大阪市役所から多くの方々がお出迎へ下さつた。此處でも婦人會や靑年團の盡力で非常な歡待と慰問を受け、三百七十人の上陸者があつた。種痘は船中で全部して貰うたので、面倒もなく濟んだ。私共の一行も一先づ此處で上陸した。出迎への親戚友人のお世話で無事に落ちつく事が出來、私は二十二日更らに神戸に出張して、大阪から廻航される樂洋丸を待ち受けた。入港が非常に遲れて午後四時になつた。

此處での上陸者は僅かに十三人であつたが、此中に二家族の非常に氣の毒な人々があつた。しかし御親切にも全部兵庫縣社會課で御引受け下さつたので、これで全く私の責任が解除された。

人と云ふ字は持ちつ持たれつであるとか聞いて居るが、實際だ。お互ひに助け合はなければいけない、と云ふことをしみじみと體驗した。避難の人々もよく辛抱して下さつた。船の方々もよくお助け下さつた。お手傳ひして下さつた方々もよく働らいて下さつた。長崎門司大阪神戸のお役所の方々、色々の團體や會の方もよく御盡力下さつた。私は此文を終るに當つて心からなるお禮を申上げます。私の眼は今涙で曇つて居ります。ありがたう御座いました。

詩の對話

N氏　支那の將來はどうなるでせうか。

L氏　支那の將來にはアラビヤの沙漠が見える。それ故に私は戰ふ。

N氏　日華の親善は出來るでせうか。

L氏　日本人がモツト個人的に物言ふことが出來るやうになつたら。

N氏　今日の支那の政治家と軍人とが到底民衆を安んずる力がないとしたら、いつそのこと國防と政治とを印度が英國にまかせて居るやうにしたらどうでせうか。

L氏

そこ迄行けば感情の問題です。同じ財産を無くするなら强盜に奪られるよりは馬鹿息子に使はれた方がよい、同じ殺されるなら自國の人の手に殺されたい。

一九三五年の秋の或る日、靜かな室で二人の詩人は語る。私は只だ恍惚と聽いた。それはそのまゝ詩の對話であつた。

魯迅先生と版畫

東洋に於ける唯一の世界的文豪と云はれた周樹人卽ち魯迅先生は、文化のあらゆる方面にその力を使うて居られたやうであつた。

魯迅先生が蒐集して居られた漢代の石刷は非常に澤山であつた。上海に持つて居られただけでも大きな柳行李に一ぱい押込んであつた。北京のお宅にはもつと澤山あるとのことであつた。全部を整理して寫眞版にして見たいが、何分隨分大形のものがあるため、寫眞に取るやうにするのさへなか〳〵困難であるからと、いつも延び〳〵になつて居つた。現在どうなつて居るか斯學のため誠に惜しいことだと思ふ。キツト〳〵あの中には非常に參考になるものが澤山あるに違ひないと思ふと、埋れ木にして置くのが一層惜しくなる。どうか散逸しないやうにと祈つて居る。

先生は又新興版畫（或は不適當な言葉であるかも知らんが、支那には非常に立派な古版畫が細細ながらも、今日も尙ほ存在するから、それに對して現在流行して居る獨逸とかロシヤとかの風の版畫を私は新興と呼び度くてつけて居るのである）に對して、大きな關心を持つて居られたので、遠く獨逸、佛蘭西、英國、露西亞、日本などの（日本のは浮世繪にも關心を持つて居られた）

作品を非常に澤山に蒐集して居られた。中でも獨逸と露西亞の物が一番多くあつた。それは集められる便利と云ふこともあつたであらう。又其外に色々の關係からさうなつたのであらうと思ふが、獨逸流のあの非常に粗野な、そして大地を踏みしめたやうな確かさに對して、露西亞流の纖細な美しい線の畫は、故意か偶然か知らんが先生の兩面を遺憾なくあらはしてゐると私は思ふ。

何時も畫が來ると見せて下さる。私もいつか版畫に對して、一種の面白味を感じるやうになつた。或る日私は先生に、

『私は先生の集めて居られる版畫を人々に見せ度いと思ひますから、私にお貸し下さいませんか。一つ版畫展覽會を開らきますから』

と話したところが、よろしい、それでは選んでチヤンと額椽をつけて置きませうと云うて下さつたので、早速小さいが世界版畫の展覽會を開く計畫をした。

丁度其頃私は北四川路の狄思威路角の上海購買組合の二階を借りて、日本語の夜學校をやつて居つたので、その教室も會場にあてることにした。先生は獨逸と露西亞の版畫を大小併せて七十枚(?)ばかりチヤンと額に納めて番號をつけて、國名と作者名を原語と漢文とで書いて下さつたので、それを目錄として印刷した。確か土曜と日曜の二日間だけであつたと思ふ。

支那に於いてはほんどの第一次版畫展覽會と云ふものであつた。其頃上海には美術學校と云ふ

日本人の餘得とは性質が違つて居る。純然たる勞力の報酬である。其事が解つて來ると、アーさうかと極くあつさりと片附くのであるが、支那の習慣と云ふものを知らんと、憤慨したり怒つたりしなくてもよい處で、無暗に憤慨して見たり怒つたりすることがある。其癖憤慨も激怒も先方には一向何んの意味だか解らんで、日本人と云ふ者は妙な怒りつぽい人間だ位にしか通じないに至つては、遂にお笑ひ草である。

私は或時商用で、西湖に二人で五日泊つた。馴染のボーイ（茶房）に二元やつたら、謝々と言つて喜んで居た。次ぎに私が正月の逃避行に、家内と二人で三日泊つた。歸りに酒錢を二元やつた。商用の時は五日で二元であつたから、今日は三日で二元だから、キツト喜ぶであらうと思ふと、これはしたり喜ぶどころのことでなく、これでは少ないからモツト呉れと言ふ。支那と云ふ處は奇怪至極の處である、お客である吾々の行動が、茶房の酒錢に影響するのである。商用であると遊びであると、それは何にも茶房に關係すべき筈ではない。それはお客である吾人の自由である可き筈である。然るに商用と遊びとその行動によつて茶房の酒錢が高くなつたり、安かつたりする。實に怪しからんと青筋たてるよりも靜かに考へることだ。何か知らん其處には暗示があるやうだ。矢張り生活が實際に則して居るのが、私にはあり〳〵と見える。それは私だけであらうか。

上海漫語（その九）

上海其他の支那に生活して居る者が、相當苦るしめられて居ることの一つは、アミーバ赤痢である。而も一度罹つたが最後、恐らく全快は不可能と云うてよいのである。

妙な事には、このアミーバ赤痢で苦しむ者は、殆ど日本人だけらしいのだ。四億の支那人は一向平氣で居るやうである。

最近はアミーバの豫防注射迄出來て居るやうであるが、私は必ずしも注射藥や豫防注射を悪るいとは云はんが、かうした注射又は豫防注射によつて、アミーバ赤痢からの苦るしみを免からしめる努力と共に、アミーバ赤痢菌が日本人の腹中に住居しても差支へない方法を考へる可きではあるまいか。

私は今日の日本醫術の發達は非常に喜ぶが、どうかすると、この方面の研究が後れて居ると思ふ。病源が判明すると共に、病菌を撲滅すると云ふ方法も必ずせなければならんが、その病菌と同居しても一向苦痛を感じない身體になると云ふことである。アミーバ赤痢の如き已に支那人は此菌と同居して居るにかゝはらず、一向苦痛を訴へないやうである。（無論除外例はあるが）何故

支那人は苦痛でないのか、アミーバ菌は支那人の體内では何故活動出來ないのか、それとも活動しないのか。この點に研究は進められる可きではないかと思ふ。

一體衣食住と云ふものは、各國各民族の間で色々違つて居るものであるが、その最大の原因は恐らくは生活環境の相違と云ふことであると私は思ふ。而もそれは各人がその生活環境に順應した結果ではないかと思うて居る。その生活環境を無視しての生活法は、丁度暴風に向つて船を走らせるやうなものではないかと思ふ。かういふ風に考へて來ると、支那在住の日本人が、アミーバ赤痢に苦しむ一面に私は日本人の生活環境無視があると思ふ。

極く簡單な話であるが、日本人がお茶を呑む、支那人もお茶を呑む、然し其量に於いて日本人の方が少ないと思ふ。お茶の量はその本質的に云ふのではなくて、水量で云ふのであるが、支那人の方が遙かに多量に呑むやうである。私自身でも支那に居る時と日本内地へ歸つて來てからとでは、其量が非常に違ふ。なぜ支那ではお茶を多量に呑むのであらうか。それは日本の空氣が濕度が多く支那の空氣の方が乾燥して居るが爲めであらうと私は思ふ。

日本人が食物に油を使ふことが少くて、支那人が油を呑む程使用するのは何故であらうか。ただ好ききらひと云ふことだけではない。あれは必ず自然の要求であると思ふ。支那人の身體が油を要求するのであらう。その生活の自然環境が油を體内に入れしめるのであつて、それが自然環

境に順應したことになるのであらうと私は思ふ。

日本人と支那人とでは、同じ上海に生活して居つても日常生活が非常に違つて居る。朝起きた時から日本人は多く水で洗面する（上海に居住して居る日本人は今日は多く支那人式になつて來たが、それでも夏は矢張り水の洗面が相當多いやうである）が、支那人は必ずお湯で洗面する。日本人は冷飯を平氣で食べる、中にはわざ〳〵冷たくして迄食べる、おすしはさうである。處が支那人は冷飯は殆ど食べない、熱い御飯でないと食べない。從つて、どんなまぐろのニギリでも食べない。たゞ冷飯を食べないだけでなくて、生物は多く食べない習慣である。然し決して食べないと云ふのではない。生物も隨分食べはするが、大體に於いて煮た物その煮方が多く油で煮た物を食べて居る。生物を食べる時、假令ば鹽菜（漬物のこと）を食べるには、必ず胡麻の油をかけて食べる。其他生の蝦とか貝とか蟹とか野菜でもきつと胡麻の油をかけて食べる。支那人は生魚は食はないと云はれて居つたが、そんなことはない。除外例ではあるが、杭州料理や廣東料理の中には魚生と云うて、お刺身がある。然しこの魚生も胡麻の油がかけてある。

かうした點から考へると、私は上海在留の日本人が、アミーバ赤痢菌の活動による苦痛は、或はその體内に油が少ないためではないかと思うたので、先年三回程自分で試して見た。私はアミーバ赤痢菌とは無論同居者であるが、時々冷えると彼れが活動を始めることがある（自分で冷え

ると起ると思ふだけだ）其時に下劑をかけて腹を空らにして置いて、支那料理を食べる。さうするとそれきりで治つて終ふ。こんなことは實は私一人の三度や五度の經驗で決定するのでは無論ないが、或はアミーバ征伐の何等かの手がかりになりはせんかと思ふまでであるが、兎に角衣と住との關係もあるかも知らんが、腹の中のことだから食の問題が一番關係が多いと思ふので、食物で比較して見ると其處に油の食用に非常な差がある。或はアミーバ菌は油に對する活動が弱いのではないかと思ふのである。

別にアミーバ赤痢の治療として書いたのではないが、どうも上海在住の日本人の生活の多くが環境に順應した生活をして居る人が少なくて、反對に環境無視の生活が多いやうに思はれる。それは恰度暴風に向つて舟を走らせてゐるやうなものではあるまいか。

私一人の杞憂だけであつたら幸ひであるが——。

國共合作への私見

國民黨が、蔣介石を主腦とする政權は、數年前卽ち滿洲の獨立前迄は、南京を中心とする三、四省に限られて居つたものであつて、やゝもすれば反國民黨又は反蔣介石運動が擡頭しかねまじき狀態にあつたのである。而してこの國民黨政權に對して極めて明確にその反國民黨的旗色を飜へして居つたのは言ふ迄もなく、江西省瑞金に政府を持つ處の中華ソヴェット政府の主なる中國共產黨そのものであつた。

然しながらこの反國民黨的反蔣介石の中華ソヴェット政府は、その半面に於いて反つて國民黨の蔣政權の擴大を非常に援助したものである。例へばソヴェット政府が一の事實を十に宣傳すれば、その宣傳を國民政府は直ちに十五又は二十に擴大して宣傳するのである。國民政府は何故にソンナことをするのであらうか、これこそ昔から支那で行はれる逆手の政策である。敵をして生かさず殺さずその半殺しの狀態を利用して自らを有利に導くこれ大政治家の手腕である。殘念ながらこの大手腕を國民政府が持つて居つたのである。そしてこの生かさず殺さずの方法を中華ソヴェット政府に對して施したのである。

舊軍閥・舊政治・舊習慣に全的反對を標榜して立てる中華ソヴェット政府は、自分等の宣傳が然く逆手政策に利用されて居るとは全く知らなかつたであらう。彼等はたゞ赤色ロシヤ模倣の宣傳に熱中したのであつた。中華ソヴェット政府のロシヤ模倣宣傳は、それがより盛んなればなるだけ國民政府の逆手政策はそれに正比例して强烈となつたのである。一體その逆手政策の効果をもたらすのであらうか。それは國民政府をして紅軍討伐の軍資金と、國民政府直屬軍の强大資金の調達とを、非常に容易ならしめたのである。

然らばその方法は如何と云ふと、原來共産黨を恐れるものは多くの財産を持つて居る所謂資産家連中である。この又資産家連中こそ國民政府が軍資金を調達する唯一の目標である。このツボをチヤンと握つて居るのが國民政府であつたから堪らない。共産黨の擴大された宣傳を尙一層國民政府が擴大してその恐しさを彼等資産家に見せるのであるから、資産家たるもの身の毛をよだてゝ恐れを爲したのである。卽ち、恐しい彼等を討伐するには、第一に必要なものは軍資金である。さあ公債を買へ公債を買へと幾度でも繰り返へして公債を買はされたのである。共産軍は誠に恐しいものである、彼を討伐の軍資金であるからサア公債を買へと云ふのである。資産家たるもの遂に逃がるゝ道はないのである。イヤもオ、もなく公債に應募させられたのである。

卽ち國民政府に必要なものは、中華ソヴェット政府の宣傳文であつたのである。そこで國民政

府はいつ迄も、いつ迄も、宣傳文の發行可能の程度に共産軍を壓迫して居つて、決してその徹底的討伐はせなかつたのである。此處迄考へて來ると國民政府が今日の統一を造り出すに對して、共産黨の貢獻も亦た大であることを忘れてはならぬと思ふ。國民政府は、紅軍卽ち中華ソヴェット共産軍のこの貢獻を思ふが故に、彼等が遂に瑞金に止まるを得ざるに至つて、瑞金放棄を宣言して逃走せんとするや、豫め示すに逃走の道筋を以つてしたのである（私は某氏から未だ彼等が瑞金を出發せざるに、早くもソヴェット政府は江西より湖南に入り、貴州から四川を横ぎつて甘肅を通過し、寧夏から陝西に入ると云ふ豫定通路と聞かされたのである。その某氏は南京政府要人に非常に親しい友人を持つて居る人である）。卽ちソヴェット共産軍は、恰も修學旅行でもするが如くに、樂々と豫定の道筋を行軍したとの事である。その落ち行くソヴェット共産軍の後を追うて、丸で監督でもして行くが如き態度で、不則不離の行軍をしたのが國民政府の紅匪討伐軍であつたのである。

ソヴェット共産軍は、遂に陝西省延安（今の膚施（フス））に入つて落ちついたのである。それは豫定の目的地であつたか又は偶然であつたか知らんが、兎に角トンデもない場所に落ちついたものであると私は思うた。

私は、當時共産軍が此處でこのまゝに膠着したならば、彼等は必らず物資の缺乏と共に全般的

の窮乏に遭遇するであらう。そしてその結果としてキツト非常な危機に直面するであらう。或は遂に救ふ可からざる崩壞に瀕するのではないかと思うたのである。そこで私は其後の推移を注意して見て居つたのである。私のこの考へはこの延安と云ふ地が、後方は大ゴビの沙漠であることと、その前面は國民政府の西北巢匪軍が討伐の陣を敷いて居ることからの考へであつた。果然私のこの考へを裏書きしたのはソヴェット共產軍を此處迫追ひ込んだ蔣介石が、これで巢匪工作は一段落を告げたものとして、一先づ南京へ凱旋したことである。

而して張學良を總司令とする西北巢匪軍は、西安に本陣を据ゑて共產軍と相對峙して、今日に及んだのであるが、天然の巢匪軍たる沙漠と人爲的巢匪軍に狹擊されて居る共產軍は、恰も鹽か砂糖が溶けるやうにジリ〳〵〳〵と水と熱とが加へられたのである。其處に押し寄せて來るものは當然全般的窮乏と云ふことであつた。それには三年の日子が費やされたのであつた。無論其間、共產軍は巢匪軍に向つて昆蟲的喰ひ込み戰術を用ひて對抗したのである。西北巢匪軍もそのためには相當苦しめられもしたに相違ないが、然し孤立無援の共產軍（私は中華ソヴェット共產軍は、ロシヤの共產軍とは無關係又は極めて薄弱なつながりがあつた位のもので、大體無關係と云うて差支へはないと思ふ。何故なれば、新疆省の廸化府の中國郵政局行の局員を上海で試驗した事があつた。其時の話に、露西亞語の話せる者は非常に便利であると聞いて居つた。然れば

少くとも同地には相當ロシヤ語が使用されて居ることが解る。されば萬一支那の共產軍が實際ロシヤと關係があつたとしたら、甘肅省を横ぎつて現在の地點に向つて東に來るよりも、寧ろ西へ向つて廸化府に入る可き筈ではないかと思ふ。又假りに百歩を讓つて東行して北の方庫倫あたりで、ロシヤ共產軍との連絡を欲したものとすれば、何故三ケ年の日子をその方面と無連絡のまゝ過したかと云ふ不可解が出て來るのである。私はかうした理由で、支那共產軍は孤立無援であると云ふのである）は、十年來の戰疲と、最近攻め寄せて來た窮乏とで、知ず〳〵全く鳴りを靜めて延安に膠着せしめられて居つたものであると思ふ。處が偶々昨年十二月十二日、西安に於いて西北巢匪軍總司令張學良の名によつて、反國民政府反蔣介石抗日卽時開戰と云ふ頗る物騷なる聲明が發せられると共に、國民政府軍事委員長蔣介石は、西安に於いてその家の子郎黨と共に監禁せられたと云ふ事が、中外人の耳を驚かしたのである。此時に當つて、蔣介石の生死兩說が熾んに傳へられた。そして日本の大體は死亡說であつて、次ぎに來るものは國民の崩解と云ふ見透しであつた。その結果として、支那の紙幣は當然反古になると云ふ說が日本側を支配して居つたやうであつた。然し經濟的立場の若かい人々は、生死相半ばしたやうであつたが、例へ死んで居つても今日の國民政府は最早蔣介石政府ではなくて、實に相當確かな組織の上に立つて居る國民政府であるから、決して崩壞はせないと云ふ意見であつた。だが、私は蔣介石は生きて居ると考へ

た。それはこの監禁を矢張り一種の紙票と見たからである。故にその肉票を殺して終つては目的の金が得られないから必ず生きて居ると見たのである。又假に蔣介石が死亡して居るとしても、國民政府は決して崩壞せないと見た。それは各國の武力的壓迫の手がゆるまない限り、斷じて崩壞はせない。從つてこの發行權力の不崩壞は、その紙幣をして反古たらしめる事はないと考へたのである。

私は國民政府が蔣介石を主腦として支那統一を企てしより以來、知らず〳〵ではあつたが、その統一を非常に援助したものは各國であると思ふ。その事は支那の人々の間にもよく言はれて居つたことである。若しも各國の武力的壓迫がなかつたならば、兩廣の妥協もあんなに容易には出來得なかつたであらう。支那はあの兩廣問題を最後として、先づ統一されたのである。もう當分反國民政府運動も反蔣介石運動も起り得ないであらうとは多くの支那人間の定說であつた。一度西安に監禁された蔣介石が、如何なる方法手段によつて解放されたか、實際は私は知らないが、私の想像にして許されるならば、これが解放に當つては、舊保定軍官學校々長であつた。蔣方震（彼は歐米漫遊より十一月三十日に歸つて、十二月十二日在西安の蔣介石に報告のため、洛陽から天大楨と共に飛行機で西安に赴いて同時に監禁されたのである）の力が、非常に有効であつたと云ふことは、西安半月記が如何に蔣介石の名論卓說の効と書かれてあつても、又宋美齡が如何

にキリスト敎の御利益を說明しても亦、彼女の信仰を高調しても、宋子文の力であると書かれて居つても、それ等一切のものを尻目にかけてより以上に有効であつたものは、矢張り蔣方震其人の力であつたと思うて居る。而も蔣介石の身代金なるものは、想像以外の小額であらうことを思ふものである。

蔣介石は、十二月二十五日無事に放免せられて洛陽に歸つた。此時に一つの不可思議の一事が起つた。それは反逆の張本人張學良が責を負うて國民政府に待罪を申出づるため、蔣介石に隨伴して、同時に南京入りをしたことである。この一つの謎は、先般來張學良は蔣介石の鄕里なる浙江省奉仕に軟禁されて居ると云ふ流言と共に、實に不可思議の好一對である。

蔣介石西安監禁事件なるものは、それが例へ誰がやつたことであるとしても、兎に角國民政府の一大缺點の暴露であつたことは云ふ迄もない事であつた。此報を耳にして最も活潑に活動したものは、言ふ迄もなく、實に延安に膠着を餘儀なくされて居つた共產軍であつた。

共產軍は時到れりとばかりに國民政府に向つて聯合抗日戰線案を振りかざして妥協を申込んだのである。當時私は尙ほ上海に在住して居つたのであるが、例へその宣言と聲明とが如何なる文字と文章で綴られて居つても、一ケ條でも共產主義の本來の面目を放棄するやうなことがあつたら、それは共產軍の降伏的妥協であると考へたのである。

その反對に、國民政府にしては、その年來の主張である三民主義の一ケ條でも放棄するやうな事があつたら、それこそ國民政府が共產軍への降伏的妥協であると私は考へたのである。

然し妥協である以上、相方が同量の讓步をすることは當然のことであつて、それなしには不可能であるが、それは相方の力が相伯仲した時のことであつて、國共いづれか力に强弱のある場合は、その妥協面に現はれて來るところは、力の强い方は讓步の量が少しも無いか又はあつても非常に少ないに反して、力の弱い方の讓步は必ずより多い讓步をせなければならんことは言ふまでもないことである。詰り國共いづれがより多く讓步して居るかと云ふことによつて相方の實力が判明する筈である。

西安事件を契機とする國共兩者の妥協は、漸く進んで確か今年初夏の頃と思ふが、遂に成立を告げたやうであつた。それと共に、延安方面への郵便の交通（何月何日から郵便物の取扱ひを開始すると云ふ布告はなかつたやうに思ふ?）が開らけたことによつて私はそれを知つた。其頃新聞は、熾んに周恩來の來滬とか南京入りとか云ふことを報じて居つたが、恐らくそれは事實であつたと思はれる。然し成立した妥協がどの程度のものであつたかと云ふことは、私共は一向知ることが出來なかつたと云ふのは、少しく妥協條件も聲明も宣言も發表せられなかつたからである。

而して七月始め、蘆溝橋に端を發した華北事變は、追々と擴大されて行く。八月十三日には上海に於いて大山大尉事件が原因となつて（イヤ其頃已に支那側は充分抗日戰の準備をして居つたものと見えて、この明らかな大山大尉事件の外交的解決を彼から放棄したのであるから、今次の上海事變は明らかに支那側の挑戰である）、再度の上海事變が爆發した。此等の大事變の進行中、九月二十三日上海電報は中國共產黨の宣言なるものを傳へた。曰く（東京朝日新聞に因る）、

(1) 中國共產黨は、中國再建設には孫總理の三民主義は不可缺ものであることを認め、三民主義の完全なる實現のために、黨としての最善を盡くすべきを誓ふ。

2) 中國共產黨は、(イ)暴力による國民政府の轉覆。(ロ)共產主義思想の宣傳。(ハ)土地の强制沒收の三者を目的とする總べての方策措置をこゝに廢棄することに決定した。

(3) 中國共產黨は、中國ソヴエット政府を解消し、中國の行政的諸機關を統一する意圖の下に、中國のために民主的形式の政府樹立を支持する。

(4) 中國共產黨は、紅軍を解散し、その麾下に屬する軍隊を國民革命軍に改編。國民政府軍事委員會の指揮下に屬せしめる右革命軍は、軍事委員會の命令の下に前線に於いて、國防事務に服する用意あり。

と云ふのである。これがその全文であるか又は一部分であるか知らないが、暫らくこれをその全

文として取扱ふことゝする。(1)から(4)までの全文の中に(1)の末句黨としての最善を盡す可きを誓ふと云ふ中に、何程かの面目を殘せる外全般的に讓歩せることは判然として居るではないか。この文面では共產黨が如何に辯明するとも、最早彼等が共產主義を放棄して、國民政府に身賣したと云はれても答ふる言葉はあるまいと思ふ。

更らに二十四日、大阪毎日新聞に因る上海電報は、中國共產黨の宣言に對して、蔣介石の聲明が傳へられて居る。曰く、

共產黨の聲明は輝かしき民族意識の勝利である。國民政府は國民黨指導の下に各黨各派に對し、救國の實を擧ぐ可くあらゆる機會を提供する用意を有する。共產黨また今回の聲明に從ひ、我等の同志として抗日救國に合作せられん事を望む。

と云ふのである。これ又それが全文なるか一部分なるか不明であるも、これを全文として取扱ふ事とする。共產黨員にこれをたゞせばこれ共國兩黨合作の對外的辭令のみ。その實際に於いては全く共產黨が國民黨を合併したのであると云ふであらう。これを國民黨員にたゞせば、全文の示す通り明らかに共產黨を國民黨が併合したのであると云ふであらう。

これを要するに、兩者いづれにしても、自己に有利なやうに自己の立場に都合のよい辯明をするであらうことは、間違ひのないことである。而して吾等の判斷は、實に此處にかゝつて居るの

である。例へ如何なる理由と事情とが伏在するにせよ、一つの主義に立てる一黨が、他の一黨と合併する場合、無條件の合併にあらざる限り、其處には必ず程度には色々あつてもその主義を棄てなければならん者と、それを棄てさせる者とがある。その二つの立場こそその實力の强弱の尺である。今次中國共產黨がその主義を棄てゝ（あの宣言の文面から云ふと違ふと云はれるかも知れないが、然し私は違はないと思ふ）國民黨に合併する旨を宣言したのは、明らかに國民黨が、共產黨及び紅軍を解散することを條件として合併したものであると思ふ。然れば何れが强者的立場に立つ者であるかと云ふことは自ら判然として居る。

蔣介石はその聲明の第一語に於いて、

『共產黨の聲明は輝やかしき民族意識の勝利である』

と云うて居るところに、決定があると私は思ふ。

始めて延安に郵路が開らけた頃、同地にある中華文藝協會から版畫刀二組の注文があつた。又同地から古雜誌でも古本でもよいから至急に送つて呉れと云ふ注文があつた。其時の話に延安方面は全く物資が缺乏して居ると云ふ話をして居つた。私が且つて同方面が物資の缺乏に陷るであらうことを杞憂して居つたことが、今や事實となつたものであると私は思うた。尙ほその注文が古雜誌でも古本でもよいと云ふ文句によつて、金錢上にも非常な缺乏を見せて居る。されば今次

の妥協に當つても、決して噂されて居るやうな多額の身代金が渡つて居らんと私は思ふ（私は中華ソヴェット政府は、國民政府に身賣りしたと思ふが故に、敢へて身代金と云ふ）。

今一つにこれは、決して重要性を持つて居ると云ふわけではないが、一寸注意して見るも無駄ではないと思ふことは、今後共產黨の頭目連中が頭を揃へて國民政府部內の椅子に並ぶか、それともボツ〳〵と一人々々が就任するかと云ふ、つまり共產黨員の就任振りである。頭を揃へて就任するやうであれば、今次の妥協にも尙ほ相當の力が認められるが、萬一にも一人々々引き拔き的な就任をするやうな場合には、それは國民政府が拔本塞源的な方法を採るものであつて、全く共產黨が買ひ取られた一つの鐵證であると云うても差支へないと思ふのである。かく考へて來ると私は今次國共の合併は遂に中國共產黨の解消であると思ふのである。然しそれで完全に解消して終つたかと云ふと、決してさうではない。必ず其處には多少共不平分子がお粥の塊のやうに殘るものである。お粥の塊的殘留分子は將來又大を爲すやうなことがあるであらうが、然し大體に於いて今次の國共合併によつて、中國共產黨は一先づ解消し、その共產軍も亦た解散されたものであると見て差支へないと思ふのである。

然しながら此處に一つ注意せなければならんことは、各國の武力的壓迫が支那を追及することが非常に急なる場合、其處には且つて魯迅先生が言うたやうに、支那全民衆の飢餓戰線が展開す

るやうなことになりはせんか、私は杞憂に堪へないものがある。さうした時にお粥の塊的共產黨の殘留分子が再び活躍するのではないかと思ふ。いやその活躍は必ず此等飢餓軍を指揮するであらうと思ふのであるが、事其處に至る迄には、未だ〳〵幾多の變遷があるのは言ふを待たないのである。第一各國の武力的壓迫がどの程度で止まるものであるか、その止まつた後に如何なる政治が行はれるか、其處にも大きなものが殘されて居るのである。

私は今共產黨と共產軍と國民政府との惡因緣から、今次の妥協合併までに對する極めて貧弱な材料からの私見を書いて見たのである。又ソレを土臺として將來に對して一言及ほしたわけである。漫談より一歩も出たことのない門外漢である私の政黨談、矢張り一つの漫談に過ぎないものである。

西安の一幕

場所　上海漫談クラブの一室
時　一九三六年十二月十三日
人物　A　支那問題研究所長
　　B　著述家
　　C　〇〇〇調査部出張員
　　D　〇〇〇會社支店長
　　E　クラブ主任

話題は、昨日突發した西安に於ける蔣介石監禁問題が中心である。

E　そこで、明日の公債市場はドウなるかだネ。

C　無論大暴落だネ。

E　その下る値幅が、蔣介石の値打と云ふものか。

B　まあそんなものだネ。然し決して崩れないぞ。大暴落とか總崩れなんて事はないと思ふネ。

何んと云うても今日の政府の紙幣發行權力と云ふものが、非常に廣くなつて居るのだから、國民政府の經濟的基礎は崩壞するやうな事はないと思ふネ。

E　對外爲替はドウなるだらうか。

A　相當の影響は受けるであらうが、大影響はあるまいと思ふ。Bの說には僕は贊成するネ。

D　僕は、公債は無論暴落するし、爲替も大變動があるに違ひないから、恐らく支那銀行は明日は休業するだらうと思ふネ。

E　兎に角日本側の意見は、蔣介石は殺されて居ると云ふことに一致して居るやうだネ。それから出發して國民政府は倒れ、從つて支那の財政は破產するといふ結論まで引き出したやうだネ。

C　僕もさう思ふネ。蔣介石は無論殺されて居る。蔣なき後の國民政府は四離滅裂すると思ふネ。だから無論幣制は大破綻を來たして、紙幣は反古になるだらうと思ふネ。

A　例へ蔣介石は殺されて居つても、――僕は生きて居るだらうと思ふが――今日の國民政府は最早昔の國民政府ではない。蔣介石一人の政府ではない。今日の國民政府は立派な組織の上に立つて居るのであるから、蔣が殺ろされたからと云うてすぐ崩れると云ふやうなことは決して、ない。從つて公債が下落し、爲替が影響を受けるやうなことがあらうとも大丈夫と思ふ

ネ。僕等の若い者は大體かう云ふ意見であるのに、老人連は全く悲觀說であるが妙な對立だよ。

D　僕も大體悲觀說だネ。

B　僕は悲觀せないネ。これだけ大きな紙幣の發行權力の上に出來て居る經濟組織が、さう簡短に崩壞なんかするものぢやないよ。

E　蔣介石は殺されて居ると云ふ意見が多いやうだが、僕は西安事件を一幕と見て、その場面をかう書いて居るのだ——舞臺の西側には、蔣介石が監禁されて沈思默考して居る。その舞臺の東側の全く切り放なされた一軒の中には、張學良が大きな机にもたれて、聲明書を讀んで居る。楊虎城が横に立つて居る。後に若い將校が二人、興奮の面持ちで劍を振つて立つて居る。張學良がヤヤ艱ましい面色を見せる。二人の將校が楊虎城に早く〳〵と催促するので、彼も次第送りに總司令サ早く檢字をして下さい。とセキ立てる。そこで張學良はシブ〳〵檢字をして、拋げるやうに楊虎城に渡す。楊虎城は聲明書を受取つてホツトした態度で、二人の將校をつれて出て行く。廊下にも庭にも門にも嚴重に番兵が澤山居る。花道には多くの若かい將校達が、ガヤ〳〵と云ひながら楊虎城の歸りを待つて居ると云ふ場面だ。ネーつまり

學良も監禁サ。

B　それも一つの見方だネ。

C　そんな甘くドラマ的な事があるものかネ。

A　イヤ支那には案外そんな事があると思ふネ。

E　それから、例へ蔣介石が殺ろされて居つたとした處で、國民政府は斷じて瓦解するものではない。それは已に現實に見えて居るではないか。〇〇からの壓迫がかくも鮮やかに國内統一を完成させて居るのを見れば、この通りである。壓迫が嚴しいだけ統一は堅くなるものである。日本だけではないが、凡そ殉教史を讀めば一目瞭然ではないか。大きな權力が信仰を壓迫する時に、その壓迫の强さに比例して愈々信仰が堅くなり、更らに加へられる壓迫に對して遂に悲壯なる殉教者が出來るのであつて、壓迫が少ない時には決して殉教と云ふことはないのである。殉教は非常な壓迫に對して自己意志の統一が、いよ〳〵堅くなつて其處に發生する殺ろされても屈しない統一意志の結晶である。だから蔣介石が殉國すれば、それだけ國民政府の統一が堅くなることは火を見るよりも明らかである。つまり外部からの壓迫がいよいよ强ければ强いだけ支那の統一は堅固になる筈である。これを考へる時に決して國民政府は崩れないと云ふことが出來る。從つて幣制に何んの心配もない公債が、どんなに下落しても、爲替が如何に變動しても、それは一時的影響に過ぎないものであつて、決して悲觀すべ

きものではないと僕は思ふ。

翌日公債市場は開いた。遂に人氣は四元の棒下げを演じたので、立會停止となつた。各銀行は休業もせず、開業した日本金だけが動いた。而も買ひの一手なるが故に、一〇四圓の相場は一〇二圓迄上つた。然かしそれからは大變化はなかつた。英米の爲替は殆ど不變であつた。

やがて政府顧問ドナルド氏は、飛行機で西安一番乘りをして蔣介石の無事を傳へた。再び飛んで蔣鼎文が蔣介石の親書を携へて南京へ歸つた。支那新聞は全部蔣介石生存を載げたにもかゝはらず、日本側は依然として死亡説を唱へて生存説を芝居として冷笑したのである。更らに宋子文西安に飛ぶや、日本新聞は八千萬元の紙幣を携帶したと傳へられた。引き續いて宋美齡女史が飛んで、十二月二十五日には蔣介石は解放されて宋美齡と相携へ、張學良を從へて南京入りをした。張學良は待罪文を發表して宋子文邸に謹愼した。これで全支那は湧き立つて爆竹の音は耳を聾するばかりであつた。

空襲下の上海を脱れて

——停戰協定の區域内に居る保安隊の數が最近非常に增えた。保安隊は一人々々非常に爆發力の强い獨逸製の手榴彈を三個と、非常に巧妙を極めた小型の機關銃を懷に入れて居る。保安隊は兵舍を離れて民家に分宿して租界に接近して來た。保安隊はザンゴウを掘つた、鐵條網を張つて居る。陣地も構築して居る。保安隊の中に正規軍が出て來た——と云ふやうな話が毎日甲から乙へ乙かの丙へと洪水のやうに流れた。支那人避難者の群は流れのやうであつた。だが陸戰隊は極めて注意深かく、而も平然としてこれを見て居た。兵の外出も平常のやうであつた。突如として起つた大山大尉事件に對するあの正々堂々の態度は、未だ且つて見た事のない立派なものであつた。

然し事は遂に決裂した。それは勢ひの止むを得なかつたのであつたかもしれないが、私が非常に遺憾に思ふ事は、支那人一般民衆生活のモツトーとも云ふべき『窮すれば變じ、變ずれば通ずる』と云ふ詰まり行づまりと云ふものゝない人生哲學が、兪鴻鈞市長の若さから四億民衆の幸福の心臟とも云ふべき上海をワケもなく炎々たる坩堝の中に、たゝき込んだ愚かさである。

十三日午後四時半に領事館から、エキステンション在住邦人は速時租界内へ引上げるやうとの電話が來たので、私の通知すべき範圍の人々にスグ其旨を傳へた。然し一方自分達は前きの上海事變に採つた態度と同じやうに、店内に籠城するつもりで居た。處が砲彈に堪へられる點から云ふと店の建物は不適當であつたのと、丁度前年の事變に最後の籠城家屋として安全であつたラモスアパート（鐵筋コンクリートの建物）内に、十數年來寢たまゝの病人を抱いて居るS氏から電話で同じ籠城するなら、この建物へ來いとの事であつたので早速一時だけでも凌げる米など持つて一同は其處へと引越した。

若い者は部屋の準備を始めた。ベランダには日本人の住んで居る印に國旗を出した。

私はモ一度店へ引き返へして、店や住宅の戸締りを見て廻つた。鐵の網とウインド硝子との間には日本疊を一枚づゝ差し込んである。入口にも疊が立てかけてある。新居も舊居も何れもこれ以上ドウすることも出來ない事を見屆けて、籠城家屋にひき上げかけた時に五六人の正服をつけた領事館の巡査が大きな聲で『引上げて下さい。一人殘らず引上げて下さい。今トラックが來ますから一人も殘らないやうに引上げて下さい。』と叫ぶのであつた。

私を見て『この千愛里にはモウ日本人は居りませんか。』と尋ねられたので、『今はモウ一人も居りません。』と答へた。『貴方はドウするのですか。』と再び聞かれたので、『私共は向うのラモ

スアパートに籠城するつもりであります。』と云ふ言葉の終らぬさきに、『いけません、一人も殘つてはいけません。租界内への引上げ命令ですから一人殘らず引上げて下さい。』と云はれたので、『實はあのラモスアパートには動かせない病人がありまして、私共はそのS氏の部屋に籠城するのです。』と云うた處、『斷然いけません。私が行つて來ます。』と云うて巡査は走つて行つた。

丁度その時何を探がしに來たのか私共の家主の自動車が來たので、これを呼び止めて最後の引上げに備へた。アパートから巡査が自動車を持つて來い、と云ふのでスグその自動車を廻した。若い者達や皆んなが手傳つて病人を自動車に乘せた。

Mさんが私の爲に小型自動車を運轉して迎へに來て吳れた。病人を伴れて、S氏一家は虹口のK醫院に行かれることになり、私の店の一行は虹口の共和里内にあるK病院へ行くことにした。私はヤツト昨日病妻を避難させた平凉路のK洋行の住宅に避難した。

此處では若かい人々が盛んに荷造りをして居るので、二度ビツクリした。聞けば昨夜近くの東華紡績に支那軍が襲擊して來たのださうで、此處も決して安全地帶ではないらしい。實は前年の上海事變で絶對安全地帶であつたので、昨日病妻を避難させたのであつたが來て見るとこの騒ぎである。その間も絶えず砲聲が響く、豆を煎るやうな銃聲が聞える。それでも其夜は安心の高いびきで颱風さへも知らずに過ごした。

十四日Kの自動車に便乘してS銀行や郵船會社へ行く。S銀行の中で話して居ると十時半頃、突然文字通り百雷の一時に落ちたやうな一大音響がしたと同時に、流石の大建築もビリ〳〵ビリビリと震動した。居合はせた人々の顏色は一瞬にして蒼白になつた。外は人の雪崩だ。門衞の印度人は直ぐ門を締めて了つた。何んだらう〳〵と云ひ合つて居ると、今支那の飛行機が黃浦江上に姿を見せて爆彈投下をやつたので、日本軍艦から全艦の總射擊をしたのだと云ふ。その知らせがあつてヤレヤレと胸をなで下ろしたが、街は何にも知らぬ人々の右に左に避難する自動車、トラック、黃包車で渦を卷いて居る。

郵船會社へ船を決めに行くと、臨時船の榮洋丸が十六七日頃に出るが、船室の有無は明日にならないと決定しないと云ふので、豫約だけして、Kの自動車を借りて平凉路へ歸りかけたが、今朝の飛行機が楊樹浦方面へ爆彈を投下したとか云ふので、遽かに支那人の避難者が列車のやうにヴロードウエー路へ押し寄せて來て、とても通行は出來ないと云ふので一先づ後返りして、午後二時頃ヤットの思ひで歸りついた。

艦載飛行機一臺が低空飛行をして居るのが見える。かすかに日の丸の印が見える。間もなく西南の雲の中にウーンウーンと云ふウナリが聞えて來たと同時に、ドーンと耳をつんざく一發の大砲の音をキツカケにしてタンタンタン、ドーンドーン、パンパン、ドドドドドーンと一齊射擊の

音が聞える。雲の上高く十機ばかりの敵機が姿を見せたかと思ふと、今の射擊で列を亂して北の方と東の方へ分かれ分かれに飛んで逃げる。折柄二臺の艦載機が飛び出して來た。一臺は北へ一臺は東へ敵機を追うて勇敢に突進する。數臺の敵機の中へ一臺が飛び込んだ。始めて見る空中戰、高射砲機關銃が全力を擧げて高空射擊をして居る。危險だ!! 敵數機の中にたゞ一臺で飛び込んで行く勇敢さ!! 見て居る私等の手には汗が玉のやうに流れる。

快速を利用して高く〳〵密雲の彼方に長蛇は逃れ去つた。然し此時已に一臺の敵機を見事打ち落したことが翌日發表された。東に敵機を追うた一臺は、敵機が浦東の石油タンクに一彈を投じて黑煙天に沖する時、非常な速力で敵機に迫つたが惜しや彼もスピードを出して遂に逸走し去つた。一度北に消えた敵機の中の一機が再び東部の空に姿を現はしてルナパーク跡、東部小學校前、商業學校前、公大第一廠、上海紡織第三工場等に爆彈投下を行つて逃げ去つた。

始めて見る敵機の襲來、それを迎へ打つ高射砲機關銃の耳を聾するばかりの響と、高空の敵機近かく破裂する砲彈の響が手に汗を握らせた。これが今事變に於ける第一次の敵の空襲であつて、私が味うた最初の恐怖であつた。

今夜再び空襲がある、と云ふ噂さが傳へられ、各自避難の場所を求めた。この家では近かくにある工部局楡林路警察の一室に一部が避難した。今夜のニュースで購買組合、內山書店は共に黑

煙濛々として目下燃燒中であると報じた。然かし幸ひにこの火災は私の店よりも遙かに遠い場所であつたことが後に判明した。恐怖の一夜は明けた。雨と風との交響樂の中を虹口の店員の避難所へ立寄つて郵船會社迄行く。この日蘇州河の各橋は閉鎖されてたゞ一つガーデンブリッチだけが租界の交通路となつて居た。

臨時船樂洋丸で、いよ〳〵病妻を歸國せしめることに決定して、雨の降る中をたゞ一枚より持たないシヤツのまゝでビショヌレになつて多くの支那人の中を掻き分けてガーデンブリッチ迄來ると、此處は工部局巡査及び日本陸戰隊員が嚴重に警戒して居て呉れる。

『日本人です』(この一語は夜でも晝でも吾等の守り本尊である)と一聲かけて虹口に向つて橋を渡る。同じ共同租界でありながら蘇州河以南の舊英租界は人で埋まつて居る。だから十四日の爆彈でカセイホテル前、大世界前等で英米人支那人等數百人の死傷者は出たのである。ガーデンブリッヂからエドワード路の平和記念塔迄の間、アノ廣ろいバンドに出て居る支那人の數は恐らくは何十萬であつたらうか。全く人で埋つて居たのである。ソレにひきかへて蘇州河以北の舊米國租界は、これは又何んたる淋しさであらうか。鬼氣人に迫る死るせ街虹口である。

私は無量の感慨を抱いて共和里の避難所迄つき、賴んで置いた自動車に乘つて平凉路へと向つた。この方向も悉く店は閉めて、ヴロードウエー路に避難する人の流れが、沈默に傳へて居るの

が見えるだけである。涯山碼頭迄來るとモウ人の影もチラホラである。平凉路の通りは遠く迄見透しがつく。マーケット近かく迄來た時に行く先に群衆が見え、この方へ四方から走つて行く男女が見える。何か事があるに相違ない。こんな中へ自動車を乘り入れたら危險があるのだ。私は運轉手に路を變へるやうにと注意した。馴れた運轉手は直に前輪を横町へと曲げて居るのであつた。

歸りついて二階の窓から見て居ると、工部局の赤塗の非常用自動車が三臺走つて行く、オートバイが走る。支那人巡査が自轉車で列をなして驅けつける。群衆のワメキが聞えて來た。大方巡査が群衆を追ひ散らして居るのであらう。バケツに米を入れて提げて來る老人がある、メリケン粉の袋を擔いで來る若者がある、麻袋を二人で引ずるやうにして來るのがある、あゝ米屋の襲擊であつたのだナと解つた。

群衆が散じた頃、三人の男が工部局警察の方へ支那人巡捕にひつぱられて行くのが見えた。食料品の盜みに對し無意識的に寛大な支那人心理は遂に飢饉の時の食料品の掠奪を罪にしない習慣迄生んで居るのである。今次上海事變は全くの其日暮らしをして居る、支那の下層の人々をして、遂に飢饉に迄追ひつめた。其處に來るものは食料騷ぎであるのは當然である。引張られて三人も、大方二つ三つ肩でも打たれるのが落ちであらう。

街は又淋しくなつた。それでも時々軍用オートバイやトラックがシュウ〳〵言はせて走つて居る。

樂洋丸は十五日午後七時に入港して翌日未明の出帆と云ふので、私共は形ばかりでも乘船準備をした。タオル、齒磨、ブラシ、悉くK夫人が氣をつけて呉れた。準備は出來たが本船の入港は明朝になつたので又一夜を厄介になつた。今夜は比較的靜かであつたが、未明頃から砲聲が聞えて來た。夜が明けて久し振りに青空が見えた。風も凪いだ、此分なら航海は大丈夫。

郵船會社へ電話すると、本船は今朝七時入港しました。九時から御乘船を願ひます。お荷物は苦力（勞働者）が居りませんから御自分で處理して頂くより方法がありません、そのおつもりで願ひますと云ふ。

今次の事變中最も嬉しかつた事は、上海の電話が全部自動式になつて居つた事である。私の店が燒けたと云ふニュースの時にも、早速私は誰も居ない店へ電話をかけて見た。呼出しベルの鳴つて居るのがよくわかる。あゝ未だ店は燒けては居ないのだと分る。それからは友人の宅や店へも度々この電話で其後の安否を知ることが出來た。

やがて心盡くしの朝食に舌鼓を打つて、先づ荷物の積込みに大連汽船黃浦碼頭に繫がれた樂洋丸へと自動車を走らせた。

實は私の病妻は三ケ月前から私の家に來て居る岡田女史に附添うて貰うて歸國させるつもりであつた處、ドクターからの注意で急に私も附添ふ事になつたのである。そこで今日はこのK洋行の店員の妻子が二た組乘船する事になつて同勢八人となつた。

本船へ上つた刹那に、非常に近く耳をつんざく大砲の一發を聞いた。又一發又一發とつづいて聞える。本船の反對側に繫留されて居る××××が浦東方面に昨日から進出して來た敵に對して砲擊を加へて居るのだと云ふ。荷物は若い人々に擔いで貰うて14號の室に入つた。私共一行の行李やフトン包が未だそのままになつて居る。下船して數人の若い人々の手を借りて、荷物の積み込みを始めた。見も知らぬ人々がどん〳〵とやつて來て手を貸して呉れる。日本人だと云ふ意識が、今更らのやうに確かになる。外國へ出て日本人と云ふ意識がハツキリするとよく云ふが、日本に居る時は洋畫專門の大家であつた人が、洋畫の本場へ旅行してから日本畫を書くやうになる心理と同じではあるまいか。

一度家へ引き歸り一行を連れて二臺の自動車に分乘して、居殘る友の一家に後髮ひかれつゝ見送られて出發した。やがて本船についた。どうかと案じた長いタラップも緊張のためか病妻は安安と上つて船室に入つて呉れたので、私の不安も、ヤレ〳〵と胸なで下ろすことが出來た。

乘船する避難者を積んだトラックが、後から後からとやつて來る。陸戰隊員や自警團員が武裝

して警備して居る。その大部分が婦人と子供であるために混雜は一層である。

折柄敵機數臺がウナリを立てゝ上空に襲來した。碇泊中の我が軍艦からドンドンドン、タンタンタン、パンパンと高空目がけての射擊が始まつた。その物凄さ!! 船客係りはサジを拋げた。切符のあるも無いもない。兎に角無暗矢多羅に乘船させた。午後一時出帆の少し前に紡績聯合會の堤さんが杭州領事松村君を探がして居られた。何んの要事か知らないが急用らしいので探がして上げた。見つかつたので事務長の室に待つて居る堤さんの處へ同行した。

堤さんが內山君は何處へ……と訊ねるので私は病妻を送つて神戸迄と云ふと、丁度幸ひだ是非お賴みする。此船にはひき上げの婦人子供が約千人乘船して居る。實は郵船會社から民團が借りた形式になつて三等長崎行十元門司行十一元神戸行十三元と云ふ割引切符を民團が發行する事にした。然し何分にも急速の事とて充分其意味が徹底して居ない。乘船に際しても民團が發行した乘船證明書を持つて居る人だけと云ふつもりであつたが、先刻からの空襲でそれがメチヤ〳〵になつて了つた。そこで杉村さんを主任になつて頂いて君とお二人で船中で此等の民團事務を全部處理して貰ひたいとの依賴である。彼れ此れ云うて居る時ではない、よろしいと引受けて了つた。堤さんは必要の書類を引渡して下さつた。

ジャンジャンと出帆を知らせるドラが鳴る。船は靜かに碼頭を離れた。二隻の軍艦に護備され

て下江した。吳淞附近で數發の射擊を受けたが、何事もなく船は黃浦江から揚子江の本流へと進んだ。多くの×××が此處に投錨して居るのを見た。

私共は民團事務を開始した。船賃の受取り、領事館證明の發給、船賃の立替、上陸地からの乘車賃の立替と云ふやうな私としては前代未聞の事務であつたが、同文書院學生や外に熱心な二三人のお手傳ひがあつて長崎迄に大體が片づいた。乘客數は千五百〇一人であつた。船中二日颱風の後の大ウネリのために流石の大船もグラリグラリと搖れ、加ふるに暑熱の烈しいのと、船室でない船艙につめこまれたのとで乘客は丸でヘトヘトである。子供は乳を求めるが母は頭さへも上らない。コンデンスミルクの配給をして貰ふ。見る見る函にミルクが出拂ひになつて了つた。食事は一二三等共長崎迄は平等にニギリ飯の一點張りである。

十八日朝、長崎檢疫所着、檢疫官が乘船され種痘のしてない者は種痘しなければ上陸させないと云ふ。トウトウ大多數が種痘してない事が解つて、船中で種痘が始まつた。岸壁に橫づけされる頃にはそれも濟んだ。上陸が始まり長崎縣廳からは、避難者に對して出來るだけの便利を計るから兎に角、驛前の大テント迄行つて吳れとのことで、一同はとりあへず上陸して、色々の慰問や歡待を受け、午後二時頃には大テントも全く空らになつて終つた。

船中では一人赤ちやんが生れたと云ふので赤飯のおにぎりが一度出た。又一人產氣づいたと云

ふので、長崎救護班より直ぐ擔架で產婦を下船させて病院へ引取つて下さつた。ただお氣の毒に堪へなかつた事は門司上りの一婦人が、六歲の子供をつれて上海をやつとの思ひで脫れ、長崎迄來ながら此處で不慮の事で空しくこの女兒を黃泉に送つた事である。

長崎上陸は約七百人の豫定であつたのが實際には千人の人が此處で上陸して陸行したので、船中は非常に樂くになつた。門司上りは六十二人の豫定であり、極めて安醉な航海を續けて翌十九日朝門司に投錨した。

出帆が明日の午前十一時であると云ふので此處でも上陸者は豫定以上になつて、百人あつた。船長が乘客の心中を察して出帆を午後八時に變更して下さつたのであるが、イザ出帆と云ふ時に本船のスクリューがブイの鎖を卷き込んだと云ふので、翌日午前九時の出帆になつた。しかしながらそのために瀨戸內海の美しさを滿喫することが出來た事は又一つの感謝であつた。

二十一日午前七時、大阪築港三井棧橋に繫船され、大阪府社會課、大阪市役所から多くの方々がお出迎へ下さつた。此處でも婦人會や靑年團の盡力で非常な歡待と慰問を受け、三百七十人の上陸者があつた。種痘は船中で全部して貰うたので、面倒もなく濟んだ。私共の一行も一先づ此處で上陸した。出迎への親戚友人のお世話で無事に落ちつく事が出來、私は二十二日更らに神戸に出張して、大阪から廻航される樂洋丸を待ち受けた。入港が非常に遲れて午後四時になつた。

此處での上陸者は僅かに十三人であつたが、此中に二家族の非常に氣の毒な人々があつた。しかし御親切にも全部兵庫縣社會課で御引受け下さつたので、これで全く私の責任が解除された。

人と云ふ字は持ちつ持たれつであるとか聞いて居るが、實際だ。お互ひに助け合はなければいけない、と云ふことをしみじみと體驗した。避難の人々もよく辛抱して下さつた。船の方々もよくお助け下さつた。お手傳ひして下さつた方々もよく働らいて下さつた。長崎門司大阪神戸のお役所の方々、色々の團體や會の方もよく御盡力下さつた。私は此文を終るに當つて心からなるお禮を申上げます。私の眼は今涙で曇つて居ります。ありがたう御座いました。

詩の對話

N氏　支那の將來はどうなるでせうか。

L氏　支那の將來にはアラビヤの沙漠が見える。それ故に私は戰ふ。

N氏　日華の親善は出來るでせうか。

L氏　日本人がモツト個人的に物言ふことが出來るやうになつたら。

N氏　今日の支那の政治家と軍人とが到底民衆を安んずる力がないとしたら、いつそのこと國防と政治とを印度が英國にまかせて居るやうにしたらどうでせうか。

L氏

そこ迄行けば感情の問題です。同じ財産を無くするなら强盜に奪られるよりは馬鹿息子に使はれた方がよい、同じ殺されるなら自國の人の手に殺されたい。

一九三五年の秋の或る日、靜かな室で二人の詩人は語る。私は只だ恍惚と聽いた。それはそのまゝ詩の對話であつた。

魯迅先生と版畫

東洋に於ける唯一の世界的文豪と云はれた周樹人卽ち魯迅先生は、文化のあらゆる方面にその力を使うて居られたやうであつた。

魯迅先生が蒐集して居られた漢代の石刷は非常に澤山であつた。上海に持つて居られただけでも大きな柳行李に一ぱい押込んであつた。北京のお宅にはもつと澤山あるとのことであつた。全部を整理して寫眞版にして見たいが、何分隨分大形のものがあるため、寫眞に取るやうにするのさへなか〳〵困難であるからと、いつも延び〳〵になつて居つた。現在どうなつて居るか斯學のため誠に惜しいことだと思ふ。キツト〳〵あの中には非常に參考になるものが澤山あるに違ひないと思ふと、埋れ木にして置くのが一層惜しくなる。どうか散逸しないやうにと祈つて居る。

先生は又新興版畫（或は不適當な言葉であるかも知らんが、支那には非常に立派な古版畫が細細ながらも、今日も尙ほ存在するから、それに對して現在流行して居る獨逸とかロシヤとかの風の版畫を私は新興と呼び度くてつけて居るのである）に對して、大きな關心を持つて居られたので、遠く獨逸、佛蘭西、英國、露西亞、日本などの（日本のは浮世繪にも關心を持つて居られた）

作品を非常に澤山に蒐集して居られた。中でも獨逸と露西亞の物が一番多くあつた。それは集められる便利と云ふこともあつたであらう。又其外に色々の關係からさうなつたのであらうと思ふが、獨逸流のあの非常に粗野な、そして大地を踏みしめたやうな確かさに對して、露西亞流の纖細な美しい線の畫は、故意か偶然か知らんが先生の兩面を遺憾なくあらはしてゐると私は思ふ。

何時も畫が來ると見せて下さる。私もいつか版畫に對して、一種の面白味を感じるやうになつた。或る日私は先生に、

『私は先生の集めて居られる版畫を人々に見せ度いと思ひますから、私にお貸し下さいませんか。一つ版畫展覽會を開らきますから』

と話したところが、よろしい、それでは選んでチヤンと額椽をつけて置きませうと云うて下さつたので、早速小さいが世界版畫の展覽會を開く計畫をした。

丁度其頃私は北四川路の狄思威路角の上海購買組合の二階を借りて、日本語の夜學校をやつて居つたので、その教室も會場にあてることにした。先生は獨逸と露西亞の版畫を大小併せて七十枚(?)ばかりチヤンと額に納めて番號をつけて、國名と作者名を原語と漢文とで書いて下さつたので、それを目錄として印刷した。確か土曜と日曜の二日間だけであつたと思ふ。

支那に於いてはほんどの第一次版畫展覽會と云ふものであつた。其頃上海には美術學校と云ふ

のが四つばかりあつた。

いよ〳〵開會したところ日本人の方面がなか〳〵評判で、支那人の方面は割合に參觀者が少かつた。それは宣傳の拙劣と云ふこともあるが、然し何んと云うても未だ版畫とは何かと云ふことさへも解らなかつた時であつたから、興味のなかつたのは當然であつたかとも思ふ。然しそれでも日支人で約四百人位の參觀者があつて、先づ〳〵成功であつた。

實は先生も私も、版畫と云ふものは材料が極めて簡單である、一本の小刀と一枚の板片でよい。紙と墨さへあれば其處に一つの藝術が生れるのだ。支那のやうな國に於いては油畫や水彩畫などよりも普遍力が非常に多い、特に支那人の歴史にはいや血には水墨の畫を鑑賞する力があるのだから、この白と黑との版畫は必ず支那人を風靡するであらうと云ふ意見が早くからあつたのであつて、この第一次展覽會はその意志の表示でもあつたのであつた。二日間に四百人の參觀者を得たので、先づ〳〵成功と云うたのであつたが、若しもこの展覽會が支那の藝術界に一石の波紋を描いたと云ふ點を考へるならば、それは實に偉大なる成功ををさめたと云ふことになるのであるが、それは其時は知ることが出來なかつた。

先生はセメントと云ふ小說の挿畫一組を複製することを思ひたゝれて、確か商務印書館でコロタイプ版で二百冊(?)作られ、私の店で販賣した。然し殆ど支那人は買つては呉れなかつた。日

本人ばかりであつた。先生はその賣行狀態を見て多少悲觀して居られたが、それにも拘らず先生は依然各國から蒐集して居られた。

私も版畫に對していよ〳〵面白味を感じるやうになつた。

第二次の版畫展覽會を計畫した。無論先生も大賛成で、今度は佛蘭西の小說の挿畫を主として陳列することにした。

其時は日語學會も他に移轉して居つた（長春路の舊アメリカンスクール跡であつた）が、教室の都合で使用出來なかつたので、老鞄子路の日本人基督教青年會館の二階を會場にした。先生が一々番號と國名作者名とをつけて下さつたので、それによつて目錄を作つていよ〳〵開催したところ、場所の關係か他に何か理由があつてか、豫想外に參觀者は少かつた。大體に於いて失敗であつた。

かくて版畫展覽會の影響は支那人の間にはあるやうには思はれなかつた。從つて支那人で版畫の製作に志した者は、未だ一人もなかつたやうであつた。

魯迅先生は此頃、支那の古版畫が將に消滅せんとしつゝある狀態を惜しまれて、北京に在住した鄭振鐸氏と力を合せて、この世界に誇り得る立派な古版畫の面影だけでも遺さんと多くの物質的損失と色々の困難を打破して、北平箋譜一部六冊、約四百種の堂々たる版畫集を完成された。

北平箋譜の完成に先立つて、豫約申込みを發表したところ、大上海に於いて僅かに二部だけあつたと云ふのであるから、如何に支那人間に無關心の物であつたかと云ふことが想像される。

百部限定版であつたので、私が三十部申込んだのが、賣品であつただけで、後は先生と鄭さんとで引受けられたのであつた。鄭さんの分は北京で賣物になつたかも知らんが、先生の分は英・米・佛・露・日等の圖書館や友人等に寄贈された。私の引受け數はまたたく中に日本人の間に賣切れになつて、尙ほ注文が數部あつたが殘念ながらお斷りして居つたところ、其頃から支那人方面の注文がボツ〳〵私の方へやつて來るやうになつた。どうしても欲しいと云ふ希望者が多くなつて來たので、先生へ御願ひして百部だけ再版して貰ふことにした。再版に際しても色々面倒があつた（版木の所有者が數人になつて居つたので面倒が多かつたやうだ）が、漸く出來上つた。私は四十部より貰ふことが出來なかつたのでスグ賣切れになつた。今日では北平箋譜は已に珍本に屬するものである。

其頃であつたと思ふ。東京の成城學園で手工の教師をして居つた內山嘉吉君が上海へ遊びに來て居つて（此人は後に彫刻で二科に二回入選した）、魯迅先生とも親しく往來して居つたが、偶然の事から版畫の手ほどき位なら致しませうと云ふ事で話は急速に進展して、先生の熱心なる努力で美術學校の學生が十三人講習することになつたが、內山君が支那語が出來ないところから魯迅

先生がその通譯をして下さることになつた。會場は日語學會の教室を使ふことになつたが、材料と云ふものが何んにもないので、ペン先きの尻を研いで軸にくゝりつけて丸のみの代用にして、極めて短時日の講習が終つたが、眞夏の炎天下で扇風機もない蒸し暑い部屋の中での講習に拘らず、十三人の熱心と先生の熱意とは遂に支那文化に一線を劃せしむる大運動となつたのである。

この講習會によつて、中國最初の新興版畫家は生れたのであつた。

これから日に月に新興版畫家は雨後の筍の如く叢生して來た。

魯迅先生は此等學徒の參考のためにと、露西亞版畫の選集を作る計畫をたてられた。それは、『引玉集』と命名されて、日本でコロタイプ印刷にして立派な書物となつた。初版三百冊は發賣一ケ月にして賣り切れとなつた。

支那の版畫熱は三箇處に集中したやうであつた。北平と上海と廣東とでつた。廣東はなか〳〵熱心であつた。そして多く露西亞流の纖細を模倣した。上海には獨逸流の粗い刻り方もあつたが、北平は矢張り纖細が好評のやうであつた。國民政府？　中央黨部？　何れであつたか知らんが、突然として此等新興版畫家を一網打盡的に捕縛した。何んでも版畫家を共產黨員とでも思うたらしい。兎に角この暴擧によつて十三人中の十人は行方不明になつたやうである。恐らくは今日も行方不明であらうと思ふ。

此事を思ひ出す毎に、私は一種の責任を感じ、流涕禁じ得ざるものがある。

魯迅先生は新興版畫家奬勵の意味に於いて、第一回の版畫選集百冊を自ら序文を書き、自ら編し、自らその費用を負擔して作られた。『木刻紀要』第一集はそれであつた。

私は第三次版畫展覽會を計畫した。木刻紀要が出版された頃から版畫と云ふ日本名が支那では『木刻畫』と決つた。盛に出る個人作品集や同人作品集は悉く木刻畫と云ふ文字を使ふやうになつた。

いよ〳〵第三次展覽會を施高塔路千愛里四十五號に開催した。此時は木刻畫展覽と改名した。この開會にも先生は大變骨折つて下さつた。今度の參觀者は非常に多かつた。そして支那の小學校の教師が生徒を引率して來たのが三組もあつた。言ふ迄もなくボツ〳〵手工科でこの版畫が始められて居つたのであつた。

版畫熱はメキ〳〵と發展して來た。上海美術專門學校內の版畫家の作品展覽會が開かれたのはそれから餘り遠くなかつた。

先生と私とは參觀に行つた。學生が私共を取り卷いて熱心に批評を求めた。

私は參考のためにこの展覽會出品の全部非賣品を除いて買ひ取ることにした。

未だ〳〵幼稚ではあつたが、然し遊戯的に走らずに實用的に向つて居る傾向が充分看取出來

る。日本の版畫が何んとなくのんびりとして閑人の閑藝術の如き觀あるに對して、支那の版畫には實用的と活動的との色彩が非常に濃厚に見られた。先生と私とはかうした全體の傾向を見て私かに喜んだものであつた。

然し風景はどうにか見られるものもあつたが、人物に至つては實に拙かつた。と云ふのは人物については支那の畫では實寫が少い。肉體描寫が殆ど出來ない。

その關係からであらう、何んのことはない、ロボツトと云ふ姿である。

若人は大工場のストライキを、革命歌を高唱して居る集團を作ることは好きらしかつたが、折角作つた畫には力がなかつた、熱が見られなかつた。大體に於いて素描の不足と云ふことがありありと見えて居つたので、先生はいつもその點を指摘して注意して居られたが、それはなか〳〵改革されなかつた。それには相當の日子が必要であつたことは言ふ迄もないことであつた。

廣東方面の個人作品集はいよ〳〵幾んに出版されるやうになつた。上海が特色として持つ小報（普通新聞一頁の二つ折にしたもので一口に言ふとすつぱ抜き新聞と云うてよいもので、日刊と週刊となどで三十種を數へる賑かさであつた）が、先づこの木刻畫を挿畫に使つた。引き續いて漫畫雜貨やグラフや雜誌の挿畫は木刻畫で占領した。大新聞や、小說、詩などの單行本の挿畫がたうとう木刻畫でないものはなくなつた。劉硯とか羅清楨などは日本へ研究に渡來した。そして

『罪と罰』の挿畫など製作して單行本で出版した。『引玉集』の再版希望者が多いので再び印刷にして私の店で販賣した。

魯迅先生は此頃から病床の人となられたが、病狀は一進一退で時々は店へも出て來られたが、先生の熱心は病中にも拘らず、獨逸の老婦人の版畫家コーヴイツチの複製を計畫され、病床にあつてこの出版についての原文の飜譯から、紙の一枚選別から題字から序文から一人で面倒なことをして居られた。病氣にさはるからと云うても一向無頓着で一意出版に奔走して居られた。

烱眼と云ふより外はないが、露西亞大使館はいつの間にかこの木刻畫の流行を見て採つて居つた。數百種の大小の版畫を本國から取り寄せて、北平、漢口、南京、上海、廣東などで露西亞大使館主催でその版畫展覽會が開催されて、支那の版畫はいよ〳〵高潮に達して來た。

招待を受けられたので魯迅先生は病の中を少し無理をして參觀せられた。然しお歸りには大變快い氣持ちで歸られた。

老板なか〳〵好かつたよ何んと云ふても素描がうんと出來て居るから確かなものだ。一人々々の人間に血が通つて居るあゝあつてから使ふのだと見る人をして動かす力がある。あれ迄はうんと研究せなければだめだ。欲しいと思ふ畫が澤山あつたが、何分一枚が五十元、百元と云ふので僕の財布では一寸無理だからネ、四、五枚だけ買約して歸りましたが、持つて來たら受取つて金

を拂つてやつて下さい。

それから色々暫く漫談をして歸られたが、其後一向畫を持つて來ないので不思議に思うて居つたら、名地の展覽會が終つてから送つて來て而も無代にしてあつた。

現在のやうに外國品に高率課稅をして居るロシヤの現狀では、勢ひ此簡單にして材料安値なる版畫が旺盛になるのは自然の道だと思ふと共に、支那の將來を現實に見て居るやうな氣がした。支那人は昔から水墨の畫を鑑賞する。鑑賞するから描くのか、描いてあるから鑑賞するのかそれは私には解らんが、兎に角白と黑との墨繪が解る。又その技に於いて世界に比なき人間である。私共が同じ白と黑との版畫に對して抱く希望は、決して夢に終るものではないと云ふ考へが、いよいよ確かさを增して來た。

其中にコールヴイツチ版畫集が見事に出來上つた。ところが出來上つた物は賣るに到らずして同好者が殆ど分けて終つた。確か三十部位を私が販賣した。版畫集の廣告は、畫集の中の一枚に先生が廣告文を書いて持つて來て下さつた。その廣告紙に始めから豫約者があつて、すぐ其方へおあげした。

眠れるが如き支那の藝術界に在つて、新興版畫は潑剌として活躍して居る。

先生の他界數日前、フランス租界仙橋の青年會館で又木刻畫展覽會があつた。先生は若人の意

氣に動かされたのであらう。又病を推して參觀せられた。此時の畫は浦石に面目を一新せるものがあつた。先生は數名の版畫家と共に會場でニコ〳〵と寫眞に寫つて居られる。この寫眞が先生最後のものにならうとは誰れも知るよしがなかつた。先生は十月十九月未明遂に逝去せられた。支那全國を擧げて惜しんだ。現在旺盛を極めて居る支那の新興版畫は實に魯迅先生によつて種まかれ水灌がれ、育まれて今日に成長して來たのである。

何んと云うても先生は先覺者であつたが、同時に又考古家でもあつた。新興版畫を奬勵する一方、舊版畫の保存に力を盡された先生の如きは、將に溫古知新の實行家であつたのだ。

臨終の魯迅先生

十月十八日午前六時頃、許夫人が來られた。悲しくも今は絶筆となつた先生からの寸信であつた。

老版

意外なことで夜中から又喘息がハジまつたダカラ十時頃の約束がモウ出來ないから甚だ濟みません。御賴み申ます、電話で須藤先生を賴んで下さい。早速して下さる樣にと

艸々頓首　拜

十月十八日

十時には面會の約束があつたのである。手紙を見ながら許夫人の話を聞いて居つた私は、一種言ひ難い胸騷ぎを覺えた。

いつもはキチンとかかれる手紙が、今朝は筆が亂れて居る。私は早速須藤醫師へ電話して、スグ來て下さるやうにお賴みして置いて、そのまゝ驅けつけた。先生は机の前の椅子に腰かけて、右の手に烟草を持つて居られたが、顏の色は非常に惡かつた。呼吸が苦るしさうであつた、それ

でも私はスグ須藤醫師が來られる旨を告げて、前の籐椅子（それは是迄よく先生が腰かけて居られた寢椅子である）に腰を下ろした。

先生の呼吸が如何にも苦るしさうに見えるので、私は靜かに背部をサスつた。許夫人も同じくサスつて居られたが、少しも落ちつかれない。私の家では喘息の妙藥として、鷄の卵の油を造つてあるので、以前にも一度お上りになりませんかと云ふたことがあつたが、先生はマアよしませうと云うて、飲まれなかつたのであるが、今朝は事によつたら飲まれるかも知れないと思つて、家内が、駄目です先生は決して飲まれませんよ、と云ふにも拘らず、私はカプセルにはひつたのを六個持つて行つたのであつた。須藤醫師の來られる迄の手當として、私は先生に卵の油をお上りになりませんかと云ふたところ、先生は、ウン飲むと云はれたので、私は早速カプセルの蓋を除いて先生の口へ持つて行つたら、先生は飛びつくやうにして、三個迄飲んで下さつた。私は嬉しかつた。心の中で、どうか效果を顯はして呉れるやうに、と祈つて居つた。

そして、少しおやすみになつては如何ですか、と云うたが、先生は横に寢ると苦るしいと云うて、矢張り椅子に腰かけて、時々身體をゆすりながら、上半身を眞直になるやうにされた。私は見て居つて、餘程苦しいのだなと思つた。烟草をお止めになつたらと云ふと、たうとう吸ひのこりを捨てられた。許夫人と二人で背中をさすつて居つたら、須藤醫師が來られた。須藤醫師は部

屋の入口から、先生をすかして見るやうな姿勢をして這入つて來られた。どうしたんな、とお國丸出しの言葉で言はれた時の醫師の顏には、心配の色があり〳〵と讀まれた。私は一人心の中で祈らざるを得なかつた。

先生は苦るしい呼吸の中から、トギレトギレの言葉で、今朝四時から又喘息が出たこと、早く注射して呉れと云はれた。其時には、醫師は已に注射の準備が出來て居つたので、スグ右の腕に一本注射された。

先生の呼吸は矢張り苦るしさうであつた。一分二分經つた頃先生は、

『どうしたんだらう、一向效がない。』

と云はれた。醫師はモウ一、二分せないとネ、と云ひながら、それでも次ぎの注射の準備をして居られた。そして、一本で效かねばモウ一本せう、と云はれた。五分經つたが先生の呼吸に變化がない。依然として、フツフツ苦るしさうな呼吸をして居られるので、醫師は第二回の注射を又右の腕にされた。一二分經つた頃先生は、少し效いて來たやうだ、と言はれた。呼吸もチョツト樂になつたやうに見えた。私と許夫人とは期せずして、ホツと一ト息して、殆ど同時に背中をさすつたところ先生は、止めて呉れ、と云はれたので、二人共さすることを止めた。先生の苦悶が少しやはらいだのであつた。須藝醫師と話が始まつた。丁度八時五分前であつた。私は八時に一

寸店に約束があつたので、須藤醫師にお頼みして置いて店へ歸つて來た。何んの知らせもない、モウ大丈夫と、實は安心して居つたので、來客と話をして居ると、其處へ須藤醫師が來られて、どうも喘息がまだ治らないばかりでなく、心臟性喘息になつたやうだ、一つ松井博士にも診察して頂きたい、との事であつたので、スグ福民病院へ松井博士をお迎へに自動車を出したが、折惡しく博士は日曜日で御不在との事で、お出掛け先きを聞いて、須藤醫師自らお迎へに行つて下さつた。石井醫學士が偶然にも來て下さつたので、魯迅先生の今曉來發病の樣子をお話したところ、早速お見舞せうと云うて行つて下さつた。

暫らくして、須藤石井兩醫師が來て下さつて、病氣は重態であるから今日は充分氣をつけて呉れとの事であつた。イヤ危險であるやうにも言はれたのであるが、私は許夫人には、危險とは言ひ得なかつた。看護婦を呼んで、醫師からの手當で『二時間毎に注射すること』と呼吸の苦るしい時には酸素吸入をすることを命じられた。私はスグに酸素發生器の準備をして持つて行き、一方、酸素管の準備を藥店へ依頼して置いて、取敢ず酸素發生器によつて吸入して頂いた。先生は、其時はベツトに寢て居られたが、酸素の吸入は幾分呼吸を樂にするらしく見えた。先生は、

『僕の病氣はどうなつてるのだらう。』

と云はれた。私は靜かにお寢みになるのが一番です、醫師もさう申しました、出來るだけ靜かに

して寢させて呉れとの事ですから、どうぞ、色々の事を考へないで寢て下さい、と云うて居るところへ、酸素管を持つて來たので、更らに酸素管からの吸入を準備した。酸素管からの吸入の方が工合がよかつたと見えて、先生はウツラ〳〵と寢られるやうであつた。それより前に、私は萬一を考へて、許夫人に、重患であるから注意の必要であることを話して、令弟建人先生を呼ぶことにして電話をしたところ、スグに驅けつけて來られた。そして、須藤醫師も、マア〳〵大丈夫でせう、と云はれたとかで、又明朝來るからと云うて歸宅せられたとの事であつたが、私はどうも心配でならんので、店員を一人先生の家へ泊まらせることにして置いた。

そして、一先づ、私も歸つて來たが、どうしても心配でならんので、更らに石井醫學士に來て貰うて診察して頂いたところ、重態であるから矢張り令弟にも來て頂く方がよいだらうとの事で、私は再度建人先生を來て頂くべく電話をかけさせた。暫らくして、建人先生は來られたので、醫師の話をして、注意して頂く事にした。そして私と下の應接で話して居ると、許夫人が私を心配して、歸つて寢るやうにと勸めて下さる。然かし何んと無く心配なのではあるが、それを云ふ勇氣もなく、それとなく建人先生と話しながら、徹夜するつもりで居つたところ、夫人が、先生も靜かにして居られるから、どうぞ歸つて呉れ、建人先生も二階で寢て貰ふからと非常に氣がねして言はれるので、夫人に氣がねさせるのも心苦しいことと思うて、遂に夜十二時半に私は歸宅し

た。

それが先生との永久の別離にならうとは、神ならぬ身の知るよしもなかつたのである。歸つたところ、未だ寢もやらず待つて居つた家内に、先生の模樣を話してどうぞ急變のないやうに、と祈りつゝ寢に就いたが、私の神經は非常に興奮して、どうしても睡れない。右に左に轉々苦悶しつゝ只々どうぞ事なく明朝になるやうにと祈つて居つた。午前五時の時計の音を聞いてから暫らくした頃、老版々々と呼ぶ聲が聞えた。私はギクリツとした。飛び起きて窓を開けた。スグ來て下さい。そして醫師をスグ呼んで下さい、と云ふので、使ひの者にそのまゝ石井醫師を呼びに行くやうに命じて、私はスグ店から、須藤醫師へスグ往診して下さいと賴んで置いて、宙を飛んで驅けつけた。午前五時三十一分であつた。しかし、萬事は終つてゐた。

先生の額は未だ溫かい、手も溫かい。然かし、呼吸は絶えて居る。脈も打たない。私は手を片手に握つて、額に片手をあてゝ居つた。溫か味はダン〳〵に消えて行く。許夫人は机にもたれて泣いて居られる。私は慰める言葉が出ない、共に泣くのみであつた。石井醫師が來られた、沒有法子である。續いて須藤醫師も來られたが、沒有法子であつた。如何に文明を誇る醫術も、未た一指の觸れる可からざるものがある、それは生命である。

私はスグに、鹿地夫妻や、其他の人々にも通知した。

嗚呼悲しい哉魯迅先生遂に逝く。時は一九三六年十月十九日午前五時二十五分、『僕の病氣はどうなつてるのだらう』との一語は、私の耳からは消えることがないであらう。

魯迅先生の思ひ出話から

魯迅先生の思ひ話を一つきく。

魯迅先生はいつでも私に老版！　と云はれた。どんな時でも老版！　であつた。或る日、

老版！　支那の一部分の話であるのにそれが恰も支那人全體の話ででもあるかのやうに言ひふらされて居ることがナカ〳〵少くないネ。

あの山西省の人は支那人の中の猶太人と云はれて居る人間である。それは丁度猶太人のやうにお金に對する執着が非常に强いからである。

北平や天津方面の錢莊は、全部山西人と云うてもよい程である。

西洋人や日本人がよく言ふ支那人は、銀貨を溶かして塊りを造り、段々上から上から溶かしては掛けて大きな銀塊を造つて居ると云ふ話、丸で全支那の何處にでも大きな銀塊がゴロゴロして居るやうに言はれて居るが、この話などもつまり山西省の人は非常にお金に執着する結果として、銀を溶かして銀塊をだん〳〵大きくする。それが非常に大きくなつて、トテモ動かす事もどうすることも出來ないと云ふところから、それを名づけて『沒奈何』と云ふ話

を誰かがお土產話にしたのが、トウ〳〵決定的になつたのだネ

又男の子が生れると、スグに十歲以上の娘を貰うて赤ん坊のお嫁さんにする、そして赤ん坊のお守りをさせて置く風俗なども山西が一番多いらしいネ

と云はれる。それは本當である。從來支那の事と云へば、滿洲の一角を見た人が、スグ支那はと云ひ支那人はと云ふのであるが、さうして內地の人々は下らぬ不正確な所謂土產話を聞かされて來たのである。それは今日の眞面目な支那を考へる人を、どの位禍ひして居ることであらうか。『沒奈何』の話一つでも充分解るやうに、誠にたよりない材料や話が私共の頭には這入つて居る。イヤ今日でも隨分あぶない話が不遠慮に這入つて來る。

それ等の材料や話の種を、吾々は眼光を紙背に徹せさせて見直さねばならぬ。

何と云うても支那人の生活の現象は、必ず表と裏との二面のあることを忘れてはならぬ。私はよく魯迅先生から聞かされたことだが、支那の事は複數であると云ふことを頭の中に常に持つて居つて、色々の表面の現象を見なければならぬ。さうでなしに簡單に表面だけを見て判斷すると、往々にしてその裏の不文の色々の習慣が正しく、表面はたゞ表面に過ぎない事が、往々にしてあると教へられたが、ホントだと思ふ。

丙子漫語

大阪船場の眞中にある某店へ一泊したことがあつた。出た〳〵眞夜中に蚤と南京蟲の混成旅團が新米の好餌御ざんなれとばかりに、お蔭でたうとう一睡も出來ず轉々として夜の明けるのを待つた。朝になつて店の人々に話したら、何んだ南京蟲の本場から來てと逆捻ぢを喰はされた。

然しおあいにく樣だ。二十餘年上海に生活して居るが、僕の家なんか一匹の南京蟲と雖も見ること稀れなんだよとやり返したところ、それは本當ですかとの御託宣だ。そして大阪神戸に恐らく南京蟲の居ない家は一軒もあるまいと聞かされた。

一體私が大阪で小僧して居つた頃なんて、蚤こそ居つたが南京蟲と云ふことは、松本金時堂の南京蟲退治の廣告以外は、其名を聞くことさへ少なかつたのである。

況んやその吸血のために一夜寢られんなんて、丸で搔背の態だ。

此話を其儘受け容れて、阪神二大都市に蟠居せる彼れ吸血便衣隊は、如何なる巧妙なる戰術によつて今日の大をなしたのであらうか。誠に恐るべきものは便衣隊の力である。上海の虹口パークの西門の通りは昔（二十年前迄）は、江灣路であつたのが、公園の擴張によつて取り込まれた

のであるが、この通りの兩側には年老いた大なき路傍樹が青々と繁つて居つて、公園風致の上からも非常によかつたのであるが、何日となく一本枯れ二本枯れて、たうとう今では一本だけが淋しくションボリと殘つて居る。あの大きな青々と繁る老木が、ドウしてこんなになつたのであらうか。私共は散歩の都度十分氣をつけて見た。

あれだけ手入れに熱心して居る公園の中で、あの老木がヤス〳〵と倒れるには餘程のことであらうとは思うて居つたが、驚くべして人の小指位の蟲のためであつた。樹根からアマ肌をジリジリと喰ひ上つて甘まさうなところから樹の眞中へと喰ひ込んで行くのだつた。なんと云ふ蟲か名も知らんが、丁度田舍の畑の中に居る蟬になる蟲にヨク似た乳白色の蟲で、小さい嘴は茶色である、動作は極めてノロイのであるが、數匹がアツチコツチから樹に深かく穴を造つて喰ひ込むのである。

苦力が長い針金の先きを少し曲げたものを突き込んで、タンネンに一匹々々を追ひ廻はして殺ろして居るのにも拘らず、遂に大木は枯れて行くのだ。

昆蟲の力の偉大さよと、私は只驚くのみであつた。食木便衣隊の恐ろしさに、吸血便衣隊の話がいつの間にやら食木便衣隊の話へ道草を喰うて居つたやうだ。

阪神に於ける吸血便衣隊は、如何にして今日の强大を爲し得たのであらうか。先づこれを總括

的に云ふと、中日親善の具象化であると云ふことが出來るのであつて、如何なる手段方法によつてとなると、それには凡そ三つの徑路がある。

第一は中日交通の開らけた當初から、神戸大阪の居留地に侵入して來た者共が、非常の忍耐と努力を盡くして、チリ〳〵と擴大した自然繁殖を第一路とするのであつて、今一つは最近數年來の事であつて、これは後藤朝太郎先生に負ふところ極めて大なる支那趣味の普及と云ふ好機會を得て、支那から色々の雜貨が輸入される。その荷物を唯一の密航船としてやゝ急速に侵入して來たもので、これ第二路であるが、今一つ最も有力な經路があつた。それは日本木炭の市價の騰貴に從うて支那木炭の輸入が始まつた。この木炭こそはその容器である竹籠が先づ絶好の彼等の匿れ場であつたと共に、木炭其物が又より好き匿れ場であつたので、非常に迅速に非常に廣い範圍に潜入出來たのである。

凡そ支那木炭一籠を買入れたら、必ず數十匹の吸血便衣隊が易々として其家に潜入出來たのであるからたまらない。

實に易す易すと阪神の二大都市を占據し得たのである。

阪神二大都市五百萬の同胞の生血を夜な〳〵吸ふところの吸血便衣隊、そしてこの便衣隊と仲よく同居が出來るやうになつた頃には、皆んなボカンと口を開けて歩るくやうになるのとは違ふ

であらうか心配な事ぢやイヤ氣にかゝる。

竹籠の木炭は、素人の私が知つて居るのでは、浙江省の溫州が一番多く產するらしい。次ぎは平漢線の柳林と云ふ所だと聞いて居る。

一年の輸出額四・五十萬元と云はれるのだから相當な輸出品であるが支那から日本へ、毎年數十萬元の木炭が輸出されると云うたら支那の人でもキツト驚く、それも其筈だ木炭である以上必ず樹木を燒いて造るに違ひないのだ。然し一體支那の何處にそんなに澤山の樹木があるのだ。山と云ふ山は殆んど赤裸々ではないか。適々山上に木でもあれば、ショボ〳〵と森がある位ではないか。平地の樹木は墓のあるところにあるだけではないか。一體何處にそんなに樹木があるのか一寸考へられないが、其處が吾々日本人は大きいと廣いとか云ふ事を文字では知つて居つても、吾々の標準と支那で云ふ大きい廣いと云ふのとは丸で標準が違つて居るのだ。支那の人が毎日カジル西瓜子や南瓜子や香瓜子は或る友人の調査によると、一年二億斤を下らないと云ふ。二億斤とは吾々の想像だに出來ないところである。然し大きく廣いが故に特に專門の栽培場もなくて、それが集まるのだ。世界市場に輸出される蛋粉の原料である王子は、一個所の養鷄場もなくて、あの盛大を見るのである。だからあのショボ〳〵の森で澤山なのだ。ショボ〳〵の森と云うてもそこが大きい支那の事だから集めて見ると、この輸出品が出來上るのだ。矢張り文字が示す內容

の差である、イヤ人間の考へる標準の差だ。兎に角として支那と云ふ土地から考へて、樹木は餘りにも少ない（例へ日本へ送る木炭としては大量であつても、日本標準の故に）。と云ふ事は一寸支那内地を旅行すればスグ解る。先年賀川豐彦氏が來られた時に、

下手な說教するよりも、木を植ゑろ木を植ゑろと私は叫ぶ。

と云はれた事があつた。それはホントウだ。

魯迅氏はいつも、

支那の將來には沙漠が見えて居る。それ故に私は戰ふ。

と云うて居られる。尙不語を續けて國民政府でも植樹節と云ふことをして、植林を奬勵はして居るが、植林としてもそれを十分に守らねばキット人民は盜伐して終ふに決まつて居る。軍隊をして植林を保護させるのでなければ不成功であると言うて居られる。

支那の炭燒にはこんな話は通じないであらう。彼等は立木を伐つてイヤ樹根迄も掘り出して炭を燒いて飯を喰うて居るだけの事だ。立木の伐採も樹根の掘り起こしも、それがやがて支那を沙漠に導きつゝあるのだなどゝ誰が考へるであらうか。

彼等は只だ飯のために、樹木を根絶やしにして炭を燒いて賣つて、米を買ひメリケン粉を買うて喰うて居るに過ぎんのだ。

然しそれは全體からいうて、安南米やメリケン粉を買ふために國土を沙漠化しつゝあるのだ。彼等は二代目の世繼ぎを造らずして現在の家族を片つぱしから殺して居るのだ。

座して喰らへば泰山も空しと云ふが、これは又伐り倒ふしては食うて居るのだから丸で拍車をかけて居るやうなものだ。

果然魯迅氏の眼に見えてる沙漠は、決して夢でもない幻でもない。それは確かに現實である。ヤツト私にもそれが見えるやうだ。

『ソレ故に私は戰ふ』

この悲痛の一語、今は私の腸が九廻するのを覺える。

あらゆる壓迫とあらゆる隱謀とあらゆる狡猾の渦中に惱まされつゝ孤軍奮鬪する魯迅氏を見ると、先驅する者の悲哀を痛感して覺えずも私は涙する。

骨董品、骨董屋

京都の名物祇園會は、あの怪物のやうな山とか鉾とか云ふものが引出されて、通り筋は大變な賑ひを呈することは、先刻御承知のことであらう。その祇園會にモ一つ名物がある。それは舊家も成金も悉くが祕藏の道具を持つて座敷を飾ることである。道具の中でも最も目を引くものは、何んと云うても六曲の金屏風である。軒並に新古種々の大家名筆の畫いた屏風が引き廻はされたさまは、實にや天下の偉觀である。

昔私が京都に居つた或る年の祇園會に一大珍事が發生した。それは外でもないが、有名な森寛齋筆の水墨山水の屏風の寸分違はんと云れる同じ物が、甲家と乙家とに飾られたのであつた。何れの家も由緒ある家柄であるので問題が六つか敷い。同じ物が二雙あると云ふことは斷然ない筈である。一體誰の鑑定かと云ふことから、一方の家の鑑定は忘れたが、一方の家の鑑定は當時斯道で有名であつた東洞院だと云ふことから、たうとうその東洞院が引き出されて、兩家の屏風を再鑑定に行つて、サアと首をヒネツタと云ふ話がある。京童は口さがなくも東洞院もあてにならんナア、と云うたことがあつた。

これも昔の話であるが、大阪で只だ高麗橋とだけで通る有名な道具屋から、誰かの雙幅の山水が或る家に納まつたところが、その雙幅と全く同じ物が某家にあつて、その又納め主が同じ高麗橋と云ふので新聞種になつたことがあつた。

これも新聞種であつたが、或る年京都の三條の舊家某家の道具の賣立てがあつたところが、時を同じうして六角の某舊家も道具の賣立をせられたことがあつた。その三條の某家に傳はる牡丹に孔雀の岸駒があると云ふことであつた。ところが妙なことには六角の某家にその又同じ岸駒の牡丹に孔雀の大幅があると云ふので、何んでも少しも違はん物だと云ふことであつた。然るに何れおとらぬ舊家の事とて、何れを眞僞と云ふことが出來ぬ。そこで新聞の評に曰く、

岸駒は牡丹に孔雀が十八番であつたのだ。

と結んだことがある。古來名畫二枚なしと云ふ金言を、どうして吳れるか苦しい〳〵。かうした話は時々あつて、識者の眉をひそましめるものである。

私が上海へ來て間もない頃であつた。大阪の知人が上海の某骨董屋さん（日本人）をつれて店

へ來られて、これから五馬路の骨董市場へ骨董を見に行くからどうだと誘はれて、一つ目の正月でもさせて貰ふつもりで、他の友人三人と同道した。今もあるかどうか知らんが五馬路江西路の角？　であつたと記憶するが、二階に市場があつた。

私共はブラ〳〵と見て歩るいた。とある紅木の柵に、青磁と云ふのであらう觀音様が一つあつた。案内の骨董屋さん一寸見て、

あゝ、いゝ色ですネ。

と嘆聲を洩らされたので、私も引きこまれて解かりもせんクセに近かよつて見た。一個何程位の値段でせうかとたづねたところ其人の云ふのに、

マア百元ですか、八十元で呉れたら安いですネ。

とのことであつた。

私のやうな唐變木は聞いただけでギヤフンとした。こんなケチな物が百元もするのか、だから骨董と云ふ物は解らないものだと思うた、一行は隣の柵を覗いて居つた。私は觀音様の番頭にこの觀音様はイクラかと聞いて見た。番頭は曰く、『八塊洋錢』と、私は又ビツクリした。日本人の骨董屋さんが、あれだけ感心してマア百元でせう。八十元で呉れたら拾ひ物だと云ふ觀音様が、番頭はタツタ八元だと云うたのである。

この番頭テツキリ間違つてるか知らんのだナと思うたので、私はスグ日本人の骨董屋さんの袖を引いて、

あの番頭は觀音様を八元と云うてますから買つたらドウです。ホントに拾ひ物ですネ。

と言うたところ、骨董屋さんは後戻りして來て、ジツと眺めて居つたが、曰く、

ヤツパリ悪るいかナア。

何んの事はない下手な落語である。然し私は考へた。

一體世の中に鑑定家と云はれる人は、ナカ〳〵に多いのであるが、その鑑定は何を標準に何を基準に鑑定してゐるのかそれが解らんのである。書畫の鑑定などする人を見て居ると、大概上の方を一尺か二尺クルクルと解いて見て、スグ片附けて終ふのが大部分で、ズツト落款のある下の方迄見るのはナカ〳〵無いものである。それは上の方を一寸一尺見ただけで悪い物はチヤンと解るものらしい。實に鋭い直觀であると實は内々恐れを爲して居つたのである。

支那の古い竹籠などでも、骨董屋さんの話を聞いて居ると、これは二百年と云ふ年代がチヤンと解るらしい。私はいつも感心して居つたところが、上海へ來てから支那内地を旅行して見て、私のこの感心を一寸動かしたものがあつた。それは支那人の家では毎日三度の食事を作るのに、

必ず油を鍋で使ふことである。そして何處の家でも掃除と云ふことをしないために家の中が（厨房は特別に）非常にすゝけて居る。其中にある色々の傢伙を見ると、丸で三百年も五百年も經た物のやうである。遠い處へ行く迄もない城内の城隍廟へ一度お參りしたらすぐ解る。あの廟が僅か十數年前に建てられた鐵筋のハイカラな家であると誰が思ふであらうか。もう大丈夫二三百年昔の家のやうである。

色々の傢伙に灰ほこりや塵をかけては油烟でくすべ、其上へ又塵をかけては油烟でくすべる。さうした現場を知らぬ日本の人々の目に十年か二十年か二百年にも三百年にも見えるのに何んの不思議があるものか。嘘と思ふならやつて見るべしである。新らしい銅器にアンモニヤで青錆を出すよりも或はもつと鮮かであらう。

或る時、某氏が非常に古い時代の名人の書を誰かに鑑定して貰ひたいとの話があつて、一寸魯迅先生に話したところ……

それでは持つていらつしやい、一度私が見て上げませう。

との事であつたので、直ちに其旨を某氏に通じたところ、早速に持參されて魯迅先生に見て貰うた事があつた。魯迅先生は靜かに軸を解いて上から下まで極めて丁寧に見て居られたが、やがて

口を開らいて、

誰が書いたか知らんが、字は甘いですネ。しかし此人の眞筆は支那にも無いとか云ふことですネ。

更らに先生は、乾隆とか康熙とかの御覽の印や筆者の落款などを丁寧に見た上で、

この筆者と此等の天皇の時代とは非常な年數の差があるのに、印肉の色が全く同じてあることは怪しいですネ。

先生は更らに、一つ一つの印の中の文字を自分で別の紙に書いて讀んで居られたが、一つの印の中の文字の誤字を發見されて、

アツこの文字は違つて居ります。この文句の字はこの字でなければなりません。

先生は最後に、

この古るい色は染めたものですかネ。

と云うて、靜かにクル〳〵と軸を卷かれた。某氏もそれで得心せられた。私も始めて鑑定と云ふことの確かなものであると云ふことを知つた。鑑定家とも云はれる人に果してかうした鑑定が出來るであらうか、と私は思うた。

この中のどれが一つ缺けても鑑定は完全ではない。魯迅先生は鑑定家ではない素人だ。然し素

人の魯迅先生はかうした鑑定をせられた。

一尺解いてくる〳〵と卷く鑑定家の直觀力がいよ〳〵たよりなくなつて來た、或はそれは私だけかも知れないが……。

當然のことだ

支那人と云ふ奴は、金を生命よりも大切にすると人はよく言ふ。

そして支那人だけが特別に金に執着するやうに言うたり考へたりする人があるが、私は猿の尻笑ひに過ぎないと思ふ。

要は誰でも金は欲しい。が、金に執着のあることを露骨に表現するか、欲しいにも拘らず儀禮的に欲しくなささうな顏をして見せて居るかの相違に過ぎないと私は思ふ。人誰か金を欲しがらんやだ。誰か金に執着せざらんやだ。這間の消息を考へることなく、何にか支那人だけが金に執着し金を欲しがるかのやうに考へるのは、要するに其人の淺薄さを暴露して居るだけのことではあるまいか。

支那人は金に執着する一面に、非常に金離れのよいことが度々ある。支那人の金離れのよい一面を見て、それは面子のためだと云ふ人があるさうでもあらうが、私は面子と云ふやうな形式的なことが主となつてゐるのではないと思ふ。

なぜならば支那人が金離れのよい時は、その生命に關する時である。それは綁票（バンピオ）（人さらひの

こと）された時の金離れのよさを知つて居る者にはハツキリして居る。又綁票する方でもナカナカ鮮やかに請求する。全財産の三分の一がどうやら決定額らしい。無論それから交渉して金額を本當に決定するのであるが、もうこれより安くは解決の路がないとなつたら、沒有法子（メウファツ）である。キレイに金を出す。それは面子とか何んとか云ふやうなことではなくて、實は生命を金で買ふと云ふことであるからである。支那人が金に執着することはその特色であると云ふ議論に一先づ降伏してもよい。その執着の根底には、生命さへも金で買ひ得ると云ふ一事がある故に金に執着するのである。

そんな大きな問題でなく、日常の酒錢（チウヂイ）について考へて見てもさうであるが、多くの人々は酒錢を多くやることは自分の氣前を見せたつもりで居るとか、紳士の體面を保つため、つまり面子のためであると考へるか知らんが、必ずしもさうではない。酒錢と云ふものをやる人と貰ふ人とのことを考へて見ると、言ふ迄もなくやる方は先生で貰ふ方は底下人（ティシャノヒン）（下人共のこと）である。小額の買物が割安で、多額の買物は割高になる。支那の計算から考へて見ればすぐ解る。別に面子とか氣前を見せるとか云ふ條件がついて居るのではなくて、底下人には出來るだけ多くやつてよいのだ、やる可きものだと云ふ不文律が働らいて居るだけである。面子のためとか氣前を見せる

とか考へるのは、多くの場合日本的な考へ方であると私は思ふ。支那人は自分より低い生活の人に對しては、理由なしにやらねばならぬものと思つてゐるのだ。それは自分より低い生活の人だけでなく、自分よりも無い人には自分の有る中からは、どうしてもやらねばならぬのだ。やらぬと氣が濟まぬのだ。又貰はねばならないのだ。貰はぬと氣が濟まぬものらしい（チツト言ひ過ぎだが）、そんな時に面子と云ふやうなことは殆どない。たゞやらねばならぬといふ。不文の律法が、其人の手をさうさせるだけである。

魯迅先生に原稿料が百元來た。其處へ丁度先生が來られたから其事を話したら、それではその百元を今日は下さい。一寸入用があるからと云はれたので、すぐお渡した。

暫らく漫談して居つたら、其處へ、一人の支那婦人が魯迅先生を訪ねて來た。さうすると先生は、この婦人のいふ言を暫らく聞いて居られたが、今私の渡した百元のお金をそのまゝその婦人に渡された。婦人はたゞ一言謝々（シエシエ）と云うて百元のお金を貰うて歸つて行つた。

魯迅先生の生活に於いて、百元のお金は決して零碎ではないのだ。

私はドウしたんですかと聞いた。

先生は曰く、

彼の婦人の良人は、或る友人の讒言によつて、この間から蘇州監獄に入獄中であつて、夫人が

盛に解放の運動をして居るのです。ところが數日前に監獄の方から三百元持つて來たら放免してやると云ふ通知があつたので、自分や友人の間で二百元だけは出來たが、もう百元どうしても出來ないから貸して呉れと云ふのです。それでやつたのです。

私は其時騙まされると云ふことが先生に解つて居るのでしたら、其事を教へておやりになつたらどうですか。そして彼人は先生とどう云ふ關係ですかとたづねたところ、

彼の婦人も良人も、私が北京時代の學生であつたのです。騙まされてゐると云ふことは私には解つて居りますがネ。支那では警察や監獄の中に隨分悪い奴が居つて、かうした可哀相な人間を騙まして平氣で居る奴がなか〳〵たくさん居ります。この婦人も矢張りさうした流氓（質の悪るい人間と云うても、少し語弊はあるが）に騙まされて居るのです。然かし今私はそれを言ふことは出來ません。きつと彼の婦人も金だけ捲き上げられてそれを知るでせうが、いゝですよ。

私は餘りにも馬鹿々々しいので、私が先生の立場であつたらお金は出しませんネ。そしてその騙まされて居ることを充分説明して中止させますネ、と云うたところ先生は、

立場を代へて、老板が、彼の婦人の立場に立つて、私が老板のやうに云うて中止させたとしたら、老板は止むを得ず承諾はするでせうが、心の中ではきつと私を恨みに思ひませうネ。

と云はれて、私は大いに赤面した。先生は更らに、

支那の習慣では、それは出來ないのです。かう云ふ時には、有つたら斷ることは出來ないのです。どうしてもやるのが習慣です。

と云はれた。

私はその有つたら斷ることが出來ない、やるのが習慣だと云ふことについて、それは貴方の面子ですかと聞いたところ、先生は、

いや〳〵面子とか顔とかではありません。條件は何んにもありません。無くて困つて居る者に有る者がやるのは當然ではありませんか。アツハツハツハ。

と云うて笑はれたが、私はいよ〳〵赤面せざるを得なかつた。

無くて困つて居る者の賴みが有つたらやるのが當然ではないか。

何んと云ふ徹底した言葉であらうか。しかしこの言葉が説明と文句を抜きにして實行されて居るのである。それがたゞ一つの習慣として行はれて居ると云ふのである。考へるなと云はれても私は考へずには居られない。この一事をもつてしても、徒らに淺薄な支那通を振り廻すことは、斷じて出來ないことだと思ふ。

四庫全書の信用

支那人は、個人を信じることが非常に厚いことは、誰でもが知つて居る。それ故に個人主義者だとさへ言はれるのであるが、兎に角個人を信じることは、色々の機關を信じるよりもより以上に厚いものがあると私は思ふ。さうすると、イヤ個人を信じるのは日本人でも同樣であつた。何にも支那人に限つたことではないのだが、日本はドン〳〵進んで來て、世の中が變化して、そんな非科學的なことでは生活が出來なくなつたのだ。

然るに支那は、適々文明の進歩が後れて居るために、さうした昔の形態が遺つて居るに過ぎないものだと云ふ人がある。或はさうであるかも知らんが、支那人が個人を信ずるには、信ずる一つの原因があつて信じて居るのであるから、この個人を信ずる原因が除かれなければ、何程世の中が變つても、それは進歩と言はれても文化の發達と云はれても、支那人の個人を信ずる信じ方は變化しないと私は思ふのである。一體その原因は何かと云ふと、魯迅先生が、或る時かう云ふ話をせられたことがあつた。

日本人は、よく四庫全書とか何んとか云ふ帝王などによつて作られた書物を研究の引照にす

るが、吾々支那人はそれはしない。何故ならアーした專門の學者にもあらず、專門の研究者でもない人が、その金力と權力とで作つた書物を信用することは出來ない。あゝした書物には誤りが多い。なぜなら彼等編纂した人々は、役人として月給を貰うて編纂したまでであつて、學者的良心の研究にもあらず、又學者的態度からの編纂では無論なかつたからである。かうした出發點からの集積であるだけに、例へそれがどれだけ尨大であらうとも、それは帝王が何事にも大を好む一つの集積に過ぎないものであつて、學者が持つて引照すべき筈のものではないのである。吾々は如何に量に於いて小さくとも、數に於いて少くとも、學者が學者的良心から出發した研究書とか、全く學者的態度から出た編纂物であるならば、これを引照し又これを研究の對象とするにやぶさかならざるものである。

と云はれたことがあつた。

そしてこの言葉を聞かせた魯迅先生の著書及び編纂書を見て居つた私は、一言の文句も云ふことは出來ない、成程と思うた。と同時に、學者的良心、學者的態度と云ふことの實質が解つた。先生は、原稿は或る事情によつて、必ず許夫人が代寫された。然し出來上つた原稿は丁寧に點檢されて、一字もおろそかにはしてない。更らにそれが活字に組まれるやうになる迄には、チヤンと裝幀迄自分でして、一冊の書物を作つて居られる。かうして出來上つた原本が渡されて、始め

て活字に組まれるのである。そして又、校正の嚴重さに至つては、斷然御自分が一字々々の點檢をせられて朱筆を加へられる。そして五校六校をとられるが、それでも印刷には尙ほ誤植があるので、先生はイツモ困つて居られた。

北平牋譜を作る時、セメントの挿畫のや、コールヴイツチの版畫の飜刻の時など、一枚々々紙迄撰拔された引玉集の原稿を見れば、チヤンと出來る可き引玉集は已に出來て居る。而も出來上つた引玉集にも誤りがあるが、原本には一字一枚の寫眞の間違ひもないのである。從つて、先生が作られた書物は、その原本に於いては一字一句の間違ひもないが、出來上つた書籍には間違ひがある。たゞ此事だけでも先生は、後人や權力や金力によつて作られた書籍を信用せられないのはよく解る。

支那人が個人を信用することに厚いのは、如何にも個人主義的又は舊時代の遺物の如くさへ思はれるが、その態度の根底には、かうしたものがあるのである。だからこの原因さへ除き得られるならば、支那人の個人信用は又變化することが容易であらうと思ふ。

飜譯に就いて

何んのために外國の小說は飜譯するのかと云うたら、キツト澤山の理由と原因が言はれるであらうと思ふが、外國の人情風俗を知ると云ふことも、大きな理由の一つであると私は思ふ（無論何んの理由で外國の人情風俗を知るのかと云ふやうな議論が出るかも知らんが、それは私の踏み込む畑ではないやうだから、たゞ外國の人情風俗を知ると云ふだけのことにする）。

無論何處の國にも、チヤンと立派な文字と文章とがある故に飜譯は出來るのであるが、然し私は文字は人間生活の符號であると云ふ考へ方からして、如何に巧みに外國の文字と文章に通じても、それが實際にその國人の生活を知つて居らぬならば、飜譯の完全は不可能であると思ふ。この意味から云うて近代人が古典を飜譯することの一層不完全を思ふものである。

非常に形式的な生活をして居る或國人の生活から生れた小說は、キツト形式的な人間生活が表現されて居ると思ふ。

非常に平等的な生活をして居る或國人の生活から生れた小說は、又必ず平等的な人間生活が表現されて居るに違ひないと思ふ。

特に言葉など非常に階級的な言葉を使用して居る或國人の生活から生れた小說は、必ず其中の人物の言葉が、キツト階級的な言葉で書かれて居ると思ふ。

同じやうに平等な言葉を使用して居る或國人の生活から出來た小說は、小說中の人物の使ふ言葉が、又必ず平等な言葉を使用するであらうと思ふ。

此等の各々の特色とも云ふべき形式的生活とか、平等生活とか云ふことは、無論その通りに飜譯されて居る筈である。ところが飜譯者其人が、各その本國人の實際の生活を知つて居るか居らんかでは、必ず其處に相當の差が出來るであらうと思ふ。階級的な言葉で書かれた小說は、矢張り階級的な言葉で譯出せなければならんことは云ふ迄もないことである。同樣に、平等な言葉を使用して居る小說は、又平等な言葉で譯出されるべきであるが、こゝに因ることは常に使用して居る言葉が非常に階級的な言葉であるにも拘らず、そのことに何んの自覺も持つて居らん人が、平等的な言葉で書かれた小說を譯出する場合、知らず〳〵譯出された言葉が階級的になつて居るやうなことは、必ずしも絕無ではないと思ふのである。

支那人の使つて居る言葉は、非常に平等的である。例へば令尊とか令兄とか云ふやうな對人的な敬語、又は大人とか閣下とか云ふやうな極めて少數の除外例はあるが、

愛不愛（アイブアイ）　好きか嫌ひか

好不好（ハオブハオ）　よいかよくないか
要不要（ヤオブヤオ）　いるかいらないか
去不去（チユイブチユイ）　行くか行かぬか
來不來（ライブライ）　來るか來んか
買不買（マイブマイ）　買うか買はんか
坐不坐（ツオブツオ）　かけるかかけないか
拿不拿（ナアブナア）　持つか持たんか

此等の言葉は、例へば閣下と呼ぶ人に對しても、又商人に對しても、苦力に對しても、皆一樣に使はれる言葉であつて、相手が閣下であるからと云うて、おの字をつけたり自分よりも目下の人々であるからと云うて、おの字をつけなかつたりするやうなことは決してないのである。であるのに、かうした言葉を書いてある支那の小說を日本語に飜譯する場合、恐らく飜譯者は、知らず知らず相手によつておの字をつけたりつけなかつたりするであらうと思ふ。それは又例へ這間の消息を知つて居つても、日本文としてそれでは感じが出ないと云ふやうなことから、ワザとおの字をつけたり、つけなかつたりする人もあるであらうと思ふ。然し實際の支那人の生活から云ふと、相手に閣下と云ふ敬語は奉つても、それ以外の言葉では殆ど階級的使ひ分けはしないやう

である。

日本人の言うやうに、自分と同等の人間に對しては、ヤ、平等的に、

君　好きか嫌ひか

と云ふが、身分の違ふ閣下などに對しては、

閣下　お好きでいらつしやいませうかお嫌ひでいらつしやいませうか。

又自分の召使ひなどに對して、

お前　好きか嫌ひか

と云ふやうに、色々使ひ分けをするやうなことがないのである。例へば私が、自分の友人に對して、

你愛不愛（ニイアイブアイ）

と云ふ。それが身分の高い閣下級の人に對して、

閣下愛不愛（コウシヤアアイブアイ）

と云ふ位が關の山であつて、自分より目下の者例へば苦力などに對しても、

你愛不愛（ニイアイブアイ）

である。然し今日のやうに平等になると、もう閣下と呼ぶやうなことが非常に少くなつて來て、

殆ど、

你愛不愛（ニイアイブアイ）

が使はれて居るのである。日本語の君、貴方、お前、手前、其方、貴樣など色々の言葉で呼ばれるのに對して、支那語では你（ニイ）（爾が楷書である）が一つである。北京語で您（ニン）と云ふのがあつたが、今日は殆ど使はなくなつて居る。だから若し支那語の你愛不愛を、日本語に譯する場合は、日本語の君に譯するか、貴方にするか、其方か手前か第一これに困る。日本的にならその相手方次第で、色々と變へて使つた方が讀者に對しては解りよくて譯出にも亦た便利であるが。それでは實は支那人の人情が少しも解らんことになる。

現に今日迄の支那小說の飜譯は、恐らく相手方次第で、色々と日本式にチヤンと階級的に譯出されて居るであらうと思ふ。それは意識的に又無意識的にさうなつて居る筈であるが、私はそれ故に、支那人の人情風俗が日本に傳はらないのだと云ふのである。

逛々去（コウコウチユイ）　遊びに行く

借光（ナエコウ）　手を止める

別撒謊（ベエサアホウ）　嘘を云ふな

好看的（ハオカンデ）　綺麗な

容易的（ヨンイデ）　易い
好極了（ハオチーラ）　極めて好い

などの單語から、

明天你有工夫沒有工夫（ミンチンニイユウクンフ　メイユウクンフ）

『明日你ヒマがあるかないか』

你要吃甚麼東西（ニイヤオチイシエンマトンシイ）

『你何を喰べるか』

這是我的房子那是他的舖子（チヨエシイウオーデフアンツナアシイタアデプウツ）

『これは我の家だあれは他の店だ』

又こゝに使はれて居る是と云ふ文字を、だと譯すか、でと譯すかも考へなければならぬ。我を私と譯すか、僕と譯すか、吾れと譯すか、乃公（オレ）と譯すかも無論問題である。他も同樣である。彼と譯すか、彼の人と譯すか、彼のお方と譯すかなども同じことである。其外の有工夫沒有工夫でも、要吃甚麼東西でも、房子でも、舖子でも、人によつておの字一字つける必要はないのである。悉く一樣である。

こんな言葉の使ひ方をして居る支那人の氣持ちは、日本人のやうにチヤンと御主人と召使ひと

小僧と車夫との間に、一々言葉を變へて使つて居る。特に店員とお客樣との間など、絶對に敬語一點張りで使はねばならぬ。それを一種のサービスの如くさへ思うて居るやうな人々には、なかなかに解し難いものであると思ふ。

始めて日本から來られた旦那樣や奥樣方が、支那人の阿媽（アマ）（女中）の言葉を聞いて何んと云ふ失禮な言葉をつかふのであらうかと、不審がられることが多くあるが、それは日本的の頭で支那人の言葉を判斷されるからであつて、支那には豆や大根や芋に迄おの字をつけるやうなことは斷然ないのである。

孔子樣の言葉でも、子曰は、ツユイと讀むだけであつて、それは商人であつても、農夫であつても、乞食であつても、苦力であつても、全く曰（ユイ）と讀むより外に讀方もなく、又誰の場合でも曰（いはく）と云ふ意味よりないのである。モツト〳〵例を澤山擧げて說明するのが本式であらうと思ふが、それは數限りもないことであるから、本式のことは別人にお讓りしておいて、私は矢張り漫談で此文を括ることにするが、兎に角飜譯は、原書の國人の實際生活を知つて居る人でないと、完全でないと同時に、何處迄も原書の國人の使つて居る言葉の內容を適確に日本語に（絶對にと云ふことは無論出來ないことであるが）寫す必要があると思ふ。詰まり支那人のやうに敬語と云ふものも餘りイヤ殆ど使はない國人の造つた小說などの言葉は、矢張り敬語を拔いた日本語で表現し

なければ、支那人の人情風俗は、決して日本人に傳へ得ないと思ふのである。

一度支那人の店へ買物に行つて見るとよく解る。支那商人の態度は、一體どうであるか、お客様であるとして一つ上に置いて扱うて呉れるかと云ふと、彼等は決して日本のやうにお客様として、店の方の者が一段下に下つて居つては呉れない。例の通り要不要（ヤオブヤオ）（入るか入らんか）と平等な言葉を使つて居る。たゞの一言でも尊敬した言葉など使つては呉れない。その態度はお金はお前のもの、品物は此方のもの、氣に入つたら買へ、氣に入らねば買ふな、と云ふ態度である。そして品物を買つてお金を渡すと、今はもうないが一元の銀貨の通用して居つた頃であつたら、渡した銀貨を賣臺の上にパン〳〵と拋げつけて見る。日本人はお客に對して非常に失禮なことをする非禮な奴と考へるのであるが、支那人の方ではお客も店員も何んの變りもないのである。若しも藥水（ヤオシュイ）と云うて硝酸で銀を盜んだ銀貨ではないか、又鉛（シエン）と云うて鉛の臺に鍍金した銀貨ではないか、銅（トン）と云うて銅にメッキしたのではないかと、お客様から貰うたとか使用人から受取つたとか云ふそんな考へは毛頭ないのである。かうした態度の、イヤ行動を書いた小說などを飜譯する際に、日本式のお客心理や店員心得で書いたら、それこそ丸つきり支那ではなくて、支那人式の姓名のついた日本人のお客と店員とになつて終うであらうと思ふが如何。

をかしい文字

正しいと云ふことは、言葉を替へて云へば道理に叶うて居る（少し不味かも知らんが）と云ふことであると思ふ。從つて道理に叶はんことは、正しくないと云へると思ふ。その正しくない道理に叶はんことを無理と云ふ。無理とは文字通り理の無いことつまり道理のないことを云ふのである。

そこで私は何事によらず物事は無理をしてはならんと思ふ。

最近、私は滿洲を四十日間歩るいて來たが、鐵道沿線の處々に『鐵路愛護村』と云ふ文字を見た。日本人にだけ讀ませるのなら是れでもよいが、滿洲には日本人だけでなく、三千萬の滿人が居る。從つて必ず滿人も見るであらうし山東から來て居る支那人も見るであらう。さうした時にこの字の書き方では書いた方の意味が通じないやうなことは無いかと思うた。なぜ鐵路愛護村と書くと、鐵路は村を愛護すると解釋されはせんかと思ふのである。書いた方では多分鐵路を愛護する村と云ふ意味で書いて居られるのであらうと思ふから、さうなると丸で反對に通じるのでは無いかと思ふのである。滿人や支那人には『愛護鐵路村』と書いてやらねば、鐵路を愛護する村

と云ふ意味にはならんやうに思ふがと或人に聞いて見たら、日本文を覺えさせるのです、と極めて無雜作に言はれたが、言はれる通りに日本文を覺えさせるのなら、チャンと正確に鐵路を愛護する村と書いてやらんと通じないでのはあるまいか。支那の文字を支那式に支那文學ばかりで並べると、說明がない限り、滿人や支那人は支那文的に解釋すると思ふが如何と云うたら、あれは漢字を日本流に並べたのです、と云ふ返事をしられた。成程あの並べ方は日本流であつても、漢字ばかりを並べたら說明のない限り滿人も支那人も支那流に並べたものとより思はんと思ひますが、と聞いたところ、それもさうですネ、と云はれた。

又鐵道のことだが、或る驛に、墨爾根方面行換車と横書きしてあるのを見たので、或る人に聞いて見たら、それは墨爾根方面行乘替と云ふことです、と言はれた。實は私もさうであらうと思うて居つたが、書かれて居る文字の排列を見ると、墨爾根方面行と迄が日本流であつて、換車とは支那語であるやうだ、これなども日本文でなら全く日本文で、墨爾根方面に往く人は乘り替へと書くか、假名ヌキで書くなら到墨爾根方面去客人換車とでも書かねば、矢張り滿人や支那人には通じないのであらうと思ふが如何。

も一つ是れは、熱河省承德の喇嘛廟や離宮見物の時氣がついたのであるが、假指定古蹟と云ふ文字が横書きにされたり、大きな梅杭に縱て書きにされたり、省長の名に於いて出されてある布

告文の中に迄書かれであるのを見たが、この文字の使ひ方は、非常に危險ではないかと思ふ。それは第一字の假と云ふ文字であるが、この文字はニセと思はれる事が多くはないか。吾々は上海で毎日使つて居る言葉では、假はチャアであつて、假票(チャアピヤオ)はニセサツであるのを始めとして、假は全くニセの意味に使つて居る。北京語でも、假チャアは、ニセと云ふ意味に最も廣ろく使はれて居ると私は思ふ時に、假比とか假如とか云ふことがあつても、平常最も廣く使はれるのは、矢張りニセと云ふ意味であるから、あゝしたところへ使はれるには、寧ろ暫定とか暫行とかモツトはつきりした文字を使ふ可きではないかと思ふ。以上は無論ホンの一例である。が、兎に角それぞれ專門の學者によつて使用されて居るのであるから、私のやうな文盲の者が彼れ此れ云ふ筋合ひのものではないのであるが、たゞはつきりして欲しいと思ふ考へから書いたに過ぎないことであるが、こゝに一つ日本內地で遍く使用されて居る文字ではあるが、滿人や支那人といよ密接になつて來た今日では、餘りにもをかしいから使用を改正して貰ひたいと思ふ文字が一つある。

卵子　鷄卵

この文字であるが、鷄のタマゴと云ふ意味で使用されて居るのであるが、何時何處で何う變化したのか誤つたのか知らんが、鷄卵とは今日の支那人には鷄の睾丸(キンタマ)と云ふ意味である。今日の支那人はタマゴは蛋と云ふ文字で書く。鷄のタマゴは鷄蛋と書く。日本文だからかまはんと云ふ人

があるかも知らんが、何もわざ〳〵違つてるものを頑張るにも及ぶまいと思ふ。簡短に訂正出來ることだから訂正するがよいと思ふ。卵子に至つてはいよ〳〵もつてをかしい。男根と云ふ意味になるからである。

かうした文字は、使用法を訂正しないと云ふと、たゞをかしいだけでなく、時に起さなくてもよい問題まで起すやうな恐れが多分にあるからである。或は日本で訂正する必要はない、支那の方で改正させたらよいと云ふ人があるかも知れんが、元來文字と云ふものは、始めに形から出來て居つて、つまり人間生活の一種の符號である。そして漢字と云ふものは支那が符號として造り出したものであるため、改正も訂正も出來ないやうな文字がなか〳〵少くない。この卵子と云ふ文字なども、文字の形を見ればよく解るやうに、改正も訂正も頗る困難な、已にその形に於いてどうすることも出來ない文字であるから、日本での使用法の改正をした方がよいと私は思ふ。キツト此外にも同樣の文字があると思ふ。たとへば、天井とか茶碗とか云ふやうな文字などもあるが、此等は特にをかしいことでもないから私は言はんことにする。

吾等の行政が大陸に展びて行くには、無理があつてはならん。道理によつて人々を導かねばならん。無理は發見次第除かるべきである。極めて小さいことではあるが、文字は非常に廣い範圍に影響を與へるものであることを思うて漫談一席依如件。

漢字六分ノ一說

一

昔の人はよく文字を粗末にすると罰が中るとか、文字を書いた紙を御不淨などへ持つて行くと天神樣から叱られるとか、字が下手になるなどと云うた。何んで罰が中るのか、何の理由で天神樣から叱られるのか、私は知らなんだ。

もう上海では澤山見ることは出來ないが、それでも支那街へ行けば通り筋の家と家との間に、石造の塔型の火爐と云ふものがある。塔の中は洞になつて、丁度手の屆く位の處に火口がある。通りがかりの人が小さい字の書いた紙や、時に新聞紙など指の先きにつまんで火口から抛り込んで行く。火爐の中はいつもクス〳〵とたよりない火が燃えて居つて、白い烟がモク〳〵と立ち昇つて、火爐は大概黑くすゝけて相當の時代物であることが解る。

火爐のある附近や街の此處彼處の柱に『敬惜字紙』と云ふ文字の書かれた小さい竹籠が掛けてあつて、時々新聞紙の泥まぶれがはみ出して居るやうなこともある。

この籠には凡そ字の書いた紙ならなんでもよい。それが廣告の紙でも習字の反古であつても亦帳面の破れであつても、石版刷でも何んでもよい。地上に落ちて居るのを拾うて入れて置く。そしてその籠から出して火爐で燒棄てるのである。

然しそれは誰も決つた人があつてするわけではない。又誰彼が交代でするとも云ふのでもない。全く誰がしてもよい、自由である。こゝらがほんとの支那式とでも云ふのであらう。

今日も尙よく見受けることがある。大きな竹籠を一荷纏めて輕々と擔つて、戸毎の紙屑を貰うて歩いて居る人がある。集めた紙屑を賣つて生活して居るやうな者もあるかも知らんが、由來この仕事は一種の隱德的なものであつて、云はゞ特志の隱居さんのする仕事である。日當や月給を貰ふのでなく、文字通り敬惜字紙の觀念から奉仕的に誰に賴まれたのでもなく、勝手にして居るのである、全く支那式だ。

集めた紙は火爐に入れて燒き棄てるのである。中にはお金持ちの人が日當をやつて自分の代りに人を雇うて、文字紙を集めさせて燒き棄てさせて居る人もある。

凡そ此等のことは文字と云ふものに對する一種の尊敬を捧げてのことであることは、私にも解るが、それは人間の感情の產物に外ならないと私は思ふ。

さうした美しい又麗はしい人の心のことなど、まア〳〵別世界のことゝして、極めてザツクバ

ランに私は一流の獨斷で、

『文字は人間生活の符號である』

と土臺を据ゑて見る。

處がこゝに一つ頗る厄介千萬なことがあるのだ。それは支那では支那人の生活の符號として造り出された文字であるから、今日でも矢張り文字は符號としての意味よりないやうである。

然るに日本へ舶來した文字は、符號としての文字ではなくて、實は學問としての文字が舶來したのであつた。それ故日本で使はれて居る漢字の意味と云ふものは、恐らく支那人の實生活とは違つたものであらうと思ふ。

二

然し假りに百歩を讓つて、舶來當時は支那人の實生活と共に舶來したとしても、其後支那人の生活と云ふものは、幾度か變遷して居るのである。だから生活を表現する文字の內容は、從つて變化して居る筈である。

もうこれだけ言うただけでもなる程と首肯出來る答であるが、念のために少しばかり實例を擧げて置かう。

先づ時代の變遷、つまり支那人の生活の變化による文字の内容の變化の最も普遍的なものを見ると、『座』と云ふ文字である。わが奈良朝、かれの唐の時代には、唐人も矢張り何にかの上に『スワル』生活をして居つたらしいから、日本へ漢字が渡つてからも『スワル』と云ふ意味に使はれて居つた。そして日本人は今日も尙ほこのスワル生活をつゞけて居るから『座』の字の意味はスワルでよいのである。

請座々々（チンツオチンツオ）（日本讀みではコウザセ、コウザセでドウゾオスワリクダサイと云ふ言葉の丁寧さを現はして居るのである）

ところが、この『請座々々』は支那人も昔から今日迄引き續いて使用して居るのであるが、而も昔の支那人が坐つた生活をして居つたのに反して、今日の支那人は椅子に腰かける生活をして居るのであつて、その腰かける實生活の表現としての請座々々は、云ふまでもなく『ドウゾオカケクダサイ』である。つまり昔スワツタ生活の時代には、『座』の字はスワルと云ふ意味であつたが、今日腰かける生活の時代では『座』とは腰かけることである。

反對に支那人が日本文を讀む場合にも、同様な場合の多くあることは云ふまでもあるまいと思ふ。

いよ〳〵符號としての文字が如何に日本に使用されて居るかと云ふ實例を擧げて見よう。

茶碗（チャワン）（日本讀みではチャワンであつて日に三度御器と云ふので飯を頂くのである）

ところが茶碗とは云ふ迄もなく茶と碗と、二つの文字の組合せであつて、茶を飲む碗につけた文字である、然るに日本人は御飯を頂く碗、つまり飯碗と云はねば意味をなさない器を、平氣で茶碗と云うて居るのである。

然かし支那人は、昔も今も茶碗ではお茶を飲んで居る。そして茶碗と云うて居る。又昔も今も『飯碗』（ファンワン）で御飯を頂いて居るのである。そして飯碗と云うて居るのである。文字は生活の符號なるが故にちやんと茶碗は茶碗、飯碗は飯碗とハツキリして居るのである。

序でに云ふと、日本人が御飯を頂いて居るあの器は、實は支那人がお茶を飲む茶碗である。茶碗の蓋は漬物を入れるお皿ではない、碗の方に茶の葉を入れて熱湯を注いで、あの蓋で茶の葉をこしてお茶を飲むのである。

襖（フスマ）（日本讀みはフスマと讀んで建具、一名カラカミと云ふ）

ところがこれが又飛んでもないものであつて、實は襖とは『綿襖（メンアオ）』の略語である。即ち襖とは腰から上の綿入れの衣類のことである。

百姓（ポシン）（日本讀みはヒヤクシヤウと讀んで農夫を指す。或る學問上の專門語としては違つて居るかも知らんが、常識的には農夫の事である）

支那でも百姓と云ふ文字は無論あるが、何事も農夫に限つて使はれる文字ではない。これは百家姓と云うて、支那人四億の姓は百に限られて居るものである。現在では五百にも六百にもなつて居るが、それは俗に小姓と云ふものであつて、根本の性は俗に大姓と云れて百に限られて居るものである。それ故に百の姓とは庶民のことである國民を指して居るのである。農夫も無論その一要素であることに相違はない。

三

蒲團（フトトン）（日本讀みはフトンで、夜具や坐る下に敷く綿入れの敷物を指して云ふ）

これも亦支那で使はれて居る文字であつて、蒲團とは文字通り蒲で團めた物を言ふのである。丁度日本の神主さんがお宮で敷いて居られる俗に圓座と云ふものがよく似て居る。支那では僧侶が使用するもので、お寺へ行くと澤山置いてある。中味が藁で、トヂて團くしてある。三拜九拜する時にスネの下に敷く物を云ふのである。

天井（テンチン）（日本讀みはテンジヤウと讀んで、室内上部の小屋組と云ふやうに書いてある。兎に角テンジヤウとは吾々をしてスグ上を向かせる。電燈などのブラ下つて居る上の部屋との仕切りを言ふらしい。天井と書くのは火災を忌みてこれを壓するに起る、なんかは餘りにも馬鹿々々しい說

明であるが堂々たる辭書にも書いてある）

然も天井（テンチン）と云ふ文字は支那でも昔から使つて居るのであるが、意味は全く違つて居るのである。支那には雨水を取つて飲料水にして居る地方が澤山ある。その地方では家の屋根を四方から井字形に葺き下して中央に四角い明り取りが大きくあけてある中庭がある。その中庭を指して天井に云うて居るのだ。天井には大きな水甕が一隅又は四隅に置いてあつて樋によつて雨水を取つて貯へるのである。つまり天から水を取る場所だから天井と云ふのである。

私が昔浙江省紹興へ旅行した時一寸手を洗はうと思うたが、其處らに手洗鉢もないので、ウロウロして居ると、天井にある大水甕が目についた、蓋を開けて見ると水が一パイあつたので、早速手をつゝこんでジヤブ〳〵と洗つて居ると、ボーイがやつて來て、イケナイと云ふ。ナゼかと云ふとこれは飲水であると云ふ。私は再び蓋を開けてよく見たところ、これはしたり、中の水は全くの腐水であつて、ボウフラが一ぱいだ。ピン、ピン、ピン、ピンと棒を振つて居る。

私はこんな腐水がどうして飲めるかと云うたところ、彼れ曰くこれは最好の水だと云ふ。そして熱湯を持つて來て私の茶壺に注いで呉れて、これが彼の水だと云うた。

成程煮沸してしまへば、最好になるのであらうとばかり思うて今年に至つたのであるが、フトしたことから、ボウフラ水が最好の飲水である理由を發見した。

『ボウフラのやうな小サイ生き者でも生きて居られるやうな水は毒水ではないと云ふことだ』

日本は水と云ふものに惠まれて居るために、ボウフラ水と一口に片づけて終つて居るのであるが、水に不自由な、水のために天井まで作つて雨水を取つて貯へて飲む支那人には、一口に腐水と云うて片づけるワケには行かないのだ。毒水でない限り、腐水なら煮沸さへすれば毒にはならん、飲む事が出來ることは、理論や試驗管の問題でなくて、實に幾千年の永い間幾多の犧牲者によつて作り出された、化學的結論である。支那人の幾千年の歴史は、人間界の結論と云ふ結論は悉く作つて居るらしい。

ともかく、以上の例で符號としての文字の意味が解るであらう。そしてそれが日本ではさうでなく使はれてゐるのである。

それに、何分日本に文字と云ふものがない時代に、漢字が學問として舶來したために、文字そのものが直に學問ででもあるかのやうに信じられて、文字を知つて居るものは學問もある者と思はれ學問のある人は文字を知つて居ると思はれるやうになつた。

そこで文字の意味が非常にむづかしいものゝやうにも考へられて居つた處へ、日本では假名と云ふ『アイウエオ』とか『いろは』とか云ふものが出來ると共に、漢字を本字と稱して特別の待遇を與へて、いやが上にも漢字の意味を重く解釋するやうになつた。また支那では誠に一般的な

意味よりない文字まで重味をつけて、一般から區別するやうなことまでした例もある。

四

論語の初めにある。

子曰（日本讀みではシノタマハクと讀む。然し普通人の場合はイハクと讀む）

この『曰』と云ふ文字の讀方のノタマハクと讀むのは、孔子に對して特に敬意を拂うてであらうと思ふが、然し支那にはそんなことはないのである。曰と云ふ文字は乞食でも苦力でも同じことユイである。人によつて二種の發音はないのである。

全く意味の違つて居る文字には、

告訴（日本讀みはコクソであつて、警察とか裁判所へ訴へることを云ふのである）

ところがこの二字は支那では『告訴我』私に話すとか、『告訴他』彼に話す、『他告訴作』彼が貴方に話すと云ふやうに、たゞはなしする、告げる、と云ふ意味よりない。最もヒドイ文字には、假（日本讀みはカリニであつて、假契約とか假祝言などの時に用ゐるのである）といふ文字がある。

ところが何んぞ知らん、支那ではこの文字はチヤアと發音してニセと云ふ意味である。つまり

假契約はニセ契約となり、假調印はニセ調印となり、假祝言はニセ祝言となるのである。

かうして色々集めて考へて見ると、一體支那人が生活の符號として使つて居る漢字の意味と、日本人が漢學から影響されて覺えた漢字の意味との間には、相當大きな差のあることが考へられる。

然らばその差はどの位あるものであらうか。十把一束にして概算して見ると、それは丁度里數でチヤント割り出せるから面白いではないか。

一里（イイリイ）（日本讀みがイチリで、三十六丁の長さを言うて居るのである）

ところが支那では一里（イイリイ）と讀んで日本の六丁の長さであるから笑はせるではないか。あの廣大な國でありながら里數の長さが馬鹿に短い。そこには三十丁と云ふ大きな差が出て來るのである。この差を差引いて見ると、丁度、それは六分の一となるのである。漢字六分の一說と云ふのはかうして出來たのである。

漢學廢止說

時　雨蕭々として鄉愁を誘ふ秋の夕

場所　上海の漫談會

人物　甲漫談子
　　乙漫談子
　　丙漫談子

讀書や、著述に飽きた人や、仕事もちよつと一休みと云ふ人々である。

甲　墨子と云ふ本を敎へられて一寸覗いて見たが、ナカ〳〵面白い本だネ。

乙　イヤ驚いた。君にしてこの心掛けありとは、人は誠に見掛けによらぬものだネ。

丙　彼ナカ〳〵の讀書家だよ。時々爪牙を見せるからね、我輩は大いに恐れをなして居るのだよ。

乙　僕は恥かしながら、甲にそんな隱藝があらうとは今日迄全く思はなかつた。

甲　一體それは讀めて居るのか、それとも冷やかしてるのか、マア〳〵何んでも好いとして、實

際僕は墨子の日本譯を讀んで感心したり驚いたりしたよ。

丙　それは一體どんなところに感心したのぢや、又驚いたのぢや。サア〳〵話したり話したり。

乙　實は僕は未だ墨子は讀んだことがないのだが、非常に面白いとは聞いて居つた。何んでも耶蘇敎によく似て居ると云ふぢやないか。

甲　さうだよ。實際耶蘇敎に彷彿たりだよ。

丙　さうだ墨子の說は兼愛と云うて、人間が仲好く生活するにはお互ひに愛すると云ふことが根本問題であると說いて居る。然し墨子はたゞ愛だけでなく、モ一つ交利と云ふ事を說いて居る點は、僕は耶蘇敎よりも餘程實際的だと思ふネ。

甲　實際だ。吾々日本人が讀むと基督敎の聖書よりもより解りよく墨子は說いて居るネ。そして乙君の言ふやうに、たゞ愛と云ふ人格的(少し語弊があるが)の方面だけでなく、交利と云ふ人間生活の一面である經濟的の方面をも說いて居る點は、確かにより實際的であると思ふネ。

乙　それは偉らいものだネ。そして耶蘇敎とはどつちが古いのかネ。

甲　何んでも、西曆紀元前四百七十年頃から三百年頃迄の間の事柄であると云ふから、耶蘇よりも三百年か四百年以前の人らしいネ。

丙　何にしろ、墨子と云ふ人が、ほんとに居つた人かどうかが判然しないのだからネ。

甲　僕は原書がどんなに讀まれて、どんなに解釋されるのか知らんが、國語に書き改められた文を讀んで見ると、面白いことがある。——聖人は天下を治むるを以つて事を爲す者なり。必ず亂の自つて起る所を知つて焉ち能く之れを治む。亂の自つて起る所を知らざれば治むる能はず。これを譬ふれば醫の人の疾を攻むるが如く然り。必ず疾ひの自つて起る所を知つて焉ち能く之れを攻む。疾の自つて起る所を知らざれば攻むる能はず後略——と書いてある。此中に『亂を治む』と治の字が使つてあつて、『疾を攻む』と攻の字が使つてある。そして日本讀みでは共にをさむと假名づけしてあるのであるが、治と云ふ文字ををさむと讀むのは文句は云はないが(云ふことを知らんからでもあるが)、攻と云ふ字ををさむと讀むには、少し文句が云ひ度いやうな氣がするネ。同じをさむと云うても、疾ををさむと云ふのは、亂ををさむと云ふをさむとは別の意味であるか、又同一の意味であるか知らんが、攻と云ふ字をワザワザをさむと讀ませるには、きつと何んとか彼とか一流の文句があるのであらうとは、無論承知の上であるが、私はこれはせむと讀んだ方がよいと思ふ。醫者が疾ひを治すると治の字を使ふ。其時はをさむと讀んでも文句は言はんが、攻擊の攻をどうしてをさむと讀ませるのか、私はどうしても贊成できない。墨子がどういふ意味で書いたか知らんが、醫者が疾ひを攻るから攻の字を使つたのではあるまいか。支那音で讀むのならクンとかコンとか發音する

のであらうが、支那音で讀まんのならワザ〳〵をさむと讀ませないでもせむと讀ませてもよい筈ではあるまいか。せむと讀ませては意味が通じないのかと云ふと、私は充分通じると思ふ。醫者は疾の自つて（この自と云ふ字をよつてと讀ませるなども、どうかと思ふが）、起るところを知つて焉ち（此字なども果してすなはちと讀むべき字かどうか私はすくなからず疑問に思ふが）、能くこれを攻むと讀んで、何んの不都合はないと私は思ふ。無學な私の云ふことだから間違つたら御免下されだが、私はワザ〳〵變ちきりんな讀方は止めて頂きたいと思ふ。どうか讀方は出來るだけ一つにして頂きたいと思ふ。文字の發生は、生活の符號であると云ふ立場からこの希望を漫談する。古典學問と云ふものはそんなものではない。學問と云ふものは無學な者の彼れ此れ嘴を容れるものではないとお叱りを受ければたゞはい〳〵と引き下るだけであるがネ。

丙 君は少し漢字を敵視し過ぎる傾向があるやうだネ。さうした讀み方を色々にするには、各々その據つて來るところがあつて、讀ませられて居るのだからマア餘り畑違ひの文句は言はんがよいネ。

乙 甲は學問と常識とを混交させる癖があつて困る。イヤ時々笑はせることがある。君のやうに常識一點張りの實際生活の事ばかり主張する人間には、深遠な學問の事なんかマア言はんが

いゝな。言うて恥にこそなれ、決して君を益するものではないからネ。

甲 漢學者から叱られるかと思うて居つたら、早くもはからざる兩君からお叱りを受けた。友達甲斐に喜んで御叱りを頂戴するとしよう。ハイ〳〵以後謹しみます。でも矢張り茶碗はお茶を飲む碗であり、飯を食ふ碗は飯碗であつて欲しいネ。或は今日の私の漫談には、無理と間違ひがあるかも知らんが、兎に角日本の漢字の讀方には隨分下らんものがある。僕の知つて居る支那人の日本へ留學した人々に、日本の學問で何が一番困難かと聞くと、彼等は言下に漢學と云ふのである。漢學がナゼそんなに難學かと云ふと、讀み方も解說も通じないと云ふのである。それには色々の原因もあるであらうが、假へどんな原因があるとしても、苟も支那の文字が支那人に難學であると言はせるのは、如何に日本の漢學なるものが、支那人の使ふ文字から離れて居るかと云ふことを、最も雄辯に語つて居るのであるからネ。

丙 日本の漢文が、そんなに支那人に六つかしいのかネ。僕等はどんなに考へて見てもそんな事はないと思はれるがネ。頭から漢文の文も文字も皆な支那のものではないか。それが讀めないとか解釋が通じないとか云ふのは、一體どうしたのであらうか。

乙 日本の漢文と云ふのは、古文と云ふ支那文であつて、今日の支那人は全く口語文より知らないから、古文は讀めないのだ。從つて意味も通じないのだよ。たとへ讀方は違うても意味位

は通じさうなものだと思ふのだが、何分日本の漢文は唐時代からの正統派であるに反して、支那は其後幾度幾十度の變遷を經て、今日使つて居る文字の表現が、今日の支那人の生活を表現して居る。その文字の意味より知らん若い留學生には、唐代の正統派の解釋が通じないのであらうと思ふが、兎に角それは困つたことだネ。

丙 兎に角日本の漢學者は、今日でも出來るだけ一般人の讀み得ないやうな珍らしい文字を並べることが、何か重々しいやうな自己麻醉にかゝつて居るやうに思はれる。あゝしたことは何んとか改革する必要があると思ふネ。

乙 東洋平和のため、日支が提携の必要がある今日であるから、日本の漢文の如きは、古典學問として專門學校以上にこれを課して、中學程度には寧ろ今日の支那語を課した方が、實際に間に合ふのではないかネ。何時であつたか、漢學者の漢學廢止論と云ふ意見を見たことがあつたが首肯する點がなか〳〵あつたよ。

甲 さうだよ。東亜の和平の實際的行動として、吾等の前には支那語の必要があると同時に、支那人の前には日本語の必要が展開されて居る。少くも漢學は現代の支那學と改革される必要があると思ふネ。

一同 賛成だネ。

房字

可愛い子には旅をさせ、とか、旅は憂いものつらいものなどと云ふと人は何んとなく少しは感傷的になるものである。そして石童丸や阿波十を思ひ出したりするものである。然しそれは旅の一面であつて又の一面は旅は樂しいものであり又愉快なものである。人は旅に出て始めて人生と云ふものを味ふものだと云うても敢て過言ではあるまいと思ふ。夫故に古來東西の聖人は人の一生を旅路に譬て敎へを垂れて居られるのである。人の名に房子と云ふのがある、國の名に房州がある、名人に安房と云ふ人がある。漱石の書齋も何とか山房と云うた。筆墨紙などを文房具と云ふ、罪人の部屋が監房でお臺所は厨房と云ひ、その主權者は女房でウント離れて何々大臣官房と云ふのもある、とかう房と云ふ字を調べて見ると日本で使はれるこの文字の數は僅かに十指を折るに足らずである、オツト最近茶房と云ふ字も使はれて居るとの事であるから、これを序でに入れて置く、そして支那で使はれるこの房の字を並べて見よう、讀方はフアンである。

藥房（ヤオフアン）何々大藥房と云うて藥屋のことである

書房（シユフアン）書店のことである

油房（ユファン）　製油工場を云ふ
棧房（ツアンファン）　倉庫のこと
賬房（チャンファン）　帳場又は會計科
牢房（ラオファン）　監獄とか牢屋
兵房（ビンファン）　兵營
平房（ピンファン）　平屋のこと
洋房子（ヤンファンツ）　西洋館
新房子（シンファンツ）　新らしい家屋
舊房子（チュウファンツ）　古い家
空房子（コンファンツ）　空家、空部屋
掃房子（サオファンツ）　部屋掃除
造房子（ツアオファンツ）　家を建てる、部屋を作る
房東（ファントン）　家主
二房東（アルファントン）　又貸の中間家主
房錢（ファンチェン）　家賃

房產（ファンツアン）　家屋敷
開房子（カイファンツ）　部屋を開ける
看房子（カンファンツ）　部屋を見る
關房子（クワンファンツ）　部屋を閉める
煙房（イェンファン）　阿片を吸ふ部屋
內房（ネイファン）　妻の部屋
紅房（ホンファン）　子供の生れた部屋
死房（スウファン）　人の死んだ部屋
官房（クンファン）　旅館の一等
房艙（ファンツアン）　船の二等室、船の一等室を官艙と云ふのと比べて官房と二分して使つてるやうな氣もする
茶房（チャアファン）　旅館、茶館、船などのボーイ

等々實に澤山である。友人が日本では近頃喫茶店が熾んに茶房と書いて居ると云うたので茶房隨筆の意味が解つたが、實はボーイ隨筆かなと思うて居つた。モウ一ツ官房と云ふと支那の人は旅館の一等室と考へる、だから總理大臣官房なんて書いてあると總理大臣一等室と思うて居ること

と思ふ。

兎に角この房と云ふ字は矢張り部屋のことである。少し意味が違つて居るのは茶房と房艙と位のものである。

山房で思ひ出すのは、杭州三天竺の上の天竺の町である。寺の名はたしか法喜寺と云うた思ふが、その本堂の前の一本町で家數も僅か數十戸に過ぎないのであるが、何れの家にも何々房とか何々老房とか新房とか殆ど房と云ふ字のついた看板を掛けて居るのが私の目についた。大方毎年三月頃の會（お祭）に各地から押すな押すなで參詣する善男善女の宿であるらしい、お四國詣り の遍路宿と云ふやうなものであらう、何れの房にも正面に佛樣がお祭りしてある。そして房は全部男手であらうと思ふ。皆鼠色の法衣を着て居るから多分は寺からハミ出た僧であらうと思ふ。

法喜寺の門内に白雲老房と白雲第一房と云ふのがあつて、門外に白雲東房と云ふのがあつた。思ふにこの白雲老房と云ふのが總本家であつて、第一房とか第二房とかに、段々と擴大されたもので、遂に他の看板の房も出來たのであらうと思ふ。流石に此方は僧房街であるだけに魚賣る家肉賣る店はなかつたが線香、蠟燭、紙寶、其他名物の小サイ豆腐乾など賣る家があるが、面白いことに兩替へはして呉れないで、物を買へばおつり錢は呉れるのである。何んでもないことではあるが、如何にも僧房街らしくて面白い。堂々たる鐵筋コンクリートの大伽藍が建ちつゝあつた

が、私にはそんな大建築よりも、アノ線香臭い古びた僧房街上天竺は、又行つてゆつくりとして見たい街であつた。

オツト忘れた、山の上まで上つた房の字にも下へ落ちるマオフアン（厠房）が確にあつた。

コンマを忘れな

私だけでもあるまい、日の照らぬ國はあつても、日本娘子軍の居らぬ國はなく、その娘子軍は殆ど九州の天草女、島原女であつて、彼等は何時も非常に多額の金を儲けて故郷へ錦を飾ると云ふことを聞いて居る。

私は此話を、實はウツカリ丸呑みして居つたのである。と云ふのは、故郷へ飾る錦と云はれて居るその金の高であつた。何百萬圓とか、何十萬圓とか、少くても何萬圓と云ふ金額であらうと獨り思うて居つたところが、數年前にふとしたことから、同じく大金儲けと云うて、又同じ大金儲けと云ふ文字で書いても、土地や處によつて、大金儲けの金額に大きな差のあることに氣がついた。私共が子供の時に、田舍で某さんは、長者だ富限者だと聞かされて居つた。その長者や富限者が大阪へ出て來て、長者番附を探がして見ても一向見當らないので、不思議に思うたことがあつたが、丁度それと同じことを人生五十になつて又繰り返へして居つたのである。

大金儲けして歸る天草女が、未だ長者番附に大關に書かれて居るのは見たことがない。イヤ島原女で、長者番附の三役になつて居るのも見たことがない。そんなことどころか番附の端しにで

も一人でも出て居るのを見たことがあるか。殘念ながら未だ見たことがない。つまり同じ大金儲けと云ふ文字や言葉で表現されても、その內容の數字は長者番附に出る程のものでなく、或は大都會の小金にさへも當らぬ小遣ひ錢であるかも知れない。イヤ多分、當らずとも遠からずであらうと思ふ。

上海見物や、支那旅行に來る人が、支那には非常な大金持があるさうだ、と聞かれることがある。それは大金持はないではないが、其處には同じやうな言葉や文字で表現されても、その內容に大きな差のあることを意識して居つて貰はんと困る。そこで私は、大金持はあります。然し日本の三井とか岩崎とか安田とか云ふやうな大富豪はないと答へると、大概ビツクリしられるが、此人とも私と同樣に同じ文字でも意味が違つたり、數字のケタが違つてゐることにお氣がつかないのだ。それ故に案外だと思はれるのであらう。私は永い間この馬鹿々々しい丸呑みをして居つたが、やつと氣がついた。

昨年夏、日本から來た人に、一つの謎を私は書いた。それは、

五年を永しと思ふ人と、二百六十年を永しと思はざる人

と云ふのである。吾々日本人はヤ、もすると數字のコンマを忘れて居る。同じやうに年數などにもコンマを忘れ勝ちである。

これ迄と違つて最も氣の永い支那人といよ〳〵密接になつて來た今日、この大切なコンマを忘れてはならんと思ふ。

其上に支那では、習慣上財産を一個所に集めてない、非常に廣く散在させてある（必ずしも支那だけでなく、日本でも西洋でもさうであるかも知らんが、何分私が財産を持つた覺えがないためにに、支那人だけより解らんのだが）。其又散在させてある財産が、一人の人の名義になつて居らん（それは社會上の危險や、政治的の危險や、色々の原因があつてゞあるが）。さうした社會に於いては、分散させてある財産の保護のためには、各所に肉親關係の者を住はせることが一番安全である。其所にも支那人生活の特色とも云ふ可き一夫多妻が生じる一つの路がある。財産を造つて、それに命令し得る本人の生存中は安全であるが（必ずしも安全と云ふことは出來ないが、比較的にである）、一度その命令權を持つて居る本人が歩んだとなると、こゝに當然發生するものは、これ迄忍從して居つた各個人の野心と利己心の發動である（除外例は無論あるが）。其處に現れるものは分裂である。而もその分裂を公然認めて居る支那の遺産の相續が、長子相續でなくて分散相續である。一時は決定的に分裂せしめるのである。つまり五人の子供がある人は、遺産は五等分される。十人には十等分と云ふ方法である（從來の習慣では、女には分配せない。そして女は他家へ嫁かせねばならぬその責任を長子が負はされる關係上、少しばかり長子は多く分前が

貰へると云ふことであつた。最近では女も男と同樣一人前の分前を貰へとか呉れとか云ふ法律が出來たとか云ふことである）。そのために親父が造り上げて、親父の生存中は、相當の財産家であり大金持であつた（內容的に日本や西洋と比較することは出來ない。コンマは違つて居るが）が、一度その親父が亡くなると共に、財産は全く分散されて小さくなつて終ふのである。最も遺産相續にも別の形式がある。それは等分せずして、兄弟全部で共同相續する方法であつて、たゞその遺産に據つて生ずる收入を、長幼の年順に毎年一人づゝで收得するのであつて、この場合は其年の收得者が、其年の祖先の祭りをする責任がついて來るのである。然し年によつて特別の大祭りが附隨して來ることがある。その場合は、キツト相互に幇忙々々する（助け合ひをする）であらうと思ふ。

又今一つの方法は、毎年の收入を年毎に等分に分配する方法である。この場合も祖先の祭りは同樣である。然かし長子以外の人は、多く鄕里には止まらないものであるため、祖先の祭りは大體長子に負はされた責任である。そのために兄弟達は各々祖先の祭りの費用は、その都度分擔命令によつて據出させられることもあるのである。兎に角支那では、財産も一代制度であると云うてよい。そのために日本のやうな大金持とか富豪とか云ふものはない。況んや英米のやうな大富豪などにも見られないのである。

いや全體の條件が合法と非合法とを問はず、大富豪の出來ないやうに出來て居る。それが支那の面白い點であり、變つた制度ではないであらうか。少くも私は此點は非常に研究すべきものであると思うて居る。

三種の貨幣

長かつたり短かつたり重かつたり輕かつたりしても、矢張り尺は尺であり、天秤は天秤である。それは適々同一の長サ、同一の重サにする申合せをせなかつただけのことである。

隣と云ふものゝあることを知らずに、タヾ思ひ〳〵に造つた惡意のない差に過ぎないものである。

然し一度び思ひ〳〵の尺や天秤が出來た以上、其後はその尺で、その天秤が出來た以上、其後はその尺で、その天秤でものを量るやうになつたことは又止むを得ないことである。

つまり日本には日本の尺があり、天秤があり、支那には支那の尺があり、天秤がありする所以であると共に、總ての事柄を各々自分の國の尺や天秤でソレを量つて居るのであるにも拘らず、時に日本人は支那の事柄迄日本の尺で量らうとする。支那人は日本の事柄を支那の尺で量らうとする。其處にお互ひに間違ひが、イヤ長サや重サの違ひが出るのではあるまいか。

正しいとか道理だとか合理的だとかお互ひに平氣で口にしては居るが、恐らくお互ひ日本人の間でも、必ずしも同じ考への人ばかりではあるまい。程度の差もあらうが、時に尺の違つて居る

やうな人もあるであらうと私は思ふ。

況んや日本人と支那人とでは、キツト尺や天秤が違ふやうに、違つたものがあると思ふのである。

支那人は日常の言葉の中でよく有道理(ユウタオリイ)沒有道理(メイユウタオリイ)と云ふ言葉を使うて居る。一口に言へば道理があるかないかであるが、一體日本人の考へる道理と、支那人の考へる道理との間に、差は無いであらうか。私には其處が問題になるのである。

色々の方面から考へて見ると、支那人の道理とは何んであるかと云ふと、ドウヤラそれは、

自然界の方則

を指して居るやうである。その自然界の方則を、人事百般に應用して、自然界の方則に從うて居るものを有道理(ユウタオリイ)即ち道理が有ると云ひ、反對したり從はないものを沒有道理(メイユウタオリイ)がないと云ふやうである。

支那人の間では決算は年に三回であつて、舊曆の五月五日(端午節(トウンウクチエ))と八月十五日(中秋節(チヨウシチユウチエ))と十二月三十日(年底又は過年(ネンテイ又はコウネン))とである。この三節には、あらゆる決算をすることに習慣はなつて居るが、萬一金融が非常に逼迫してドウしても決濟が出來ないやうな狀態になると、各々同業組合は董事會(トンズウクエ)(理事會とでも云ふ可きか)を開らいて決濟を延期することにする。組合々々で

延期を決定さへすれば決濟は一期延期されることになる。

例へば靴屋の組合で決濟が一期延期と決まると、其旨を材料屋である皮屋やラシヤ屋其他へ通知する。材料屋の方では又各々その買入れ先へ決濟一期延期を通知する。ソノ延期材料屋で喰ひ止められるか、その買入れ先である製造家で喰ひ止められると、遂にソレが錢莊迄及ぶか、ソレは其時の逼迫狀況に因るものではあるが、兎に角靴屋は全部一期先の支票(ツウピヤオ)(小切手)を書いて材料屋へ支拂ふ。材料屋はそのまゝ持つ人もあるかも知らんが多分申合せによつて裏書して製造家に支拂ふか、或は別に自分の一期先日附の支票を發行して製造家に渡す。製造家は錢莊か銀行へ持つて行く。結局決算は日歩だけの問題となつて、滯りなく決濟がついて行くのである。詰るところ全體的逼迫であるから、全體的に延期して決濟するのである。逼迫の現象に順應した方法を採するとでも云ふのか、決して無理なことをしない。極めて自然な方法を採つて行くのである。

窮すれば變じ、變ずれば通ずと云ふ自然界の方則を(一寸語弊もあるが)人爲的にも應用して決して無理をせん。よく支那人は全く私利私慾の人間の如く、又利己一點張の人間のやうに云ふ人もあるが、かうした現實を知つて見ると必ずしもサウでもないやうである。銀行に預金して置いてソレを引き出しに行つた時に、銀行に希望通り現金のない時など、今日は三分ノ一とか、二分ノ一とか、時に五分ノ一を渡して、又明日とか、明後日とか、銀行に現金の集つた時に受取る

と云ふやうなことが、平氣で行はれたり、銀行が公債の大暴落で資本の三分の二を缺損したと云ふやうな時でも、外國の銀行は取引先のことなど全く眼中に置かず、タヾ銀行自體の缺損を豫防する考へで、無警告で支那銀行の發行して居る紙幣の受け入れを停止して平氣で居るほど利己的な行動を採つて居る。時に支那人は、

銀行だつて商賣だ。儲ける時もあり損する時もある。特に公債と云ふものは相場があつて上つたり下つたりするものである。今公債が下つて銀行が缺損になつて居るやうな時に、預金を引き出したりなんかしたら反つて銀行が潰れる。ソレよりもモツト放つて置いて銀行の儲けた時に引き出せばよい。

と店の小僧の貯金としては、殆ど全財産であるほどの預金を一寸も引き出さうともせず、放任して靜かに銀行の儲ける時を待つなどの態度が、如何に大自然の方則に從つて居るものであるか。而してかうした考へ方を有道理と云ふのであるから、タヾ雷同的に理由もなく支那人は利己主義者だとか、私利私慾の塊だとか、ソンナ一面だけの見方では、ホントに支那人を知ることは出來ないと思ふ、無論知つたとは云へない。事によると吾々の方が學ぶ可きものが相當多くあるのではあるまいか。

支那人には今日迄、同じ貨幣でも三種のものがあつた。一種は大洋と稱する七錢二分の（錢と

は匁のことである）大きな銀貨であつた。紙幣はこの大洋を標準にしたものである。この大洋を一元と稱して（日本の一圓標準である）この標準で大洋一元、大洋一角、大洋一分と云ふ十進法的な勘定の仕方があつて、紳士紳商や外國人は總てこの勘定によつて、生活をするやうになつて居る即ち上層階級生活者の貨幣である。次ぎに今一種小洋と稱する貨幣があつて、一角と兩角の二種の銀貨がある。ソシテ小洋一元、小洋一角、小洋一分と云ふ十進法的な勘定の仕方があつて、大洋勘定に對して近年は約二割强安價であつた（日々相場があつて一定せないのが常態であつて、この小洋一角の銀貨を十個合せては大洋一元の銀貨の七錢二分よりは輕くて、六錢九分？位と思ふ。小洋兩角の銀貨五個を合せても大體六錢九分位の目方よりない。この二分程の差が、毎日建の相場の基本であつて、ソレに現貨の多少が影響して高低が生じるのである）この小洋と云ふ銀貨は、中層階級生活者の持つ貨幣であつて、上層生活者の間では小遣錢によりならんものであり、下層階級生活者の間ではヤ、大洋的位置に居るものである。下層生活者の持つ貨幣としては、實に一個一分の銅板（銅子兒とも銅角子とも云つて、地方によつては二分の銅貨もあり、四川省では昔から二百文と書いた大きな二分の銅貨もある）があつて、一厘錢の無くなつた今日では最も下位に在る貨幣で、小洋一角に對しては二十五個、小洋兩角に對しては五十個、小洋一元に對しては貳百五十個（この數字は一昨年の幣制改革頃の相場である）であり、大洋一角に對し

ては銅板は三十個、大洋大元に對しては三百個であるから、大洋一分は銅板は三個であつた。ソコデ勞働者連中の常食とする點心類が、今日大體一個の價が三個銅板と云ふことは、つまり大洋一分と云ふのと同じことである。ソシテこの銅板生活層の生活が、總てに於いて最も安價であることは云ふ迄もないのである。一昨年秋の支那の幣制改革はこの三種の貨幣を單一に大洋勘定の十進法に改變せんとしたのであるが、種々なる原因のため未だ上海だけさへも完全には改革されては居らないやうである。

私はかうした三種の貨幣が通用して、各々の層が極めて自然的な生活を繰り返へして居ることを、非常に面白く、如何にも支那人らしいと思うて居る。イヤ流石は支那だとも思はれる。支那人の生活は何處迄深いのか底が知れないやうな氣がする。果して西洋が進んで居るのか？　而もソレは矢張り支那の尺と天秤でなければ解らないやうな氣がする。

郵便支局長

西洋の哲人は、倒れかけてる者は突き倒して終へ、強い者だけが生き殘ればよいのだと云うた。東洋の哲人は、轉びかけてる者を支へてやれ、倒れて居る者は助け起してやれと云うた。何れが眞理であるとか何れが間違つて居るとか云ふやうなことは、私の領分ではないやうだ。私は沈默を守るとしよう。

だが、現在の世の中には、確かに或る時は突き倒しが勢ひを得てのさばつたり、又或る時は助け起しが優勢になつたりして居るやうである。いや同じ時に一方では突き倒して居るが、一方では助け起こして居るのが私の目にも見える。第一次上海事變より少し前から、北四川路方面が非常に發展したために、上海郵政局でもその方面の人々の便利を思うて、北四川路支局を狄思威路の突き當りに開設して呉れた。

私共に取つて誠に便利であつた明信片（ミンシンペン）（はがき）や郵票（ユウヒヤオ）（郵便切手）を買ふにも、郵便物の差出しにも、特殊郵便である保險信（パオシエンシン）（價格表記とでも云ふ可き方法であるが、一寸違つて居るのは郵便局で賣つて居る保險信用の狀袋を買つて、中に百圓でも五十圓でも自分の送金しようと思ふ

金額を、必ず紙幣で、手紙と共に同封して、規定の五個所を封臘で厳封して局へ持つて行くと、内容の金額に對して保險をつけて呉れるのである。つまり支那の郵便局では保險を營業して居つて、たゞにこの現金に對する保險だけでなく、小包や書留に迄も保險をつけて呉れる便利があるのである）とか快信（これは速達便である）とか、掛號（これは書留である）等に到るまで大變便利になつた。たゞ小包だけは稅關の關係上、どうしても本局まで行かねばならぬのだ。

然し、兎に角蘇州河の角まで行かねばならなかつたのが、大體手近で便じられるやうになつたことは、多くの人々を便利にして呉れたのであつた。特に私共では、年一年と郵送も增えて來た。特に日本への郵送物が非常に增えたので、一時に五十個六十個と云ふ掛號を差出すやうになつた。ところが或日の支那內地向けの三四十個の掛號を、この便利な支局が、どうしても受付けて呉れないばかりでなく、以後はお前のところのは澤山だから本局へ持つて行つて呉れと云うて斷られて郵便物を持つて歸つた。

最もそれ迄にも度々澤山だから本局へ持つて行けと云うて困ると、よく使ひの者が云ふのは聞いて居つたが、たゞ面倒臭ひので、そんな事を云ふものだと思うて居つたところが、今日はナカナカ强硬らしい。そこで改めて王先生に交渉に行つて貰うた、ところ時間がかゝつてもよければと云ふことが又郵便物を持ち込ませて一人店員をつけておいたところ、やつと夕方になつて歸つ

て來た。一體どうしたと云ふのだとよく聞いて見ると、支局長さんの言ふには、支局は人數が少いから澤山の郵便物を持つて來られると困るから本局へ行つて呉れと云ふのだ、と聞いて實は少からず驚ろいたと云ふのは、前にも云ふ通り北四川路方面の人々の便利のために設けて呉れた支局、その支局が澤山の郵便物を持つて來られては困ると云ふのは怪しからん、人手が足らねば增やしたらよいではないか、甚だ怪しからんことを言ふと思うたが、其後も彼此れ言ひながら、兎に角馬々虎々でやつて居つたところ、其中に支局長が代つて、新支局長は斷然受付けないと頭から寄せつけない。曰く：忙しいから澤山の郵便物は本局へ持つて行けと云ふのである。

私は直ちに詳細を書面に認めて、支局へ增員するやう請求した序でに、一言支局長の受付けないと云ふのは不合理であると、文句を言うてやつた。さうすると本局の監督課とでも云ふのであらう一人の局員が來て、始めからの話を聞いて曰く、それではドウカ、本局の方へ持つて來て呉れ、出來るだけ早くさせるからと云ふではないか。何んのことだ折角の私の抗議も更らに不得要領である。而も丁寧にどうぞ不都合のことがあつたら遠慮なく書面で知らせて呉れ、出來るだけ便利なやうに改正するからと云ふ御挨拶である。私はふと此時、こいつ一つ考へて見るべきだと思ふたので、勞駕々々で其日は別れた。然しドウ考へて見ても、局員の言ふことも支局長の言ふことも腑に落ちない。依然として私は、

忙しければ増員すればよいのではないか。吾等は支局の管理内に於いて、その便利に均霑すべき筈であるとより考へられない。

然し何んと云うても支局は受付けて呉れない。書面で抗議した時、局員は來て色々詳細を聞いては呉れたが、それでは本局へ持つて來て下さい、出來るだけ早くやらせます、と云ふ御挨拶である。この抗爭は私の負けだ。こんな話に彼此れ言うて居るよりも、澤山の郵便物は本局へ持たしてやつたがよいと、たうとう本局差出しに變更した。イヤ止むを得ずさせられたのだ。だが頭から私の方の郵便物全部を受付けないのではない。少しの郵便物なら何時でも受付けて呉れる。ただ澤山の郵便物だけを受け付けないのである。

日本の郵便局であつたら、多いから受付けないとか、少いから受付けると云ふやうなことはない。例へ多くても少くても、取扱ひ範圍内の郵便物であれば、文句なしに受付けて呉れるのだが、支那は其處にその一寸違つたところがあつて甚だ困る。然し同じ四川省の重慶へ送る小包でも、夏と冬とではその郵税が、冬は夏の倍になる。支那の事であるからどうも日本のやうに一本調子に理論で押すことはナカ〳〵むづかしい。いやよく考へて見ると、時に日本でも同じやうなことがある。私の方では、毎月末に東京大阪等の仕入先へ支拂ふために、上海の銀行で爲替を取組んで貰ふのであるが、大體二十口位ある。チヤンと手續きしてから爲替手形が出來る迄待つて

居ても、どうしても二時間位かゝる。そこで何時でも係の方にお頼みして置いて歸つて來る。そして出來たら屆けて頂くことにして居つた。

それは銀行の方で待つてゝ頂くとお氣の毒だからと云ふお話もあつて、さういふ習慣になつたのであるが、其處には一つ理論と云ふよりも實際上の（イヤ實際上だけでなく、理論上からもそれが正しいやうでもある）問題として、一人で二十口もの仕事を順番だからと云うて、私の仕事をかたづける迄次ぎから次ぎと來る人を待たして置くとしたら、それこそ澤山の人が待されることになる。私の二十口に二時間かゝるとすれば、最も永い時間待される人は二時間で、それから五分置きに一人づゝ後れて來るとすると二十人が待つとなると、その合計の延べ時間は二十四時間と十分になる。私が待てば二時間だけのことであるから問題はない。たとへ順番であつても、これは私の方は後廻しにして口の少いの方からかたづけるのが當然のことである。理論から云うても實際から云うても私が待つ可きである。それは卽ち公德の最少なるものである。

北四川路郵便支局が、私の郵便物を本局へ行けと云ふには、これと同じ理由があるのだ。一人で五十口六十口と云ふ非常に多くの仕事を持つて行つて、多くの人々の仕事を邪魔（少し語弊はあるが）することは、多數の人々の便利のために設けられた支局本來の目的を阻害することになる。私には多數者の便利をさまたける權利はない。私がヤ、もすれば自分の便利を權利として主

張したのは、甚だお恥かしいことである。支局長が頑として受付けを拒絶したのは、つまり多數者の權利を擁護したのであつて、それは實に立派な行爲であつたのだ。

いつも言ふことだが、少數主體の考へ方は、支那人はしない、彼等はいつでも多數を主體として考へ又理窟を云ふのだ。

ところが私共は、どうかすると、少數主體の考へをしたり、理窟を云うたりする習慣がある。私の銀行に於ける利己的な考へ方は、どうかするとどうぞ順番にやつて下さい、私も忙しいんですから。と云ふやうな言葉を出したがるものである。

それは自分の仕事をせずに、他の人の仕事をして居られたり、自分よりも後から來た人が先きに歸つて行くのを見て居ると、つい何んとか文句が言ひたくなる。それは即ち私共の習慣から來る少數主體の偏狹な利己的な考へ方である。どうも私は人の立場を考へるといふ餘裕がないらしい。自ら一人の時間的犧牲が多くの人々の便利になるのだ。世の中は多くの人々の便利と云ふことが、私一人の便利と云ふことよりも重んぜられねばならぬのだと云ふ理窟を知りながら、實際生活に於いては、自らの都合と得た順番の權利とだけを考へて、多くの人々が自分のために如何に多くの時間を犧牲にしなければならんかと云ふことを忘れるのである。

殘念ながら私は、こゝにも他山の石を見出さゞるを得なかつた。いや頂門の一針であつた。

上海の票いろいろ

上海には色々の票がある。郵便切手が郵票で船の切符が船票で汽車の切符が火車票でソレを買ふお札は鈔票と云ふ。銀行小切手が支票で爲替手形が滙票で約束手形が期票(先日付の小切手)である。錢莊と云ふ昔の日本の兩替屋のやうな舊式の銀行業があつてその錢莊が發行する莊票と云ふものもある。富籤が彩票で、人掏摸團が綁票公司で攫れた人を肉票と云ふ。十二月十二日西安で行はれた一ト芝居をハイカラな人はクーデターとおつしやるが、私共時代後れは綁票と云ふ。ついでにさらはれた蔣介石氏を肉票と云ふ。

彼時に南京の國民政府が採つた張學良氏の官職の褫奪とか、何應欽氏を總司令とする討伐軍の北上とか、行政院長代理を孔祥熙氏に任じたなどの行動が、餘りにも速やかであつた事を一つの大きな理由として、蔣介石氏の死亡說は、愈々蔣介石が回京した二十五日迄多くの日本人をして信ぜしめた

私は大多數の日本人が蔣介石死亡說を信じた事を惡るいとは言はない。然しいつも言ふやうに日本人が餘りに事を單的に結論する癖を此處でも指摘するものである。日本には宮本武藏と云ふ

二刀流の大劍客があつたとのことである。私は不幸にしてこの大先生にお目にかゝつたことはないが、今度の蔣氏綁票に際して國民政府が採つた速やかなあの態度は、疑ひもなくこれ宮本武藏の右の太刀であつて、引續いてドナルド氏宋子文氏宋美齡女史などによつての工作が宮本武藏の左の小刀であつたと思ふ。

而して綁票公司の止めをサスものは、右の太刀にあらずして左の小刀であつた事を特に記憶して置きたいと思ふ。止めをサスのは小刀である。さうして何日でも必ず二刀流宮本武藏を忘れないやうにせなければならんと思ふ。

見合の注意

昨年六月上海に事變が發生して以來、避難民生活を送ることこゝに八ケ月となつた。

其間に內地と滿洲とで、支那漫談の大小旅行をしてしやべること實に百數十回に及んだ。其間の見聞はトント駄目であるが、一つ面白い現象が私の目についた。それは電車汽車の中でも町の通行者にでも、又漫談の聽衆でも男と女とを問はず、全く白髮頭の人のなくなつた事である。スタイナツハ博士をしてこの現象を一見させたなら、キツト博士は雙手を擧げて萬歲を三唱することであらうと思ふ。然り、日本人は全部若返つて居るのである。それは頭髮だけではあるが、兎に角頭髮は老若男女悉く黑色である。ドンナに厚化粧をしても、若返へらんものは顏や手足のシツである。黑い頭髮とあらい大柄の衣服とを後から見て居ると、どんな美人であらうか、どんな娘であらうかと思ひつゝ、前に廻つて見ると、これはしたり、ソバカスとシワとで埋つて居る六十一の本家返りの御隱居樣であるやうなことは、度々あることである。

其處で、若い人に對して私は、結婚の見合ひには、必ず充分目を光らして、お婆さんと娘とを見そこなはないやうによく氣をつけて呉れと云ふのである。

大宴會は安料理で

西洋では何んの理由か知らんが、結婚式と云ふことは極く親しい者だけの間で行はれるとのことである。東洋では何んの理由であるか知らんが、出來るだけ多くの肉親、友人、知己、其他關係のある人々に集つて貰つてお祝ひして頂くのである。何れが好いか惡るいか、又何れが正しいか正しくないか、ソンナ七面倒なことは別として、ザツクバランに言へば西洋流は安あがりで、東洋流は高くつくと云ふことだけは間違ひあるまい。その高くつく東洋流の中でも、日本流が特別に高くつくやうに思ふ。外のことは別にして、たゞその披露宴だけについて考へて見ても、日本の披露宴のお料理と云ふものは非常に高いものらしい。平素のお料理などゝはトテモ比較にならんものらしい。

ところが支那人の方面はドウであるかと云ふと、結婚披露宴なんかのやうに非常に、多くのお客樣を招待する時のお料理は、必ずお安い料理でする習慣がある。だからと云うて、別に高い料理でしてはならんと云ふ規則も何にもあるのではないから、するなら勝手であるが、然しメツタにする人はない。不幸にして私は今日迄未だ高い料理の披露宴に列したことがない。支那人はナ

ゼ多人數の大宴會のお料理を、安い料理でまかなふのであらうか。日本人はナゼ披露宴のやうな大宴會に特に高い料理をしてまかなふのであらうか。ソレハ第一お目出度い儀式と云ふことが主になるために儀式以外にメツタに使はない材料など取り揃へなければならん。その材料によつて色々の技巧をこらさねばならん。さうした特別の條件が價格を高くするのではあるまいか。又宴會主の方でも成る可く立派にしてと云ふ考へが働らいて、イヤが上にも高くなるのではあるまいか。その價ひが特別に高くなつた結果として、

『出來るだけ多くの肉親友人知己其他關係のある人々を集つて貰うておいしく頂く』

と云ふ本來の考へが、己むを得ざるにもせよ、人選して人數を制限せなければならんと云ふ、世にもさもしい悲喜劇をひき起すのではあるまいか。實際人數を制限するための人選と云ふことでは、何處の家でも相當頭を痛めることである。而も折角人選しても、キツト何處からか文句のあるもので、彼の人を招んで自分を招ばなんだのは怪しからんと云ふやうな言葉は實は多く聞かされて居るところである。而もその原因が料理の價格の高いがためであると思ふ時に、私は直ぐ支那人が結婚披露宴のやうな多人數の宴會に、必ず安いお料理を出してまかなふその實際的なやり方を思ひ出すのである（日本人は口を開らけば支那人は形式的であると云ふ、その形式的であると云ふ言葉が一種の侮辱を含んで居ることは云ふまでもない。されば必ず日本人はその形式に陷

るべきではないと云ふことを、言葉は少く足らんかも知らんが前提とする)。

何故支那人は必ず安い料理で多人數の宴會をまかなふのであらうか。ソレハ料理と云ふものゝ實際的な考へ方からであると同時に、本來的には出來るだけ多くの人々に來て貰うて賑やかにお祝ひして頂くと云ふ考への實行からでもある。

何處の料理屋にでも第一等の料理の出來る料理人は一人である。だから一時に多くの人が集るやうな大宴會にはドウしても間に合はん。よし料理は出來るとしても、熱いものが冷えてたり、軟らかい物が固くなつたり、丁度好い加減な食べ頃と云ふことは到底不可能である。だから支那料理でも、ホントに高くてもよい甘い料理と云へば一卓以上は駄目である。つまり高い甘い料理は多人數では食へないと云ふ料理の原則を、そのまゝ自然に實行して居るまでである。上海の城內、湖心亭の西に、南翔饅頭を賣つて居る店がある。店へはひつて食べるなら、何程でも食べるだけ持つて來る。だが外からお金を持つて買ひに行くと賣つて呉れない。食べに來て呉れと云つて斷つて終ふ。店のお客に出すだけで足らんとも言へるが、又店で食べて呉れゝば、ホントの味が味はへるが、持つて歸へられては味が變つてしまふ、それでは南翔饅頭の信用を傷けるからとも考へさせる。上海で近來の流行を見せて居る四川料理(蜀艘)へ名物の燒鴨を買ひに行くと、矢張り賣つて呉れない。來て食べて呉れ味が違ふからと云ふ。

日本の結婚はナカ〳〵厄介になつて來たやうだ、私の聞いた京都の或る家の結婚に親戚の一軒から金五圓の商品券のお祝ひを持つて行つた、さうするとお祝ひ返へしと云うて又五圓の商品券を返へして來た、ソシテ當日は儀式張つた高い御料理の披露宴があつた、ソシテお嫁さんのお顏つなぎの挨拶廻りにお饅頭のお土產が來た。お土產のお饅頭と當日の披露宴とは言はないことにするが、默つて居られないことは、折角お祝ひして貰ひながらお祝ひ返しと云うて返へすとは何事であらうか、ソンナ事なら始めからお祝ひを貰ふた時に包紙だけで、中味を入れないことにしてはどうか。お祝ひを貰うても、香典を貰ひつぱなしで、お祝ひ返へしも、香典返へしもせない支那人は、折角お祝ひして貰つて返へして終つては無意味である、折角香典を貰ひながら返へしては又無意味である、イヤソレは非禮だと云ふ。一休和尙が雨の降る日に京都の町を緒の切れた下駄を引きずりながら歩るいて居ると向ふから一人の親切な男がやつて來て、

『和尙さん下駄の緒を直して上げませう』

『オ、さうかさうか』

と足を出す、親切男は丁寧に切れた緒を直して、サア〳〵おはきなさいと差し出すと、和尙無言で下駄をひつかけて、スタ〳〵と歩るい行く、親切男後から聲をかけて、

『和尙さん何んぞ忘れ物はありませんか』

と云ふと、和尚ふり返つて身體中をナデ廻して、
『イヤ〳〵何んにも忘れ物は御ざらん』
ととぼけた顏で又歩るき出さうとするので、親切男は聲あらゝけて、
『ヤイ〳〵糞坊主、人に親切にして貰つたらお禮の一言は言ふものぢや』
とキメつけたので、和尚立ち止つて大口開いてカラ〳〵と笑ひながら、
『アゝさうかお禮を言ふのは何んでもないが、お禮を言うたら折角の親切が消えて終ふぞ』
と云うたので、親切男グツと詰まつて目を白黑させたと云ふことである。
モウ一度、一休和尚を復活させて、この痛快の一言を京童に聞かせたく思ふのは私一人であらうか。

習慣

一

私の知人の息子が亡くなつた時は、五月頃であつた。明日の葬式の當日が友引と云ふ日に當るので、一日延期しようと云ふ話が世話する人々の間に持ち上つた。處が其話を聞いた八十歳の老年なる此家の老母が出て來て言はれるには、
葬式の當日が友引に當るとかで、葬式を延期せなければならんとか云ふことですが、どうぞそんなことをせずにその友引の日にお葬式をお出し下さい、友引が友を引くに決つて居るのでしたらこの次ぎは私の順番です、一日も早く可愛い孫の處へ行かれることは私の願ひで御座ります。第一醫者の私共で、この蒸し暑い時候に死んだ者を一日でも永く置くと云ふやうなことは決してしてはなりません、どうぞ御心配なく明日お出し下さい。
と云はれて、分別盛りの壯年男が顏見合はせて返事に困つて、眼をパチクリさせて居つたことがある。私は何んとなく一種の痛快をさへ覺えたことがあつた。

同じ日本人同志の間にでもかうした事があるのだから、況して國を異にして色々の習慣を比べて見るとナカ〳〵面白いことが澤山ある。時には吹き出してしまつて話すことさへも出來ないやうなこともある。さうかと思ふと、他山の石とも云ふやうなこともあり、時に又頂門の一針もあるものである。

吾々の習慣では、一度御馳走にでもなると先づ其時に、

どうも御馳走様でしたとか、ありがたう御座いました。

とかお禮を言ふ。その翌日其家へ行くと又一度、

昨日はどうも御馳走様でした。

と云ふであらう。四五日經つて又其家に行くとモウ一度、

先日はどうもありがたう御座いました。

とお禮を言はねばならん。一ケ月經つて行つたら、

先月はどうも御馳走様でした。

とモウ一度お禮を言ふ。一年經つてからだと、

昨年はありがたう御座いました。

と云ふであらう。二三年經つてからだと、

先年はどうもありがたう御座いました。

と云はねばなるまい。

つまり一度御馳走になつたら最後、何日迄も何日迄も、その御馳走に對して恩を覺えて言行一致的に何度でもお禮を言ふのが普通の習慣であつて、時に私のやうに少々忘れ勝ちの人間は彼奴どうせ恩知らずだと云はれるのであるが、恐らくは永く上海に住んで居る支那式の習慣が傳染したのであるまいか、一寸支那式を覗いて見る。

さうだこの習慣には非常な違ひがある、支那人は一度御馳走になつたら、其時に多謝々々（トウセエトウセエ）（ありがたう）と云うたら、その翌日來ても決して昨日はありがたうとは言はない。四五日後に來ても何とも言はない。一ケ月後にも言はない。一ケ年後にも數年後にも決してモウ再び言はないのである。それは支那人の間では、お禮は一度言うたら二度言ふものでないのが彼等の習慣である。假へ生命を助けられたやらな大事件に對しても、同じく一度よりお禮は言はないのである。

かうした習慣に育てられて來て、日本の習慣を知らない支那人の行動を、支那人の習慣を知らない日本人から見たならば何んと見えるであらうか、其處に使はれる言葉は、

『支那人と云ふ人間は實に恩知らずだ。』

と云ふ言葉であらうと思ふ。吾々が日本内地へ歸つて來て、實は到る所でよく聞かされる言葉の一つがこれである。『支那人は恩知らずだ』

私は始めどうして日本人の多くが、さう云ふのであるか解らなかつたのであつたが、暫く注意して居る中に、ハツキリ解つた。解つて見れば何んでもないことであるが、吾々のかうした習慣が、遂に彼は親日家である、誰は排日家である、彼は親蘇家である、誰は親英主義者である、彼は親佛家であると云ふやうに、簡單に分別して終ふのであるまいか、そしてその支那人は一つの事柄に對しては、一度よりお禮を言はない習慣の人間であるのだから厄介千萬である。

二

習慣と云ふものは誠に恐ろしいものである。吾々の習慣では、賭博と云ふことは非常に嚴格に取締られて居つて、苟くも勝負事と云へばその内容の如何にかゝはらず何んとなく憎惡の感が湧然として生じて來る程に、殆ど潔癖と云うてもよい程に徹底して居るのである。

然しそれ程徹底して居る賭博と云ふことは、果して何れの範圍に屬することが賭博で、何れ迄が慰みであるかと云ふことになると、それは非常に限界が困難である。法律上に於いては、果し

てどうであるか知らんが、吾々の概念に於いては、貨幣を賭して勝負を爭ふ行爲を賭博と云うて居るやうである。そこで假へ一錢、五錢でもそれが貨幣を賭して居る以上明らかに賭博犯に當るのであるが、蜜柑とかお菓子なら一個十錢する物でも、又三十錢する物でも、それが品物を賭して居る場合は慰みであると云ふやうである。

支那人は其處へ行くと、一寸賭博の概念が違つて居るやうである。

支那人は賭して居る物がお金であつても品物であつても、家族の者とか親戚、緣者であるとか友人であるとか、又お容樣であるとか云ふ人々の場合は、それは全く慰みであるから、決して罪にはならんのであるが、玄人が一人でも其席に居ると賭博と見られるのである。それは賭博が金錢であれば無論であるが、例へ菓子や果物であつても、それが金錢の代身である場合は同じことである。つまり賭物が金錢であるか品物であるかと云ふことよりも、勝負を爭ふ其人の人柄によつて、賭博ともなり、又慰みともなるのだから、日本とは一寸勝手が違ふわけだ。

上海の共同租界の警察は、昔は全く英國人でやつて居つた。尤も警察制度は各國に依託したことになつて居るからでもあるが、兎に角今日でも、矢張り英國式である。そしてその警官の中には、英人、米人、日本人、ロシヤ人、支那人、印度人等が居つて、誠に複雜を極めて居るのである。始めて日本人警官を採用した頃の話であるが、日本式では警官は出來るだけ事件を申告す

る人が好い警官となつて居るとか云ふことで、日本人警官は矢張り日本流に大小を問はず、事件を一々本署へ申告したとのことであつた。處が妙なことには、この忠實なる日本人警官は一向昇給しないばかりでなく、一向事件を申告しない日本流に云へば無能かヅボラかグウタラとしか考へられない方面の警官は、どし〳〵進級すると云ふ奇怪な狀態が現れて來た。

そこで日本人警官の中にも、内々心よからず思うて居る人さへも出來たとの事であつたが、英國式の警察署では全く習慣が違つて居つて、事件を澤山何んでも彼でも申告するやうな警官は常識のない人として、進級させないのであるさうだ。英國人の習慣では發生した事件はドシ〳〵其場で其人の常識によつて處理して行く人でなければならんのであつて、何んでも彼んでも本署へ申告して來るやうな人は常識の無い人として扱ふのだと云ふ事を聞かされて、なる程英國と日本との習慣の相違と云ふことをハツキリと敎へられたやうに思うた事があつた。

昔は支那人はお役所へ出るとか、お役人と話す時などには、自然と嘘が出て來るとのことである。キツと支那人の面子にかけて否定する人もあるであらうと思ふが、私はそれは多分例外であらうと思ふ、自然と嘘が出て來ると云ふのは實際さうであらうと思ふ。

それは打官司（訴訟）はお金の有る者が勝つ——と云ふ概念の下に、あらゆる事件を仲裁で解決する習慣を見て居れば首肯出來ると思ふ。それは支那の生きた歴史が人々に敎へた活學問であ

ると私は思うて居る。そしてかくの如き態度を取らねばならんやうなところまで押し込められて來た支那民衆に對して同情の涙を惜まないものである。

かうした事は決して對岸の火災視してはならんと思ふ、吾々も人間である以上知らず〳〵其處に陷ることなきを誰か保證し得んやである。

三

吾々の儀式はナカ〳〵複雜で困ることが多い。すべての儀式が只一つの小笠原流だけならよいのだが、殘念ながら其他に何流、何流と云ふ色々の流儀があるために、何が正しい儀式か方式がさつぱり解らない。

たとへば或る人は水引の使ひ方に赤が右で、白が左ですと敎へて呉れた。其處で私はいつも水引を使ふ時には赤い方を右にして、白い方を左にして結んで居つたところが、或る時某と云ふ儀式に通じた人が來て、私が赤を右に白を左にして水引を使つて居るのを見て、君の使方は違つて居るよ、水引と云ふものは赤が左で白が右だよと云うて呉れたから、アーさうか然し私に敎へて呉れた、或る人は、赤が右で白が左だと云はれたのだが違つて居るか、と聞いたところ、其人の言ふことが面白い。

さうだ、水引の使ひ方には赤が右で白が左だと考へたそれは、決して間違つては居らんのだ、それでよいのだ。

私は其反對に、赤が左で白が右だと教へたそれも、決して間違つては居らんのだ、それでよいのだと思ふ。それでは一體何れが正しいのかと云ふことになるが、それは何れも正しいのである。つまり違つてるのは流儀のことであつて、表流では赤が右で白が左であるが、裏流では赤が左で白が右になるのだ、と。

吾々の習慣では、お招きうけた時など、お客は何でも賞めるものらしい。先づ床の間の掛軸から始まつて置物、花瓶、香爐、額、屏風、唐紙、火鉢、煙草盆、菓子鉢、茶碗、茶卓から中味の菓子や玉露の味まで賞めるものらしい。特に茶の湯の席などでは、お道具の賞め方まで、一つの儀式になつて居ると云ふから、感心を通り越して寧ろ滑稽にさへなつて來る。だから茶席の御馳走などはキツト表流ではかう云ふ風に賞めねばならぬ。裏流ではかう云ふ風に賞めるべきであると云ふ風に賞め方があるであらうと思ふが、一寸日本の流儀を超越した賞め方を一つ御紹介しようと思ふ。

私が主人になつて、七人のお客様を招待した。支那料理は一卓が八人と云ふのが定席である。だから、一名八仙卓子(パアチエンテヤオツ)とも云うて居る。この名前は或は、別の方面からつけられたのかも知れない。支那には八人の酒豪があつたとか云ふから、そんなことから八仙卓子なんて名前が出來たのかも知らんが、兎に角この八仙卓子で思ひ出した事は、「八仙卓子上排夜壺(パアチエンチヤツオシヤンパイエフウ)」御馳走の卓子の上に夜壺(夜ベッドで使ふ便器のこと)が並んで居ると云ふことである。

然しこれは一種の隱語とでも云ふ可き言葉であつて、ホントの意味は支那では宴會の席に出る位の人間はどれだけ酒を飲んでも亂醉せないのである。適々宴席に酒を飲んで亂醉して居る人のあるやうな時に云ふ言葉であつて、亂醉者を便器にたとへて出る可からざる物が出て居ると云ふのである。面白いではないか。飲んだ酒なら醉はずばなるまいで、亂醉を當然のこととして居る吾々の風習とは全く反對である。アツト話が横道に走り込んで失敬々々。

私の招いたお客は揃うた、宴は開かれた、丁度宴半にして客中の一人が私に向つて云ふ。

『老板這個菜幾塊錢麼(ラオパンチヨエコフアイチイクワイチエンマ)』(この御馳走は幾元ですか)

と聞くのである。日本的に考へたら甚だ失禮な人間もあるものだ、これから支那人と云ふ奴は下劣な豚野郎だと位に思ふであらうと私は思ふが、其時私は平氣で、二十元ですと答へる、するとお客は得たりや應と、

『好很好一定是倆的面子』（好ろしい、非常によろしい、必ず貴方のお顔です）と云ふ。つまり貴方のお顔だから二十元でこんな御馳走が出るのです。私共ではトテモ駄目ですと云ふ意味である。

日本にも賞め方に色々あるやうだが、コンナ賞め方は恐らくあるまいと思ふ。これが支那式である。何んと面白い賞め方ではないか、失禮とか下劣野郎とかは全く見えなくなつた。巧妙だネ。

子供の世界、大人の世界

子供にお話をして居ると實に敎へられる、始めは緊張して聞いて居る。ところが其話が一向面白くない、そしてとても解らん話であるとスグにムヅ〳〵と手となく足となく動かし出す、やがて前の子供の首筋を一寸指でつく、つかれた子供は待つてましたと言はぬばかりにクルツト後を向く、何か二人でヒソヒソと話を始める、隣の子供が身體を横にしてスグ仲間入りをする。向ふの方で一人の子供が兩手を高く擧げてアクビをする、隣の子供が鼻をかむ、四つ五つ位の子供が一人で前の方へヒヨロ〳〵と歩るいて出て來る、後を向いて姉さんにお出でお出でをする、姉さんがイケマセンと、眼にもの言はせてニランで見せるが、イヤ〳〵をして一向言ふことを聞かない、姉さんがたまりかねて靜かに席を離れて背をまげて迎へに出るとヒヨロ〳〵君、いよ〳〵面白がつて、ヒイ〳〵言ひながら前の方へ出て行く、たうとうお話して居る講壇へ上つて來る。姉さんが聲を呑みながら早く早くと云へば云ふほど面白がつて、今度はキヤツ〳〵と聲を立てゝ講壇の上を走り歩く。向ふの隅から又小さいのが一人出て來た。お母さんが呼び戻さうとすればする程面白がつて走り出す。皆んながお話の方を忘れてハツハハツハと笑ひ出す。小さいのはいよ

いよキャツキャツと喜んで走り廻る。

それを見極めて首を後ろに向ける者、横を向く者、立ち上る者、遂に彼方此方から席を離れて外に走り出す者が出來て來る。

もうかうなつてはお話はメチヤメチヤである、ところがお話が始めに子供の面白いところがチヨツトあると、先づ緊張がゆるんでハツハツハツハと笑ふ。その次ぎに一寸可哀想なところが出ると、第一番に女の子の顏が曇つて來る、マタ、キを始める、ポロリポロリと涙が落ちる、鼻水が出て來る。話は少しづゝ緊つて來る、可哀想が頂點に達しると彼方からも此方からも鼻の鳴る音、シヤクリ聲が聞えて來る。其邊で勇敢な子供が飛び出して來て、男らしいところを一寸見せる話になると、今までシクシクが急に影を消して皆んなの顏が生き生きと輝いて來る。少年の勇敢がグングン伸びて行くと、男も女も皆んな兩手を腿にあてゝ兩手を堅く突つ張つて兩肩を屹てゝ、ポツポツ頭や身體がブルブルと動き出す。勇敢が頂點に達したとなると、小さい手が丸で電氣掛けのやうにパチ〳〵〳〵〳〵と拍手される。足踏がついて來る此處らで話をクゝつて終ふとアー面白かつた、アー面白かつたと云ふ聲が聞えて、彼方にも此方にも立上つて伸びをするのが見える。

話しながらこの聽衆の變化を見て居ると、何んとも云へない愉快を感じる。たゞに愉快だけではなくて、實に其處に眞正な批評を見ることが出來る。僞らざる批判が表現せられるのである。この味を覺えると次ぎから大人に話をすることがイヤになる。

ナゼなら大人は失禮とか、行儀とか云ふことのために、誠にイヤな話でも欠伸をカミしめながら手を拍つて聞く、ヤレヤレよく止めて呉れたと思ふやうな時にでも拍手で送つて呉れる、その批評も批判も悉く素直でないからである。

私は思ふ、話は子供にすることだ——と、こんな事を考へるのなども下らんことではあるが、人間は時々たわいもないことを考へるものであることを知つて居る人々なら、キツト私のコンナ下らんことを考へるのを許して下さることゝ思ふ。

雲州の守護職、尼子義久が毛利氏と戰うて利あらず、沒落に臨んで一子勝久を忠臣山中鹿之助幸盛に托す。幸盛以下の十勇士が遺子勝久を擁して尼子再興のために各々身命を睹せしも、時の至らざりしか天の命か再び敗れて、遂に又起つ能はざりし悲壯なる物語、所謂尼子十勇士と云ふ講談本を讀んだことがあつた。その本の中に『以つて六尺の孤を托するに足る』と云ふ文句があつて、全部忘れたやうであるが、ドウした事かこの言葉だけが今も尙ほ私の頭に烙きつけられて

居るのである。

過ぐる一日、フトこの言葉が頭に浮んで來たので、恐らくこの言葉は支那人の言葉であらうと思うて二三の本を引き出して見たら、矢張り曾子と云ふ古人の言葉から出て居ることが解つた。

以つて六尺の孤を託すべく
大節に臨みて奪ふべからず
君子人か　君子人なり

と云ふのださうである。即ちこの第一句である。そしてその意味が父なき後の幼兒を安心して頼むことが出來ると云ふのださうだ、さうして見ると、この託される方の人は云ふ迄もなく大丈夫であるに違ひないと思ふ……大丈夫と一口に云へば何んでもないが、その大丈夫と云ふことにも色々型があつて、

幾度か辛酸を歴て志始めて堅し
丈夫玉碎して瓦全を恥づ
一家の遺法人知るや否や

とは西南健兒の總帥大西郷が、偶感の七絶であるが、その磊々落々たる風貌は髣髴として眼前に躍動するものがある。思ひ出せばこの第一句は幾度か私を引き起こして呉れたことであらうか。

然し不幸にして商人の片割れである私は、遂に玉碎丈夫たる不能曠日彌久、今日も尚ほ瓦全の一路を歩んで居る不甲斐ない者である。

それは兎に角として、この玉碎主義は確かに日本の大丈夫の一つの型である。イヤこの玉碎主義も或は支那の言葉であらうと思ふのではあるが、然かし何んと云うてもこの玉碎主義は日本男子の立派な型である。それは大丈夫の型であることは疑ふことが出來ない。

杜牧の烏江亭に題すと云ふ七絶がある。——

勝敗は兵家の事期す可からず
羞を包み恥を忍ぶ是れ男兒
江東の子弟才俊多し
捲土重來未だ期す可からず

敗れし頂羽の懐古として、線々としてつきざる杜牧の心事、二十八字より湧きて流るを覺えるのはあながち私一人ではあるまい。

こゝにモ一つの大丈夫の型がある、云ふ迄もなく第二句の羞を包み恥を忍ぶ是れ男兒である、玉碎するも大丈夫なら、羞を包み恥を忍ぶも亦た大丈夫である。

私はこの二つて詩を比べて獨り肯いて居る。さうだ〳〵、でなければならんのであつて、始めて、六尺の孤は託すべしである。何んだかたわいもないことを考へたもんだナア。

雙喜

場所 支那家の一室

時 晝頃

人物 父親と息子

吃飯卓子の上に紙を展げて息子が習字をして居る。

一と云ふ字を一つだけ書いて筆を持つたまゝでジツト眺めて居る。暫らくしてその紙をヒツクリ返へして、一の字の裏を指で辿りつゝ首を振つて見たりして居る。其處へ父親が這入つて來て息子の樣子を見て居つたが、

父親 オイ飯だ〳〵、ワレ一體何に考へとるぢや。

息子 (一寸振り向いて父親の面を見たゞけでジツトして居る)

父親 ワレ手習サどンだけ書アたぢや。

息子 父つあん面白エナー

父親 なんがソンネエに面白エだ。(と父親は息子の上を覗いて見て、ビツクリしたやうに眼玉を

むいて）ワレ半日サかゝつて、タツタ一本棒を引張つただか、ヤレ〳〵何んちう馬鹿者ぢや、ワレがやうな奴がホントの罰あたりの穀つぶしぢや。

息子 さウともさウとも父つあん、穀つぶしたアホントにウラが事ぢやノー。父つあんウラ半日がかりでタツタ一つ一といふ字を書アたんぢや。

父親 ワレ半日サかゝつて一の字一つ書きやがつて、ソレで手習ひになるもんが。

息子 父つあん、そのタツタ一つ書アた一の字が一つぢやのうて二つなんだよ。

父親 ヤレ〳〵厄介な息子が出來たもんぢや。ウラが家の息子ア正眞正銘の馬鹿息子ぢや、半日がゝりでタツタ一つ一の字を書きやがつて一つぢやない二つぢやと云やがる、馬鹿も休み休み言ふがエーだ。タワケも事によるたア此奴の事ぢやナア、よう聞け隣の與太公歳は四つぢやがナ、煎餅一枚やつてソノ煎餅何枚あるかつて聞いて見ろ、キツト一枚だつて言ふにキマツてるぢやアネエか。

息子 父つあんさウだよ、與太公でも一枚の煎餅は一枚つて云ふだア、ダレが二枚と云ふ奴があるものかネ、デモ父つあん一枚の物を千ベエとはこれ如何。

父親 アンチウこと言ふぢや寺の和尚サンの眞似しやがつて、一つでも萬十とはコレヤどうぢや。

息子 一枚でもせんベイ一つでもまんじうなら、ウラが書アた一の字一つが二つだつて不思議も

ネエか、ナア父つあん、ウラが書アたタツタ一つの一の字には表の一と裏の一とがあるんだよ、ウラが書アたナアこの表だけで裏の方の一アウラ金輪際書アた覺エがネエんだ。

父親 （書いた一の字を取り上げて、表を見たり裏を見たりして小首をヒネツて居る）何んとナアー、ワレが書アたナーこの表の方か、ソイぢやこの裏サ一タイ誰が書アたダ、ホントだ與太にやつた煎餅にもチヤンと表と裏とがあつたつケノー。

息子 父つあん、裏のネエ煎餅が燒けるだか、上下のネエ饅頭が造れるだか、ウラが身體にや前と後とがある。片親だけで息子が生るだか、口から食うて尻から出す。ウラが飯碗にや内と外とがある。ウラが襖にや兩端がある。ヤアヤア、ウラが着物にや裏と表があるワイ。

息子 父つあん、矢つ張り人のするこたア何やつてもコン通りぢや。飯の喰エネエ者に飯を喰はせたり金をやつたりする、ソレヤ、ホントに好か事ぢやと先生ナ敎エて下んしたがノー、好か事にや違エネエだがその好か事チウナア表の方でその裏の方にやナマケるノラツくチウ中サ覺ベエさせてるだ、そのナマケるノラツく事ナ好カ事なら文句ネエだが、ソレヤどうしても好か事ぢやネエ。惡リイ奴サとつちめるベイ規則だアちうものドツサリ造る、ソレヤ好か事ぢや、イヤサそりや文明サチウ事ぢやゲナ、ケンドその文明サちうことも好か

事も表の方ぢや、裏の方にやその規則サ楯にして人をイヂメる道がチヤンと出來るさ、つの規則サ、一つの抜ケ道サだ。十の規則サ十の抜ケ道サ作つとるぢや抜ケ道のネエ規則サ出來ネエもんだ。

父親 ワレ知つとるベイ、そら〳〵アノ雙喜サちうこと。

息子 エレエ父つあん、アンでもハア雙喜だ。雙喜がなけやフントの好か事ぢやネエダ、表ダケが好か事で裏サ悪か事ぢやドモならん。表も好か事裏も好か事、ソンで雙喜ぢやイヤ雙好ぢや。

父親 ワレ、なか〳〵甘めエこと云ふだ、ソンならその雙好サお前エに出來ベエが。

息子 ソウだノー……トテモウラにヤ出來ネエナアー。

父親 ソンぢヤワレなんとする。

息子 (頻りに考へる。暫らくしてニヤニヤ笑ひながら顔を上げて)どうせウラがやうな者にヤ裏も表も好か事ナ出來さうもネエダ、ソンデもうウラ止めた〳〵手習ひナもう止めた。

父親 ソレも好かんベイ

其時大きな聲でお菜が冷える——と呼ふのが聞えた。

これも支那人生活の一部分である。

養老院へ凱旋

甲 主人

乙 夫人

丙 友人の老人

丁 友人の若い學者

所 或る晩の茶話會

丙 ヤア今晩は、T君も一緒に來ましたよ。

乙 よく來て下さいましたね、雨は降るし大變淋しく思うて居つたところです。さあ〳〵お茶でも入れませう。

丁 丙が來て行かう〳〵と云ふので、たうとうお邪魔に上りましたよ。

甲 お揃ひでよく來て呉れたネ。さあ、一つ漫談でもやらうぢやないか。

丙 うれしいなあ——時に君の家には子供がないのだが、お二人共、年がよつたら如何遊ばすお

考へなりやだ。

甲　それは御親切にありがたう様ですが、私共は年が寄りましたら養老院の方へ凱旋する考へで御座候……。

乙　又始まつた、養老院へ凱旋ですつて、いつもあれを云うて私をいぢめるのですよ。

丙　實に呑氣だネ——君は、ハツハツハツハツ——。

丁　いや、決して呑氣とか奥さんをいぢめるとかではありませんよ。實に面白い考へですネ——

乙　丁さん、そんな事言うて油をかけてはいけませんよ、どんな事、言ふか知れませんから……

丁　イヤ僕は決して油をかけるのではありません、僕の心をピンと打つほんとに面白い言葉ですね——。

甲　流石に君はえらい、僕の言ふ事が解る、吾輩一人の知己を得たりだ、感謝々々。

丙　何が感謝だ、馬鹿言へ、男一匹と生れて年が寄つてから養老院行きだなんて縁起でもないネ——。

乙　ネー、さうでせう、さんざ働らいてそのおまけに、年が寄つたら養老院へ凱旋するんだなんて、養老院で養うて貰ふなんか世の中の厄介者ですわね——、そんな事になつたらそれこそ御先祖様や親兄弟の恥さらしではないでせうか、私そんな事になるのなら死んだ方がましだ

と思ひますわ。

丁　イヤ、奥さん、そんな極端なことは別として貴女も丙君も考へ方に間違ひはありませんが、たゞ甲君の考へとはやゝ距りがありますネ——。

丙　オイ〳〵又妙な理窟を言ひ出すんぢやないかネ。

丁　イヤ妙な理窟ぢやないよ、甲君と君方の考へとの差は實は時代的とでも云ふのだネ。

丙　ナンテ君が又偉らさうな事を云ふが、マア考へても見給へ……抑も養老院と言ふものは國家又は社會又は宗教團體などで一つの慈善事業として設立せられて、世の中の不幸な、養ひ人のない老人を引取つて、養うてやる處であつて、やせても枯れても男一匹と生れた者の行くべき處ぢやアないネ、吾々は達者な間に十分働らいて少しづゝでも貯金して置いて、老年になつたらその貯金によつて安全に生活して世を終ると云ふのでなくてはならん。慈善は施す方にはなつてもよいが、施される方には斷じてなつてはならんと思ふネ。……君、そんな恥かしい行爲がどうして凱旋と言へるか、養老院へ凱旋するなんて、實に氣狂的な言ひ方であつて、言葉としては面白いが、實際的に考へては餘り呑氣すぎるね。

乙　ほんとですよ、私全く丙さんと同感ですワ。先日も上海で永らく附添婦をした婆さんが、いよいよ働らけなくなつたので、長崎へ歸つて養老院に入ると云ふので、私は大變お氣の毒だ

と申しますとね、主人はそれは間違つてる、養老院へ凱旋するのだ、あの人は世の中の勇士だと云ふのです。私、どうしてもそんな事は考へられないと申しますと、それは考へが違つて居る、あの人は今迄、世の中の爲に人の爲に働らいて來たのだ、其人が年が寄つて働らけなくなつたのだから、今度は世の中がその老人を引取つて養ふのは當然の事である。何んにも恥かしい事ではない。あの人もさう思うて養老院へ凱旋するのだ、旗でも立てゝ見送つて上げるがよいとか、長崎では岸壁迄、旗でも立てゝ出迎へするがよい、養老院でも樂隊でもはやして世の中の勇士を迎へるがよいなんて云ふんですよ。

丙　甲君は實に呑氣だネ。實際そんな風に考へて居つたら呑氣でいゝネ、だが僕等にはどうしてもそんな事は考へられないね。……

丁　そこだよ、君や奥さんの考へによると、養老院はドコ迄も國家とか社會とか宗教團體とかが經營する不幸な人、哀れな人のために慈善事業であると考へて居るのだ、だからそんな處で養うて貰ふ事は恥かしい事であると言ふのだらう。

丙　さうだよ。

乙　さうですよ、だから私はいつも主人にどうぞ少しでも貯金して下さい、でないと年が寄つてから困るやうな事になりますからと云ふのですが、一向聞いては呉れません、……吾々人間

は神との約束に於いて、十年とか五年とか一日とか半日とかいふことは、始めから決めては居らないのであつて、いつお迎へが來るか解らないのだ。神樣が人間に許して下さつたのは一人々々に今といふ時間だけは自由に許して下さつたのであつて、決して遠い將來や過ぎた過去を許しては下さらなかつたのである。だから人間はその許された今といふ時間に起つた色々の事柄に對して、最も善い生き方をせなければならん。今から貯金して置いて年を寄つてからなんて言うて居ると、明日お迎へが來たらどうするか、吾々は今の事柄に對して今自分の持つて居る力の中で最善の行爲をすればよいのであるといふのです。……何んだか理窟もあるやうですが、又何んだか頼りないやうな氣もするのですよ。

丙　奥さん甲君はえらいことを云ひますなあ——つまり甲君は、自分の事は全く神にまかせて、世の爲人の爲に今といふ時間に自分の持つ力で最善の行爲をするといふのですネ。參つた、奥さんこれは一つお宗旨換へですぞ。

丁　やゝ、大變な事になつたネ。僕が未だこれから一くさり話さうと思うてる間にそんなに早く降參して呉れては僕の話のやり場がなくなるよ、マア〳〵待つて呉れ、兎に角今迄の君方の考へ方は決して間違ひではないんだよ。然かし世の中のことは何事でも考へ方は一つに決つたことはないのだよ、二つも三つもあるのだ、甲君の考へ方から云ふと先づ養老院の設立の

考へ方が先刻君が言うたやうな考へ方とは違ふんだ、そこで結論が養老院行は恥かしい事と云ふ考へ方でなくて、養老院へは凱旋するんだとなるんだよ、ネーさうだらう。

甲　ウンさうだよ。僕の考へでは養老院にせよ其他にでもあるが、今日は特に養老院について言ふと、人間は世の中に生きて居る間、世のため人のため國のために働らくべきである。そして働らき疲かれてモウ働らけなくなつた時には、今度は國家とか社會とか言ふ方面で養老院と云ふものを造つて、世のため人のために善き戰ひを戰うて、戰ひ疲かれた人を安らかにその餘命を保たしめる、そのために養老院である。だからその養老院に迎へられる人は人生の勇者である。世の戰士であるから入院は卽ち凱旋でなければならんと思ふんだネ。僕達のやうに子供のない者は特に養老院へ凱旋するのが神の道だと思ふネ。然しこの場合最も大切なことは僕達に果して凱旋するだけの美き世の戰ひをなし得たや否やと云ふ資格問題だネ。アツハツハツハツ……。

皆　さう考へると養老院へは是非凱旋したくなりますネ。

唯吃論

誰か言ひし唯心論と、誰ぞ云ひし唯物論と、又近頃餘り、エラクもなき人が唯生論と云ひしとか、然らば凡中の凡、愚中の愚なる我も亦一語をか言はん。心臟の强きを笑ひ給ふ勿れ、大方の衆よ!!

抑々支那には何時の頃よりか又誰が始めしかはしらねども『福・祿・壽』と申す神のおはしまして、庶民の信仰深きこと誠に驚くばかりなり。人々はただ『財神菩薩・財神菩薩』とのみ拜み申し上げて、四億の民に普遍なる信心の對象とこそはなれるなり。されば何故福・祿・壽は財神なりやと訊ねけるに答ふる人とてもなく、空しく數年を經て漸くに自ら悟りしことこそ目出たき限りなりけれ。福と申すは、一人の人が子供を抱ける姿にてこれ子福なり、祿と申すは此上なく貴き役人の衣冠束帶せる姿にて、これ食祿なり。壽と申すは長き白髯を垂れ、杖つける老人の姿にて、不老長壽の象なり。されば福・祿・壽とは四億の人々の渴仰する幸福にして又歸依する神樣なりとぞ申すべし。さて長壽と云ふは個々の人間の希ふところのものにして、子福と云ふは種族的繁榮を希ふ姿なり。

されどこの二つの妙機は等しく人力の一指も觸れ得ざるところにて天命とこそ申すなり。すべての者が天命を完ふせんとする時に缺く可からざる唯だ一つの道は、食ふと云ふことにしてこれ誠に食祿に當るなり。

食祿こそは、食ふことこそは、『吃』こそは、個人にも種族にも絶對必要の方法なり、手段なり、行爲なり。つら〳〵人の世の種々樣々なる相を案ずるに、もろ〳〵の事象は凡てこの行爲の現象なり、さればこそ、げに『唯吃論』と申すべきなり。あなかしこ、飯桶・飯桶。

一石三鳥

私が子供の頃田舍の家で、一枚の障子のサンの一番下の段に一厘のせて、一段毎に倍增しにのせたらドレだけの金高になるかとか、算盤のツブを一番始めのケタの一から一二三四五と數へ、上のツブと替へ、更らに一二三四五と數へて上のケタに繰り上げて、又一二三四五と數へることを繰返へす、そして算盤全部が動かすことが出來なくなる迄にするには何時間かゝるか、とか云ふやうなことを云うては、わい〳〵騷いだことがあつた。

禁煙主義者が云ふには、一人の人が毎日一本宛卷煙草を儉約すると、日本中では一ケ年に何萬圓とか何十萬圓の節約が出來るとか、禁酒の宣傳に晩酌一本を儉約すると、日本中では戰鬪艦が毎年何隻出來るとか云ふやうな鼠算をよく聞かせて呉れたが、どういふものか實行力がない。未だそれによる十萬圓の貯金も一隻の軍艦も出來たことを聞いたことがない。

近頃白米を中止して、七分搗き又は胚芽米を常食にすれば、一ケ年七千二百萬石の使用で三百萬石の節約が出來るとか云ふことであるが、人間の智慧と云ふものは、どうもたいして進歩するものではないやうだ。

それは兎に角として、かうした米の節約と云ふことが云はれることを思ふと、どうやら今日の狀態に於いて、米が不足して居るらしい。玆に於いて私は、

『白米酒釀造禁止を提唱する』

同時に酒の釀造は

『滿洲產高粱に限ることを提唱する』

この二つのことで、日本の米問題は容易に解決すると同時に、滿洲高粱は大需用口を發見することになる。

私はこれを一石二鳥の妙案と云ふ。イヤ一石三鳥となると思ふのである。

何故ならば、白米酒の釀造を禁止することによつて、米の節約に成功するのが一つ。滿洲は高粱の需用口を發見することに於いて、高粱の値上りを見るであらう。高粱の値上りは滿人農家の收入を增加する。收入の增加はこれぞ工業日本の經濟發展の基礎である。三千萬人の滿人の收入の增加は、購買力の增進となるであらう。これその二である。それだけでなく農產物の價格の騰貴は日本農家の滿洲分家を容易ならしめるであらう。これが第三である。一石三鳥漫談依如件。

恐るべき力の漫行

永く上海に住んで居る人なら誰でも知つて居るであらう。

新公園が取り込んだ舊江灣路のあの大きなポプラの並木路、今の西門から這入つて音樂堂へ行く廣い路がそれである。堂々たりし兩側のあの並木は今は一本もなくなつた、イヤ一本か二本はあるらしいがどうしたのであらうか實に亭々として天を覆うた立派な街路樹が十年かソコラで殆んど全部が根こそぎに枯れて終つた。それは少さい乳白色のからだをした害蟲のためである。公園の管理者は多くの苦力を使つて害蟲退治に骨を折つて居るのも見たが、然かしたうとう駄目であつた。老樹と云ふ程でもなかつたが、大木は安々と倒れて終つたのである。

非常に强力な力で壓へると容易に服從の現象を表示し、その强力者に對しては使ふ言葉迄が丁寧になる。イヤ慇懃を極めて强力者を歡迎し又遠慮なく讃辭さへも呈する。

其處で經驗の淺い强力者などは好い氣になつて吾が意を得たりと喜ぶのである。

ところがその反面に於いて彼等は極めて緩慢な速力で、全く得意然と喜んで居る强力者の感じないやうな速力で、じり〳〵と堅い場所を避けて又右に左に方向をかへながら喰うて行く。さう

して樹皮の蟲糞が人の目に觸れた時には已に遲しである、皮肌はメチヤ〳〵に荒らされて穴は樹心に迄達し、大木は遂に倒れるのである。

專門の宣傳者もなく、誰も太鼓一つたゝかないのに、いつの間にやら福・祿・壽は全國の人々に浸潤して居る。

恐るべき力の漫行、其處には一日・一ケ月・一ケ年・五年・十年・五十年と云ふやうな人が定めた時間などは問題でない、自然に自然の方則に從うて生きんとする生命の力が見えるだけである。

絶海の孤島と小説

西沙島からモツト南の遠い〳〵絶海に小さい一つの名もない島があつた。餘りにも小さいためにその島の人々には島中の事柄が何にも彼もスツカリ解つた居つた。恐らく一戸々々の家族生活から一人々々の生活まで見えすいて居つた、この島の人の中から一人の外國留學生が出た、やがて五年の留學を終つて島へ歸つて來た、そして外國の色々變つたことや、珍らしい事を話して呉れた、島の人々はビツクリして目を見張つた。

外國で勉强したのが醫術であつたので早速醫者を開業した、島の人々は外國戻りの新らしいお醫者樣に診察投藥を受けた、病人はメキ〳〵と全快した。全快者は新歸島の醫者の妙手であることを吹聽して歩るいた。全島民は一も二もなくそのお醫者の信者になつた。このお醫者は外國から外國語の書物を取り寄せて讀む、そして次ぎから次ぎと珍らしい變つた色々の事柄を話して聞かせた。

島の人は聞く度び毎に眼をパチクリさせて驚いた、此島にも昔から物語りや昔噺があつたが、お醫者樣が外國の小說と云ふものを飜譯して若い人々に讀んで聞かせたので、若い人々はわけも

なく感心した。そして吾れも吾れもと小説を書いた。

然かしこの若い人々は外國小説の何處に感心したかと云ふと、それはその奇拔な珍らしい點に感心したのであつた。そこでその若い人々は小説を書くのに何んでも小説と云ふものは奇拔な材料珍らしい物を主材にせなければならんと思つて、知つて居るだけの事柄の中から珍奇なものを選み出して書いて見た。そして又他の若い人々に讀んで聞かせた、聞いた人々は驚きつゝ感心した。そしてこの人々も小説信者になつて終つた。斯くて此島では小説と云ふものが大流行になつた。又書く人も次ぎか次きへと出て來た。

然かし、本來この島が極めて小さいので、總べての事柄は悉く知られて居るので少しばかりの奇拔な事柄や珍らしいことはわけもなく種が盡きて終つたので、或る人は外國行きを思ひ立つて外國の珍らしい變つた種を仕入れて來て小説を書いた。始めの中はさうした事で島の人々はビツクリして眼を見張つて居つたが、同じやうなことをする人々が益々增えて來たため外國の事も追追と珍らしさを失うて終つた。島の人々はかくて自分の島の小説は世界の水準にまで進んだかの如くに自信を持つやうになつたのだが、どうしたいとか世界の人々は一向此島の小説を感心もして吳れないらしい、なぜだらうか？

小説とは、人々の知らない奇拔なこと、珍らしいこと、想像もせないやうな變つたことを材料

として書くものと考へた。始めの出發點が間違つて居つたらしい、つまり闇の中にドンと一發打上げる花火が、パツと開らいて人の目をアツト驚かす、さうした事柄を書くのが名小説のやうに受け入れたそのためらしいとは、或る外國人の話であつた。此話はあながち絶海の孤島の昔ばなしとばかりは思はれないが、ハテナ。

神蟲

日本からの新聞は面白いことを書いて居る、東京方面では近頃神虫又は九龍蟲と云ふ蟲を飼育することが流行して居る。ところがこの蟲が果物屋に寄生したが最後一夜の中にメロンでも、リンゴでも、ポンカンでも、パイナップルでも大きな穴を開けて終ふ、乾物屋に寄生したら、これ又一夜の中に椎茸でも、干瓢でも、高野豆腐でも、蟲糞だらけにして終ふ、非常な害蟲であるからと云ふので、その飼育をその筋から禁止したとのことである。

實は私は、昨年夏東京から來た某氏からその神蟲の話を聞いて居つたのである。某氏の話と云ふのは、

最近東京では不老長壽とか、虚弱者の常備藥とか云うて何んでも「神蟲」とか「九龍蟲」とか云ふ小サイ蟲を買つて、各自の家で飼育して、生きたまゝで飲むことが流行して居る。自分の姉などもその信者で隨分澤山飼育して居る。自分が呑むだけでなしに人樣にもお分けして居るが、皆さん大變好いと言うて居るとか言ふことです。

此蟲を呑むのは雌の方は偶數で、雄の方は奇數で呑むのださうです、何にしろ生きてる奴を

そのまま口に入れるのですから人によると氣味惡るがるのです。ソコデ、カプセルに入れて呑むのださうです、恐らく非常に流行するでせう。

私は嘗つて店の王先生がソノ蟲を呑んで居るのを見たことがあつた。丁度鰹節の蟲のやうな姿でモツト小サイ蟲であつた。その時はたゞ補藥と云ふことだけより聞かなかつたが、東京で流行して居ることを聞いてハ、アンと思うた。その頃上海に新らたに出來た日本のラヂオXQHAから漫談を放送した時に、一寸内々で放送したことがあつた。其後魯迅先生との話の時に此話をしたところが、ソノ神蟲とか九龍蟲とか云ふのは日本製の名である。上海やら杭州あたりでも居るよ。支那人でも呑んでる人が澤山ある。アレハ洋蟲と云うてスペインからの輸入品であつて、ナカナカ贅澤な奴でネ、自分等もマツチの空箱の中で、胡桃や蓮子を餌にして飼つたことがあつたが、餌が高くついて、ドン〳〵增へるので後には棄てゝ終つた、と云うて話された。

支那は徐福以來、幾世紀の間不斷の努力をして、不老長壽の秘藥を探求したのだから、實に種種樣々の藥がある。恐らくこの洋蟲は何首烏や蔓蒿のやうに流行することであらうと云ふと。

魯迅先生は、老板、徐福と云ふ奴は不老長生藥には失敗したんだ。そして到底ありませんと云へば殺されるので、出駄羅目に遠い國のことを云うて、甘く一族を連れて逃げたのだ。再び支那へ歸らないことは豫定の計畫であつたんだよ、支那には昔から不老長生藥と金を作る術つまり煉

金術とに一生懸命の研究をしたが、悉く失敗であつたのだ、徐福なんて奴もその一人だよ、と云うて笑はれたことがあつた。こんな話を聞いて見ると支那人は富貴長命を人力を盡くして研究したが、それは遂に不可能を知ると共に、今度は超人間力に頼つてこれを得んとした。其處に財神菩薩なるものが出現したのではないかと思はれる。

人間富貴になるのは『王侯將相など』或る點までは人力で可能であるとしても、或點以上絶對にと云ふことは不可能である。

絶對にとなるとそれは人の力ではなくて、神の手に在るのである、神の手にあるのだから、神様から富貴を貰ふより外にない。そんならどうしたら貰へるか、神様を喜ばしたら貰へるだらうと云ふことから、神様を喜ばすためのお祭りと云ふことが發生したのではあるまいか。そして熾んにお祭りをしたが、それでもどうも思ふやうでない、富貴とか榮達とか云ふことは生れぬ前からもうチャンと決つて居るものらしい、幸運も不運もお祭位で變るものではないらしい。

そんなら今度自分の家に生れる子供は、一體幸運な性分を持つて居るのであらうか、又は不運な性分の子供であらうか、此に發生したのが占ひではあるまいか。

この又占ひと云ふ奴が、實に甘く出來て居つて、當つた時には占ひ師の手柄になるが、はづれた時にはその責任はチャンと他へ持つて行つて負はせてある。而もその責任を負はせる相手と云

ふものが、濱の眞砂ほど負はせても、頭から瀧のやうに海の水をブツカケても、決して不足も不滿も小言も云はない、年とか、月とか、日とか、方法とか、方角とか、井とか、便所とか、猫とか、犬とか云ふものに負はせてあるのだから安心なものである。だから私は八卦とか、周易判斷とか、人相とか、骨相とか、四柱推命とか、姓命判斷とか云ふやうな總べての占ひは、責任轉嫁の發達の極致であると云ふのである。

ヤア／＼神蟲の話が横道を歩るいて占ひに迄落ちた、お許し下さい。

漫談ぢや漫談ぢや。

牛肉盗人

神様は人間に泣くより以上の悲しみは與へないと仰しやる。

なるほどさうだ、人間は口惜しい時にも泣き、殘念な時にも泣く、親が死んでも、子が死んでも泣く、嬉し泣きと云ふこともないではないが、兎に角泣くのは悲しい時である。

ユーゴーの名作ジャンバルジャンを讀んで泣かない人があるであらうか。彼の活動寫眞を見て涙を流さない人があるであらうか。實にあれは人生の一大悲劇である。

而も彼の大悲劇の發生が僅かに一本のパンの盗みからである。

働らく事の出來ないが故に、可哀い子供等の泣く飢ゑの聲に堪へられずして盗んだ一本のパンが、世界の人間を泣かせる大悲劇となつたのである。實に人類の哀史である。

サテ私はあの活動寫眞を見て考へさせられたのは、凡そ人間界の出來事を法理一點張りで處理したり、理論一點張りで考へたりすること、又物事を餘りにも潔癖にしたり質一點張りに考へるやうな片よつた考へ方に對して、私は大きな疑問を持つやうになつた。

例へば設計圖を机の上で造つて、實際工事にかゝつて、何んでも彼でも設計圖通りにせなけれ

ばならんと、理論一點張りで、果して工事が出來るものであらうか。

又例へ一つでも桃は桃だと云うて、量も容積も介在を許さないやうな考へ方で實際の世の中で生活出來るであらうか。

雨だれ水の溜りを近江の湖水と大小のさこそあれ、矢張り同じ水溜りであると論じて適當であらうか。

例へ一本のパンでも、又どんな事情であつても盗んだ行爲は盗みである、則ち刑の處罰を受けるべきであると云ふ峻烈な質的論理がジャンバルジャンを生んだのではないか。

私の家の近所に中國人の牛肉屋があつた。毎朝配達する肉を蒲包に入れて表の人道の片側に何十個となく並べる。

或る朝私は偶然面白い事を見た。

それは何時もの通り何十個かの牛肉の蒲包が並んで居る時に、北の方から一人の長衫を着た意氣甚だ揚らざる薄汚れた青年が、それでも歩くには悠々と肩を搖つてやつて來た。そして並べられた蒲包の側を歩んで居る中に、極めて自然に蒲包の一個を右の手に提げて、悠然として歩るいて行くのである。

やがて牛肉屋から一人の店員が飛び出して來て、一寸北南を眺めてスグ蒲包を提げて行く青年

を追ひかけた。私は一擧一動に注意を拂つて見て居つた。

追ひついた店員は、一寸小腰をかゞめて提げて行く蒲包をチョイとひつ張つた。蒲包は青年の手からはなれて牛肉屋の店員の手に移つた、飯桶の一語を棄てゝ店員は歸つた。

日本人だつたら、先づ横面の一つや二つはナグツテ於いてから、コン畜生と行くところだが、其處が支那式の違ふ點である。

蒲包を取り返へされた青年は、まるで何事もなかつたと云ふ風で振り返りもせず悠々と歩るいて行つた。

只にこの時だけでなく、支那人は全體的に食物と云ふことについて非常に寛大である。

ほんの一面識の人にでも飯を食へと勸める。支那人ほど人に飯を食へ〳〵と勸める人間は多くはあるまいと思ふ。

この食物に對する寛大と云ふことが結果してか、又他に理由があつてか知らんが、食物の盜みと云ふことについては、實に驚くばかりの寛大である。あれだけ利己主義だと言はれる支那人にして、どうして彼んなに寛大であるのかと實に怪しくさへ思はれるのである。

飢饉の時の食物の掠奪を罪にせないこの國の人々は、また個人的にも食物盜賊に對して非常に寛大である。

その寛大の一例として私は牛肉盜人を擧げたのであるが、これをジャンバルジャンの話と比較して其處に非常に大きな距離を見出すのである。

支那では食物を盜むのはその根底に『喰ふことが出來ない』と云ふ悲慘な存在と社會人心が肯定して居る。それは無論無意識的にであつても、其處に生ずる人間的寛大さである。

茶撰り

日本は昔支那から陰陽二元の哲學を敎へられた。次ぎには西洋から一元哲學と云ふものを敎へられた。そして二元哲學はわけもなくけし飛ばされて、何んでも彼でも一元一元と、一元でなければ夜も日も明けなくなつて來た。

その結果として、何首烏は不老長壽の藥であると誰かゞ言ひ出すと、誰も彼もが何首烏々々と云うて一時は流行する。然しそれもほんの一時的流行であつて、又暫らくして、誰かが決明子は無病息災の藥だと云ふとわんさ〳〵と賣れて行く。一擔三兩位の品がまた〻く中に二十五兩、四十兩、五十兩と値上りして上海市場品切れとなつた。寧波あたりの農民がそれを聞いて、やれこりやと決明子の種を蒔くと云ふ騷ぎ。然し、それが實のる頃には、その一時的流行は煙のやうに消えて終つてゐる。

スタイナツヘの若返り法と云ふ奴が紹介されると、彼方からも此方からも、色々の若返り法や若返りの藥が出て來る。遂に山東苦力のニンニク迄が紳士富豪の食膳やポケツトに跋扈する。ビツクの自動車から、シガー銜へた八字鬚の下から、かつて犬畜生のやうに臭い〳〵と侮辱した

山東苦力をポツ〳〵と臭はせて、昨今非常に身體の調子がよいなんて平氣で御座ると云ふ珍風景が街頭をのさばつて、オセローの廣告主は忽ち成金となる。

支那政府が突然として銀國有、紙幣不兌換を發表すると金融、經濟、財政等の學者實際家を始めとして、吾れも〳〵として、名論卓說を吐いた。中には御丁寧にも、わざ〳〵上海迄二三の子分迄つれて調査研究に出掛けて、多くの人々を集めて、定石的經濟論の長講を聞かしてくれた親切な人もあつた。兎に角、その矢繼早に出た名論卓說なるものは、誠に國を擧げて一元的悲觀論であつて、舊正月には支那の紙幣は反古になるとか云ふやうな結論であつたやうに記憶する。

そして程なく舊正月は來た。然し支那紙幣は一向に反古にもならず、一元は一元として通用してゐる、對日爲替も例へ二分でも三分でも日本金よりも高い値を保つてゐる。何んと云ふ奇怪事であらうか。

西洋醫學は非常に進步したものには違ひない。然し未だ完全ではないのである。如何なる名醫の治療も、手術も人間の生命には未だ一指も觸れることは出來ないのである。而も日本人の中にはこの未完成の西洋醫術を、恰も完全なもの〻如く考へてゐる人がナカ〳〵少くないのである。豈にそれ醫術のみならんやである。天文から宗敎、哲學、文學、物理、化學等現在の全學術一つとして完全なものは未だ無いのである。たゞ完全に向つて進みつゝあると云ふに過ぎないのであ

る。然るに多くの日本人は恐らくは、此等今日の學問は決定的のものでもあるかのやうに信じて居る人々は決して少くない事を思うて寒心するものである。

本因坊の名人は定石の大本山である。しかし、支那の青年棋客吳清源は突飛にも天元を打つて彼名人を苦しめたではないか。

私は吾々日本人は定石の外に天元の打ち方の存在を忘れてはならんと思ふ。

山城宇治と云へば、天下にならしたお茶の名所である。彼の地方一帶の女子供(娘)は、年中、手のあいてる者はお茶問屋へ、お茶撰りと云うて、お茶の葉の中に混じつて居る不純物を撰り出す仕事に、一日何程、又はお茶何貫目撰つて何程、と云ふ日當又は賃金で働らいて居るのであるが、それと同じやうなお茶撰りの仕事が上海にもある。小さい茶舖では二三人より十人二十人と云ふお茶撰りを雇うて矢張りお茶の中の不純物を撰り出させるのであるが、その賃金の勘定の仕方が甚だ面白いのである。日本では撰り上げたお茶の目方を量つて賃銀を算出するのに、支那では撰り出した不純物の目方を量つて賃銀を算出するのである。何れの方法にも一長一短はある事と思ふが、しかし撰り上げられたお茶の目方を量つて賃銀を算出することも出來るが、撰り出された不純の塵芥を量つて賃銀を算出することも出來るのである。

定石で名人となることも出來るが、天元を打つても名人を苦しめることが出來るのである。

一元一元と云うて何んでも彼でも一元でブツ通さうとすると、其處には自殺と情死と投げ出しと自暴自棄とが動いて來るのではあるまいか。

窮すれば變じ、變ずれば通ず、と云ふ人生哲學に生きて居る中國人と對照して考へる時に、吾吾の生活を再檢討する必要があるのではあるまいか。茶撰りの漫談一席如件。

蕨と苜蓿

伯夷、叔齊の昔話に名高い薇は、多分日本で云ふ蕨と同一の物であらうと思ふが、日本でこの話を聞いても一向に面白くないと云ふのは、日本人は、日常この蕨を好んで食するものであるからである。

中國のやうに恐らく一本の蕨も食べないで、野にも山にも生えるがまゝに野草と共に生えて枯れて行く土地に於いてこそ、この話は意義があるのである。つまり誰も食べないそれこそ乞食も食べないこの蕨を食べて生を保つたと云ふので話になるのであると私は思ふ。

さてこの名高い蕨、而も伯夷も叔齊とが確かに食べたと云ふ物を假りに昔は食べなかつたとしても、一度食べたといふ事實が出來たのだから、それ以後の人々はそれを食べる筈と思ふのであるが、どうしてか決して食べない。或はあの話の終りが日本文では蕨を食べて餓死したとなつて居るが、原文でも矢張りさうなつて居るがために、その後の人々も食べないのかも知れない。兎に角どうした事か何んの理由か知らんが、中國人は決して蕨を食べない。私は凡そ私の知つて居

る人には、無遠慮にこの理由をお尋ねするのだが、未だその理由は解らない（僅かに一人の廣東出の人が、廣東では食べるといはれたが、それ以外は聞いても解らない）。

上海附近でなら、蘇州でも杭州でも、紹興でも南京でも、湖北湖南あたりでも、雜草と共に生えて雜草と共に枯れるにまかせてある。

私は中國の各地でこの蕨を見る。そして墳墓の上とか、その附近に澤山生えて居るのを見て、或は何か、そのために迷信でもあるのではないかと思ふのであるが、未だ迷信も聞いたことがない。

種類が違ふのかも知らないが、上海附近では草頭菜と云うて苜蓿をよく食べる。聞けば中國の人は食用として植ゑて居るとのことである。

或日のお總菜に、阿媽が蕨と草頭菜を別々に煮て呉れた。何んの氣なしに箸をつけたものゝ、食べてる中に妙なことが考へられて來た。草頭菜は日本人の食べない物で、蕨は中國人の食べないもの、そして私共は二つとも平氣で食べる。一體お前は何處の國の人間かと聞きたくなつた。

然し私達はこれでよいのだ。日本人の通じない點に通じ、中國人の知らない點を知る、其處に

第三の食道が拓らかれて來るのだ。

新らしい食道を拓らいて行くのと同じやうに、私等は又あらゆる方面に此種の新らしい路を開らく責任があるのではないかと思ふ。

西湖夜話

淨慈寺・六和塔・靈隱寺・玉泉・岳廟と見物して、松村領事のお招きを受けて御馳走になつた私達六人は、新らしい西湖畔の大華旅館の樓上に一夜の王侯をきめこんだ。ストーブを圍んで紅茶に喝を濡らしつゝ、次ぎから次ぎとつきぬ思ひ出話に夜は更けた。

パールバツクと云ふ人の書いた小說が譯されて出た『大地』と云ふのだ。丁度私は風邪で寢て居つたので讀んで見た。そして嘆息せざるを得なかつた。

殘念ながら、日本人にかうした物は書けない、內容は支那の農村生活を小說に書いたものである。又其筋も極めて平凡なアメリカ映畫に過ぎない、貧農から地主へのメデタシ〳〵であるが、中に書かれて居る色々の事柄が眞實を寫して居るのである。

支那の奧地に飢饉がある。色々の報告や新聞の記事を見ると、

喰ふに食なく、草を喰ひ、木の芽を喰ひ盡くして、今や木の根の軟かい皮をむいて喰ひつゝある。イヤ牛も馬も食ひつくした、犬も猫も食うた終うた。子供を賣つて食に代へた。犬の腐肉をさへ食うて居る。イヤ人間の肉をさへも食ひつゝあるとか、粘土を食うて居るとか云ふ文字がず

らりと並べられて居る。

然かし私にはかうしたあらゆる悲慘を表現した文字がたゞ、

拜啓時下寒氣殊の外嚴しく候折柄御一同樣には御障りも無之候や

的の響しか與へない。それは私が支那の文章には型があると考へて居るからである。

其の私に大地はどんな響を與へたか、

王龍と云ふ農夫が飢饉に際して、或る日粽子米（トウモロコシ）の粒をとつて終つた穀を、燃料にでもせうと片附けかけて居ると、阿蘭と云ふ妻が寢床の中から細い聲で、それはたきものにするのではない、私が山東に居つた頃、飢饉の時にそれを粉にして團子にして食べたことがあつた云々。

と云ふところを讀んで、私は一種の壓力を感じた。始めて飢饉の眞實を傳へた文字に接した思ひがした。

如何なる美文でも名文でも、それがたゞ學問や智慧で書かれたものであるときには、かうした感じは受けないものである。

私が受けたこの壓力は、この小說を書いたバック其人が且つて受けた壓力に相違ないと私は思うた。

なる程ネーと云ふ人もあつた。

昨年滿洲から遠く蒙古を旅行して『蒙古』と云ふ本を書かれた山本さんに、私はあの『蒙古』を讀んで、貴方が茫々漠々際涯もないあの蒙古大陸から受けられた、一種の大地の威壓とでも云ふ可き壓力を感じましたか、如何ですかと聞いたところ、山本さんは、さうですさうです、とうなづかれた。

私は且つて或る秋の夕暮れに、湖南省洞庭湖で、たゞ一人小さい弋子に乘つて、益陽から常德に向つたことがあつた。其時の威壓とでも云ふやうな一種の壓力を受けたことがある、と話したら、遠く滿鮮露の國境から來られた宗さんが大變面白い話をせられた。

或る時十名ばかりの宗さんの一行が、二臺の自動車に分乘して、興安嶺の附近を旅行せられた時の話であつた。

僕達の自動車は、始めは二臺前後して走つて居りましたが、僕の乘つて居つた方の自動車が度度のパンクで、たうとう一臺の自動車に遲れて終つた。而も僕等の自動車は遂に動かなくなつて仕舞ひました。處は大蒙古平原の眞只中である。目的地迄は日本里數で十八里ある。併し如何ともすることは出來ない。今はこれ迄なりと一行徒步することに決めて動かぬ自動車を棄てゝ出發しました。

始めの中は皆んななか〳〵元氣でした。歌など唱うて歩るいて居りましたが、漸く疲れて來ると一人默し二人默し遂に一人として歌を唱ふ者はなくなつて來た。日は追々と暮れて來る、寒むさは感じて來る。空腹を覺える、歩みはダラ〳〵おそくなつて來る。後には眞暗の中を默々として重い脚をひきずつて居るに過ぎなくなつた。然し道は未だ〳〵遠いが喝を醫す一杯の水さへもない。

其時折よく一人の蒙古人が馬でやつて來たので、傳言して馬で迎へに來るやうにと賴んだ。

こんな事でも非常な安心を與へるもので一行は又勇氣を出して歩るき出した。

然しその勇氣もほんの暫らくであつた。後は又重い脚を引摺つて居るのであつた。

喝きと空腹と疲勞、どうして進行どころではない。眞暗い中であつたからそれでも少しは歩るいて居るやうに氣持だけは思うて居つたが、恐らくはたいして歩るいたものではあるまい。と思ふ丁度眞夜中頃、遙かにチヤン〳〵チヤン〳〵と鈴の音が前方から聞えて來た。

誰やらが來たぞと急に元氣な聲を出した。一同も生き返つた思ひがして賑やかになつた。果して鈴の音は迎ひの馬であつた。一人々々に馬を與へたところどうした事か馬の數は人數に對して一匹不足して居る。

さあ困つた事だ、どうしても一人だけは歩るくより外ない、ところで宗さんはどう考へて見て

もこの一行中に歩るく勇氣のあるものは自分だけである。ヨシ僕は歩るかう、そして皆の者を馬で先きにやらうと決心して、一行がついたら又すぐ迎ひの馬を寄こすやうに賴んで出發させた、一同は勢よくチヤン〳〵〳〵〳〵と出發した。僕の脚も犧牲的精神に勇氣づけられて少し輕くなつた。勇氣を出してドン〳〵と歩るいたが、何を云うても馬と人とで、馬はドコ〳〵〳〵〳〵と走り出した。歩るく宗君との距離はグン〳〵に開らいて來た。やがて最後の馬から、宗君失敬するよ直ぐ迎ひに寄こすからネと云ふ聲が聞えた『賴むよ』と云ふ聲の下から馬の一行は脚を早めた、鈴の音に交つて聞えて居つた人聲はもう聞えなくなつた。鈴の音のみが暫らく聞えて居つたが、やがてその鈴音もカスカになつて聞えなくなつて終つた。眞暮暗の蒙古大平原の眞夜中は實際萬籟寂として聲がない。其中を且つて、

蒙古原車のわだち三千里

と歌つたことのある、その車の輪だちのみを唯一の賴りとしてトボ〳〵と歩るいた。足の裏が軟かい草の上を踏むと、アー路が違つたと足探ぐりに車の輪だちを探がして輪だちについて歩るいた。イヤ足を引摺つた。

漸く東天の白らむ頃、迎ひの馬が來て呉れてヤツト救はれた、云々。

私は車の輪だちを唯一の賴りとして歩るいた。軟らかな草を踏んで又車の輪だちを探がしてわ

だちについて重い足を引摺つた。と云はれた一句に、又一つの壓力を感じた。ほんたうだほんとうだと獨り感じ入つた。

いつしか十一時近くなつたので皆な自分の部屋に歸つた。

夢はまどらかであつた。

黑燒

今日は一月の四日である。流石に小寒近かき風の音は、ブウ〳〵と唸りてコト〳〵と硝子戸は鳴り、バタ〳〵と干し物は旗を振れど、光りまぶしき太陽は暖かしとも暖かし。

吃飽了(滿腹した)睡魔は、しきりに覆ひ來る。持つて居つた書物も、何時しか手から離れて夢はしきりに西湖に遊ぶ。

正月とは思はれない程ポカ〳〵と暖かい。妻と二人は、新々旅館を出て葛嶺に上る。漫歩と云ふか散策と云ふか、千貫の重荷ひく牛の歩みのやうである。小坂、石道を上つて、樂書きと破損に廢頽の雅趣が滿點になつて居る。喜雨亭に汗ばんだ顏を微風に吹せた心地よさ、將さに千金である。少憩の後、更らに石堦幾十級を上つて、某の別墅を吾がもの顏にボーイを呼んで、龍井の綠茶と西瓜子を取つて、悠然として西湖の風光を滿喫して、茶代僅かに四角洋錢、あゝ安いものは西湖の別莊遊びである。數萬金、數十萬金を投じて數奇をこらした權門長者の別莊を、見もしらぬ他人の而も旅人である吾等如き者が、例へ限られた時間であつても、我儘勝手にボーイを使うて、天下第一の景西湖の風光を滿喫して、その代價タツタ四十錢、何んと云ふ安い而も清遊で

あらうか。利己主義者と烙印をおされて居る支那人の社會にも、かうした面白い良い點がある。かうした點こそ支那が世界に誇り得るものではあるまいか、など考へながら、謝々再來々々とボーイの笑顔に送られて、足は更らに頂上に向つて上る。脚下の西湖にギラ〳〵光る太陽のまぶしさに顏をそむけて眼を開けば、夢は覺めて、身は小倉村の假寓に在つて寢返りを打つたのであつた。

その西湖畔に、胡餘慶堂と云ふ大きな漢藥屋がある。この藥屋は杭州名所の一つであつて、朝から晩までお客と見物人の絶えたことはない。私も度々見物に行つたが、不老長壽の祕藥の一つと言はれて居る袋角を持つた鹿が、數十頭も飼つてあつて、多くの見物人が動物園でも見て居るやうな氣持ちで見て居ると考へるのは、吾々日本人の見方であつて、實は支那の人々はあの高價な祕藥である鹿角を採るために、こんなに澤山の鹿を飼つて居る。この藥屋は大金持ちである。大金儲けをすると思うて見て居るかも知れない。中にはこんなに澤山不老長壽の祕藥である鹿角を持つて居るこの藥屋の人は、定めし皆不老長壽するであらうと思うて見て居るかもしれない。或はこんなに澤山の不老長壽の藥のある藥屋にしては、百歳の老人が一人もゐないのが奇怪であると思うて見て居る者もないとは云へない。兎に角吾々の考へや見方とはチヨト違つた角度から見て居ると云ふことだけは言うてもよいと思ふ。

大きな鍋が並んで居つて、香ばしい煙を上げて、色々の藥材が黑燒きにされて居るところがある。私はこの黑燒と云ふことに、何んだかしらんが一種の神祕（一寸言葉が穩當でないかも知らんが）を感じて居るものである。如何なる人だ何時頃如何にして發見した方法か知らんが、實によく考へたものだと思ふ。或は偶然の發見かも知らんが、何にしても偉らい方法であると思ふ。生ま木を蒸燒にすれば、木炭になる位のことは吾れ人共に知つて居ることだが、總べての物を燒いて終へば灰になる。灰は肥料になる位のことが、又一般の常識ではあるまいか（或は私一人の頭の貧弱の暴露であるかも知らんが）。兎に角燒いて終へば、フイになると云ふ概念の中から、燒いて粉にして人間の病を治す、人間の生命を助けると云ふ考へが出たと云ふことは、實に驚く可き發見だと思ふ。而も蝶蝟（イモリ）の黑燒は男が女を女が男を强制的に惚れさせると云ふに至つては、効くか効かぬかは保證の限りではないが、天下一品世界第一の發明ではあるまいか。殘念ながらこの大發見も、吾等の國日本の發明ではなくて、どうやら支那か印度あたりの未開人の發明らしい。一寸言海を借りて、黑燒の條を覗いて見る。

くろやき（名）黑燒

物を燒きて黑き灰となしたるもの。多くは藥として飲み、又は局部に塗るに用ゆるものと云ふ。

と書いてある。

鷹・鷺・雉・雁・鴉・烏の黑燒は、婦人血の道の妙藥であると云はれて居る。梟・巧婦鳥・鴿・雀の黑燒は、喘息に効能があり、鳶の頭・鷄の頭は、三等症の靈藥であり、山鳥は肺病に、鶉は疝氣に、八目鰻は眼病に効くと云はれて居る。私は鷄蛋（鷄の玉子）を煮拔きにして、その黃味ばかりをフライパンに容れて火にかけ、黑燒きにして眞黑になつた物を、尙ほ燒いて居ると、遂に全部は一種の液になつて終ふ（これが一般民間藥の玉子の油である）。一種の黑燒（超黑燒ではあるが）を造つて使ふが、實によく効く藥である。

吾々は少しばかり學問の中毒をして居るらしく、何々博士と云ふやうな人の云ふことでないと信用しない癖がある。或は一歩進んで所謂西洋中毒であるかも知れないが、支那の方法とか民間藥とか云ふものに對して、一種の未開的の視線を拋ける癖がある。然しそれは餘りにも淺薄ではあるまいか。成程西洋の色々の方法は立派なものである、卓越な効能の藥も無論あるには相違ないが、吾等が考へねばならぬことは、四千年の人間の經驗と云ふことである。この偉大なる事實を鼠や兎の百疋や二百疋の實驗よりも輕視することは、果して妥當であらうか。理論は事實によつて容易に訂正されることはないと云ふことがある。何百年か千年か二千年かの歷史を持つこの東洋獨自の製藥の方法である黑燒について、日本の學者はなぜ眞劍に研究して呉れないのであら

うか（或は已に熱心に研究して居る人もあるかも知らんが、例へあるとしてもその餘りにも少ないのに驚くものである）。

幾度も云ふことだが、私が支那漫談をすると多くの方法は、それは何んと云ふ書物に書いてありますかと仰せになる。私が書物には書いてありませんが、からした事實があるのです、と云ふと、あゝさうですか、さうするとそれは貴方の獨斷かも知れませんなア、と云はれる。其處で私は、さうでも私の獨斷であるかも知れませんとお答へするより外に仕方がない。その時のその人人の顏には、明らかに一種の冷笑と云ふか、侮辱と云ふか、兎に角お前さんなんかの獨斷なんて問題にはならんと云はぬばかりの色がアリ〳〵と讀まれる。恐らくその時の私の顏色にも、あゝあれも活佛信者かと云ふ一種の冷笑が現はれて居るであらうと思ふ。

或は今日迄の日本は、支那の事を研究するやうな時と暇とがなかつたかも知らぬ。餘りにも西洋を學ぶに急であつたがために、然しもう今日の日本は、西洋の尻ばかり追うて歩るかねばならぬやうでもないらしい。獨創と云ふか創作と云ふか私は適當な言葉をしらぬが、未だ文學にも活字にも組まれた事のない事實が、支那にはゴロ〳〵して居ると私は思ふ（これも私の頭の貧弱の暴露に過ぎないかも知れぬが）。それはたゞ一つ黑燒と云ふのではない。社會百般の事柄に於いて、四千年の日月を用ひて、何十億の人間が進化法則に支配しられつゝ生命をかけて經驗して來

たことである。博士は何千人或は萬を持つて數へる程出來るであらう。遂に肩書きは商賣の看板になつて終ふかも知れない。然し支那に關するほんたうの支那研究の博士が何人あるのであらうか。

私は何にも支那を暴眞して云ふのでもない、西洋を罵倒するのでもない。日本の學問のために、日本の學問が燈臺下暗しのそしりを萬代にのこさないやうにと希ふのみである。

膠考

人生は無限だと云ふ人があると、イヤ有限だと云ふ人がある。大昔から今日迄この問題は絶えず論議されて居る。恐らく將來も論議されるであらうが、なか〳〵決定はせぬらしい。

然し、人生は有限であつてもなくても、人間が造るものはどうやら有限らしいと誰やらが云うた。先づ子供の數にも限りがある。孫の數にも限りがあると云うて居ると、横合ひからモルモン宗の一夫多妻にだつて限りがあるからネ、と半帖を入れる者がある。

それは兎に角として、何事にでも流行と云ふことがある。特に日本はその流行がひどいやうである。多くの品について云ふことは出來ないが、一つ藥の流行を數へて見ると、六神丸・寶丹・清快丸に仁丹・何首烏に決明子、ビタミンにニンニク、ホルモンにメンソレータム、九龍蟲と云ふやうなところは先づ第一流の流行兒である。どうも吾々は流行が好きらしい。然し私の知つて居るのでは、蝦蟇の油の名は此等の名藥よりもズツト昔から今も尙ほ其名を傳へて居る。誠に一子相傳の祕藥中の祕藥であるさうだが、私はその實物がドンナものであるか、何んで作られるものか、少しも知らなんだところが、今度滿洲旅行をして蝦蟇の油と云ふものがたゞ日本だけの流

行兒でなくて、實に東洋の流行兒であることを知つたが、或は同名異物であるかも知れぬ。

私の道樂の中に漢藥がある。と云うたところで、ほんの幼稚園で、而もその扱ひ方たるや實に漫談的である。決して藥屋的でなく、又斷じて學問的でない。上海方面に支那人の藥舖や南北雜貨海味など賣つて居る店に、蛤士蟆(蛤士蟆とは上海語)と云うて一種の蛙の干物を賣つて居る。私は多分赤蛙の一種であらうと思ふが、干物の形は後脚を思ひきり引張つて干してあつて、眼玉をワラか何かで突き指してつないである。

この干物の特徴は、悉く母蛙に限られて居る。而も姙娠中の母蛙に限られて居ることである。蛤士蟆を買つて來て解剖して見ると、腹部には丸で六神丸のやうな黑いタマゴを一パイ持つたまま干物になつて居るのである。こんなところから六神丸を蛤蟆の毒素で造つてあるなんて言ひ出したのではないかとも思はれる。そこで知らん人は、その腹の中のタマゴが藥になるのだと言ふ人もあるが、支那人が實際に使ふのはタマゴではなくて、一寸思ひつかないものなのである。

池の蛙を見て居ると、春になつて水が溫かになつた頃、お尻から背中の邊りへ一面に透明な白味で包んだタマゴをウントコサと背負つて居るのが澤山居る。彼は蛤士蟆もタマゴを生むと、その一つ一つを白味で包んで背中に背負つて居るのだ。未だタマゴを產まない蛤士蟆は、產んだタマゴを一つ〳〵包む白味を何處から採つて來るか、どうして造るのか、あれは他から採つて來る

のでも特別に造るのでもないのだ。蛤士蟆が姙娠すると同時に、母蛙のお尻の上部に自然に出來るものなのだ、造化の妙だ、白味はチヤンと體內に出來て居るのだ。產む時にか產んでからか知らんが、一つ〳〵丁寧にタマゴは白味で包まれるのだから、背負つてるタマゴをよく見ると白味の中央に黑いタマゴがハツキリと見える。この白味が藥になるのだ。干物の蛤士蟆の腹のタマゴは藥には使はないのだ。長く引張つてある後脚をお尻のところから逆にむしると、背中の皮がムケる。その皮の下にお尻のあたりにポロ〳〵と少しばかりの肉の干からびたやうなものがある。それが白味の干物なのだ。一寸それを口に入れて嚙んで見るがよい、ヌル〳〵として溶けて終まふ。私はこれは膠だと思うて居る。

この膠をとるのだ。この膠をそのまゝ口に入れて溶かして飲んでもよし、又一般の使用法はこの膠を湯呑に入れて水でも湯でも入れて湯煎にするのだ。さうすると非常に大きくふくれて湯呑一パイになる(極く僅かの膠で)、そのふくらんだものを飲むのだが、味をつけるなら鹽味でも甘いのなら氷砂糖でもよい。

ズツト以前に、一寸廣東菜の變り種を食ひに行つた時に、丸でゴムのやうな小さいやうなもので、口の中でどうしてもクル〳〵逃げてカミきれない。何んの味もないものがお汁の中に入れてあつて、これは何かと云うて聞いたところ、『カツポコウ』と云うて吳れた。どんな字を書くかと

聞いて見たが、其時はとう〳〵解らなんだことがあつて、今も尙不思議に思うて居るのであつたが、今これを書いて居る中にフト思ひついたのは、或はあれもこの蛤士蟆の膠の料理ではなかつたかと思はれるのである。カツポコウは蛤蟆膠の廣東音ではないかとも思はれる（私は廣東語は一つも知らんからたゞ想像である）。

今度滿洲旅行の途、新京の友人の宅で、吉林名物蛤蟆油（ガマの油と日本人は云ふ）と云ふものを見た。それは油ではない、全く上海で蛤士蟆と云ふあの干物の蛙の膠ばかりをとつたものであつた。支那人がつけたらキツト蛤蟆膠と云うはずであるが、油と云うたのは恐らくは日本人の命名ではないかと思ふ。上海で蛤士蟆と云うのは吉林の蛤蟆のことである。つまり彼の蛤蟆膠を、蛤蟆油と云う名で補血强壯劑として用ひられて居るのである。

支那では人間の衰弱とか老衰とかを、藥によつて防ぐ、又は取り返すことを昔から研究して居る、所謂不老長生藥とか何んとか云うて居る藥は皆それであるが、其たいがいのものは日本へ傳來して居るやうであるが、未だ多く用ひられない。從つてあまり知られて居らんのはこの膠の藥である。日本では膠（ニカハ）と云ふと指物帝が使ふもの位により一般には知られて居らぬ。然し近頃はセキの藥にチヨイ〳〵名もハイカラにゼラチン劑と云うて使はれるやうになつた。最もお醫者樣の方では、咯血などの時にゼラチン注射と云ふものをやつて咯血を止める方法が廣ろく

用ひられて居る位のことであるが、支那人は膠劑を昔から非常に廣ろく用ひて居つて、支那料理が上等になればなるほどこの膠質の物が多くなるのなど、考へて見ても餘程の昔から膠質と云うものについて研究と經驗をつんで居るやうである。今日迄の處では漢法の不老長生には膠質を多く吸收すること、而も動物・植物などありとあらゆる膠質を用ひるやうである。蛤蟆膠なども矢張りその一種である。

『人間が衰弱するのは身體から膠質が逃げ出すからである。衰弱を防ぐのはたえず膠質を身體の中につぎ込むことである』これは不老長生の方法である。

如何に支那人が膠質の藥を用ひるか、上海で有名な一藥舖が賣つて居る。膠劑の藥名だけでも序でに並べて見よう。

『全副虎骨膠』　『四腿虎骨膠』
『龜鹿二仙膠』　『黑驢皮膠』
『關虎頭膠』　『關鹿角膠』
『龜版膠』　『黃狗腎膠』
『鱉男膠』　『霞天膠』
『麋角膠』　『毛角膠』

『鹿腎膠』　『黄明膠』

此等の膠劑は、實は一藥店の製劑であるが、何處の藥店にでも澤山あるから非常に數多くあるわけである。然し支那の藥名は何處の藥店でも大同小異であるから、先づ種類は是位であらうと思ふ。

日本のホルモンは、姙娠中の婦人の尿の中に最も多く含有されて居るとか聞いて居る。ホントだとすると、姙娠中の蛤蟆の膠が支那で强壯補腎藥として使はれて居る所以も解つて來るやうな氣もする。

私は日本の人の衰弱して居る病人に、動物性の膠と植物性の膠と水棲動物の肝とを交替に飲まれるやうにお勸めして居るが、ナカ〳〵効能的確である。それは簡單に日本人の食物には膠質食用が少ないと云ふ考へからでもあるが、肋膜炎や肺患などで非常に衰弱して居る人や喀血の人などでもなか〳〵効果があるやうである。

雨の日の下午

時　　某月某日
場所　　上海の某店
人物　A　中國人のお客
　　B　主　人

それは雨が降つて店も非常に閑散な日の午後であつた。タツタ一人の老朋友の中國人のお客と主人とは、火鉢を圍んで、シミ〴〵と漫談して居るのであつた。

A　人間と云ふものは、文章を書いて發表するとか、公開の場所で演說するとか、講壇から說敎するとか、敎室で講義するとか云ふ時には、メツタに尻尾をおさへられたり馬脚を現はしたりはせんが、極めて不要意に茶話などして居る時には、尻尾を出したり馬脚をつかまれたりするものだネ。

B　そりやさうだよ。要意して話たり文章を書いたりするときには、出來るだけ理路正然たるところだけを見せるよ。けれども茶話なんかして居ると、そこには思はずもその人の眞を暴露

するものだよ。例へば自ら勞働者の味方を持つて任じ、口に筆に侃々の論謂々の說を爲す人が、車夫から少し多く吳れと言はれて猪獵なんて惡罵を吐いてプン〳〵したりなんかするのは可愛い方だネ。

A　ホントだよ。救國の志士は我れ獨りと云はんばかりの面をして居つて、一食百金を棄てゝノホホンで居るやうな者もあるんだからネ。

B　先年も日本から來た一人の名士があつた。僕が數名の人を紹介したのさ。ところがその名士先生イキナリ手帖と鉛筆を出して、一番近い處に居つた某に向つて、貴方のお名前はとやつた。某が某々と云うと名士はスグ鉛筆を走らせてその名前を書き止めた。そして曰くサアどうぞお話下さいとやつた。その時名士の耳と鉛筆と手帖とは、寸分の隙きなくピツタリとして居つた。その意氣に呑まれたか何日もは滔々懸河の辯を弄する彼が、一糸亂れない紋切型の御挨拶をしたに過ぎなかつた。第二第三又同じで、遂に誰一人として脫線する者はなかつた。マア〳〵敦睦の外交辭令とでも云ふべきだネ。

A　それで思ひ出すのは日本の人は競技と戰爭と云ふことが一つになつてるやうだネ。

B　マサカ君、戰爭と競技位の區別はチヤンと出來てるよ。

A　イヤ〳〵さうでない。今僕がさう云うたから君はさう云ふが、ナカ〳〵さうでないネ。例へ

ば野球競技について云うて見ても、早稻田と慶應の競技などでも、日本人に早慶競技なんて云ふ人は一人もないだらう。全國の新聞から小學生に到る迄『早慶戰』と云うてるぢやないか。そればかりぢやない。點取りに過ぎないごとを勝負々々と云うて居るネ。あゝした言葉のつかひ方から、僕は日本人は何事でもそれを戰ひと考へる。そこで勝つと云ふことが最も重要になつて來る。だから日本人の野球其他の競技を見て居ると、競技者だけぢやない見物迄が丸で殺氣滿々だネ。

B　君から見るとさう見えるか知らんが、吾々日本人では、決してそんなに思うてるのぢやないネ。何んでも負けないやうにと云ふ熱心だネ。そしてその熱心が非常に眞面目なために、吾れを忘れて熱中するのだから、殺氣ではなくて一種の緊張だよ。

A　ウン君の言ふことはよく解かる。魯迅先生が云うたと君が吾々中國人に傳へて吳れた——全日本を排斥しても、あの日本人の眞面目さだけは學ばねばならんと云ふ日本人の眞面目と、又熱心が、つまり緊張の姿となつて現はれる。それは僕にもよく解るのだが、僕の云ふのは決して眞面目と熱心とに對してゞはなくて、野球のみではないあらゆる競技と云ふものは、文字通り技を競ふので、あつてそれは決して戰爭ごつこではないのだ。競技は熟練された鮮かな技を競ふのであつて、從つて、勝とか負けるとかゞ決してその中心にはなつて居らぬの

に、日本人の競技はそれを單なる戰爭と思うて居ると見えて、僕が見て居ると全く勝負以外には一向興味がないやうである。見物人がよく聲をかける、死んでも勝てとか、負けたら腹切れとか、死んで終へと云ふ言葉なんかから考へても、どうも競技とは思へない。たゞ勝つと云ふことに競技者も觀衆も專念して居るとしか僕には見えないネ。

B　さう言はれと、ナール程と反省させられる點があるネ。

A　僕の見方にも無理はないだらう。僕が或る時アメリカの野球選手に東京での感想はと聞いたら、彼はすぐ日本の野球は戰爭だネと云うたよ。

B　さうかナアー。然かし日本がオリンピツクに出て、一等二等を勝ち得るやうになつたその根底にはその勝つ勝たねば置かんと云ふ負けじ魂が非常な貢獻をして居るんだよ。

A　それは僕にはよく解るが、僕をして若しも赤裸々な批評を許して呉れるなら云ふが、日本人の競技には、實際技としての鮮やかさよりも勝たんとする而も遮二無二勝たんとする穢なさの方が目に立つネ。僕は東京回向院へ大相撲を見に行つて、つくゞ〳〵それを思うたネ。あの堂々たる仕切、上の役に居る關取りは下の者の聲からでなければ立ち上がらん。下の者がヤツと云ふと上役がオイショと受けて立つ。あの堂々さが野球其他の競技に見られないのを惜しむネ。

B　さうだ相撲のアノ仕切りは實に吾々の花だ。君はえらいところを見て居るネ。

A　イヤまあ讃めるのは待て。回向院の相撲では、同じ勝つても勝方が非常に問題になる。それは非常に強くて何時も勝つて居りながら、少しも人氣のない者と、時に負ける、然かし非常な人氣のある者とがある。あれを見て居ると同じ勝つても堂々と勝つのでないと人氣がないのがハツキリ見える。汚い手で勝つたのは人が受け入れない。あの意氣だネ、あれが野球其他の競技に欲しいネ。それには矢張り競技は何處迄も競技として、決して戰ひではない。戰爭ではないと云ふことの自覺が大切であると思ふ。

B　君は實に今日はよいことを言うて呉れた。大いに感謝するよ。何事によらずその根底に誤りがあつてはならんネ。

A　序でだからモ一つ言ふが、日本の辯護士の辯護料のことだがネ、僕のやうに少しばかり日本を學び、又英國を學びした者には比較が出來るんだがネ。英國ではあんなことはないネ。日本の辯護士は依頼者を勝たせるつまり依頼者を辯護するらしいネ。此處にも矢張り勝たせる勝つと云ふことが主になつてるやうだネ。ところが英國ではそんなことはないネ。英國の辯護士と云ふのは、一回法定へ出るのが何程と云ふことであつて、勝つとか負けるとかそんな事は頭から問題ではないんだよ。英國の辯護士と云ふのは、依頼者を勝たせると云ふ考へは

ないんだよ。依頼者の行爲の中の正しい點を辯護するのであつて、決して其人を辯護せないのだ。原告にしても被告にしても辯護士はたゞ依頼された人の行爲の中の正しいと思ふ點だけを辯護するのである。一口に言へば辯護士は正義の辯護士であつて、斷じて依頼者を辯護するのではないのだ。勝ち負けを中心にする日本の辯護士の行き方と、英國の辯護士の行き方とは非常に違つて居る。僕はいつもかうした比較をして一人面白く思うて居るんだがネ。

B　面白いネ。確かに他山の石だネ。何れにした處でどうせ缺點だらけの人間のやることだから完全はないだらうが、然しそれは實に面白い比較だ。今日の漫談は實に有益であつた。

A　かうして僕が不要意にツベコベと漫談して居る間に、君が僕の尻尾を押へたり僕の馬脚をつかんだりするのでなければ駄目だよ。

B　さうだ、其通りだ。人は不要意に話してる時にその眞を暴露するのだからネ。

A　そんなら僕の尻尾を押へたのか。

B　そんなに三段飛びやマラソンでやられては、押へやうにもつかまうにも、どうにもならんだアツハツハ。

常識を働かせよ

日本のロータリークラブの一機關紙に、支那視察お土産話が書いてあつた。其話と云ふのは、

『支那人と云ふ者は、實に金錢に對する執着が強い。一人の男が河へはまつて居る時、其傍を通りかゝつた男に、片手出して五十錢やるから助けて呉れと云うた。通りがゝりの人は二元出すなら助けてやると云ふたら、河の中の男は兩手出して一元で助けて呉れと云うた』

とか何んとか云うたと云ふ話であつた。苟も日本ロータリクラブの會員ともあるやうな人が是れだから困る。餘りにも馬鹿々々しくて涙がこぼれるのである。この話を、お土産話として會員の前に平氣でする人だから無論支那に對して無智である位の事は私も解る。それはかうした馬鹿話を、サモ眞面目さうに恰も支那人心理を確かに握つてゞも居るかのやうに、得意然と話したであらうその人が憎らしくなるのだ。話す人も話す人だが、聞く人もモウ少し常識と云ふものを働らかして貰ひたいと思ふ。

一體人間が、河の中へはまつて、泳ぎの出來る人なら通りがゝりの人に助けて呉れと云ふこともあるまいと思ふ。助けを求めるやうな人なら、キツト泳ぎの出來ない人であらうと思ふ。泳ぎ

の出來ないやうな人が、水にはまつて助けて呉れと云ふやうな、言葉一言でも出るものであらうか。泳ぎの出來ない人間が、河へはまつた時の狀態は、支那人でも日本人でも同じことである。支那人だけがハツキリ助けを求めることが出來るなんてことは斷然あり得ないことである。況んや助け賃の應對なんて出來る筈がないではないか。私が常識を働らかして呉れと云ふのはこのことである。こんな常識はづれの話を聞かされて、成程と感心して聞いて來るなんて、全く其人の常識を私は疑ふものである。話した人の非常識に至つては問題外である。この河はまりの話は、日本で云ふ紀州商人の話に、無天井と書いた蚊帳を賣つて歩るく、割安で買つたつもりでつゝて見たら、天井の無い蚊帳であつたと云ふ惡口話に彷彿して居る話である。支那では山西省の人は金儲けが甘い。從つて金に對して執着すると云ふので、その惡口話であるのだ。五十錢やるから助けて呉れと片手を出したと云ふのは、何にも五十錢やるからと云うたのではない。河へはまつてビツクリして手を擧げたと云ふことである。二元呉れるなら助けてやる。と云ふたら、一元にまけて呉れと云うて兩手を擧げた。と云ふのは、二元呉れも一元にまけとけもつけたした話で、兩手を擧げてもがいたと云ふことである（河はまりの人の心の中では、片手も兩手も、恐らくは助けて呉れと云ふあひづのつもりであつたかも知れない）。かうした山西人への惡口話であると、私は魯迅先生から聞いて居る。例へ山西人への惡口話でないとしても、こんなお伽噺のやうな話

を、堂々たるメンバーによつて出來て居るロータリークラブで話されたり、又その機關紙に印刷されるに至つては泣かざらんとするも泣得ずである。餘りの馬鹿々々しさにだ。

支那人と云ふ奴は實に呑ん坊だ。實際生命よりも金を欲しがる奴だ。

と平氣で云ふ人が、なか〳〵少くない。そんならどんな呑ん坊を見たかと云ふと、大概は、イヤ誰さんが二ヶ月も支那旅行をして歸つて來て、何處で話した時にさう云うたとか、何々新聞に書いてあつた位が一番多いところであつて、見た者なんて頭からありやしないのだから恐れ入るのだ。一つ實際に話をして聞いて貰はう。

上海の私の友人は、綿布商をして居つたその華やかなりし時代に、支那人の友人から洋五萬元を預けられた（支那の人はよく自分の信用した人には、平氣でお金を預ける癖がある。日本人にはほんたうとは思はれないことだが、それは事實だから仕方がない。而もその預けたお金に對して利子をつけて呉れとか、預證を書いて呉れとか云ふやうなことは、斷然言はないものである）ところが不幸にして、友人は商業上の大失敗で遂に破產した。チャンと別に銀行にでも預けてあればよかつたのだが、どうしたことかその五萬元もフイになつて終つたので、止むを得ず預け主の支那人に失敗の理由や破產した事を話して了解を求めたところ、預主の支那人は平氣な顏で、君が商賣上の見込違ひでの損なら仕方がないではないか。又儲

けた時に還へしてお呉れ。

と云うたまゝで、證書一枚書けとも何んとも云はなんだと、友人が感心して話して呉れた。こんな話は一體どう解釋したらよいであらうか。而もかうした話は、決して珍らしい話ではない。無論お伽噺でもないのだ。

今や日本と支那とは、いよ／＼密接な關係になつて來た時に、吾々の支那常識がお伽噺であつてはならないにと位は私が言ふ迄もあるまい。而も現實に於いて、世界人を以つて自ら任じて居る吾國一流のインテリ層に在るロータリークラブに、かくの如き非常識なる支那常識を見て、聊か憤慨と共に落膽と悲哀とを覺えるものである。

生活の向上

先日もある會社の方と漫談して居つたところが、其方が言はれるのに、日本の生産會社が、滿洲へ北支へ中支へと進出するのはどうだらうかと聞かれたので、私は言下にいやでも應でもさうなることではないでせうかとお答へしたところ、さうなると日本内地の生産過剰が來る怖れがあると云はれた。

誠に御尤も千萬なお話である。そしてこれは何處でも實は度々聞く話であつて、そのために滿洲投資が非常に遲れて居るのではないかと思はれる位である。

ところが、これに對して、私は心配は無用であると思ふ。なぜなら滿洲三千萬人の滿人と北支七千萬人の一ヶ年の收入を、一人平均一圓增加せしめても一億萬圓の餘剰を見ることが出來る。餘剰は購買力の基礎である、一方生活の向上と云ふことにさへ努力するならば、何んの不安もない。殘念ながら一億萬人の收入の增加と云ふことを根本的に考へて居る人が少ない。それの方がより心配であると考へるのである。

支那の金融界

私がトランプをすると、キツト負ける。ナゼ負けるのか私には理由が解らぬ。隨分熱心に考へてやるのだが、どう云ふものか又しても負ける。然し他から見て居ると、私の負ける自由が、ヤヤ鮮やかに見えるらしい。

親切者は、度々私に注意して呉れる。然し自惚れの強い私は、いつまでもそれが解らない。『……君はいつも自分の手以外には考へて居らんネ。もつと目を光らせて場の札と、兩隣の人の手の中とを考へなきやあ駄目だよ』と親切者が云うて呉れるのである。つまるところが、目に見ることの出來る自分の手の中の札と、場の札とを見て、次ぎに見ることの出來ない兩隣の人の手の札を見よと云ふのである。その言葉はよく解るのだが駄目だ。そしてキツト負けるのだ。

未だ北京政府の在つた頃と記憶するが、何んでも財政顧問とか云ふ名で日本の阪谷さんが北京へ來られて、支那を金貨本位國にするとかせんとかで調査研究をされたことがあつた。

そして當時の支那を金貨本位國にするには、最少限度で二億圓の金準備が必要であるとか云ふ結論が、新聞に發表されたやうに覺えて居る。

その後支那は革命されて、現に民國は二十五年になつて居る。昨年十一月に突然として支那は幣制改革を斷行した。最重要な點は、從來の通貨であつた七錢二分の目方のある大洋と云ふ大きな銀貨の通用を禁止して、一切の銀を國有とすると云うた。又中國・交通・中央の三銀行をして國庫の仕事をさせ、この三銀行の紙幣を以つて國幣となし、澤山の銀行が發行して居る紙幣を、順次この三銀行の紙幣と交換すると云ふ。而も現行の紙幣は、全部銀貨との兌換を禁ずる旨を發表したのである。

支那の財政、經濟がどうしてもかうしなければならぬと云ふことは、以前から話にも聽いて居つた。新聞雜誌の論文などにもあつた。

扨てそれなら愈々支那が、さうした後がどうなるかと云ふ見透しについても、そんな亂暴なことをしたら、それこそ紙幣の取附けが起つて、紙幣はメチヤ〳〵の底拔けの暴落を演んずるであらうと云ふやうなことも度々聞かされて居つた。

支那紙幣の暴落と云ふことは、卽ち日本金や外國紙幣の暴騰と云ふことである。

そこで銀行に澤山預金のある人は勿論、少しでもある人々は、大あわてにあわてゝ銀預金を引出して日本のお札に替へて、改めて金預金をする人もナカ〳〵多かつたやうである。

どんなに銀紙幣が暴落しても、支拂ふ時には必ず銀貨で拂ひ戻すと云ふことを、通帳に書いて

くれと銀行に申込んだところ、それは誠に最もであるが、貴方はそれでお助かりになつてもかんじんの銀行が、それでは潰れて終ふから折角だがそれは出來ぬとアツサリ斷られた人もあつた。銀建の公債や株券を賣つて日本金に替へた人もあつた。

擧句の果てには、上海の日本人小賣商人が聯合して、從來の銀建てつまり賣値の札が、これ迄は洋何元とか洋何十元とか云ふ風に銀で値段がつけてあつたのを、來年一月一日（卽ち一九三六年一月一日）から日本金何圓とか日本金何十圓とかと云ふ風に書き直すと云ふ、所謂上海の日本小賣商の金建て問題と云ふ滑稽劇まであつた。

イヤそれどころではない。シルバーラツシュとか云うて支那政府が銀の輸出を禁止（輸出稅を支拂へば公然輸出されたであらうが、それでは儲からない）して居るのを、ワンサ〳〵と防彈チヨツキで運搬するやら、その又買出しに來て二人も三人もが首を締められて何萬圓かをフンダクられるやら、折角買つた銀貨が行方不明になるやら、村長さんの息子や學校の校長さん迄、家屋敷まで賣つてこしらへた虎の子を抱いて一儲けせうと、ヤツコラショと上海までやつて來て、その虎の子を宿の拂ひも出來ん迄に惡漢共に捲き上げられたりして、亡者共に地獄繪卷の展けられたのもあの時であつた。

相當有名な財政とか經濟とかの權威者が、二三人の子分迄連れてやつて來て有名な、財政とか

『支那銀行の紙幣は、舊正月には反古になる』

と云ふ名演說を聞かせて呉れたのも、あの時であつた。イヤこの人だけではなかつた、恐らく全日本を擧げて、學者も研究家も實際家も五十步步百の名論卓說であつたと思ふ。

財政とか經濟とかには何んの關係もないヅブの素人迄が、ヤー支那のお札はモウ駄目だ、反古紙と同樣だなどゝ謠言をたてゝ步るいたものである。かうした浪の中に居つて、私はどうしても此等の大悲觀論を丸呑みに信じることが出來なかつたと云ふのは、

第一に支那人が一向騷がないこと（西洋や日本あたりで勉强した人々はナカ〳〵騷いで居つたやうであつた）。

第二には英國がアンナに腰を入れて居ると云ふこと（あれだけ勘定高い英國人が力コブを入れて居るのだからと云ふこと）。等のハツキリしたやうなボンヤリしたやうな理由の根本には、總べて物事には兩面がある。イヤ理窟は必ず三つ建てられる。

株や米の相場の祕密通信と云ふものは、申込者の三分の一には不動と通信を出し、三分の一には上ると通信を出し、殘る三分の一には下ると通信を出すものであると聞いて居る私は、英國の樂觀と日本の悲觀の外に、その中間說でも出るであらうと期待したが、私の耳にはたう〳〵聞えなかつた。

たゞに中間說が聞えなかつたばかりでなく、何程悲觀論の日本にも少し位は樂觀論もあるであらうと思うて、來る人に相當根氣强く根掘り葉掘りして漫談を吹きかけて見たが、たうとう駄目であつた。

私は嘗つて、當時獨立して居つた湖南省で、紙幣が反古になつたのを知つて居る。又大淸銀行紙幣の反古になつたことも知つて居る。

學理とか學說とか云ふ六ケ敷いこと他の國のことは丸つきり私には解らんが、支那では發行された紙幣が反古になるのは、その發行權力が全く倒れた時に反古になるが、假令ヒヨロ〳〵でも發行權力が持續して居れば、下落はするが全く反古になると云ふことは、メツタにないやうである。

そこで國民政府と云ふ發行權力の倒れない限り、中國・中央・交通の三銀行の紙幣は、決して反古になることはないと思うたのである。四明・中南・中國通商等の民間銀行は別としても、それでも此等民間銀行は反古になる危險があると云ふのではない。察ろ反對に此等民間銀行はより强固であるとさへ私は信じて居る。

然し日本の全悲觀論は、舊正月反古と云ふ說をヤ、肯定して居るやうにも見えたので、私には疑問が出て來た。事によると國民政府は舊正月迄に倒れると云ふ、何か確かな話でもあるのでは

ないかと思うたので、この方面の風說でも聞き度いと思うたが大報を見ても小報を見ても香りだにせなかつた。

どうしても私には合點が行かない。

上海中國銀行の董事の中に、宋さんと云ふ老人がある。中國銀行改革に際して、新總理は老ボレ董事を皆な追ひ出して終つた。ところが一日に二千萬元の預金引出しがあつたので、驚いて調らべて見ると、それは追ひ出した董事の中に宋さんが居つたからであることが解つて、早速再び宋さんを迎へて董事にしたと云ふ話である。

恐らく、この話はほんたうであらうと思ふ。一體支那の銀行の預金の預主は、銀行資本の高よりも董事連中の信用で預けて居るのであると云うたら、それは日本あたりでも同樣だと云ふ人もあるであらうが、信用と云ふことの內容が少しばかり違つて居るのである。又してもそれだからお前は古いのだ、そんな物は昔の遺物で崩れつゝあるのだとお叱りを受けること必然であるが、支那人は彼の人は何十萬元のお金持だからと云うてお金を預つて下されと云うては預けに行かぬらしい。彼の人に預つて貰うて置けば大丈夫だからと云ふ對人信用で預けて居るらしい。だから一人の董事が銀行を止めると、その人を信用して預けて居つた預金が一時に引き出されるやうな事が起るのである。その董事が再び董事になれば從つて預金も又戻つて來るのである。これだか

ら預金の引出しの際でも、一時にではなく何回かに分けて拂ひ戻す事が、何の不信用もなく相談が平氣で出來るのである。

支那では個人同志の間で、お金を甲の人から乙の人に預ける（かうしたことは今尙ほ澤山にあることである）。その時に預り證とか受取りとかを下されとも、證明書を書いて置いて呉れとも決して言はないものである。全くその人を信用して居る心配らしい氣もない。十二分に安心して居る信用とはこれだなと、今更らのやうに敎へられる。

一面には極度の實際家であるが、その反面には此處迄信用家である。莊票のことを考へて見ても不思議な位信用制度が發達して居る。莊票には準備金は問題ではないのである。而も十日後の日附の莊票が現金として扱はれる銀行紙幣は、永遠銀貨と引替へると云ふのだから、それが現金として扱はれるのは當然であるが、十日後の日附の莊票が現金として扱はれると云ふことは信用を通り越してこの制度は信仰に迄到達して居ると私はよく言ふのである。

銀行が政府公債の大暴落で資本金の三分の二を損したと云ふと、外國銀行（日本を含む）は全く市場の困難とか混亂とか云ふことはおかまいなしに、只今から支那銀行の紙幣は受け入れませんと斷るのが文明國の銀行である。

さうした際に、銀行だつて商賣だ。損する時もあり儲ける時もある。大損したと云ふ時にお金

を取りに行けば銀行が潰れる。銀行が潰れゝば自分も損になる。暫く待つて儲けた時に取りに行けばよいと考へるのが、時代遲れの財政學も經濟學も何にも知らん無學な支那の一般人の考へである。文明國の學者先生達に申し上げる。只一口に原始形態の遺物だ、アジア式の何んとかだ、亡びつゝある何んとかだと、資本いらずの理想論で遠い將來の夢ばかり語らずに、モツト〳〵手近にある現實と云ふことを確かり見て呉れ。一體人間の社會生活に於いて、ドツチが眞實の文明人なんだらうか。大建築や自動車の數に幻惑せずに、今現に生きて居る人間の考へも、少し位仲間入りさして呉れても罰は當たるまいではないか。

支那の商賣では、今日も尙ほ年三季の決濟である。五月五日（端午節）、八月十五日（中秋節）年末の三回であるが、然し全般的に市場が不況で、決濟をすると大破綻が生ずると云ふやうなことが見えると、同業者が協議して三ケ月決濟を延期するとか、四ケ月延期するとか云ふことが實際に行はれる。これなども矢張り原始形態のカスであらうが、然し若しもこれをモラトリアムなんて言ひさへすれば、誰も亡びつゝある支那の何んとかなんて云ふ人はない。つまるところが、漢子と横文字の違ひのやうにも考へられないこともない。

兎に角、何んでも彼では西洋のことを頭から好いことゝ云ふ前提から出發せずに、好いか悪るいか進んで居るか遲れて居るかは結果として現はれるのだから、どうか支那の研究は自分の頭の

尺を持つて來て當てる前に、現實を握つて下されと私は云ふ。世界中何處に銀行が資本の三分の二の大缺損をして取附けのまぬかれられる銀行があるか。預金の引出が相談づくで銀行の都合によつて分拂や延期の出來る銀行が何處の國にあるか。さればと云うてそんな規則でもあるのか、國の法律でもあるのか、云ふと、そんなものは何處にも見出すことは全く出來ない。書いたものには影もない。たゞそれは支那の人々の頭の中にだけ必要に應じて書かれる不文の法律である。

強ひて言へば、窮すれば變じ變ずれば通すと云ふあの人生哲學の實行と位により云ふことは出來ない。この又窮すれば變じをキツト鼻の先きでお笑ひになるかもしれんが、世界中の如何なる國と如何なる人間とその間に起る事柄に、この言葉を當てはめて見ても人間の生活がこの原則からはづれることはマアあるまいと私は思ふ。

不換紙幣も、平價の切下げも、爲替の無制限賣買も、喧嘩も仲裁も、外交も戰爭も、條約の締結も、拋げ出して、悉くこれ窮すれば變じ變ずれば通ずではあるまいか。

捕搏令が出た時には『少し邪魔になるから默つて居れ』と云ふことで、ホントに捕搏するのなら、命令なんか出さずに默つて捕搏する支那のことだから、見せて呉れない兩隣の人の手の中を見なければトランプは勝てないことゝ同じ理窟だ。

自省のために

知らなんだからしなかつた。ソレは罪にはならんが、知つて居りながらしないのは罪である。と聖人様が敎へて下さつた。成程さうだと首を捻つて、さて自の日常生活を顧ると、これはしたりイヤハヤ犯かしも犯かしたり毎日の大半はこれ罪である。人間は罪の子だと外の聖人様が仰つたさうなが、とても文句は言はれさうにないネ。

聖人様の道と云ふのは、云ふ迄もない神様とか佛様の道の方のことで、私達のやうな罪の子には一寸眞似さへも出來ないことゝして、せめてこの世の俗事だけなりとも、少し知つたら行ひたいものだと思ふ。

入るを計つて出づを制する、と云ふこと位は私も知つて居る。それは餘りにも當然なことであるにも拘はらずカラハア駄目でゴワす。これはどうしたワケで、彼はかうした義理で、イヤ彼も世の中のおつきあひでと色々の理由づけをして、甚だ屢々當然を踏み破るのはどうしたことであらうか。

『オイラ經濟サチウこと金輪際習うたことネエだ。知らネエ經濟サ持つすべ知らネエだ』

『お前ェ様ラ、ハア經濟學士様チウて、その經濟チウ事サの先生様デネェだか。ソノお前ェ様に經濟が出來ネェで誰に出來ベェ』

と天保爺さんにタンカをキラレて、ウーンと返答に詰まるのが名譽でもあるまいと思ふ。五十圓の收入ある人が、五十圓迄の支出をして居れば借金はしなくてもよいのだ。それは誰でも知つて居ることである。

その簡單な解りきつたことが、ナカ〳〵實行出來ないのだ。人の子の弱さであるとアキラメの理由づけはしても、財布の不足はどうすることも出來ない。積もるものは借金の山である。この故に吾國中國階級を指して、借金階級なりと。なにも別に惡口に云ふのではない。自らを省みて解脱の資とするまでのことである。

支那の政治家とか軍人とか云ふ時々ボロ儲けをする人々のことは私は門外漢であるが、一般庶民の生活には私共には他山の石とするに足るものゝ少くないことを思ひます。

一昨年十一月十四日、支那では未曾有の幣制改革が行はれたことは、誰でも知つて居るところである。其事に就いては、英國政府が特派したリースロスと云ふ人が助言を與へたとか、或は英國が援助して居るとか云ふことでありますが、然かし私共には眞相は解りません。

兎に角支那紙幣の習慣であつた。何時でも紙幣をその發行銀行へ持つて行けば、チヤンと銀貨

と引き替へると云ふ兌換券としての當然のことを停止いたしました。此日限り紙幣は銀貨とは替はらないことになりました。多分窮した結果が變じたのでせう、變じて通じる。トウ〳〵立派な不換紙幣になつて終ひました。同時に銀は一切國有と云ふことになりましたので、中華民國造幣廠で造られた七錢二分(七匁二分のこと)の目方のある一元の銀貨(どうした理由が知りませんが、日本で昔造つた一圓の銀貨も矢張り七匁二分でありました。明治初年頃造られた貿易銀と云ふ一圓の銀貨も矢張り七匁二分でありまして、今日でも稀れに支那内地で見ることがありますが、支那でもメキシコあたりから、英洋又は鷹洋と云うて賣込んで來た頃から矢張り七匁二分であります)もうこの日限り、通用せないと云ふことになりました。これは國民政府の命令でありますから、或は不過官樣文章(文字通りでお上みの文章に過ぎないと云ふことがある)であるかも知れない。それは兎に角として、銀貨が通用せないとなると困る者が多いと云ふ御親切から、通用しなくなつた銀貨を中央・中國・交通の三銀行へ持つて來れば、一元銀貨は一元紙幣と換へてやると云うて下さつた。

吾々日本人だつたら、ヤレ〳〵有りがたい便利なことになつた。重たい銀貨は輕いお紙幣に代へて下さる。早く銀貨を持つて行つてお紙幣に代へて貰つて來いと、押すな〳〵で銀貨は銀行へ持ち込まれる筈であるのに、これは又どうしたと云ふのであらうか、支那では何れの銀行でも門

前雀羅の體であつた。

誠に不可思議である。だから支那人は不可解である、など〻輕々しく言ふことは謹しまねばならんのだ。それは奇怪でも不思議でもない。極めて當然なことであるのだ。

吾々日本人が押すな〳〵で引換へに行く心理は、文明になると便利になると云ふ一面のみを見てのことであるが（其他にも色々の原因はあつたかも知らんが）其處へ行くと支那人は、人が悪いのか、向ふ先きが見えるのか、政府の命令を疑ふのか、どうか知らんが、今日限り紙幣は銀貨には換はらないと云ふことを知ると共に、銀行にも政府にも銀貨がないのだと云ふことを知ると共に、銀行にも政府にも銀貨がないのだと云ふことを見て取つたのだ。イヤもう一つ、七匁二分の銀貨は銀貨としてはお紙幣の一元と同樣にしか通用しないが、銀地金としての相場から計算すると一元六角の値打がある、と云ふことも知つて居るのである。三銀行の門前雀羅の因はこれにあつたのである。

それは恐らく、當局者が誰よりもよく知つて居つたことであらうと私は思ふ。

銀の世界値上りによるのか、それともお紙幣の値下りに因るのか、何れにしてもお金儲けに拔け目のない人々である。果して政府の命令は『不過官樣文章』になつたのである。以後三ケ月の間に全支那で中央、中國、交通の三銀行の手に集つて來た銀貨は、僅かに一千六百餘萬元にしか

過ぎなかつた、と云ふことは何にを物語るものであるか。

然れば一體銀貨を持つて居つた人々はその銀貨をどうしたのであらうか。

政府にも銀行にも銀がない、と見拔いた一般の支那人は、お紙幣よりも銀貨はかな物だと考へた。その上地金としては五割も六割も高いことを知つて居る。重い銀貨はドツコイショと提げられた。厚い壁の中に塗り込まれたり、寢臺の下が掘られて上から土がかけられた。もうチリンともチヤリンとも音はしなくなつたのである。他の一部の人々は色々の事情で銀貨を持つて居ることが出來ないでそれをお紙幣に換へる。然し萬止むを得ない以上、銀行へ持つて行くことはない。それは銀行での値段はチャンと決定して居つて、一元のお紙幣より安いことはないのであるから、一元よりは少しでも高く賣つただけが儲けになるのである。だから多くの人の中には、儲けるために賣らないでもよいが、儲かるのだから賣れと、賣つた人もあつたに違ひない。支那の各地には澤山の金銀細工の商ひをして居る銀樓（ノロウ）と云ふのがある。銀樓は地金の賣買もするので、賣る人々はこの銀樓へ持ち込んだのである。市價よりも割安に、イヤ國家の賣下値段（ホントにはあつたか無かつたか知らんが）より安くさへあれば相互の交渉は成立する。其處へ又もう一つ拍車をかけたのが有名な悲喜劇の數々を遺したアノ銀の密輸出と云ふ事件であつた。銀を買へば儲かると云ふことを聞いて、來るは、來るは、毎船滿員の銀亡者が押しかけたのだから、上海も

相當賑つた。毎船二十萬元づゝ運んだとしたら、少くも一ケ月二十隻の輸出があつたとして四百萬元となる。六ケ月續いたとしたら、二千四百萬元が上海から出たことになる。そのために支那稅關は輸出禁止令を出して、流出を喰ひ止めやうとしたが駄目であつた。治外法權と云ふ鐵條網は、如何ともすることが出來なかつたのである。然しその間には持逃け、籠拔け、スリ替、拔き荷など、あらゆる罪惡が亡者を廻つて行はれた。上旬にはトウ〳〵大仕掛けな殺人未遂によつて、一萬何千元かの强奪事件まで持ち上つて、ヤツト幕を閉ぢられたが、幾千もなく世界的銀價の大暴落が來て、歩に返るやら桂馬になつて高飛びするやらの餘興まであつた。近來の大悲喜劇などがあつて、折角政府が甘く紙とスリ替へやうとしたカラクリも、美事にはづれて終つたのである。

私の素人考へでは、支那政府はナゼ銀貨の時價買上げをしなかつたかと思うた。どの道紙を渡すのだから、時價買ひ上げにさへすれば、アンナ悲喜劇もなくて濟んだであらうと、下司の智慧は何時でも後から出るものだ。

かくて昨年一月になつて、上海市場が甚だヒドイ不景氣に見舞はれた。然し時間的に割合に短かく濟んだのは幸ひであつたが、一體何んでアンナ不景氣が、アンナに急に上海市場を襲うたのであらうか。

私が聞いた範圍の原因は、揚子江の大水害に續いて黃河の大氾濫及び永い間の共產軍討伐などの內戰の綜合的原因であるとのことであつた（キツト其他にも色々の原因があつたであらうとは想像されたが）。私は何にも確かな材料を持つたワケではなかつたが、直觀的にこれこそ幣制改革がその原因だと思うたのである。幣制改革までの支那人の生活は、その何人たるを問はず、大なり小なり銀貨と紙幣とを使つて生活して居つたのである。それが急に銀貨の通用が止まつた時に、政府の豫期に反して、銀貨は前記のやうに大體埋藏されたのであつた。

その埋藏された銀貨が全額の三割であつたか、五割であつたか、それは一寸評價が困難だが、假りに三割の銀貨が埋藏されたとして、手に在る七割の紙幣が其日からの生活費となつたのである。つまり幣制改革は一般人をして從來の七割で生活せなければならんことを餘儀なくせしめたことになつたのである。それは誠に偶然にも餘儀なくせしめられたのであるが、果してそれが實際に出來るものであるかどうか、私は吾々日本人にはそれが偶然であるだけ尙ほ出來ないと思ふが、同時に支那人には出來ると斷言するに躊躇しないものである。私は何時も言ふ、支那人は實際的な生活をすると。それと共に支那人は無理をしない人間であると。それだ、それ故に出來ると云ふことは斷言するのである。

彼等が若し義理とか、おつきあひとか、體面とか云ふやうな、形式的の生活者であつたら出來

75
16

ないに決つて居るが、實際的な無理をしない人間なるが故に、七割になつたら其日から七割の生活を始めるのである。彼等は一圓の洋傘を何日でも二十錢の雨傘兼用の杭州の繪日傘に代へて、平氣で持つて歩るく人間である。舶來の羅紗帽子は、何日でも昔の頂紅帽子に代へられる人間である。舶來の麥藁帽子をぬいで、銅貨六枚の棕梠の團扇で太陽をよけて歩るき得る人間である。毛織の洋服はいつでも藍色の木棉の支那服に着替へられるのである。

公債の暴落で銀行が大損をしたと聞いても、銀行も商賣だ、公債は下ることもあるが上ることもある、損した時に預金を引出しに行くのは危ない、儲けた時に引出せばよいと、狼狽しない人間である。銀行の都合で預金が分割して拂ひ戻されて何んの危險もない人々である。

革命軍が入城すれば青天白日旗を出し、共產軍が來れば紅旗を出す。五色旗でも、黃龍旗でも、恐らくは日章旗でも自由に出し得る人間である。幸か不幸か支那人の生活は實に自由自在である。經濟を伸縮する位のことは實にお茶漬前の仕事であると思ふ。

羨むべきか嘆ずべきか、彼等はその四千年の歷史に於いてあらゆる經驗をして來たらしいその經驗の結果として、實際に生きる方法を體得して居るのだ。

それ故に七割はおろか、たゞの一割になつても彼等は決して狼狽せんであらう。默々として許されたる現實に則して生きる道を知つて居るであらうと思ふ。

或は遂に持てる全部がゼロになつても、餓死する迄は生きつゞけるであらう。その生命を天にまかせて。

75
16

儒教と革命

時　ポカ〳〵溫かい春の日
場所　上海の漫談會
人物　甲漫談子
　　乙漫談子
　　丙漫談子
　　丁漫談子

何んとかのたりのたりかなだネ。と丙が這入つて來ると、已に矢次ぎ早やに卷煙草を腹の底迄吸ひ込んで居る甲と、時々額を平手でたゝく癖のある乙と、五流長鬚を靜かに膝の上あたり迄撫でる丁とが、異口同音にサア〳〵と歡迎の言葉を呈した。

丙　いよ〳〵國民政府も孔子祭を行ふとかで、奉幣使が曲阜に出發したと云ふネ。

甲　革命政府も、ボツ〳〵次ぎの革命を待つ準備を始めたのですナア。

乙　イヤ例によつて深刻なる皮肉ですネ。

丁　蔣介石もこれ迄は、革命未だ成らずであつたから仕方がないが、もうボツ〳〵國民生活を秩序立てる必要があるからネ。

丙　革命政府の出來た頃には、一度文廟や、夫子廟をブツコハしかけたことがあつたやうであつたが、矢張り儒教國民を指導するには儒教に限ることを知つたものと見えるネ。

乙　さうだつたネ。宗教は阿片なりなんて隨分齒切れのよい名句をつかつて、革命の意氣將に天に冲するの慨があつたネ。

甲　何にしろ、何十年間教育に社會事業に生命を睹して專心して來た天主教の人々でさへ、到底止まることが出來ないと云ふやうなことになり、アメリカミツションの宣教師など、向ふ五ケ年間支那の傳道は不可能であると云ふ宣言を發表して、各本國へ引上げたのもあの時であつた。實際支那では、宗教はモウ根絶やしになるのではないかとさへ思はれたネ。

丁　ソンナ事があつたかネ。

甲　然し昔の人は、チヤンと後世を見拔いて居つた易世革命の言葉はそれである。

乙　その易世革命と云ふのは、一體ドウ云ふ理由ですか。

丙　さうだネ、易世革命と云ふ言葉はよく聞かされた言葉であるが、何んでも革命が絶えないと云ふやうな意味だつたと思ふがネ。

75
16

丁　易世革命と云ふのは、何日迄も革命を繰り返へすと云ふ意味だつたネ。支那は昔から革命を繰り返へして居る其事を、易世革命と云ふのだと覺えて居るがネ。

甲　さうだ。革命を繰り返すことを易世革命と云ふのだが、なぜ支那はどう云ふ風に革命が繰り返へされて居るかと云ふことを、君方聞かれたことがあるかネ。

一同　それは一向聞いたことがないネ。

甲　實は支那の革命と云ふのは、何時の革命も悉くそれは儒教に對して企てられる革命であるのだ。由來儒教なるものは、政治する人々のために書かれた教へであると云ふことは御承知の通りであつて、庶民の側からのものでは無いのである。そこで儒教なるものは、常に政治家が、時の政府が、これを利用するものなのである。政府を造つたら必ず儒教を庶民に強ひるのが、支那の昔からの不文の律法である。その儒教の強ひ方が很利害（甚だヒドク）になると、卽ち名物の革命が起るのである。その革命がマンマと成功すると、革命政府が出來る。出來た革命政府は始めの中こそ萬機は公道に據らなければならんとか何んとか新らしさうなことを云うて居るが、知らず〳〵に又はしりつゝ儒教を庶民に強ひるやうになつて來る。それは權力によつて下に臨む時、この教へ位便利な教へは無いからである。ところが便利が度を過ごして、又利害的很（甚だヒドク）になつて來る頃には、次ぎの革命がチヤンと擡頭し

つゝある。從つて、その革命が成功すると、今迄の旗印であつた言論の自由も、結社の自由も、天下爲公も、宗教は阿片なりも、丸で忘れたやうに知らん顏をする。國家のためと云ふやうな美名に匿れて、罪もない糟糠の妻を離別して、宗教は阿片なりと叫んだ舌の根の未だ乾かない中に、自ら耶蘇教の洗禮を受けて、基督教に據つて結婚式をするやうな事は、お茶漬である。文廟や夫子廟の破壞をした其手を洗ひもせず、そのまゝで孔子祭を復活する訓何んとか時代だとか云うては、ドシ〳〵言論を壓迫する結社を禁じる。何處の國でもやつた事のないやうな文章の內容の如何を問はず、只だ著者の名前だけで、頭から發行を禁止すると云ふやうな野蕃的な行爲を平氣でやる。かうした行動を採るやうになる頃には、矢張り儒教を借りて來るのが一番便利である。孔子祭の復活は、畢竟その序曲であつたのである。こゝに生れるものは、何んであるか言ふ迄もない次ぎの革命である。この繰り返へしを易世革命と云ふのである。支那の革命はいつもかくて儒教に對しての革命であると云うても決して差支へないネ。長漫一席依如件だ。

一同　ナール程ネ。さう言はれるとさうだネ。イヤ智慧が一つ增えたネ。

甲　なにもさう智慧とか藥とか云ふ程のことではないが、事はお互ひにかく漫談的に話すことに於いて、極めて和やかに解決するものであることだけは、この漫談會がこれを證明して居る

ネ。

乙　だから漫談會へは缺席してはならんと僕は云ふんだよ。

丙　そりや君よりも僕の方だよ。君は未だ云ふ位のところだが、僕と來ちや身自ら實行して居るんだよ。

丁　實際面白かつた。僕も今後は決して缺席せんことに極めた。こんな話など聞かしてやりたい人間が澤山あるネ。

乙　あるともあるとも人事ぢやないよ。

丙　ホントだよ。人の振り見て吾が振り直せとは、甘く言つたものだネ。

一同　アツハツハツ。

轉向

今日世界の文明國に行はれて居る法律は、殆どローマ法に出發して居ると云ふ話を聞いた事があつた。嘘か誠か私はしらんが、さうかも知れないとは思はれる。その又ローマ法とかは、其昔モーゼが神様のお召を受けて、エジプトに奴隷となつて居つたイスラエル民族を率るて故國ユダヤに還る道すがら、シナイ山に於いて、神より受けた啓示である。所謂十誡なる誡律に淵源して居るとも聞いて居る。

然し十誡の中、一から四までは、所謂法律になるべきものとは思はれない。宗教上の事柄である(少し語弊はあるが)。五から十迄の六項が、恐らくは法律の根底になつて居るのであらうと思ふ。六項と云ふのは、『汝の父母を敬へ。是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に、汝の生命の長からんためなり』『汝殺すなかれ』『汝姦淫するなかれ』『汝盗むなかれ』『汝その隣人に對して虚妄の證據をたつるなかれ』『汝その隣人の家を貪るなかれ、又汝の隣人の妻およびその僕、婢、牛、驢馬ならびに凡べて汝の隣人の所有を貪るなかれ』と云ふことである。

お釋迦様が、人間の守る可き戒律として、五戒と云ふのをお示しになつたと云ふことである。

75
169

不殺生、不邪婬、不妄語、不竊盜、不飲酒の五項であるさうな。モーゼが前か、お釋迦様が前か、それとも偶然の一致か、恐らくは私は偶然の一致であらうと思ふ。兎に角大體同じやうな事柄を戒めてある中に、盜むと云ふことがある。

盜むことは惡るいことである。それ故に盜めば罪惡であると云ふことが、こんなに古くから誡められて居るにもかゝはらず、今も尙ほ盜みの絶えないのは、どうしたことであらうか。人間と云ふ者は、よく〳〵因業の生れではあるわいと思うても見るが、然し考へて見ると、誡められた大昔よりも、もつと昔からある盜むと云ふ行爲の事だから、誡よりも根强いのは寧ろ當然の事かもしれない。その盜むと云ふ中にも色々あるが、一つ考へさせられる盜みは、飢ゑによる食ひ物の盜である。一個のパンを盜んだ、それは不運と不幸に災ひされた（或は少し位ナマケたためであつたかも知らんが）貧しさのために、自分の生命にも代へ難い可愛い子供等の飢ゑるを見るに忍びないで、罪とはしりつゝもおさへることもどうすることも出來ずに犯した親心の行爲であつたのである。聰明なそして貧と云ふことを知らない、不幸とか不運とか云ふことに出遇うたことのない、誡に所謂幸福な人々には解らない。溫かい血の脈打つて居る人の子のセツパ詰まつた行爲であつたのである。而もそれは、世界の人間を今も尙ほ泣かせずにはおかない、レ・ミゼラブルの第一因であるのだ。法の峻嚴と云ふことゝ、是れあるが故に人間であると云うてもよい程の

尊い親心の最後の行爲が罪せられる。何んと云ふあさましい世の中であらうか。それは必ずしも小說であると云ふことは出來ない。それは恐らく、法の峻嚴と云ふことゝ、所有の權利と云ふことが、非常に時に必要以上に保護される。西洋諸國に於いては、現實であつたであらうと私は思ふ。

近來は、法の峻嚴にも餘程人間味が加へられて、情狀酌量とか、執行猶餘とか云ふことが實行されるやうになつた。誡にありがたい事である。

いつも云ふ話だが、支那では飢饉の時に食糧品を掠奪してもそれは罰せられないと云ふ事である。この寬大を實行する迄には、人間は容易ならん經驗をして來たことであらうとも思はれるが、又一面モーゼの十誡とか、釋迦の五戒とか、ローマ法とか云ふやうな人爲的なことに影響されるより、以前に早く、已に自然の法則に服從して來た支那民族が、握り得た寬大さではあるまいか。彼等はたゞに飢饉の時に食糧品の掠奪に寬大であるだけでなく、今日も尙ほ一般的に食ひ物の盜みに對して非常に寬大である。支那人は不幸せと云ふこと、不運と云ふことをよく了解して呉れる人間である（ソノことには無論弊害も伴ふであらうし、又除外例もあるが）、いつも云ふやうに乞食に對する態度に於いてそれが解る。乞食は、不幸と不運にさいなまれた氣の毒な人間であると云ふのが、一般の概念らしい。乞食は、ナマケた人間の落ちつく場所だなぞといふこと

は、除外例として認めるのみである。況んな好きで乞食するなぞと云ふやうな、人間心理の度はづれした珍らしいことなど、支那人の常識の中には探がしても見られないのである（近來外國から歸つた人々の間に、そんなことを云ふ人が出來かけたやうであるが、矢張り除外例に屬する人である）。かうした支那人の考へ方も、多數を主としてゞなければ考へない習慣によるのであらう。個人の食ひ物の盗みと云ふことも、決して多數ではない、少ないことである。飢饉と云ふことも決して多いことではない。少ないことである。飢饉の故に盗みする無論それが事態ではあり得ない稀有のことである。それ故に除外例として、情狀を酌量し執行を猶餘するのではあるまいか。私は西洋の法の峻嚴さの故に、所有の權利の餘りにも保護の過ぎたが故に、書き出された小說ではあるが、あの悲哀そのものゝやうな感じのするレ・ミゼラブルを讀んで、食ひ物の盗みに對しての支那人の寛大さを思うて、人情の相違を如實に見たやうに思ふ。食ひ物の盗みに對する寛大、其處等に東洋の特色があるのではあるまいか。

峻嚴と權利が、情狀の酌量と執行の猶豫を認めたのは、西洋が東洋への轉向の一歩ではあるまいか。私はさうであらうと思ふ。こんな事を考へて來ると、吾々日本人は支那の文章文代のみの研究に滿足することなく、その生活文化の研究に一層の精進をせなければならんことを思ふのである。

この食ひ物の盗みに對する寛大と云ふやうな事など、何んだか示唆するものがあるやうにも思はれる。專門家の研究を希うて止まないものである。

757
169

思ひつくまま、あれや、これや

必要な物を造るのぢやと誰かゞ云ふと、イヤ物が造られてから必要になるのぢや、物が存在つたから人が使ふのぢやと云ふ人がある。さうぢや或る時は必要から物が造られる、然し或る時は造られてから必要になつたり、あつたから人が使ふやうになつたりする。それは丁度在つても不要のことがある又必要であるのに物がないことがあるのと同じことである。

紙上の議論ならどうでもよい。私は生きねばならん、生きるためには今食はねばならんと云ふ現實がある、私は此現實から踏み出さねばならん、現實の現在から踏み出すのがなぜ悪るいか、悪るいと云ふなら悪るい現在を造り出した過去の人々の罪であつて、今消さねばならんやうな現在に生み落された吾等の罪でもなければ又悪でもあるまい。殘念ながらそれは歴史に書かれたいや歴史と奴を生かした晝と夜との罪ぢや許してやつて下されハツハツハツハツ。

ノーベルさんと云ふ人は、ダイナマイトと云ふ爆發藥とかを發明して、大金儲けをした人ぢやさうな。その人の遺した財産が生む利子で年々世界文化に貢獻した人に、ノーベル賞金が出るさうぢや。そしてそれは世界的に人間界の名譽ぢやさうな。

よたるのは大概にして吳れ。人間界で最大の悪疫である戰爭と云ふものを、劃期的により慘酷なものにしたのは一體誰だ。それ故に儲けた遺産の利益が文化賞だなんて、だから鼠小僧が義賊だなんて飛んでもないことになるのぢや。その又賞金が世界的の名譽だなんて馬鹿言へだ、詰まるところが貧乏學者には少しばかり過ぎた大金なるが故に、何んとか彼とか屁理窟をくつつけてかつぎ廻つてるんぢやないか。

私がかう云うたら、大馬鹿野郎奴、世界のノーベル賞を何んと心得て居るか。大方とても得られぬゆゑに、イヤ岡燒きにあんな無茶なことを云ふのだ。なあよう聞けノーベルさんと云ふ人は土中深かく埋藏されてをる無限の財寶を開發する道具として、ダイナマイトは發明されたのであつて、決して人殺に戰爭に使うて人殺しを擴大したのでは斷じてないのぢやと位やられることは知つて居る。

それでよいのぢや。何んと辯解したとて、理窟を云うたとて、矢張り人間はその人その人の現在から踏出すより外に路はない、或る人の現在は地下埋藏の財寶をこの世に引出すべき道具としての發明であつたが、又或る人の現在は例へその發明の歴史がどうであらうと、發明者の考へがどうであらうと、そんなことはどうでもよい。その人は戰爭に勝たねばならん。現在にある發明されたダイナマイトを使へば戰爭に勝てる、それで高い〳〵大金を出して買つて使うた迄のこと

757
169

であると、一度戰爭に使うてそれが非常に有力な武器であることが解つたから、われもわれもと大金を出して買ひ入れて使うて人殺しがダン〳〵と慘酷を擴大した迄の事ぢや、そして又それが吾等の現在の立場であるのだから、吾等は又この現在から踏出すより外ないのである。

何んとかの金錢登錄器と云うて、千圓二千圓もする立派なやうな器械がある。今は世界的に使用されて居る。この器械を使はなくちや人は丸で野蕃人のやうに自家廣告をやつて居る。買つた人の方でも丸で一個の裝飾品のやうな考へでも居るらしい。使用させてる人も使用してゐる人も立派なハイカラな器具として商店の何んの疑問もなしに喜んで使用して居るのであるが、考へて見ると此奴ナカ〳〵おつな怪しからん品物である。

このハイカラな立派な器具の何處が一體怪しからんのか、恐らくはこれもとても買ひ得ない羨望のへん物か岡燒きかと云はれるかも知れんが、マア〳〵何んとでも云うて呉れ。私にはなんとしても怪しからんのぢや、元來この登錄器と云ふ品物は、それを使用して人々を盗賊、欺僞と宣告して居るのである。乃公が居らんとお前等はお金を盗賊するイヤごまかす、だから乃公がここに坐つて居るのぢやと無言の宣告をして居るのぢやないか。

その怪しからん品物を店の裝飾だとか、便利だなんかと考へたりハイカラ器械と考へて得意顏

して使うて居る人々の顏を見ると、私はあゝ世の中は樣々ぢやなあと思ふ。

お前等は盗賊だからそれをさせないために、乃公が居るのだと言うたら云はれた者で憤慨せん人間があるであらうか。云ひさへせなければ明らかに侮辱されて居つても、反つて得意顏して喜んで居る面白いものだ。

こんな事を考へる私は、どんなに勸められても、あの金錢登錄器と云ふものを買ふ氣にはならん。早く計算が出來て決して間違ひがないなどゝ自家廣告はなんとでも言へるが、然し決してあれは店になくてならん品ではない(西洋は恐らくばなくてならん品物であらうと思ふ)。あれ位の事なら人手と時間さへかければ何んでもないことである。

言ひ草なんかどうでもよい。兎に角高い利息のついたお金で(利息なんて貰ひこそすれ、拂つたことは毛頭ないぞと叱る人があるかも知らんが)、店員や社員を盗賊扱ひにすることはどうしても忍びない。假へ無意識的にでも廣告につられての迷ひにでもよい。あの器械を据ゑたら店員や社員にお前方は盗賊ぢやと宣告されたことになるのだ。少くもお前等は不正確な人間だと云ふことになるのだ。いやそれは發明の出發點が全く其處にあるのだ。人間に金錢の出入をさせて置くと、時間がかゝつて不正確だと云ふのが抑々出發點ではあるまいか(いやさうでないと云ふ人があるかも知らんが)。モ一つ、露骨に言へば西洋の店員とか社員とか云ふ人間には、よくお金を

盜んだり、ゴマカしたりする人間が多い處からではあるまいか。詰まり盜賊を防ぐための發明ではないか。

いや決してそんなものではない。計算を正しくするためだ。計算を早くするためだと言うた處で、矢張り人間を不正確視しての發明による器械であることはどうにもならないではないか。上海稅務司署の統計は、全中國で最も信用のある統計表である。それはその統計に使用される器械が非常に立派な正確な器械であると云ふことを聞いて居る。然かし器械が計算する迄の色々のカードに若しも不正確があつたら、何程正確な器械の統計でもメチヤ〳〵になるものであると云ふことを聞いて居る。何程金錢登錄器が正確であつても、使ふのは矢張り人間である。いや不正と折紙つけられた人間によつて發明された器械がどうして正確が保證されるのか。不正確な人間によつて發明された器械を正確と思ふこと其事が已に間違ひではないか。いや百歩を讓つて器械は假へ正確であるとしても、器械は始めから獨りで動きはせんために人の力が加はらなければ駄目である。不正確なる人間なしに器械は動かないのだ。動かす人が動かさなければ何程正確な統計器械も金錢登錄器も役には立たん位のことは考へて置いて呉れ。オイ頼むよ。

人間樣を頭から不正確と考へて器械を正確と考へるのが、西洋流でイヤ西洋カブレ流であつて人間は不正確ではあるが、然かし世の中で、最も正確な者は矢張り人間であると云ふのが、東洋

流の古い考へ方であるさうな。其證據に西洋人は人間を使ふ器械を發明するのである。人を監督する器械を造るのである。東洋の考へからは、人が使ふ以外の器は何者も生れはせなんだのである。

75
169

有限か無限か

天地は無限であると云ふ考へ方がある。イヤ天地も有限であると云ふ考へ方もある。

人間にしても、人間の一生はオギヤアと生れて、ウンと死ぬるまでのものだと云ふ考へ方もある。

世の中は稼いで喰うて寢て起きて
　　さてその後は死ぬるばかりぞ

と云ふ歌は、人間有限說の立派なものであると思ふ。

然し又一面には、抑々人間とは何んぞやと云ふことから始まつて、肉體は死んで燒かれて灰になつても、靈魂は無限に生きて居るものであると云ふ人がある。

天地が無限あつて、人間だけが有限であるのか、天地は有限で、人間だけが無限であるのか、それとも天地も無限で人間も無限であるのか、或は天地も有限にして人間も有限であるのか、どうも私には解らないが、支那には面白いものが二つある。曰く『帮』曰く『合會』である。

帮とは、何か姓を同うし、鄕土を同うし、營業を同うする人々の集團形態を指して云ふのであ

る。日本の色々の集團と比較して見ると、田舍に親類とか緣者を株内と云ふのがある。この株内が支那の姓を同うする帮によく似て居る。支那には、何々氏祠堂と云ふものがある。これは張とか陳とか李とか徐とか同姓者が聯合して、同一姓の祖宗を祀つて居る處である。この祠堂の上に冠らせてある姓によつて、同姓の集團が出來て居るのである。從つて同姓の帮は鄕里に存在するものである。日本で同縣人會と云はれて居るものが、支那の同鄕會又は何々會館と上に地名を冠らせて居る鄕土を同ふする帮によく似て居る。從つて、この帮は他鄕に存在するものである。日本の同業組合とか、同業の協會とか云ふものが、支那で何々業公會とか、何々業公所とか、各自の營業名を上に冠らて居るものとよく似て居るのであるが、この帮はその性質上他國から來て居る者でも土地の者でも、たゞ營業別になつて居るだけで、地域的には區別されないものである。姓を同ふする帮のことは暫らくおいて、鄕土を同ふする帮の上海に於いて見ることの出來る有名なものを、二つ三つ擧げて見ると、

永安公司（南京路に在る大デパートメントストアであつて、廣東帮である。資本は無論のこと、店員に至るまで、廣東人のみである。直接の賣子だけは、言葉の關係から他の地方も少しは居る）

先施公司（同樣廣東帮）

757
169

新々公司（同様廣東帮）
大新公司（同様廣東帮）
四明銀行（浙江省寧波帮である）
浙江興業銀行（浙江帮）
浙江實業銀行（同前）
寧紹輪船公司（浙江省寧波及び紹興の帮である）
四明公所（寧波帮の概括的なものである。南北二個所あつて、賓舍になつて居つて、澤山の棺が積み上げてある）
寧波會館（寧波帮の會堂である）
三山會館（福建帮の概括的集團形態であつて、矢張り賓舍になつてあつて棺が預つてある）
蜀商公所（これは四川帮の賓舍になつて居る）
湖南會館（これは湖南帮の賓舍である）

等であつて、此外澤山あるが、會館公所ではたゞ賓舍として棺を預つて居るだけでなく、同郷者の子弟の教育とか、同郷者の不幸な人々の救濟と云ふやうなことまでもして居る。

又營業を同うするものでは、

銀行公會（これは西洋式に銀行と名のついて居る銀行の集團態であつて、即ち同業帮である）
錢業公會（これは錢莊と稱する。日本人が一口に兩替屋と云うて居る同業者の帮である）
食糧公會（これは多分米を除いた雜穀類の同業帮であると思ふ）
米業公會（確か公會と云うたと思ふが、或は公所と云うたかも知れん。米屋の帮である）
綢業公會（これは呉服屋の同業帮である）
絲業公會（生糸業者の帮である）
紗布公所（紡績糸と綿布類の同業帮である）

其他多くの公會と公所とがある。然し此等の帮は、全部共通的なものがある。それは限定と云ふことである。有限である祠堂は同姓に限られて居り、會館や同郷會は地域的に限られて居り、同業公會は營業的に限られて居ることである。

『合會』これは、日本の頼母子講のことである。無盡講のことである。別に違つた點はないが、たゞ支那では合會は略してたゞ會と云うて、小さいのは一枚の衣服を造る丁稚小僧の會から、大きいのは營業の資本を集める方法にまで普遍して居ることである。この合會が人數と金額とに限定のあることである。これも亦有限である。

757
169

支那人同志で爭うて居る時でも、吵鬧（チャオナオ）には吵鬧の限定があり、相罵（シャンマ）には相罵の限定があり、打架（タチャ）は打架の限定がある。相手の鼻の下まで握り拳をつきつけても、なか〳〵ナグリもしないでただ振り廻すばかりである。卽ち振り廻はして居る間は相罵の限界であるが、一度相手の身に拳が觸れると共に、限界を超えることになるからである。戰爭の時でももう一と呼吸が最後の決勝と云ふ時になると、キツト限界を守つて後退すると云ふことである。かうして彼等には、都べての時に限定がある。

人間が有限であるか、天地が無限であるか知らんが、少くも支那人のすることには必ず限定がある。有限であることは面白いと共に、それが果して支那だけのことであらうか。

版權所有

昭和十三年七月十五日印刷
昭和十三年七月十八日發行

上海漫語
〔定價壹圓五拾錢〕

著者　內山完造
發行者　山本三生　東京市芝區新橋七丁目十二番地
印刷者　森島金治郎　東京市芝區西應寺町六十一番地

發兌　改造社　東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二二—四番

（長谷部製本）

（兩友堂森島印刷所）

757
169

757
169

山本實彦著　興亡の支那を凝視めて　定價二圓　送料十四錢
山本實彦著　支那事變（北支の巻）　定價一圓六十錢　送料十四錢
山本實彦著　支那　定價二圓　送料十四錢
山本實彦著　蒙古　定價二圓　送料十四錢
杉山平助著　支那と支那人と日本　定價二圓二十錢　送料十四錢
木村毅著　上海通信　定價一圓八十錢　送料十四錢
村松梢風著　支那漫談　定價一圓五十錢　送料十錢
村松梢風著　續支那漫談　定價一圓六十錢　送料十錢

改造社發行

757
169

757
169

13
7.18

757
169

63

757
169

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black